

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第36冊

# 鹿田遺跡 14

— 第17次調査 —

(岡山大学総合研究棟 (医学系) 新営に伴う発掘調査)

2020年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター



## 序

本発掘調査報告書は、岡山大学鹿田地区に新営された医学系の総合研究棟建設に伴って、本センターが2006年度に実施した鹿田遺跡第17次発掘調査の成果をまとめたものです。同遺跡では、現在までに28回の発掘調査を実施していますが、発掘調査報告書としては14冊目となります。

本調査地点は、第7次調査地点の西隣に接する場所にあたっています。また、西側では第6次調査、北側では第24次調査、南側では第26次調査が実施されており、第7次調査地点と合わせると、それらの調査地点の中心域付近に位置することとなります。いずれも報告書は刊行済みですが、こうした位置関係を有する本調査地点の成果を通じて、各調査地点の成果をつなぎ合わせることが可能となった点で、本報告は一つの大きな役目を果たすこととなりました。その結果、本学敷地に広がる鹿田遺跡の西端域に点在していた各調査地点の成果は、点から面への広がりへと転じることとなり、同域にひろがる各時期の空間利用状況やその変化を、ある程度の具体性をもって描き出す手がかりとなりました。これは、まさに同一遺跡内における断続的な調査の継続が生み出す醍醐味といえるでしょう。

古墳時代初頭では、本調査地点で検出された遺構の種類や配置について、第7次調査の成果を再検討して考察することで、集落内の西端域における集落構造の変化を、住居形態の違いや区画溝の出現などから指摘することとなりました。一方、中世では、同域における屋敷地の規模や配置、その内部の空間利用状況、そして屋敷地区割りの原理などに関する成果が得られました。こうした資料は、鹿田遺跡における既往研究にとって重要であるだけでなく、他の集落遺跡の研究にも影響を与える資料となるでしょう。

新たな発見もありました。特に古代の遺構は、本遺跡内における調査では類を見ない遺構となりました。その性格については今後の検討が求められますが、新しい発見と課題、そして、それについての探求心を持つ続けることで、鹿田遺跡の全貌が解明されていくことを期待したいと思います。

最後となりましたが、発掘調査の実施そして発掘調査報告書の刊行にあたっては、本学内外の関係機関・各位から様々な形でご協力をいただきました。この場をかりて皆様に改めて感謝申し上げます。次第です。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 渡 邊 和 良  
副センター長 山 本 悦 世



# 目 次

<b>第1章 歴史的・地理的環境</b>	1
第1節 遺跡の位置と周辺遺跡	1
第2節 鹿田遺跡の調査概要	3
1. 構内座標の設定	3
2. 遺跡の概要	3
<b>第2章 調査の経緯と概要</b>	9
第1節 調査の経緯と経過	9
1. 調査に至る経緯	9
2. 調査体制	9
3. 調査経過	10
第2節 調査の概要	11
<b>第3章 調査の記録</b>	13
第1節 調査地点と層序	13
1. 調査地点	13
2. 層序	14
第2節 古墳時代初頭の遺構・遺物	19
a. 堅穴住居	21
b. 灰跡・焼土集積域	24
c. 土坑	33
d. 溝	35
第3節 古代の遺構・遺物	39
a. 建物状遺構	39
b. 溝	46
第4節 中世前半の遺構・遺物	46
a. 掘立柱建物とピット	48
b. 井戸	50
c. 土坑	56
d. 溝	58
第5節 中世後半～近世・近代の遺構・遺物	76
(1) 中世後半～近世初頭	76
a. 井戸	76
b. 溝	77
(2) 近世・近代	80
a. 土坑	81
b. 溝	93
c. 畦畔	94
d. 水口	95
第6節 包含層ほかの出土遺物	97

## 第5章 自然科学的分析

1. 鹿田遺跡出土管玉の原石、遺物成分群同定 藁科哲男 108
2. 鹿田遺跡第17次調査出土種子と土器片痕の種子同定 岩崎志保・沖陽子 115
3. 鹿田遺跡第17次調査出土土師器杯内の漆膜構造調査 藤吉田生物研究所 122
4. 鹿田遺跡第17次調査出土漆碗の分析 藤吉田生物研究所 123

## 写真図版

## 挿図目次

<b>第1章～第4章</b>		図29 古代遺構全体図	39
図1 周辺遺跡分布図	2	図30 建物状遺構1・溝4	41
図2 発掘調査地点と構内座標	4	図31 建物状遺構1・溝4断面	42
図3 調査開始状況	10	図32 建物状遺構1内ピットの 直径と底面高分布	43
図4 調査風景	10	図33 建物状遺構1出土遺物および関連遺物	45
図5 遺構全体図	11	図34 溝4出土遺物	46
図6 本調査地点と周辺の既調査地点	13	図35 中世前半遺構全体図	47
図7 土層断面図の位置	14	図36 掘立柱建物1・2	48
図8 調査区基本土層図	16	図37 ビット11・12	49
図9 基本土層堆積状況	17	図38 ビット出土遺物	50
図10 古墳時代初頭の遺構全体図	20	図39 井戸1・遺物出土状況	51
図11 竪穴住居1・2	22	図40 井戸1出土遺物1	52
図12 竪穴住居3と 第7次調査竪穴住居1・出土遺物	23	図41 井戸1出土遺物2 - 木製品	53
図13 炉跡1および周辺状況	25	図42 井戸2・遺物出土状況	54
図14 炉跡2・出土遺物	26	図43 井戸2出土遺物	55
図15 炉跡3	28	図44 土坑3	56
図16 炉跡3断面	29	図45 土坑3断面・出土遺物	57
図17 炉跡3出土遺物	31	図46 溝5～7	58
図18 焼土集中城1・出土遺物	32	図47 溝8・9断面	59
図19 焼土集中城2・出土遺物	33	図48 溝8出土遺物1	60
図20 土坑1	33	図49 溝8出土遺物2 - 礎	61
図21 土坑1出土遺物	34	図50 溝10断面	62
図22 土坑2・出土遺物	34	図51 溝10出土遺物	63
図23 溝1断面	36	図52 溝11断面	63
図24 溝1遺物出土状況	36	図53 溝12	65
図25 溝1出土遺物1	37	図54 溝12出土遺物	66
図26 溝1出土遺物2	38	図55 溝13・14	68
図27 溝2	38	図56 溝13出土遺物	69
図28 溝3断面	39	図57 溝14出土遺物	69

図58 溝15～17断面	71	図83 鹿田遺跡西端付近における 中世前半の遺構配置	104
図59 溝15出土遺物	72	<b>第5章</b>	
図60 溝16出土遺物	73	<b>1</b>	
図61 溝17出土遺物	75	図1 浦項碧玉、浦項緑色凝灰岩、 花仙山碧玉の蛍光X線スペクトル	109
図62 中世後半～近世初頭の遺構全体図	76	図2 古墳(統縄文)時代の碧玉製管玉の原材料使用 分布圏および碧玉・碧玉緑岩の原産地	109
図63 井戸3	77	図3 鹿田遺跡出土緑色凝灰岩製管玉(129901)の 蛍光X線スペクトル	111
図64 溝18断面	77	図4 碧玉原石のESRスペクトル (花仙山、玉谷、猿八、土岐)	112
図65 溝19断面	78	図5 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	113
図66 溝19出土遺物	79	図6 鹿田遺跡出土管玉および鬼塚C石材群の ESR信号(Ⅲ)のスペクトル	114
図67 近世・近代の遺構全体図	80	<b>2</b>	
図68 土坑4～9	83	写真1 遺構出土種子1～54	118
図69 土坑4～10出土遺物	85	写真2 遺構出土種子55～105	119
図70 土坑10～13	86	写真3 土器瓦痕1～7	120
図71 土坑14～19	89	写真4 土器瓦痕8～14	121
図72 土坑17出土遺物-木器-	91	<b>3</b>	
図73 土坑14～19出土遺物	92	図1 塗膜断面写真	122
図74 溝20断面・出土遺物	93	<b>4</b>	
図75 〈4層〉検出畦畔断面	94	図1 断面写真	123
図76 畦畔1～4断面	95	図2 塗膜断面写真	125
図77 水口1・2断面	96		
図78 水口2出土遺物	96		
図79 包含層はか出土遺物1	97		
図80 包含層はか出土遺物2-土製品・石製品-	98		
図81 第7次調査・第17次調査地点における 古墳時代初頭の遺構配置	100		
図82 第7次調査掘立柱建物1・溝4の断面	101		

## 表 目 次

### 第1章～第2章

表1 調査区断面における各基本層位レベル一覧	17
表2 建物状遺構1内ビット一覧	43
表3 I～V群のビット間距離と列方向	44
表4 掘立柱建物構成柱穴一覧	49
表5 掘立柱建物規模と柱間距離一覧	49
表6 近世・近代土坑の類型化一覧	81
表7 遺構一覧	106
表8 出土木製品類と自然木の樹種一覧	107

### 第5章

#### 1

表1 各碧玉の原産地における原石群の元素比の 平均値と標準偏差値	110
-------------------------------------	-----

表2 鹿田遺跡出土管玉の 非破壊分析による化学組成濃度	111
表3 鹿田遺跡出土管玉の元素比分析結果	112
表4 鹿田遺跡出土管玉の石材産地同定	112
<b>2</b>	
表1 遺構出土種子一覧	116
表2 土器瓦痕の種子同定結果一覧	117
<b>3</b>	
表1 調査資料	122
表2 塗膜構造表	122
<b>4</b>	
表1 調査資料	124
表2 塗膜構造表	124

## 図版目次

- 図版1 古墳時代初頭遺構全景  
図版2 中世遺構全景  
図版3 近世・近代遺構全景  
図版4 堅穴住居1～3  
図版5 竈跡1、焼土集中域1、土坑1・2  
図版6 竈跡2  
図版7 竈跡3(1)  
図版8 竈跡3(2)、溝1(1)  
図版9 溝1(2)、溝2  
図版10 建物状遺構1、溝4  
図版11 掘立柱建物1・2と周辺遺構  
図版12 井戸1  
図版13 井戸1遺物出土状況  
図版14 井戸2  
図版15 井戸3  
図版16 土坑3  
図版17 溝8、溝9  
図版18 溝8土層断面  
図版19 溝10  
図版20 溝11、溝12(1)  
図版21 溝12(2)  
図版22 溝13～17  
図版23 溝15～18土層断面  
図版24 土坑4・5・8・9  
図版25 土坑6・7・10～12  
図版26 土坑14～16  
図版27 土坑17～19  
図版28 水口  
図版29 古墳時代初頭 出土遺物  
図版30 建物状遺構1、溝4、井戸1 出土遺物  
図版31 井戸2、土坑3 出土遺物  
図版32 溝8・10・12 出土遺物  
図版33 溝13～17 出土遺物  
図版34 近世・近代遺構 出土遺物  
図版35 石製品・土製品ほか  
図版36 木製品



## 例 言

1. 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学総合研究棟（医学系）新館に伴って実施した鹿田遺跡第17次調査の発掘調査報告書である。調査地点は、岡山市北区鹿田町2丁目5番1号に所在する。発掘調査期間は2006（平成18）年7月～同年11月で調査面積は642㎡である。
2. 発掘調査および報告書作成は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われた。委員・幹事諸氏に御礼申し上げます。
3. 本書作成に当たっては、以下の諸氏に教示・協力いただいた。また、沖陽子・藤科哲夫氏からは玉稿を賜った。皆様に記して感謝申し上げます。  
石材同定：鈴木茂之（岡山大学大学院自然科学研究科）、木材同定：鹿城修一（明治大学黒曜石研究センター）、国産陶磁器の同定：栗岡実（丸亀市教育委員会）
4. 発掘調査時の遺構実測・写真撮影は、調査体制にあげた調査研究員が実施した。
5. 報告書作成に当たっての主な担当は以下のとおりである。  
【遺物】<実測・浄書・観察表>有賀紅美 <実測>西本高美 <浄書>小野素子 <写真撮影>有賀  
【遺構】<浄書>野崎貴博・岩崎志保・山口雄治・有賀・小野  
なお、遺物の全体整理および遺構下図作成は山本悦世が行った。
6. 本書の執筆分担は、第1～4章を山本悦世が担当し、第5章は各項ごとに執筆者を目次に示した。
7. 本書の編集は山本悦世が担当した。
8. 発掘調査の概要は『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』に一部報告しているが、本書をもって正式なものとする。
9. 本書で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25000の地形図「岡山北部」と「岡山南部」(平成6年度発行)を合成して使用したものである。
10. 本書に掲載した記録・出土遺物は全て本センターで保管している。

## 凡 例

1. 本書でも用いる高度値は海拔標高であり、方位は国土座標V座標系（世界測地系）の座標北である。  
方位に関しては、本書では調査時に使用した座標も併記する。
2. 遺物番号は遺構別に番号を付し、土製品はT、石器はS、本器はWを付して通し番号とする。
3. 遺物に関するデータは観察表にまとめている。観察表の表記基準は以下の通りである。  
①胎土は、微砂：砂粒径0.5mm以下、細砂：0.5～1mm、粗砂：2mm以上  
②法量値は、数値の差が3mm以下の場合は平均値を示すが、回数値以上の差がある場合は「～」を付してその数値幅を示した。  
残存状況については、計測部の残存度を示し、その割合が1/6以下の場合は「-」を記した。ただし、1/6以下でも数値を記す場合には（ ）を付した。なお、器高値については、全て残存状況1/1の値を示す。
4. 土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnと表記した。
5. 巻末図版の遺物番号は、本文中の遺物番号に一致する。



## 第1章 歴史的・地理的環境

### 第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のはほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。その位置は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたり、河口近くに形成された三角州帯上に立地している。現在の旭川は、本遺跡の東方約1kmを児島湾に向けて南流しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって潮流していたと考えられる。現在、鹿田遺跡は海岸線から北に約7.5km程度の距離を有すが、中世以前には、遺跡の南側近くに海の影響が強く及んでいたことが想定される。

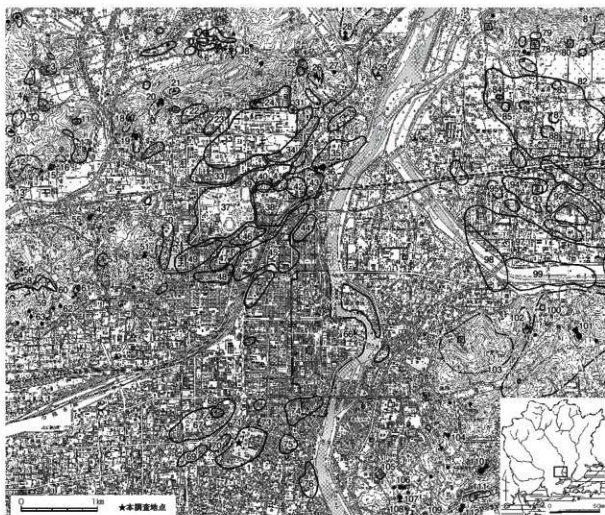
遺跡周辺における人間の生活は旧石器時代にまでさかのぼり、旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ型石器が採集されている<sup>1)</sup>。縄文時代では、本遺跡が所在する平野部北端を区切る半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認されている<sup>2)</sup>。こうした人間活動が本格化するのは縄文時代後期前葉以降である。明確な遺構を伴う代表的な遺跡をあげると、後期前葉～同中葉の堅穴住居や貯蔵穴群などが残る津島岡大遺跡<sup>3)</sup>、そして旭川を挟んで後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡<sup>4)</sup>があげられる。いずれも丘陵付近に限定された地域であるが、これらの集落は、一時的な中断を挟みながらも、弥生時代前期に向けて継続する。

弥生時代前期では、津島岡大遺跡<sup>3)</sup>・津島遺跡<sup>5)</sup>・北方遺跡群<sup>6)</sup>や百間川沢田遺跡<sup>4)</sup>・原尾島遺跡<sup>7)</sup>において水田遺構が調査されている。弥生早期とされる津島江道遺跡<sup>8)</sup>の水田時期についての評価は確定していないが、水稲農耕の情報が岡山平野地域にかなり早い段階でもたらされ、受容されていたことは確実であろう<sup>9)</sup>。

集落では、前期前半は津島遺跡に限定的であるが、その後、南方遺跡<sup>10)</sup>・雄町遺跡<sup>11)</sup>・百間川沢田遺跡<sup>4)</sup>・同原尾島遺跡<sup>7)</sup>などが出現する。さらに数が増加していくのは中期以降である。中期～後期の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸域における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のもとに広がる北群と臨海性の高い南群に二分される。前者では、前期末葉～中期前期の代表的集落である南方遺跡から絵図遺跡<sup>12)</sup>そして上伊福九坪遺跡<sup>13)</sup>へと集落域は拡大的に中心地を移動し、後期には津島遺跡や伊福定国前遺跡<sup>14)</sup>などを含めた広がりの中核的集落が形成される。後者では、中期後葉に鹿田遺跡<sup>15)</sup>そして後期には天瀬遺跡<sup>16)</sup>が加わり、遺跡群のまとまりをみることができ。旭川東岸では、雄町遺跡<sup>11)</sup>のように前期から継続的に後期に至る遺跡が多い特徴が指摘されるが、その平野の南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡<sup>17)</sup>そして後期に同原尾島遺跡へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期には、平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に弥生墳丘墓や前方後円（方）墳が数多く築かれ、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡が立地する旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の尾根上に位置する操山109号墳・網浜茶臼山古墳<sup>18)</sup>の系列を当てることができる<sup>19)</sup>。造墓活動は古墳時代前期後半頃に最盛期を迎え、神宮寺山古墳<sup>20)</sup>、金蔵山古墳<sup>21)</sup>、淡茶臼山古墳<sup>22)</sup>という全長150m級の前方後円墳を生み出す。それらを最後に、前方後円墳の築造は急速に衰退するが、古墳時代後期に入ると周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡<sup>5)</sup>帯に認められるように、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模の縮小傾向が一部の地域で指摘される。特に、旭川西岸では前述の南群に顕著に認められ、海側に近い鹿田遺跡周辺では遺跡は消滅する。旭川東岸の百間川遺跡群周辺でもそうした傾向が認められる。鹿田遺跡のように古墳時代前期まで安定した生活拠点であった集落の衰退には、古墳にみる首長系列の消長と軌を一にする状況をみてとれる。



- |                       |                         |                         |                       |
|-----------------------|-------------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (縄文～近世)       | 31. 朝倉鼻貝塚 (縄文前～後期)      | 60. 正野田古墳群 (古墳後期)       | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群     |
| 2. 富原西側古墳 (古墳)        | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世)    | 61. 関西高松山古墳群            | 89. 藤町古墳 (弥生～古墳)      |
| 3. 荒津御寺 (飛鳥～平安)       | 33. 津島新野遺跡 (弥生)         | 62. 若宮古墳 (古墳後期)         | 90. 乙之島遺跡 (弥生)        |
| 4. 上ノ成塚跡 (奈良)         | 34. 津島江田遺跡 (縄文～近世)      | 63. 乙之島古墳 (古墳後期)        | 91. 岡遺跡 (弥生)          |
| 5. 矢野塚塚 (奈良)          | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世)      | 64. 貝塚 (不明)             | 92. 赤田東遺跡・岡遺跡 (弥生～室町) |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期)      | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期)       | 65. 高柳城跡 (室町?)          | 93. 幡多塚寺 (飛鳥～平安)      |
| 7. 藤森池古墳群 (古墳後期)      | 37. 津島遺跡 (弥生～近世)        | 66. 岡山城跡 (室町～近世)        | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町)     |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期)       | 38. 北方上沼遺跡 他 (弥生～近世)    | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世)      | 95. 翠尾山遺跡 (弥生～室町)     |
| 9. 丹生山古墳 (古墳中期?)      | 39. 北方下沼遺跡 (弥生～室町)      | 68. 大供東遺跡 (弥生～室町?)      | 96. 中島城跡 (室町)         |
| 10. 蜂頭塚 (室町)          | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町)      | 69. 鹿田本町遺跡 (奈良)         | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世)    |
| 11. 坊山遺跡 (古墳～室町)      | 41. 北方中沼遺跡 (弥生～室町)      | 70. 鹿田遺跡 (額立岡山病院) 遺跡    | 98. 百間川原尾山遺跡          |
| 12. 中瀬津古墳群 (古墳後期)     | 42. 北方東沼遺跡 (弥生～近世)      | (鎌倉～室町?)                | (縄文中期末～近世)            |
| 13. 貝塚 (不明)           | 43. 北方麓ノ内遺跡 (弥生～近世)     | 71. 敷布池 (奈良・大供遺跡?)      | 99. 百間川内沼遺跡 (縄文中期～近世) |
| 14. 若宮八幡堂古墳 (古墳)      | 44. 瓜瀬遺跡 (弥生)           | 72. 大供中沼遺跡 (弥生～室町)      | 100. 藤山219号遺跡 (旧石塚)   |
| 15. 東瀬津貝塚 (不明)        | 45. 南方遺跡群 (弥生～近世)       | 73. 敷布池 (弥生)            | 101. 金藏山古墳 (古墳前期)     |
| 16. 東瀬津1号・2号墳 (古墳後期)  | 46. 松岡遺跡 (弥生～平安)        | 74. 天樂遺跡 (弥生～近世)        | 102. 砂神寺城跡 (戦国)       |
| 17. 首部 (白山神社) 首塚      | 47. 上伊福遺跡 (弥生・古墳)       | 75. 新沼遺跡 (奈良～近世)        | 103. 藤山古墳群 (古墳後期)     |
| (鎌倉～室町?)              | 48. 上伊福 (立花) 遺跡 (弥生～室町) | 76. 二日市遺跡 (弥生～近世)       | 104. 藤山03号墳 (古墳前期)    |
| 18. 高山城 (新+近世) 跡 (室町) | 49. 南伊福遺跡・伊福定因寺遺跡       | 77. 曾入塚古墳 (古墳後期)        | 105. 瀬原塚寺 (飛鳥～平安)     |
| 19. 七ノ成墳丘・古墳群 (弥生～古墳) | (弥生～近世)                 | 78. 貫田塚寺 (飛鳥～室町)        | 106. 瀬原茶臼山古墳 (古墳前期)   |
| 20. 都日坂墳丘・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊福西遺跡・尾封神社南遺跡      | 79. 貫田塚寺堂跡 (奈良)         | 107. 藤山09号墳 (古墳前期)    |
| 21. 平田山城 (戦国)         | (鎌倉～平安)                 | 80. 浄土寺 (奈良～室町)         | 108. 藤山202号遺跡 (平安～奈良) |
| 22. 津島原居遺跡 (古墳～室町)    | 51. 津島古墳 (古墳前期)         | 81. 湯辺古墳群 (古墳前期)        | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?)      |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期)  | 52. 砂神寺遺跡 (弥生)          | 82. 藤田岡付岡遺跡             | 110. 湯茶臼山古墳 (古墳前期)    |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町)     | 53. 南津島寺 (奈良?)          | 83. 北ノ塚遺跡 (弥生～室町)       | 111. 湯茶臼山古墳 (弥生～室町)   |
| 25. 津島東3丁目墳・地蔵(弥生・古墳) | 54. 南塚古墳 (古墳前期)         | 84. 藤田岡付跡 (奈良)          | 112. 大塚山貝塚 (鎌倉～室町)    |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期)      | 55. 十二本塚古墳              | 85. 藤田岡付塚遺跡 (南園長) 遺跡    |                       |
| 27. 不動堂古墳             | 56. 山崎城跡 (室町～江戸)        | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安)      |                       |
| 28. 前古墳群 (古墳前期・後期)    | 57. 矢塚山西古墳群 (古墳後期)      | 87. 八ヶ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) |                       |
| 29. 砂尻山城跡 (戦国)        | 58. 矢塚山西遺跡 (弥生)         |                         |                       |
| 30. 翠田遺跡 (弥生)         | 59. 矢塚山東古墳群 (古墳後期)      |                         |                       |

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000、1/3,750,000)

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡については、旭川東岸における発掘調査成果から、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡<sup>20</sup>、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺<sup>21</sup>、総柱建物や道路あるいは「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器・「官」の刷印須恵器などが出土した百間川米田遺跡<sup>22</sup>などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺<sup>23</sup>が知られる。その対岸では、8世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡<sup>24</sup>、そしてその西500mに8世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡<sup>25</sup>が続く。こうした状況の背景にみえてくる旭川河口を介した人々の交流が、本遺跡と関わり深い鹿田荘成立の重要な要因となったと想定できる。

平安～鎌倉時代には、鹿田遺跡周辺は、地割り方向を手がかりにした歴史地理の研究<sup>26</sup>や発掘調査成果から民間家殿下渡領の一つである鹿田庄の故地に比定されている。鹿田遺跡の詳細は後述するが、同地域を構成する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土し、また、南東600mの旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている<sup>27</sup>。旭川東岸では、百間川遺跡群<sup>28</sup>において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝の大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。

江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～1mの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

## 第2節 鹿田遺跡の調査概要

### 1. 構内座標の設定

本センターでは、岡山大学鹿田地区構内において、周囲の市街地および構内建物の主軸に合わせた構内座標を設置して調査あるいは記録を行っている（図2）。この構内座標は、2002年度までは日本測地系のよる国土座標第V座標系に基づいて、南北・東西軸座標値（ $X = -149,800\text{m}$ 、 $Y = -37,400\text{m}$ ）を原点とし、南北軸をN-15°-Eに振ったものを使用していた。その後、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書では世界測地系へ変更することとした<sup>29</sup>。その結果、構内座標の原点は、 $X = -149,456.3718\text{m}$ 、 $Y = -37,646.7700\text{m}$ の数値にあたることとなった。

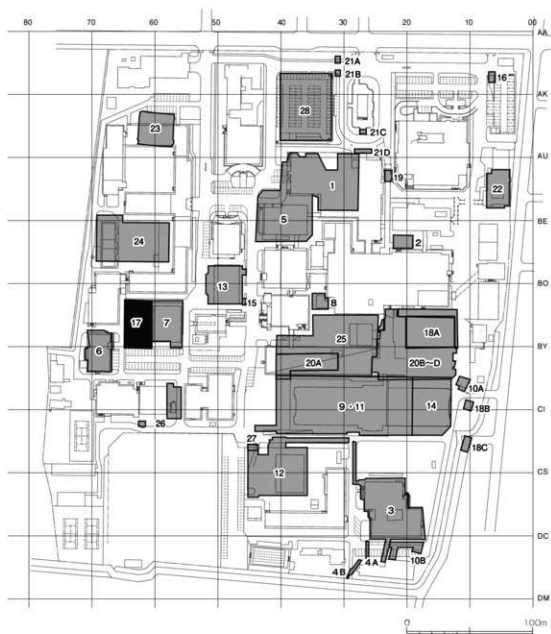
構内では座標原点から一辺5mの正方形の区割りを設定し、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとの東西ラインをAB、AC、…AZ、BA、BB…、のごとく付番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとの南北ラインを01、02、03…、と付番する。これらのラインによって形成される5m四方の区画名は、その東北コーナーで交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区、AC02区…、と呼称する。

### 2. 遺跡の概要

鹿田遺跡では、2019年度までに28回にわたる発掘調査が行われている。その成果から概略をまとめよう。

#### 【地形環境】

本遺跡の立地環境は、前述したように旭川河口付近に形成された砂州状地形にあり、臨海性の高い集落遺跡と評価される。ただし、弥生時代後期～古墳時代初頭では、第9次・11次調査<sup>30</sup>、第14次調査<sup>31</sup>において水田域が、居住域（第1次・2次調査<sup>32</sup>）の南側に確認されたことから、海岸線までは一定の距離があったことが想定される。



- |                     |                        |                        |
|---------------------|------------------------|------------------------|
| 1 第1次調査：外来診療棟       | 11 第11次調査：病棟           | 21 第21次調査：外来診療棟周辺他環境整備 |
| 2 第2次調査：NMR-CT室     | 12 第12次調査：エネルギーセンター    | 22 第22次調査：地域医療総合支援センター |
| 3 第3次調査：医療短期大学部【校舎】 | 13 第13次調査：総合教育研究棟      | 23 第23次調査：JFホール        |
| 4 第4次調査：医療短期大学部【配習】 | 14 第14次調査：病棟           | 24 第24次調査：医歯薬融合棟       |
| 5 第5次調査：管理棟         | 15 第15次調査：総合教育研究棟【外講】  | 25 第25次調査：中央診療棟（旧期）    |
| 6 第6次調査：アイソトープセンター  | 16 第16次調査：立体駐車場エレベーター  | 26 第26次調査：動物実験施設       |
| 7 第7次調査：基礎研究棟       | 17 第17次調査：基礎研究棟（本調査地点） | 27 第27次調査：自家発電設備       |
| 8 第8次調査：RI治療室       | 18 第18次調査：中央診療棟        | 28 第28次調査：立体駐車場        |
| 9 第9次調査：病棟          | 19 第19次調査：渡り廊下         |                        |
| 10 第10次調査：共同講堂連     | 20 第20次調査：中央診療棟関連      |                        |
- ※建物名称は調査次の呼称による。

図2 発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

ここで、本地点に集落が形成される弥生中期後葉以前の状況を整理しておこう。最も古い時期の遺物は、第1次調査で確認された縄文時代中期末～後期の縄文土器片である。続いて、弥生時代早期・前期の土器片があげられる<sup>①</sup>。数はそれぞれ1点程度で極めて少量である点は、該期の人間活動の痕跡が希薄であったことを示すと同時に、各時期において多少なりとも陸地が存在したことも示唆している。近年実施されたボーリング調査成果では、縄文海進によって縄文早期には海面下となった鹿田遺跡の環境は、同前期～後期中葉には砂礫状の陸域となり、その後（同後期末）の海域環境を経て、弥生前期頃に、再度陸域へと変化していたことが指摘されている<sup>②</sup>。出土遺物の時期とはおおむね整合的である。最終段階の陸域はその遺物から弥生早期に遡ることが予想され、同城が河口付近に形成された高まりの中の一つであったことを示す。

また、地形面での大きな変化が弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことがわかってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成したことが第23次調査で確認され<sup>③</sup>、また、中期中頃に河道が多量の土砂によって埋没している様子が第12次調査で見つかった<sup>④</sup>。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。

旭川西岸部のなかで、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭における本地点周辺の地形は、北側に広がる遺跡分布域とは切り離され、海に突き出したような状態が復元される。

こうした状況は、本調査地点の北側に位置する調査地点の成果からも追認される。第16次調査<sup>⑤</sup>・第21次調査<sup>⑥</sup>・第23次調査では、最も安定した微高地である第1次調査地点の北側に、深い谷地形あるいは河道が長期にわたって存在したことを示す。同地域が日常的に利用されるのは平安時代後半～鎌倉時代初頭以降である。本遺跡から北500m地点の大供中道遺跡では、鎌倉時代（13世紀）の耕作地の報告があり<sup>⑦</sup>、整合性をもつ結果を示す。一方、第1次調査地点の南側では、平安時代前期までは、第1次調査・第2次調査<sup>⑧</sup>・第5次調査<sup>⑨</sup>地点付近はその周囲と1m程度の比高差を有しており、岡山大学鹿田キャンパスの敷地全体に安定した土地環境が成立するのは、平安時代後半以降の土地開発を経てからである。

### 【集落】

本遺跡において集落が営まれた時期は、弥生時代中期後葉～後期前半～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後期～平安時代前期、平安時代後期～戦国時代である。それぞれの間に多少の中断を挟むが、弥生時代中期後葉に集落が成立した後、戦国期末～江戸時代初めの城下町再編によって農村へと変貌するまで、連続と集落が営まれていたといえそうである。

**弥生時代中期後葉～古墳時代初頭：** 中期後葉における居住域は、現状では、第1次調査地点（現在の岡山大学病院外来診療棟）に限定される。東西50～60m・南北50m程度の比較的小規模な範囲に居住域が復元される。その範囲は後期には、南側の第5次調査地点、南東側の第2次・第18次調査地点<sup>⑩</sup>、東側の第19次<sup>⑪</sup>・第22次調査<sup>⑫</sup>地点へと広がり、東西220m・南北100mの範囲を占める。また、その居住域の南側には水田域を形成する（第9次・11次・14次調査地点）。古墳時代初頭には、これらの居住域の中で東側（第22次調査地点）で遺構は姿を消し、西～南側の周縁部に新たな広がりを見せる。西側の第7次調査<sup>⑬</sup>・17次調査<sup>⑭</sup>地点では堅穴住居や井戸が形成される。一方、南側の第12次調査<sup>⑮</sup>・13次調査<sup>⑯</sup>・20次調査<sup>⑰</sup>各地点では土器溜まりの形成が顕著にみられるほか、西側の第24次調査<sup>⑱</sup>地点では土器棺の存在が注目される。

居住域における遺構の構成は、堅穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・土器棺・土器溜まりが中心的構造物をなす。堅穴住居3～5棟前後で構成された可能性が高く、ほぼ一単位の集落といえそうである。こうした遺構群には、後期後半以降に様々な変化が生じる。後期末～古墳時代初頭には、柱穴を有さない小規模な住居や井戸の数が増加する。一方、土坑はその数を大幅に減じ、それに入れ替わるように土器溜まりが増加する<sup>⑲</sup>。出土遺物の構成にも、壺の増加などに新たな動きが認められる。後期後葉以降における社会変化の一端を示す動きとして評価できそうである。また、土坑には製塩土器や炭化物を多量に含むもののほかに、本調査地点（第17次調査地点）

の資料なども、集落内における手工業生産の実態を探る手掛かりとなっている。

また、本遺跡では、海との関連を窺わせる製塩土器や土鍾・石鍾が多く出土するほか、弥生後期には四国地域との関係を示す甕（第1次調査）、古墳時代には畿内地域・山陰地域・阿波地域などからの搬入土器の存在が注目される（第12次調査・第24次調査）。このように、本遺跡は旭川西岸における集落の中で、海浜集落として一定の役割をもつ場所であったと考えられる。

**古代（飛鳥時代）：**古墳時代前期に集落は姿を消すが、7世紀前半期には、第1次・第2次調査地点に小規模な集落が出現する。その広がり、近年の調査から、同地点の西側（第23次調査地点）にも認められている。その後、一時期の中断を経た後、奈良時代後半～平安時代前半の居住域に引き継がれる。

**古代（奈良時代後期～平安時代前期）：**第1次・2次・5次調査地点を中心に、庇付き掘立建物を含む建物群や大形の割り抜き井戸枠を備えた井戸で構成される居住域が形成される。8世紀後半～10世紀初めの時期であるが、そうした遺構の分布範囲は限定的である。一方、同城から約250m南に位置する第4次調査<sup>24</sup>地点では、東西方向に流路を取る河道や橋脚、そして杭による護岸が確認されている。径約30cm前後の大形杭列は、堅固な基礎構造を持つ橋の構造を示しており、人通りの多い交通の要所に構築されていたと判断される。これは、鹿田遺跡が水陸交通の要所として機能していたことを端的に示す。

遺物では、木簡・墨書土器・硯などの文字関連資料のほか、黒色土器・丹塗り土器・緑釉の唾壺や石帯など特徴的な遺物を含む。硯には踏脚硯が含まれる。また、第24次調査地点の調査では、井戸から2枚の絵馬が重なって出土した。本時期に属する5基の井戸では、割り抜きの井戸枠が設置され、横櫛・刀子・曲物・斎串・モモがセツ関係をもって出土する。以上の遺構や遺物の状況は、本遺跡が何らかの管理地的な役目を有し、都とのつながりの強い集落であったことをうかがわせる。

**中世前半（平安時代後期～鎌倉時代）：**10世紀～11世紀初めには、集落は岡山大学鹿田キャンパスから姿を消す。一方、本キャンパスの西側に位置する鹿田遺跡（県立岡山病院の敷地）に、同時期の遺構が形成される<sup>25</sup>。本敷地で集落が再開するのは11世紀代であり、両地点での集落の移動が予想される。新たに形成された11～12世紀の集落構造は以前とは全く異なる村落景観が出現する。現在に残る地割り方向（北が15°東に傾斜）に沿った溝で敷地全体が区切られており、1町を単位とした基盤の目状の地割りに合わせて屋敷地が配されている。その地割りは12世紀後半～13世紀初頭に再編され、新たに形成された大形の区画溝は屋敷地を閉鎖的な空間へと変化させる<sup>26</sup>。

出土遺物では、輸入陶磁器・石鍋・砥石あるいは瓦器・東播系のすり鉢などが、遠隔地あるいは近隣地域から持ち込まれており、傀儡回し<sup>27</sup>の到来を予想させる鎌倉時代末頃の猿形木製品（第7次調査）と合わせて、人や物資の盛んな流通を裏付ける遺物として注目される。こうした遺物から、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端が垣間見える。また、瓦や呪符木簡そして銅鏡（第6次調査）<sup>28</sup>からは、宗教的建物の存在も浮かび上がる。その他に、第25次調査<sup>29</sup>では烏帽子を被った状態で埋葬された墓などから、名主層の存在も想定される。

**中世後半（室町時代～戦国時代）：**鎌倉時代後葉（13世紀末～14世紀前半）には、次の時代へ向けて屋敷地の再編が行われる。一部の溝は廃絶し、区画溝は主要な溝に取約される。その結果、溝で区画された屋敷地の面積は拡大する場面が多い。また屋敷地の配置は、第1次調査地点を中心とする北側域から、第9次・11次・14次調査地点が位置する南側において東西方向に並ぶ傾向を強める。また、第20次調査で出土した猿のモチーフの水漏などは有力武家の存在を窺わせる<sup>30</sup>。

**近世（江戸時代）：**屋敷地から耕作地へと、遺跡の様相は大きく変化する。各調査地点において畦畔や野畷などが認められる。時代背景を考えると、江戸時代開始前後に行われた岡山山下町の再編による影響が想定される。ただし、18世紀には、第18次調査B地点に船着き場、第18次調査A地点周辺に屋敷地があった可能性があり<sup>31</sup>、



近代に続く大庄屋の存在を想定させる資料が増えている。

#### 【藤原摂関家殿下渡り領「鹿田庄」の成立との関係】

本遺跡は、「鹿田庄」の比定地として評価されている。同庄の成立時期については不明な点もあるが、『興福寺縁起』によれば、弘仁4（817）年に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で当てたとされており<sup>90</sup>、平安時代初期には興福寺と強い関係を有す藤原摂関家の影響が当地に及んでいたことは十分に予想される。同時期の建物や井戸は、第1次・2次・5次発掘調査地点で確認された建物群や大形井戸（おおよそ8世紀後半～9世紀初め）のみであったが、近年、集落の西端に位置する第24次調査地点で同時期の井戸が加わった。前述したように、その内部からは2枚の絵馬が重なって出土している。こうした資料は鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考える上で重要な手がかりにならう。

本章は下記既報告の文章をもとに加筆および一部改変したものである。

高田寛久2007「第1章 歴史的・地理的環境」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

#### 註

- (1) 鎌木義昌 1962『第一編 原始時代』『岡山市史（古代編）』
- (2) 富岡直人 1998『朝庭鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊  
b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊  
c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
- (4) a 二宮治夫編 1985『百四川沢田遺跡2 百四川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59  
b 平井 壽編 1993『百四川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5) 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊
- (6) a 津島遺跡調査班 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』  
b 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』  
c 島崎 東はか 1999『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137  
d 平井 壽 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151  
e 島崎 東はか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173  
f 岡本泰典ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
- (7) a 岡田 博編 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126  
b 高田恭一郎編 2000『北方地蔵遺跡2 北方蔵ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
- (8) a 宇加区雅編 1999『百四川原尾島遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88  
b 平井 壽編 1995『百四川原尾島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (9) a 高畑知功 1988『津島江道遺跡』岡山県埋蔵文化財報告 18  
b 草原孝典 1999『津島江道（岡北中）遺跡』岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度
- (10) a 柳瀬昭彦 1988『中溝遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会  
b 柳瀬昭彦 1988『南方釜田遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大会実行委員会
- (11) a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』  
b 岡山市遺跡調査団 1981『南方（国立病院）遺跡発掘調査概報』  
c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40  
d 安川 満編 2016『南方遺跡』岡山市教育委員会
- (12) a 高橋 漢・正岡陸夫ほか 1972『雄町遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 1  
b 草原孝典 2017『雄町遺跡』岡山市教育委員会
- (13) a 江見正巳ほか 1980『旭川放水路（百四川）改修工事に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39  
b 正岡陸夫編 1984『百四川原尾島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56  
c 柳瀬昭彦編 1996『百四川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106  
d 高田恭一郎編 2008『百四川原尾島遺跡7 百四川二の尻手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
- (14) 内藤善史編 1996『総区遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (15) a 中野雅美 1984『上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡』岡山県埋蔵文化財報告 14  
b 中野雅美・根本 修 1986『上伊福九坪遺跡』岡山県史 考古資料
- (16) a 杉山一雄編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125

- b 金田善敬編 2005『伊福定国前道路2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
- c 龜山行雄編 2010『伊福定国前道路』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- 07 吉原秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- 08 出宮徳尚 1986『天瀬遺跡』岡山県史』考古資料
- 09 高畑知功 1982『百間川基基道路1・百間川今谷道路1』岡山県埋蔵文化財調査報告51
- 20 宇垣匡雄 1990『新浜茶臼山古墳-接山109号墳の測量調査-古墳の前期古墳壘-』『古代古墳』第12集
- 21 松本武彦 1993『岡山平野における弥生-古墳時代の地域集団』『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- 22 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 新浜茶臼山古墳』
- 23 a 西谷真治・藤本義昌 1959『金藏山古墳』岡山市教育委員会  
 b 宇垣匡雄 2008『金藏山古墳』岡山市教育委員会  
 c 安川 満・寒川史也 2019『金藏山古墳』岡山市教育委員会
- 24 a 近藤義郎 1986『漆茶臼山古墳』岡山県史』考古資料編  
 b 安川 満 2013『漆茶臼山古墳』岡山市教育委員会
- 25 草原孝典 2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
- 26 高橋伸二 2005『史跡貫田院寺跡』岡山市教育委員会
- 27 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
- 28 中野雅夫 1977『古備における平城宮式瓦について』川入・上東 岡山県埋蔵文化財報告16
- 29 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- 30 南健太郎 2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊
- 31 a 山本悦世 2007『中世の集落構造と推移-鹿田遺跡の場合-』『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊  
 b 山本悦世 2015『鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の桑理関連遺構』『桑里制・古代都市研究』30 桑里制・古代都市研究会
- 32 出宮徳尚 1985『岡山県二日市遺跡』『日本考古学年報』3
- 33 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 ほか
- 34 光本 順 2004『日本湖地系から世界湖地系への移行に伴う構内席の変更について』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002
- 35 山本悦世 2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
- 36 岩崎志保 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
- 37 山本悦世ほか 2019『岡山平野における環境復元へのアプローチ』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2017
- 38 南健太郎 2016『鹿田遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊
- 39 山本悦世 2001『鹿田遺跡第12次調査』岡山大学構内遺跡調査研究年報』18
- 40 高田貫太 2006『鹿田遺跡第16次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004
- 41 光本 順 2012『鹿田遺跡第21次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010
- 42 河田健司 2000『大供中道遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- 43 松本武彦・山本悦世 1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- 44 a 山本悦世 2008『鹿田遺跡第18次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007  
 b 光本 順 2013『鹿田遺跡第18次調査B/C地点』『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊
- 45 野崎貴博 2010『鹿田遺跡第19次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008
- 46 岩崎志保 2012『鹿田遺跡第22次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011
- 47 山本悦世 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
- 48 山本悦世 2008『鹿田遺跡第17次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006
- 49 光本 順 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊
- 50 a 山本悦世 2011『鹿田遺跡第20次発掘調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009  
 b 山口雄治 2018『鹿田遺跡第20次A地点』『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
- 51 山本悦世 1990『鹿田遺跡2』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
- 52 河合 忍 2007『総括』『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
- 53 松本武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
- 54 山口雄治 2018『鹿田遺跡第25次調査』『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
- 55 鈴木景二 2002『備前国鹿田庄・荒野史料と絵図』『新道遺跡』岡山市教育委員会

## 第2章 調査の経緯と概要

### 第1節 調査の経緯と経過

#### 1. 調査に至る経緯

岡山大学鹿田地区において、医学部基礎研究棟の西側に隣接して、総合研究棟（医学系）を建設する計画が2005（平成17）年度に具体化した。同工事予定地点は、東側の基礎研究棟（第7次調査地点）、西側のアイソトープ総合センター（第6次調査地点）の間に位置することから、工事対象範囲には弥生時代～中世の遺構が残存することは明白であったため、改めて確認調査をする必要はないと判断し、2006年度に全面的な発掘調査を実施することとなった。調査対象面積は642㎡である。調査体制は2班で、担当する調査員数は3名とした。表土掘削を除く調査期間は4か月を予定し、表土掘削を6月下旬から開始した。

表土掘削に際しては問題となったのが、東側に隣接する第7次調査地点で確認されていた、岡山大学医学部の前身である岡山医科大学関連建物2棟分の基礎の存在である。位置的には、同基礎が本調査域にも広がることが予想された。第7次調査では、同基礎の撤去に伴う包含層の破壊を避けるため、その撤去を発掘調査終了後に実施したが、本調査では比較的容易に基礎の撤去が可能となったため、基礎等の支障物は表土掘削時にすべて撤去する方針で作業を進めた。その結果、調査対象域全域に筋状に広がる旧建物基礎部分（図3）では、擾乱の深度が調査区北半において標高0.9m程度、そして同南半では同1.2～1.3mに達することとなった。いずれも中世層に及ぶ深度であったが、弥生～古墳時代層は残存する状態となった。同作業が終了したのは7月上旬であり、その後、7月10日から発掘調査を開始した。

#### 2. 調査体制

調査主体	岡山大学学長 千葉喬三	調査研究員：助手 光本 順（調査主任）
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター センター長 梶原憲次 副センター長 稲田孝司	同 中村大介 助教授 山本悦世

##### 【運営委員会】

<委員>発掘調査年度（2006年度）		<委員>報告書刊行年度（2019年度）	
センター長（財務・施設理事）	梶原憲次	センター長（財務・施設理事）	渡邊和良
副センター長（大学院社会文化研究科教授）	稲田孝司	副センター長（埋蔵文化財調査研究センター教授）	
大学院社会科学研究科教授	新納 泉		山本悦世
大学院社会文化研究科教授	久野修義	大学院社会科学研究科教授（図書館長）	今津勝紀
大学院医歯薬総合研究科教授	大塚愛二	大学院社会科学研究科教授	松本直子
大学院自然科学研究科教授	柴田次夫	大学院環境生命科学研究科教授	加藤録司
大学院環境科学研究科教授（調査研究専門委員）		大学院医歯薬総合研究科教授	大橋俊孝
	沖 陽子	大学院自然科学研究科教授（調査研究専門委員）	
埋蔵文化財調査研究センター助教授（調査研究室長）			鈴木茂之
	山本悦世	大学院社会科学研究科教授（調査研究室長）	清家 章
施設企画部長	入江良広	施設部長	岩水 仁

### 3. 調査経過

造成土除去を終了した後、大規模な攪乱部分の範囲を確認した上で、調査可能範囲などの見直しを行い、発掘調査の予定期間を35ヶ月に変更した。発掘調査は2006年7月10日から2班体制で開始した。造成土下面の清掃後に近代層上面の調査に入り、東西方向の溝および畦畔を検出した。同面の記録を終了して近世層への掘り下げに移った。その過程で、調査区中央部に東西・南北方向の土層観察用の土手を設定し、調査区北東城を1区、同南東城を2区、同北西城を3区、同南西城を4区として、その後の調査に臨むこととなった(図3)。近世層の調査では、溝のほかにも多数の土坑の調査を実施し、8月下旬には中世層の調査に入った。その間、8月1～8日には岡山大学の博物館学実習生を受け入れた。1班10名程度で2日間の授業を3班に分かれて実施した(図4)。

中世層の調査は8月下旬～10月下旬に実施し、平安時代後期～室町時代の遺構を検出した。特に調査区を東西・南北方向に区切る大形の溝は、東隣の第7次調査あるいは西側に位置する第6次調査で報告された溝をつなぐ遺構として注目して慎重な調査を目指した。その他に井戸などの調査を終了し、10月22日に現地説明会を開催した(参加者数91名)。

中世層除去後、その下面で古代(平安時代前期)の遺構を検出した。特に、一段下がった浅い落ち込み内に小形で浅いピットが整然と並ぶ遺構は、鹿田遺跡では他に類を見ないものであり、所属時期について出土遺物との関係に注意しながらの調査となった。また、同検出面では古墳時代初頭に属する遺構も数多く検出されることとなり、古代～古墳時代初頭の遺構は10月末～11月に調査を実施した。古墳時代初頭に属する遺構は、調査区東城(1・2区)に、堅穴住居のほか加熱作業関連の遺構が集中しており、その実態を探るために、焼土や炭の散布状況は言うまでもなく被熱状態なども慎重に記録した。

11月上旬には弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構を調査しつつ、調査区壁面などの記録作成を実施し、11月16日に全ての作業を終了した。

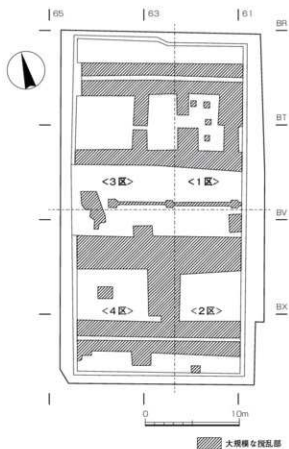


図3 調査開始状況(縮尺1/400)



図4 調査風景

## 第2節 調査の概要

本調査においては、弥生時代後期～古墳時代初頭、古代（平安時代前期）、中世前半（平安時代後期～鎌倉時代）、中世後半～近代（室町時代～大正期）の遺構が確認された（図5）。

### 弥生時代後期～古墳時代初頭

竪穴住居および加熱作業関連遺構群と遺物、そして溝が検出された。調査区の西端付近には溝が北東から南東方向に走る。同溝の東側に広がる1～2区に、竪穴住居・焼土集中域・灰跡が北から南に向けて配されており、住居域の南側に高温の加熱作業域の広がりが確認される。検出された3基の灰跡はそれぞれ形態が異なる。こうした遺構の状況から、鹿田遺跡の西端付近にあたる本地点は、何らかの手工業生産の場として利用された可能性が考えられる。

### 古代（平安時代前期）

調査区北西部（3区）のみに2基の遺構が残存する。1基は南北10m・東西5m程度の規模を有する長方形の浅い掘り込み内に、ピット56基が軸を揃えて並ぶ遺構である。もう1基は同遺構の東端ラインに沿って走り、一部が重複する状態にある溝1条である。前者は、その北端部が調査区外に伸びるため、本来の形状は確認できない。また、底面に形成されたピットの分布は、同遺構北半部において東西方向に4列、南北方向に6列の一群を形成する。本遺構内では多くの丹塗り土師器のほか緑釉陶器が出土している。また、内面に漆が付着し、漆を入れた容器の可能性が指摘される丹塗り土師器杯の存在も注目される。

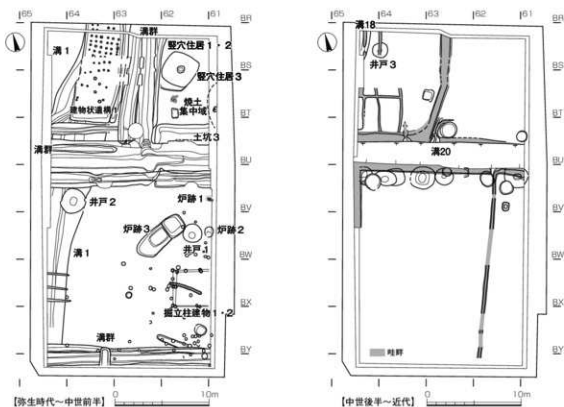


図5 遺構全体図（縮尺1/400）

#### 中世前半（平安時代後期～鎌倉時代）

東西・南北方向に走る溝によって区画された空間に、掘立柱建物・井戸が配置された状態を確認した。同溝群は鹿田遺跡全域に広がる中世の屋敷地の主要な区画ラインにあたる。これらの区画溝は、平安時代後期には調査区南端を東西方向に区切る状態を呈するが、鎌倉時代初頭には調査区中央部に移動し、規模の大形化を伴いながら、東西・南北方向の溝がT字形に接続する状態へと変化する。その後、これらの溝も鎌倉時代後半（13世紀末～14世紀初頭）に埋没したのち、東西方向の溝は、その上部に近代まで継続する溝として踏襲される。また、鎌倉時代後半の東西溝には、その両岸に張り出し状の段が付随していることが確認された。

#### 中世後半～近代（室町時代～大正期）

前段階に屋敷地として利用されていた本地点は耕作地へと変貌する。中世後半には、調査区北西部に井戸1基と東西方向の溝が検出されるが、井戸は中世前半に認められるような屋敷内の井戸とは特徴が異なり、耕作地に伴う遺構と考えておきたい。近世～近代では、中世前半から踏襲された東西方向の溝を中心に、東西・南北方向の大小畦畔と多くの土坑群（野壺）が畦畔脇に検出された。

## 第3章 調査の記録

### 第1節 調査地点と層序

#### 1. 調査地点

本調査地点は、岡山大学鹿田地区の中央部西側に位置しており、鹿田地区の構内座標ではBR～BY60～64区に位置する（図6）。発掘調査以前は、全域が駐車場として利用されていた。

本調査地点の周囲には、北側に旧医学部基礎棟、東側には新基礎医学棟が建つ。後者の建物建設時に実施した発掘調査が第7次調査である。さらに、南西側には、アイソトープ総合センター建設時に実施した第6次調査地点が位置する。1990～1991年度に調査した第6次調査地点とは約10mの間隔を有し、1998年度に調査した第7次調査地点とは、本調査地点の東側ラインを接する。さらに、本調査終了後、2014年度に実施した動物実験施設建設に伴う発掘調査（第26次調査）地点は、第7次調査地点の南約30mに位置する。

以上の3調査地点に囲まれた本調査地点は、既に発掘調査報告書が刊行されたこれらの発掘調査成果を結合させることが可能な位置を占めており、鹿田道路の西側中央部の状況を明らかにする上で重要な場所にあたる。

**参考文献** 第6次調査：本センター1997「鹿田道路4」岡山大学構内道路発掘調査報告 第11冊  
 第7次調査：本センター2007「鹿田道路5」岡山大学構内道路発掘調査報告 第23冊  
 第26次調査：本センター2019「鹿田道路13」岡山大学構内道路発掘調査報告 第34冊

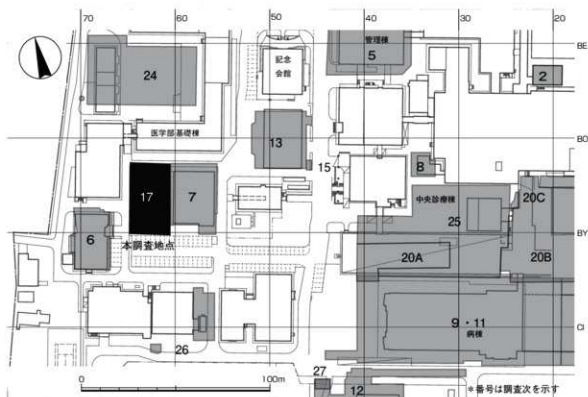


図6 本調査地点と周辺の既調査地点（縮尺1/2,000）

## 2. 層序

調査にあたっては、東西南北の調査区壁面および調査区中央部に設定した南北方向と東西方向の土層断面を中心に、層序の観察を行った。ここでは、調査区壁面の断面図をもとに説明を加える（図7～9、表1）。

**<1層>** 1922年（大正11年）に、現在の岡山大学鹿田キャンパスに移転した岡山医科大学の建設工事に伴う造成土から現代に至る堆積土である。真砂土をベースに大小の礫を含む。上面レベルは、おおむね標高2.7～2.75mを測り、調査区全域を1.35～1.5m程度の厚さで覆う。その数値は、本地点周辺で実施された第6次発掘調査地点および第7次発掘調査地点とほぼ共通する範囲に取まる。

**<2層>** <3層>を母材とする暗青灰色粘質土をベースに緑灰色粘質土のブロックを多く含む堆積層であり、同層の再堆積層と理解される。ブロックは大きな塊状を呈する場合が多い。ただし、同ブロックの包含が少なく、<3層>との境界が不明瞭な部分も認められる。形成時期については、医科大学建設工事に伴う<1層>直下の堆積であることから、大正期に対応することは明らかである。上面レベルは標高1.6～1.7mが中心であるが、3区（調査区北東部）では1.55mまでの下降が確認される。

本層は、東側に隣接する第7次調査あるいは西側の第6次調査でも<2層>として報告されている。前者の上面レベルは標高1.45～1.5mで本地点よりもやや低い。後者では、その分布は極めて限定的とされる。本層形成要因については、<1層>と関連する造成に際して形成された可能性が考えられる。

**【<1層>・<2層>出土遺物】** 発掘調査にあたって、<1層>と<2層>は一連の造成土とみなしたため、遺物は明瞭に分離されていない。よって、ここでは両者を合わせて報告する。

出土遺物はコンテナ7箱（約27%箱：以下省略）を数える。調査区北西部（3区）で4箱、北東部（1区）で2箱、南半の2区・4区で1箱であり、北半部（その中でも3区）の出土量が多い傾向が指摘される。その内容は国産陶磁器を中心に施釉陶磁器・無釉陶器を含む。器種は豊富であり、全体的に残存度が高い。周囲の居住域の破壊を含めた土地改変であったことを窺わせる。

**<3層>** 近代の耕作土で、大正期の畦畔・溝を上面に残す。青灰色～灰色粘質土を呈するが、下部には鉄分の沈着が顕著であり、黄色を強めた層を形成する場合も多い。その場合は、上記の層を<3a層>、下部の黄灰色粘質土を<3b層>として分離した。

上面レベルは、調査区北半（おおむね1・3区：以下略す。）では標高1.3m、同南半（同2・4区：以下略す。）では同1.4～1.5mを測る。両域間には0.1～0.2m差が形成され、前者が低位部を、そして後者が高位部を構成する。その境界は、調査区中央部を東西方向に走る溝および畦畔ラインに対応する。同ラインの畦畔は、後述する<4層><5層>段階にも確認することができる。土層の厚さは0.1～0.15mで調査区全体を覆う。なお、本層で形成される畦畔上面は標高1.55mである。

本層は第6次調査地点・第7次調査地点の<3層>に対応する。上面レベルは、前者で標高1.4～1.7m、後者では同1.45～1.5mを中心とする。前者はやや高い数値を含むが、

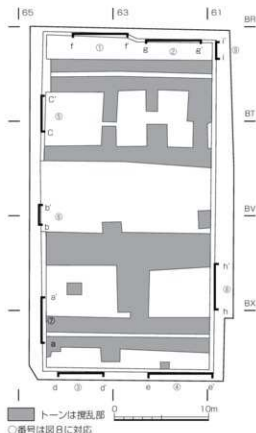


図7 土層断面図の位置（縮尺1/400）



全体的には、本地点における高位部の数値幅とはほぼ一致する。

出土遺物量はコンテナ2.3箱程度である。その内、2箱分は調査区北半から出土しており、低位部での遺物量の偏りが際立つ。また、出土遺物の残存度も高い。近世～近代の陶磁器類と瓦を含む。瓦は全域で出土が確認されるが、特に調査区北半で1箱強の量を占めており、出土量の多さが特徴的である。平瓦のほかに丸瓦も認められる。そのほかに、中世土器片がコンテナ1/4箱程度含まれる。

本層は、堆積土の特徴や既往の調査成果から明治～大正期の耕作土と理解されるが、調査区北半に遺物が集中し、瓦が多く出土する点は、耕作土とは考えにくい内容といえるかもしれない。これについては、本層上部の<2層>と本土層との土質の類似性から、<2層>の遺物が混入した可能性も考えられる。

**<4層>** 近世の耕作土と判断される。緑灰色粘質土で鉄分の沈着を伴う。上面には畦畔などの遺構が残存する。

上面のレベルは、調査区北半で標高1.15～1.25m、同南半で同1.3～1.35mを測る。<3層>と同様に調査区北半に比べて同南半が一段高く、その差は約0.1～0.15mである。土層の厚さは0.1～0.15mで、調査区全域を覆う。

遺物の出土量はコンテナ2箱分、いずれも小～細片である。調査区北半の出土量がやや多い傾向が指摘されるが、際立つものではなく、出土域に偏りはないと判断される。中世土器と近世陶磁器を中心に、平安時代前期の須恵器・土師器が散見される。中世土器の出土比率は決して低くはないが、ほとんどの地点において近世陶磁器が一定量あるいはかなりの量で含まれる。こうした遺物の出土状況は、本層が近世の時期に中世層を破壊して形成された耕作土との評価につながる。また、合計20数点の瓦片が出土しているが、後述する<5層>でも出土しており、中世後半～近世の時期に、瓦葺き建物が周辺部に存在したことを予想させる。

本層は、第6次調査・第7次調査の<4層>に対応する。上面のレベルは前者では標高1.3～1.5m、後者では同1.3～1.4mであり、本地点の高位部の数値に近い。

**<5層>** 中世後半～近世の耕作土と考えられる。緑灰色粘質土としてまとめて表記しているが、色調面では濃淡の違いで暗～淡色の幅を有す。<4層>と同様に鉄分の沈着が認められる。

上面レベルは、調査区北半では標高1～1.1m、同南半では同1.15～1.3mを測る。後者では数値幅が大きい、同1.15～1.18mを示す場所は調査区北半部に接することから、調査区南半では同1.2～1.3mと理解される。よって、調査区中央部を東西方向に走る畦畔を挟んで、両城間に0.2m前後の段差が認められ、<4層>と同様に、北側に低位部そして南側に高位部の広がり指摘される。堆積層の厚さは前者で0.1～0.15m、後者で0.1～0.05mである。また、調査区南西部では、本層は<4層>に削平される(図8-d断面)。

遺物はコンテナ1箱分が出土した。大半の遺物は小片～細片である。中世土器の量が圧倒的に多く、弥生土器あるいは古墳時代初頭の土師器や古代(平安時代前期)の須恵器・土師器そして近世陶磁器を少量含む。古代以前の遺物は下層由来の遺物である。その中で3区出土の古代遺物については、本層直下に古代遺構の埋土が接していることから、同遺構に属する可能性が高い。中世土器では、吉備系土師器碗片の多さから中世前半の時期が想定される。ただし、極めて少量ではあるが中世後半の土師器皿などが存在することや本層上面の遺構の時期・種類を考慮すると、本層は中世前半の層である<6層>を一部で破壊して形成された、中世後半～近世の耕作土と理解される。その状況は、特に1・3区で顕著である(f・g断面、i断面)。調査区南北間で段差を有す地形は<3層>まで継続するが、それは本層段階に生じたものである。なお、本層対峙畦畔の高さは、標高1.35～1.38mあるいは同1.45mを測る。

**<6層>** 中世前半の鎌倉時代前半に形成された堆積層である。上面では同時期の遺構が数多く検出された。色調は灰褐色～褐色砂質土を基調とするが、一部でやや粘性を高めて粘質土となる場所も確認される。鉄分のほかにマンガンの沈着が特徴である。褐色系の色調あるいはマンガンの沈着という点で<7層>との類似性が高い。そのため、一部で両層の識別が困難な場合も認められる。

本層は、調査区南西部(4区西壁・南壁)において堆積が確認される。上面レベルは、調査区南壁を中心に標





【本署西端 (南から)】

【本署東端 (北から)】

図9 基本土層堆積状況

表1 調査区断面における各基本層位レベル一覧

層位	3区		1区		2区		4区				1・3区 中心 レベル	2・4区 中心 レベル
	西端	東端	西端	東端	西端	東端	西端	東端	西端	東端		
(1層) 築山層位(埋設土)	275	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
(2層) 築山層位(埋設土)	275	—	27-276	—	275-29	—	266	—	275	—	—	27-275
(3層) 近代耕作土	—	1.3	1.55-1.6	1.55	1.38-1.4	1.6	1.68-1.65	1.5	1.6-1.7	1.5	1.6-1.7	1.55-1.5
(4層) 近代耕作土	1.6-1.5	1.2-1.15-1.1-1.15	1.5	1.5	1.35-1.4	1.35-1.35	1.45-1.5-1.45	1.5	1.5	1.4	1.5	1.4-1.5
(5層) 中世後半耕作土	1.2-1.3	1-1.05-1	1-1.05	1.5	1.25-1.2	1.35-1.35	1.48	1.35-1.3	1.38	1.46	1.35-1.3	1.15-1.25
(6層) 中世後半混合層	1-1.05 SD15・16	—	—	1.15-1.05-1.1	1.18-1.2	1.25-1.25-1.3	1.38	1.25-1.3	1.35	1.35	1.18-1.15	1-1.1
(7層) 古墳相混成層	0.9-1.05	1.14-0.9 SD12-14	—	—	—	—	—	1.2-1.25-1.3-1.25-1.25	—	—	—	1.15, 1-1.1
(8層) 築山後期 混成層	0.8	0.8-0.75	0.65	0.9-0.97-0.9	0.9	0.8-0.85-0.83	0.9	1.1-1.05-1.1-1.13-1.15	1.15-1.15-1.1	1.15-1.13-1.1-1	0.9-0.95	1-1.15
(9a層) 築山時代 混成層	0.65-0.7	—	—	—	—	—	—	0.9-1-0.95	—	—	0.8-0.85	0.9-1
(9b層) 築山時代 以後混成層	0.65	—	—	—	—	—	—	0.7-0.8-0.75	—	—	—	—
(10層)	—	—	—	—	—	—	—	0.55-0.6-0.5	—	—	—	—
(11層)	—	—	—	—	—	—	—	0.35-0.2	—	—	—	—
(12層)	—	—	—	—	—	—	—	0.55-0.7-0.55	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	0.48-0.5-0.35	—	—	—	—
	—	—	—	—	—	—	—	0.35-0.15	—	—	—	—

—：層位なし、↑：未確認、トーン：参照

高1.2～1.3mに求められるが、西壁では調査区中央部付近で同1.1mを示す。一方、同域以外では<7層>以上には<5層>が堆積しており、本層は<5層>の形成に伴ってその多くが削平されて消失したと理解される。こうした状況下において本来の地形を求めることは難しいが、南壁と西壁のレベルの状況から、北側に向けて緩やかに下降する地形の広がり予想されるかもしれない。いずれにしても<5層>以上に認められるような段差の存在は考えにくい。堆積層の厚さは0.1～0.15mである。

遺物はコンテナ約1箱分が出土した。出土場所に偏りは認められない。中世後半の遺物や近世陶磁器を含むが極めて少量であり、上層からの混入と判断される。中心をなすのは中世前半の土器である。同時期より古い遺物は、古代(平安時代前期)の土師器・須恵器、弥生土器あるいは古墳時代初頭の土師器、そして飛鳥期の須恵器を僅かに含むが、その中では平安前期の遺物の出土量が最も多い。本層下面には古墳時代初頭の包含層である<7層>が接する。同層上面では平安前期の遺構も検出される点を考え合わせると、こうした出土遺物は、本層形成時に破壊されて消失した包含層に由来と理解される。

本層の形成時期は、上面検出遺構の時期が13世紀～14世紀前半であることから、13世紀前半の可能性が高い。

本層は、第6次調査・第7次調査の<5層>に対応する。いずれも褐色を強める層として報告されている。上面レベルは、前者では標高1.2～1.5m、後者では同1.15～1.27mであり、本調査地点南半の状態と近似する。

<7層> 古墳時代初頭の包含層である。上下面で古墳時代初頭の遺構が検出される。灰褐色～暗褐色砂質土がベースを形成しており、特にマンガンの沈着が特徴である。上面のレベルは、調査区南半では標高1～1.15m、同北半では同0.9～0.95mを測る。その差は約0.1mを有するが、傾斜は緩やかで段差を示すものではない。また、標高値の低い場所では、<5層>が本層上面に接する状況を考慮すると、低位部の形成は<5層>形成時の削平が影響したものと予想される。よって、本来の地形としては、南側が高い傾向を有するものの、その差は大きなものではなく、緩やかな起伏を有する地形であった可能性が高い。堆積層の厚さは、レベルの高い調査区南半では0.15m前後、レベルが低い同北半では0.1m前後を測る。

遺物はコンテナ1箱程度の量が出土している。出土域は調査区南半に集中する。弥生時代末～古墳時代初頭の土器が大勢を占める。それ以外には、少量ではあるが弥生時代後期の甕も確認される。

本層は、第6次調査の<7層>、第7次調査の<9層>に対応する。両地点でのレベルは、前者では標高0.8～1.3m、後者では同1～1.13mを中心としており、本地点の範囲内に収まる。

<8層> 弥生時代～古墳時代の基盤層に対応する。黄灰色砂質土で鉄分の沈着が顕著である。砂質が強い黄色系の色調によって上層と明瞭に区別される。ただし、上面では<7層>の染み込みと判断される暗褐色化の影響によって黄灰褐色を呈し層状をなす部分が認められる。上面のレベルは標高0.75～1mであり、調査区全体に緩やかな起伏をもつ空間の広がりを見せる。堆積層の厚さは0.1m前後である。

上面では古墳時代初頭の遺構が検出される。上面付近では土器数10片(13号袋に1/2袋程度)が出土した。弥生時代末～古墳時代初頭の小～細片であるが、これらは本層上部の<7層>に伴う可能性が高いと判断される。

本層は、第6次調査の<9層>、第7次調査の<10層>に対応する。上面レベルは、前者では標高0.7～1.1m、後者では同0.8～1.05mである。

<9層> 無遺物層である。淡灰黄色～黄灰色あるいは灰黄褐色の砂質土を呈し鉄分が沈着する。<8層>と類似性が高いが同層より粘性が強い。上面レベルは標高0.65～0.75mで緩やかな起伏が想定される。層厚は0.3～0.5mである。調査区南壁付近では上下に分層され、上層を<9a層>、下層を<9b層>と区別した(図8-d断面)。<9a層>は<9層>と同層であるのに対して<9b層>は粘性を強めた灰黄～黄灰褐色粘質土を呈する。

本層は全域に堆積することが予想される。<9b層>は調査南壁面のみ確認であるが、<9a層>下面で63ライン付近(東西中央部付近)から西に下降する地形内の堆積土と理解される(図8-d断面)。

<10層> 無遺物層である。淡青灰色を呈する。砂の包含が特徴であり砂層～砂質土の幅を有す。上面のレベル

は標高0.35～0.45mを測り、緩やかな起伏を有する比較的平坦な地形が予想される。

本層の堆積域は、平面的な調査終了面以下にあたるため情報に乏しいが、調査区壁面では全域に確認される。その中で、南壁では<9層>と同様に西側への傾斜内に堆積が確認されることから、同層と共通した状態が予測される(図8-d断面)。

<11層> 無遺物層である。調査区南壁西端部の深堀部分と東壁北端で確認した。黒灰色粘質土を呈し、上層とは明瞭に区別される。南壁の観察から想定された、63ライン付近から西に下降する地形内に堆積し、<10層>の下部に確認される。極めて限定的な情報であるため詳細は不明であるが、上面は標高0.35mの斜面部から下降し、同0.2mでほぼ水平に堆積する可能性が考えられる。堆積層の厚さは0.25m以上である。

<12層> 無遺物層である。調査区南壁で確認した。灰黄色粘質土で、上部の<8層>・<9 a層>と類似性が高い。<9 b層>～<11層>が堆積する傾斜地形の外側(東側)で、同地形形成以前の堆積層を構成する。上面レベルは標高0.55～0.65mで、<9 a層>あるいは<9 b層>上面に対応する。厚さは0.3m以上である。

#### 【地形の推移】

各層位の中で、比較的情報量が多い<10層>以上の状態から、本調査地点における土地形成の推移は以下のようにより返元される。

本地点は、無遺物層を構成する<10層>～<8層>の堆積が示すように、砂の堆積によって微高地が形成される。一方、その上部に堆積する<7層>では褐色系の砂質土～粘質土へと大きく変化しており、褐色を強めた土壌の形成は、同層形成時における安定した環境をうかがわせる。そうした人間生活に適した環境形成を背景に、集落形成が進行したと考えられる。その後、堆積層の時期には断絶が認められる。<6層>の形成時期は中世前半と理解されるため、古墳時代～平安時代に対応する土層が欠落することとなる。同対応層は、<6層>形成時に削平されたか考えるのが妥当であろう。よって、<6層>には土地改変に伴う造成土という性格が求められる。そして<5層>形成後、本地点の土地利用は耕作地へと大きく変化する。その際に<6層>は調査区北半から東にかけて削平され、調査区中央部に設置された東西方向の畦畔・溝を境に明確な段差が形成される。耕作地としての土地改変は、その後<4層>・<3層>へと、その地形が踏襲される。そして、近代における岡山医科大学移設に伴う工事によって<2層><1層>がもたらされ、現在の地形へと至る。

## 第2節 古墳時代初頭の遺構・遺物

本時期に属する遺構は、<7層>および基盤層にあたる<8層>上層で検出された堅穴住居3棟・炉跡3基・焼土集中域2箇所・土坑2基・溝3条があげられる。その他に、ビット5基が4区で検出されたが、数が限定的であり、その分布域が中世のビット群と共通することから、中世に対応する遺構と判断してここでは除外する。

遺構の分布は種類によって違いを示す(図10)。北東から南西方向に走る溝1が、調査区西端部を区切るように位置し、それ以外の遺構は、同溝の東側に約5mの間隔をもって検出される。堅穴住居は調査区の北東部に、そして焼土集中域はその南側に近接して2.5～3mの範囲に分布しており、両者の密接な関係を予想させる。3基の炉跡は、住居域から南約10mの場所に一定の間隔を有して位置し、5～7mの範囲に高温の加熱作業空間を構成する。さらに、その南側約6～8m付近には、粘土塊で満たされた土坑や廃棄物土坑が点在する。土坑周辺には小規模な溝2条が平行して形成される。その機能については想像の域を出ないが、作業空間を区切る役目も考えられるかもしれない。以上のように、本地点では、各遺構の機能に応じた空間利用の様子が窺われる。

本調査地点西側の第6次調査地点では、本時期の遺構は極めて希薄である。一方、東側に隣接する第7次調査地点では本時期の遺構が集中しており、本地点にまたがる堅穴住居の存在が確認されるように、両地点は連続し

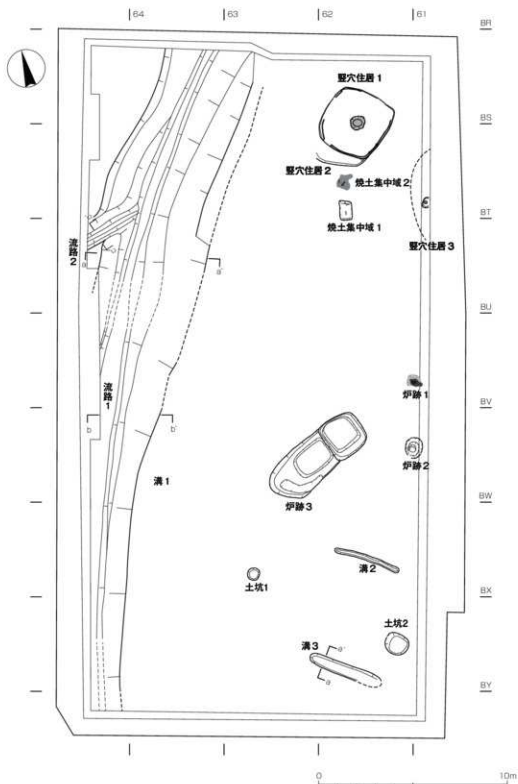


図10 古墳時代初頭の遺構全体図 (縮尺1/200)

た空間を構成する。こうした周辺調査の状況から、本時期の集落の西端を溝1が区切り、加熱作業を伴う手工業生産の場が鹿田遺跡に広がる集落の西端部に置かれた状況が復元される。

## a. 竪穴住居

### 竪穴住居1 (図11、図版4)

調査区北東部にあたるBR・BS61区に位置する。検出レベルは標高0.75～0.82mを測り、<8層>に対応する。ただし、一部の断面観察(図11-a断面)から、その上面を標高0.95mの<7層>に求めることができる。平面形態は方形～隅丸方形を呈し、3.5×3.4mを測るが、残存状況を考え合わせると、本来は一辺3.6m前後の規模が復元される。掘り方の底面は標高約0.7～0.75mの高さに位置し、残存する深さは0.05～0.07mである。壁体溝は、検出面のレベルが標高0.75m以上の箇所に残存する。その幅は0.08～0.2mを測る。数値幅が大きいのには検出面の低さや形状の崩れが背景にあるため、本来の数値は0.1m程度と考えられる。壁体溝の底面は標高0.7mに位置し小さな平坦面を形成する。

住居内のほぼ中央部には中央穴が検出された。直径0.75m前後の隅丸方形を呈し、深さは約0.1mを残す。そのほかに直径0.4m・深さ0.04mのビット1基が確認されたが、底面レベルは住居の床面とほとんど一致する点や壁体溝に近接する位置から、本住居に伴う柱穴ではないと判断した。その結果、本遺構は中央穴のみを有する方形～隅丸方形の竪穴住居と理解される。本住居に隣接する住居3については後述するが、同住居の特徴と比較すると、本住居が比較的小規模で、構造的にも簡易なものである点は明らかであり、その性格が目される。

住居全体を広く覆う埋土(図11-5・6層)は、黄灰褐色～暗灰色系の粘質土で灰色・黄褐色系の土をブロック状に含む。同層上面には、住居の東半部(中央穴の東側)に、炭化物を比較的多く含む層(同-3・4層)が堆積して広がる。また、4層は中央穴の周辺で少し盛り上がる傾向がある。これらの炭化物の量は際立って多いわけではなく、中央穴で生じた炭化物が東側に掻き出された状態と理解される。よって、3・4層は住居床面上の堆積層であり、5・6層が床面を構成すると判断し、床面レベルを標高0.75m～0.8mに求めたい。一方、中央穴の底面には、ほとんど純粋な炭化物層が厚さ0.03mで堆積する(図11-2層)。それに対して、その上部層(同-1層)では、炭粒がわずかに確認されるのみであり、同穴利用後の埋め戻し土の可能性が高い。

床面上には土器片が点在する。出土量は少量(13号ポリ袋1/8袋)で、細片～小片が50片程度である。壺・甕・高杯片を含む。こうした出土遺物の時期あるいは周辺遺構との関係から、本住居は古墳時代初期に属すると判断される。

### 竪穴住居2 (図11、図版4)

調査区の北東部にあたるBS61区に位置する。本住居の一部が竪穴住居1の南側に検出された。検出レベルは標高0.83～0.85mで、竪穴住居1と同一面の<8層>上面にあたるが、同住居と同様に<7層>以上に上がることは十分に予想される。重複して形成された竪穴住居1によって平面形の大半は消失しており、東西3m・南北約0.9mの範囲が残存するのみである。本来の形態を確定することは困難であるが、残存ラインから竪穴住居1と同様の隅丸方形を呈する可能性が高いと判断される。規模は一辺3m程度が予想される。掘り方底面のレベルは標高約0.75mを測り、深さは約0.1mを残す。壁体溝は、断面観察から幅0.1mで底面は標高0.72mに求められる。深さ約0.03mが残存するが、その多くが形状を失っており、平面的にはほとんど検出できなかった。柱穴などの痕跡も全く認められない。埋土は灰黄色～灰黄褐色粘質土で細砂を含む。床面を形成する層は抽出できない。

出土遺物数は20片程度でその量は極めて少なく、いずれも細～小片である。その特徴は古墳時代初期の範疇に属する。こうした出土遺物の時期や竪穴住居1との関連から、本遺構の時期を同時期に求めたい。なお、本遺構の上部には、炭化物の集中箇所や焼土粒の集中箇所も検出されているが、それらの出土レベルは標高0.8m以上であり、本住居埋没後の堆積と判断される。本住居南側の焼土集中域と同様の経緯で形成された可能性が高い。

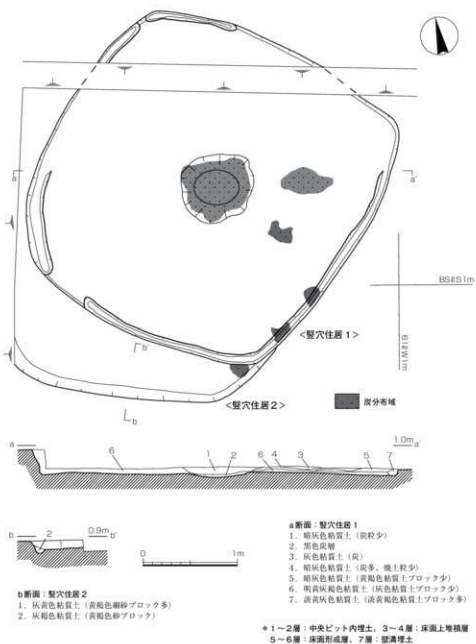


図11 竪穴住居 1・2 (縮尺1/40)

### 竪穴住居 3 (図12、図版 4・35)

調査区北東部のBS・BT60区において検出された。

柱穴の検出レベルは標高0.71~0.76mで<8層>に対応する。平面形は南北方向に軸を有する楕円形で、長軸は0.6m、短軸は0.5m前後の規模が復元される。掘り方内の中央部西寄りに、直径0.15mの柱痕跡が確認される。底面は標高0.52mに位置し、深さは0.19~0.24mを残す。掘り方はおおむね逆台形であり、埋土は灰褐色粘質土(図12-1層)を呈す。同層は砂を多く含む炭化物も少量認められる。底面には直径0.15m程度で深さ0.05m程度の柱痕跡が淡褐色粘質土(同-2層)の状態を確認された。

本遺構は、柱穴1基のみであるが、本調査区の東隣に位置する第7次調査地点の成果を踏まえると、同調査地



点の竪穴住居1新の2段階を構成する柱穴の1本が本柱穴にあたと判断される。同住居では6本の柱穴が想定され、そのうち4本は同調査域内で検出されたが、残る2本のうち西端部の1本が同調査区外、つまり本調査区内に想定されていた。同住居で調査された柱穴の検出レベルは標高0.78~0.88mであり、底面の多くが標高0.56~0.57mに位置する。平面形態は、直径0.75×0.6m~0.85×0.85mを測る楕円形~円形を呈する。以上の形態の数値が示す特徴は、本地点の柱穴の特徴とおおむね合致する。

ここで問題となるのは、同竪穴住居の西端ラインである。本調査域では、平面的な観察から暗色化した範囲を捉えることができた。明瞭ではないが、そのラインを手掛かりに既往報告のデータとあわせると、ここでは6本柱で直径6×6.4m程度の隅丸方形を呈する住居が復元される。また、第7次調査竪穴住居1新1段階で想定した

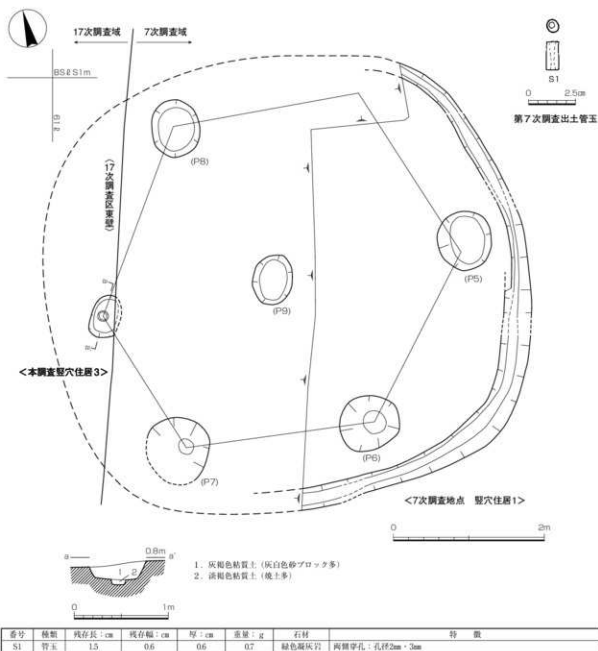


図12 竪穴住居3と第7次調査竪穴住居1・出土遺物 (縮尺1/50・1/40・1/2)

中央ピット（P9）は、本住居（同新2段階）においても中央に位置することとなった。よって、同ピットが両時期に連続的に利用された可能性は高く、その埋没時期は新1段階ではなく新2段階に対応すると判断される。出土遺物は確認されていないが、第7次調査竪穴住居1の成果から本遺構の時期は古墳時代初頭に比定される。なお、同住居の最終壁溝から緑色凝灰岩製の管玉（図12-S1）が出土している。2007年刊行の報告書では未掲載であるため、ここで改めて報告する（本報告第5章1参照）。

本住居は竪穴住居1・2に隣接するが、柱穴の有無および規模の大きさの点で明瞭な違いを示しており、住居1・2の小形で簡易な構造が際立つ。住居の機能を考える上で、こうした違いは重要な点といえよう。

**参考文献** 本センター2007『奥田遺跡5-第7・8次調査』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

## b. 炉跡・焼土集中域

焼土あるいは炭化物の分布が顕著な範囲や加熱作業痕跡を示す遺構が集中的に分布する箇所が、調査区東半部の2カ所で確認された。1カ所は竪穴住居1・2の南側に隣接する地点で、焼土集中域1・2を中心として2.5～3mの範囲に焼土・炭が散布する。いずれも明瞭な掘りこみなどの構造は認められない。被熱の度合いもやや弱い傾向が指摘される。他の1カ所は、同住居から南へ約10～15m付近に広がる5×7m程度の範囲である。強い被熱痕跡や大量の焼土・炭の存在などの特徴から、炉の痕跡の可能性が指摘される3基の遺構が3～4m間隔でほぼ等間隔に位置する。また注目されるのは、後述するように、これらが構造的に異なる点である。同域は、高温の加熱作業が行われた手工業生産の場が想定されると同時に、加熱作業において、内容の異なる作業が進められた可能性も残る。

### 炉跡1（図13、図版5）

BU60～61区において検出された。調査区中央東端に位置する。北側に配置される竪穴住居1・2から約10m離れた地点である。検出レベルは標高約0.9mで<7層>に対応する。東西約1.6m、南北約1.3mの範囲で炭化物の分布が確認された。高い被熱痕跡を示す部分は、炭化物分布域の南東部に求められる。ただし、本遺構の東側および南側は細溝などで消失しており、少なくとも炭化物の分布域が東～南側へ広がることが予想されるため、同分布域のなかでの同被熱痕跡地点の位置が、本来の姿であったかどうかは明確ではない。

被熱痕跡が特に顕著に認められる部分は直径0.25～0.3mの範囲であり、塊状の焼土として検出された（図13-1層）。おおむね橙赤色を呈するが、一部には白色を帯びる部分が確認されるなど、被熱温度の高さがうかがわれる。その影響は地表下0.04～0.05mの深さまで及ぶが、同約0.03m以下では焼土塊は焼土粒の包含へ、そして色調も黄白色から赤色へと漸移的に変化する（同-2層）。こうした状態は、地表面における高温作業の影響が上部から下部に及ぶ中で、被熱温度を減じていった結果と理解される。よって、その中心部を形成する1層が地床炉の痕跡を留める炉跡と評価することは可能と考えられる。

炉跡の周縁部には、焼土粒が顕著に堆積する2層（図13）の広がりが検出される。東西約0.75m・南北0.4mの規模を測り、炉跡の東側へ長く伸びる状態を呈する。同範囲は淡い赤色を帯びた褐色の砂質土で構成されており、炭粒も比較的上面に多く認められる。地表下への影響は0.01～0.02m程度であり、同色調などからも被熱の度合いが炉跡中心部よりも弱い状態がうかがわれる。形状はおおむね楕円形状であるが、炉跡部付近では、やや方形形状のラインを見せる。

焼土分布域の周囲には炭化粒の分布域が展開する。炭化粒の包含量によって2つの範囲に分けられる。多量の炭化粒が検出されるのは、焼土域の北～西側を中心として周縁部約0.2mの範囲である（図13-3層）。また、その中で特に2カ所に多量の炭粒と灰状の白色砂の集中が認められた。焼土粒は僅少であり、被熱の度合いは弱く、その堆積は深さ0.01mまでに限定される。さらに、その周囲0.5～0.6mには、炭粒が点的に分布する範囲が確認

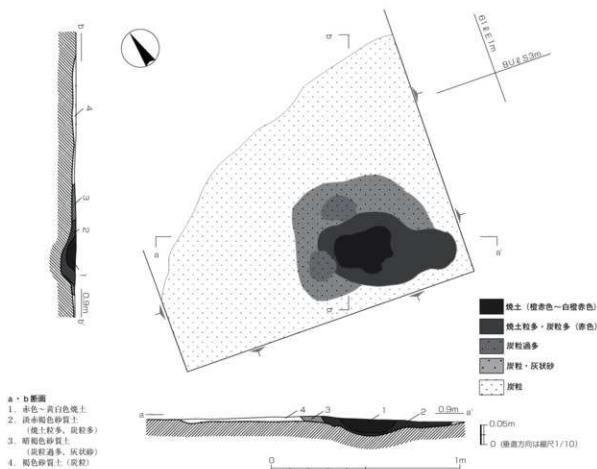


図13 炉跡1および周辺状況 (縮尺1/20・1/10)

される(同・4層)。中心部から0.8～1mの範囲に、3層分布域の外側に取り巻くように広がる。炭粒の量は少なくなり分散の状態を呈する点で3層の分布状況とは異なる。焼土粒はほとんど含まれない。このように、焼土や炭粒などの高熱作業が生み出す痕跡の分布は、炉跡の想定位置から同心円状に外側に向けて変化しており、炉を中心とした作業域が1～1.2mの範囲で広がっていた状態が復元される。

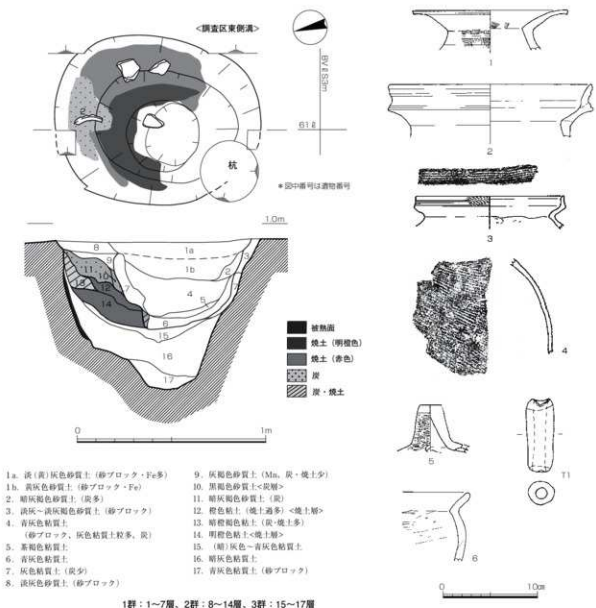
出土遺物は、周辺部から約15片の小～細片が出土したのみである。本遺構に直接伴う状態とは考えにくい、検出面の時期も参考すると、本遺構の時期は古墳時代初頭と判断して矛盾はないであろう。

#### 炉跡2 (図14、図版6・35)

BV60～61区に位置する。南北位置では調査区のはほぼ中央部そして東西位置では調査区東端にあたる。関連遺構との位置関係は、北側の炉跡1とは約4mの間隔を有し、堅穴住居1・2からは約15m離れる。

上面レベルは断面観察から標高0.9mの<7層>に求められるが、平面的には同0.8m前後の<8層>で検出された。上面規模は南北方向で1.05m、東西方向で0.9mを測る。ただし、後者の値は、調査区東側溝の掘削によって検出面レベルが下がったという作業上の問題が影響しており、本来は直径1m前後の円形に近い形状が復元される。掘り方は、底部がピット状に円形に窪み、U字形に近い断面形を呈する。底面のレベルは標高0.13mで、ピット状の窪み部の直径は約0.3mを測る。全体の深さは0.78mを残す。

埋土は、土層の特徴あるいは堆積状況から3群に大別される。1群は1～7層、2群は8～14層、3群は15～17層である。以下に各群の説明を記す。



番号	種類・容積	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法他	粘土	色調 内/外
		口径	口径	高さ				
1	土師器・壺	16.4	-	-	1/1	(口)縁ナデ(内)ナデ(外)ハケ後ナデ	細砂	明橙～淡橙
2	土師器・壺	21.3	-	-	1/2	(口)縁ナデ、磨滅	細砂	淡橙～黄灰
3	土師器・甕	15.5	-	-	-	(口)縁ナデ、7本の細指沈籠(内)巻ケズリ(外)ナデ	細砂	淡黄橙
4	土師器・甕	-	-	-	-	(内)頸内(外)口リタテキ、一部磨滅・磨滅	粗砂	黄橙・橙
5	土師器・高杯	-	-	-	-	磨滅内(ハケ後ナデ)(外)ミヤキ、口孔、磨滅	水産粘土	淡黄橙・橙
6	土師器・鉢	-	-	-	-	(口)縁ナデ(内)巻ケズリ後一部縁ハケ(外)ナデ	細砂	淡黄橙

図14 炉跡2・出土遺物(縮尺1/20・1/4)

1群(1~7層)は最終段階の土坑部分に伴う土層群であり、全体的に炭・焼土の包含が少ない点の特徴である。1層は黄色を帯びた灰色系の砂質土で砂をブロック状に含む。鉄分の沈着が顕著で、炭・焼土はほとんど含まない。特に1a層は流入土の性格が考えられる。2層は炭化物の包含が特徴でやや暗い色調を呈するが、2群の炭の包含と比較すると、その量は多くない。3層は、上半が淡灰色で下半は淡灰褐色の砂質土であり、1層

との類似性が高い。4層以下は粘質土の点で砂質土の1～3層とは区別される。4層は本群で埋まるピット部の主要な埋土を構成する。厚さは0.2mを測る。青灰色粘質土であるが、灰色粘質土粒を多く含む比較的大きな炭粒が点在する。5層は褐色を強める粘質土で特徴的な包含物は認められない。6層は青灰色粘質土、7層は灰色粘質土である。それぞれ0.05m前後の厚さが確認され、本群形成ピットの底面から側面に張り付けられたような状態を示す。特に7層は特徴的であり、壁面を構成する「粘土」と理解されるが被熱痕跡は確認できない。

2群（8～14層）の堆積範囲は1群の北半、つまり本遺構の北側半分に限定される。焼土・炭を多量に含む焼土層あるいは炭層と評価される土層群を中心とし、加熱痕跡を明瞭に残す。ただし、上面に近い8・9層では、そうした包含物は少ない。また、8層は、砂の包含の多さや明るい色調を手掛かりに1群の1a層と分層したが、基本的には同層と共通する。以上の点から、両層とも10層以下が示す加熱作業後の埋め戻し土あるいは流入土と理解される。一方、焼土・炭化物が卓越する10～14層は、多量の炭を包含して炭層と評価される11層、焼土層と評価される12層・14層、焼土と炭化物が混在する10層と13層で構成されており、焼土と炭の集中的な堆積が交互に確認される。特に、12層と14層は明るい橙白色の色調を呈しており、強く被熱した灰壁の存在として評価されよう。その灰壁が形成された位置からは、本遺構の南側から北側に向けた加熱作業が予想される。また、平面的には明るい発色の焼土の分布上に暗い赤色系の焼土が分布し、それらの上に炭化物が集中的に堆積する状態が確認される（図14-平面図トーン部）。本遺構から出土した焼土の重量は少なくとも77kgを超えるが、その多くは本群の埋土に伴うものである。

3群（15～17層）は1群と2群の下部に堆積し、焼土・炭を全く含まない灰色系の粘質土群である。15層は灰色系の粘質土であり、1～5cmの厚さで全面を覆う。最下層の17層は青灰色粘質土で、本遺構底部のほぼ中央部に位置するピット状の掘り込み部を埋める。その厚さは0.15～0.25mを測る。こうした形状や堆積状況から、同掘り込みは竈の下部構造と考えたい。その機能としては、その上面を覆う粘土層（図14-15層）の存在を考慮させると、除湿効果が意識されていた可能性が高いのではなかろうか。それに関連する痕跡として、下部ピット北壁面に残る被熱痕跡も注目される（同トーン部）。そこには同効果を高めるための加熱行為が予想される。

以上のように、本遺構は下部構造を有し、その上部で複数回の加熱作業が行われた跡との評価が可能であり、恒常的な加熱作業が想定される。ただし、1群の堆積状況からは、最終段階での加熱作業は際立つものではなかったことが予想される。最終段階における竈の規模は、直径0.75m前後で深さ約0.45mである。

遺物は13号ポリ袋に2袋弱程度の量が出土した。細～小片が大半を占める。ほとんどが1群からの出土であり、かたがた廃棄される際の埋土内に含まれた混入物と判断される。吉備型甕片のほか、鉄片が確認されるが、いずれも古墳時代初期の時期を示す。そのほかに土鏝1点が含まれる。

本遺構は、出土遺物のほか、周辺遺構との関連から古墳時代初期に機能した跡と判断される。

### 炉跡3（図15-17、図版7・8・29）

BV61・62区において検出した。竈穴住居1の南15m前後の位置に形成された炉跡1・2とは2～3mの距離を保っており、加熱作業域の一角を占める遺構と評価される。

検出レベルは標高0.8～0.95mを測り、<8層>～<7層>に対応する。平面形は長軸5.8m・短軸2.2mを測る隅丸長方形に近い形状を呈す。長軸方向は北東～南西方向を示す。浅くて緩やかな掘り込み内に2カ所の窪み部が形成されている（図15）。以下、北東側を「窪み部1」、南西側を「窪み部2」として説明しよう。

【窪み部1（図16-a・b断面）】 大量の焼土・焼土塊・炭化物の集中的な堆積が特徴をなす。平面形は隅丸方形を呈し、2.1×2.2mの規模を有す。掘り方には小規模な段が確認される。一段目の下面の高さは標高0.7～0.75mを中心とするが、南側部分ではやや上昇して同0.8mとなる（a断面）。同面から掘りこまれる二段目の掘り込み部は、一辺1.6～1.65mの隅丸方形を呈する。底面は、北側部分では標高0.7m程度の高さで比較的平坦な面が形成されるが、それ以外は凹凸が顕著で起伏を有し、その底面レベルは同0.62～0.65mの値を示す（a・b断面）。本

遺構の上面レベルを検出面の0.85~0.9mに求めると、深さは0.2~0.25mとなる。本遺構の上面レベルは、堅穴住居1で想定された数値あるいは炉跡1の同レベルと近似することを考えると、ここで求められる深さは、本来の規模から大きく逸脱するものではないだろう。底面の凹凸部の上部には、炭層と焼土層が極めて顕著な堆積を残しており、こうした大量の焼土と炭化物の集中的堆積は、本遺構の機能にかかわる痕跡と評価されよう。

両者の分布範囲は、焼土は直径1.6m程度、炭化物は同1.3~1.5mを測り、両域はほとんど重複して堆積する(図15-トーン部、図16-a・b断面)。堆積順序は、下部に厚さ0.03~0.06mの炭層(図16-a・b断面6層、以下a・b層は略す)、その上部に同0.05~0.1mの焼土塊を含む焼土層(同-3層)、さらに、その焼土層上に炭を多く含む厚さ0.03~0.05mの炭層(同-2層)が重複し、各層は比較的明瞭に分離される。焼土の堆積は分布範囲の南西側に高く、北~東側に向けて下降し(同-b断面)、その端部はアメーバ状に入り組んだ状態を呈す(図15)。特に高く盛り上がる傾向が強い中央部では、焼土分布域の中心を構成する焼土塊の広がりが確認される(同-3a層)。同層は、一部には明るさを増した橙白色化が確認され、高温被熱の状態を示す。その焼土塊の形状は、平面的には不整形ではあるが、1m四方に面的な広がりを見せる。同一個体が集積状態かについての確認は得られていないが、取り上げ後の状態では、固く焼きしまった大形の形態として取り上げられている。その重量は約90kgを超える。一方、同層周辺に堆積が確認される焼土層(同-3b層・3c層)は3a層とは異なり、橙色あるいは灰色系の粘質土層・砂質土層に大量の焼土と、一部では炭化物が混在する状態を呈すことから、再堆積の可能性が指摘される。こうした3b・c層との違いから、3a層は同位置付近で形成された可能性が考えられるのではないだろうか。炭層は上・下に分かれて堆積するが、両層の様相には多少の違いが確認される。下部の炭層(同-6層)は純粋な炭層と評価されるのに対して、上部の炭層(同-2層)は炭化物を多く含むという程度のものであり、堆積由来の違いが予想される。

全体の堆積状態を改めて整理してみよう。1層は焼土あるいは炭化物を含まない層であり、本遺構が機能を消失したのちの埋没土と考えられる。多量の焼土・炭化物の分厚い堆積が及ばない北寄り部分を中心に厚い堆積を示す(図16-a断面)。2~6層は焼土と炭の一連の堆積に関連する土層群である。2層と6層の炭層、そして3

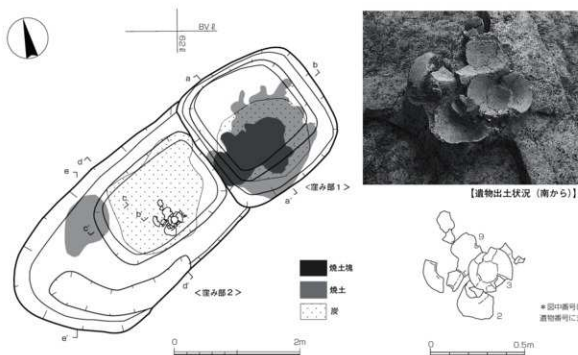


図15 炉跡3 (縮尺1/60・1/20)

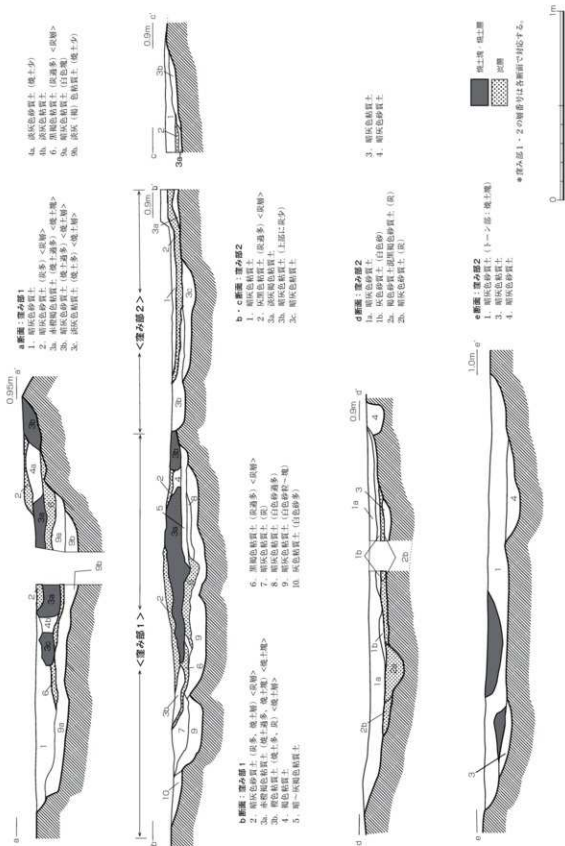


図16 炉跡3断面 (縮尺1/20)

層の焼土層については前述した。そうした中で、4層と5層は炭化物量が極めて少量である点で他とは異なる。4層は焼土層である3b・c層堆積時に混入したブロック的な堆積と理解される。一方、焼土層の3層直下に認められる5層は厚さ約0.03mの薄い水平堆積を呈すことから、焼土堆積直前における整地的な意味合いも予想させる。炭層をなす6層以下の7～9層は暗灰色粘質土を基調とし、上層とは明瞭に区別される。6層に接する7層では炭化物の包含が認められるが、それ以外では炭化物を含まず、白色砂粒～塊を包含する。特に8層は同砂を多く含み、厚さ0.02～0.03mの薄い水平堆積を呈す(同-b断面)。最下部に堆積する9層は、一部で色調に変化が認められるが(同-a断面9b層)、全体として0.1m程度の厚さで底部を覆い、底面の凹凸を埋める。

以上の堆積層の形成を下部から順を追って確認してみよう。まず最下部を埋めるのが、白色砂を包含し炭化物を含まない9層であり、2段目の掘り込みの底部の凹凸は、この堆積によっておおむね平坦化したであろう。その上部には厚さ数cmの8層と5層が6層の炭層を挟みながら連続して水平に堆積する。この点で同層は類似性が高い。これらの層の堆積範囲は、焼土層である3層が最も盛り上がる部分の下部にあたる。つまり、最も被熱の度合いが高い焼土塊状を呈した3a層のベースを構成する層を構成しており、5層および炭層である6層の上部には焼土塊が厚く形成される状態が生じている。3a層形成位置付近を加熱作業の場と関連付けるならば、8層・6層・5層は、炭化物層を挟みながら形成された加熱施設の下部構造としての性格を求めることができるかもしれない。3a層形成後、その上部には炭化物層である2層が覆う中で、加熱作業終了後の3a層の周囲には多量の焼土を含む3b層が埋土となって堆積し、最終的には、窪み部1内は1層で埋没する。現状の理解によれば、以上のような埋没過程が復元される。

【窪み部2(図16-b～e断面)】炭層の存在が特徴をなす。本遺構の南西部を構成し、標高0.85m(東半)～0.95m(西半)で検出された。平面形は隅丸長方形を呈し、3.7×2.2mの規模を有す。掘り方は二段掘りの状態が確認される。一段目の底面は標高0.8～0.85mに位置し、南西側に広い平坦面を形成する。同面において、二段目の掘り込みが窪み部1に接した状態で北東部側に、そして、本窪み部の南西コーナー付近に溝状の落ち込みが弧状に検出された。二段目の平面形は2.05×1.4mを測る隅丸長方形が復元される。その底面レベルは標高0.75mで、検出面からの深さは0.1～0.2mである。同0.65～0.7mに底面レベルが求められる窪み部1と比較すると、底面は一段高く浅い状態にあったことがわかる。一方、溝状の落ち込みは、本遺構の平面ラインに沿って緩やかな窪みとして検出された。幅は0.4～0.5mである。底面レベルは標高0.75～0.78mで、深さは約0.1mを測る。断面形態は緩やかな碗状を呈する。埋土は灰色系の砂質土あるいは粘質土である(図16-d・e断面4層)。平面的な検出範囲は限定的であったが、e断面において、断面の南北両端に溝状の浅い掘り込みが確認されることから、本来は本遺構の西半部を巡っていた可能性が高い。機能についての手掛かりは乏しいが、除湿効果の狙いがあるのかもしれない。

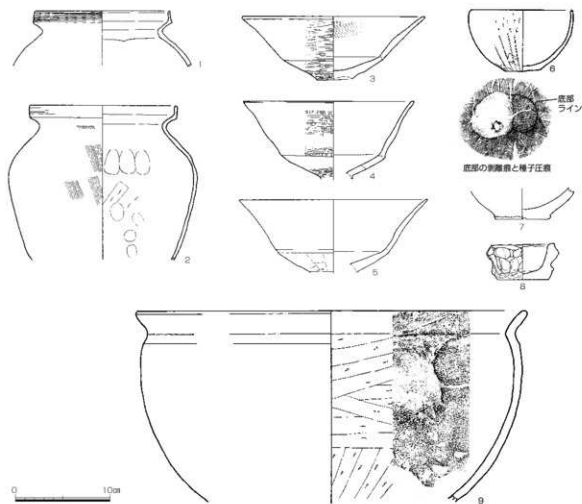
一段目と二段目の掘り込みを埋める堆積層をb～e断面で説明しよう。一段目を埋めるのは1層で、本窪み部全体に広がりを見せる。本窪み部で特徴をなす炭層あるいは炭化物を多く含む2層上部に堆積しており、炭を含まない灰色系の粘質土あるいは砂質土で構成される。その厚さは0.1m前後である。同層は最終埋土である。窪み部1の1層に対応する。ところで、本窪み部西端部では、その1層中に直径0.2～0.5mの焼土塊が数点含まれている(図15)。同焼土塊の出土レベルは標高0.85～0.95mであり(図16-e断面)、一段目掘り込み部の平坦面上に位置する。その分布は1m×0.5m程度の範囲に限られており、炭層(2層)の堆積域とは分離される。炭層と焼土層が重複する窪み部1とは明瞭に異なっており、1層中の焼土は、本来の形成場所から移動して廃棄されたものと判断される。

2層は炭層を構成し、その厚さは0.02～0.05mを測る。同層は、おおむね二段目の掘り込み部に堆積しており、本窪み部全体を覆うものではない(図15-トーン部、図16-b～d断面)。一方、下面のレベルは標高0.75mで比較的平坦である。一部で窪み状を示す部分もあるが(同-d断面2a層)、同部分については、埋土の特徴が他と



はやや異なる点から、別の意味合いを有す可能性も考えられる。2層を構成する炭化物は、東側の窪み部1から本窪み部の西側に向けて急速に減少する。それは、b断面の炭層状態からd断面の炭を含む状態への変化、そしてe断面における2層の欠落という変化として観察される。窪み部1における加熱作業に起因した炭の堆積が周辺に向けて減少する状態が想起される。3層は暗灰色粘質土あるいは砂質土で炭化物をほとんど含まない。底面の凹凸を埋めて、上面に比較的平坦な面を創出している状態が認められる。

【窪み部1と同2の関係】 両者の位置関係と平面形の連続性、あるいは掘り方形態や土層堆積状況の類似性から、両窪み部は一連の遺構と判断される。両窪み部で重要な要素は、窪み部1では焼土塊・焼土の集積であり、同2では炭化物層の存在にある点は、両者の機能を考える上で注目される。前述したように、前者では多量の焼土塊・焼土の下部に炭化物層が存在するのに対して、後者では、炭化物層の堆積では前者と類似性を有すが、遊



番号	種類・器種	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法類	胎土	色調 内・外
		口径	底径	器高				
1	土師器・壺	14.2	-	-	1/3	口縁部の輪描定線(内)匳ヶズリ(外)磨減	灰砂	橙
2	土師器・壺	15.4	-	-	-	口縁部北縁(内)匳ヶズリ・押圧(外)ハケ・磨減・窪	灰砂	橙
3	土師器・高杯	19.4	-	-	1/1	工具ナデ(外)ミガキ、(杯内)剥離痕・磨減	灰砂	橙
4	土師器・高杯	18.1	-	-	3/4	(外)ハケ後ミガキ、(杯内)剥離痕・磨減、黒斑	灰砂	淡橙
5	土師器・高杯	20.0	-	-	-	(受部外)面取り後ミガキ、(杯内外)剥離痕・磨減	水産粘土	黄橙
6	土師器・鉢	-	3.8	-	1/4	(外)ヶズリ・押圧後輪刻4条、(底外)剥離痕・種子圧痕	灰砂	淡橙
7	土師器・鉢	-	3.8	-	1/2	ナデ、(外)剥離痕、黒斑、(底外)種子圧痕	灰砂	黄濁
8	土師器・手捏土器	16.0	5.3	3.7	1/3	押圧・ナデ	灰砂	橙灰
9	土師器・鉢	36.0	-	-	1/4	(内)匳ヶズリ(外)ナデ、内面に剥離痕	灰砂	橙

図17 炉跡3出土遺物(縮尺1/4)

難した焼土を除く和被熱痕跡を示すデータは全く認められない。こうした状況から加熱作業の場と作業場の機能の違いも想起されるが、決め手に欠ける点は否めない。これについては、今後の課題としておきたい。

以上、本遺構の性格について、窪み部1では、焼土塊を呈した被熱部の面的広がりや下部の炭化物層の状態から被熱地点からの移動は考えにくいと判断して、炉跡の可能性を想定した解釈を述べた。しかし、一方で、直接的な被熱痕跡が、底面などに直接的に刻まれていないことから、焼土あるいは炭化物の投棄土坑としての評価も可能性として残る点は注意しておきたい。

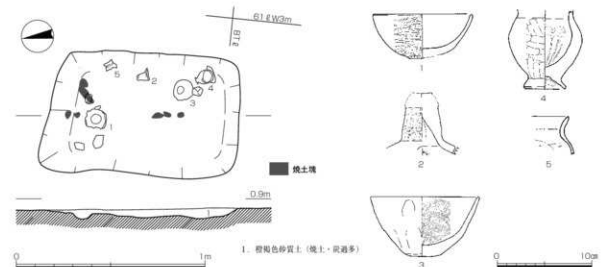
【出土遺物(図17)】 遺物はコンテナ約2箱の量が出土した。その多くが細～細片であり、最終埋土となる1層に含まれる。同層出土の遺物には炉跡1周辺から出土した土器と接合するものが含まれており、両遺構が接近した時期に廃絶した可能性を示す。一方、窪み部2の炭層上部では高杯の杯部が正位置に、そして、その下部に甕(同-2)・大鉢(同-9)の破片が重なって出土した(図15)。いずれも比較的大形片であり、他の出土遺物とは異なる出土状況を示す。また、高杯・鉢・大鉢(図17-3~7・9)の表面には、大小の剥離面が確認されるほか、うろこ状の剥片も出土している。同特徴を有す土器片は高杯・鉢に限定される傾向も指摘しておきたい。

出土遺物の時期は古墳時代初頭に比定されることから、本遺構は同時期に廃絶されたと判断される。同時期は周辺の方跡1・2の利用時期にあたる。

#### 焼土集中域1(図18、図版5・29)

BS61区の南端でBT61区にかけて検出した。竪穴住居1の南側に広がる焼土散布域を構成し、同住居からは南に2.5mの間隔を有す。検出レベルは標高0.85mで、<8層>上面にあたる。

平面形は隅丸長方形を呈し、長辺1.1m・短辺0.65mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、底面に多少の凹凸が残る。深さは0.05mで、橙褐色砂質土で埋まるが、埋土上部に多量の焼土と炭化物が包含される。炭化物の分布は土坑の周縁部に、焼土はその内側の土坑中心部に多い傾向が確認される。焼土を中心に同心円状の分布を示す。焼土分布域には、強い被熱を示す炉壁片と理解される白橙色の焼土小塊が含まれる。地床がの可能性を残しつつも、明確な焼土面が未確認であるため、ここでは焼土集中域として報告する。



番号	種類・器種	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法他	胎土	色調 内・外
		口径	底径	器高				
1	土師器・高杯	(10.3)	-	-	-	(外)ミガキ、磨滅	黒砂	赤橙
2	土師器・高杯	-	-	-	-	(内)絞り目(外)面取後ハケ・ミガキ	黒砂	明橙/暗橙
3	土師器・鉢	11.4	3.55	6.3	1/1	(内)ハケ(外)押圧(口内)後成時再熱剥離面?	黒砂	淡橙/淡緑
4	土師器・ミニチュア土器	-	4.2	-	1/2	押圧・ナデ、磨滅	黒砂	淡赤/赤
5	土師器・甕	-	-	-	-	(口)横ナデ(口内)直ナデ(外)ナデ、磨滅	水産粘土	灰緑/暗

図18 焼土集中域1・出土遺物(縮尺1/20・1/4)

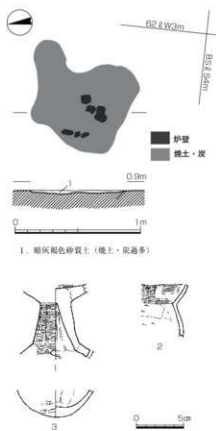
出土遺物は13号ポリ袋約2/3袋分である。小片が多いが、完形に近い鉢・台付き鉢などが上面に点在する状態で出土した。高杯・鉢などの小形器種の比率が高い。こうした遺物や周辺遺構から、本遺構は古墳時代初頭に比定される。

#### 焼土集中域2 (図19)

BS61区で検出した。竪穴住居1の南側に焼土・炭散布域を構成する。住居と焼土集中域1に挟まれる位置で、両遺構から0.5m前後の間隔を有す。検出レベルは標高0.83mで<8層>上面にあたる。焼土集中域1と同一面である。

検出面では、焼土と炭化物が一边0.8~0.7mの範囲に顕著に分布する。その平面形は、一部にアメーバ状を呈し不整形な形態を示す。底面は標高0.8mを測る。深さ0.02~0.03mの窪みを残すが、必ずしも掘りこまれた状態とは言いが切れない。窪み部分を埋めるのは暗灰褐色砂質土で、多量の焼土と炭化物を含む。焼土の中には0.05m前後の灰壁片が数点含まれる。いずれも被熱による変色が明瞭に確認される。炭化物には木炭片が確認された。周辺における加熱作業に伴う廃棄物が堆積した状態と考えられる。

以上の特徴は焼土集中域1と共通する点が多く、同時期の加熱作業に伴うものと理解される。同焼土集中域との関係や周辺出土の遺物から古墳時代初頭に属すると判断される。



1. 灰褐色砂質土 (焼土・炭過多)

番号	種類・器種	法量 (cm)			貯蔵部の 残存状況	形態・手法施	粘土	色調 内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・高杯	-	-	-	-	(杯内)ミガキ(脚内)絞り目(脚外)面取後ミガキ、凹孔	水漬粘土	橙
2	土師器・鉢	-	-	-	-	(口内)ハケ(内)造ケズリ(外)ハケ	水漬粘土	淡黄橙
3	土師器・平形土器	4.2	-	1.7	-	(内)押圧(外)タテキ創り、黒塗、二次的焼熱	黄砂	淡黄橙

図19 焼土集中域2・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

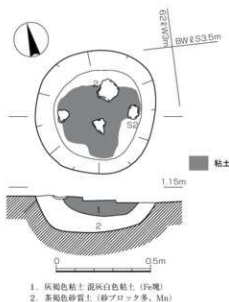
### c. 土坑

#### 土坑1 (図20・21、図版5・29・35)

調査区中央部のBW62区において検出された。竪穴住居や焼土関連遺構の分布域と溝1との間である。周辺の遺構は希薄で、北側の跡3から約6m、西側の溝1から約6mの位置である。検出レベルは標高1.1m~1.07mで<7層>に対応する。

平面形は円形で、その規模は上面で直径約0.65m、底面では同0.45mを測る。底面の高さは標高0.9mで深さは0.2mが残る。掘り方の断面形は、やや丸みを有する逆台形を呈する。

本土坑の特徴は、1層を形成する粘土層である。淡灰色の粘土塊と褐色の粘土塊が混在する。粘土には鉄分が塊状に沈着し、一部に黄色を帯びる部分が認められる。2層は褐色系の砂質土で暗灰色の砂をブロック状に含むが、基盤層をなす<8層>との類似性が高く、遺構外の可能性を残す。

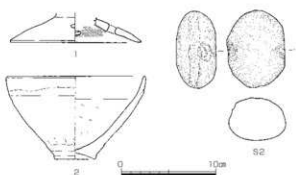


1. 灰褐色粘土・淡灰白色粘土 (Fe塊)  
2. 茶褐色砂質土 (砂ブロック多、Mn)

図20 土坑1 (縮尺1/20)

遺物出土量は13号ポリ袋0.5袋弱で、被熱した小～細片が多い。粘土層中にはほとんど遺物を含まない。大きめの破片は1層上部に数点が重なる状態で出土した。高杯・鉢が含まれる。鉢（図21-2）は外面に剥離痕跡を残しており、焼成時破損品の可能性がある。その他に、完形の石鉢が出土した（同-S2）。本土坑の所属時期は古墳時代初頭と判断される。

本遺構は粘土埋納土坑の可能性が考えられる。



種類・器種	法長 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法施	粘土	色澤 内/外
	口径	底径	器高				
土鉢器・高杯	-	(137)	-	1/2	(内)ハケ、外面剥離、口孔、被熱痕跡	黒砂	淡黄～黄
土鉢器・鉢	14.8	(42)	8.8	1/2	ナデ(内)タタキ直、(外)剥離痕、(底)内(器)圧重直	黒砂	黄白/橙白
番号	種類	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	重量・g	石材	特徴
S2	石鉢	81	60	4.5	207.5	花崗石	頸軸に打欠き跡あり

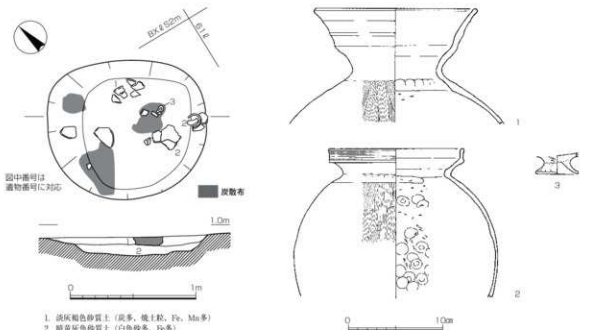
図21 土坑1出土遺物（縮尺1/4）

### 土坑2（図22、図版5・29）

調査区の南東部にあたるBX61区に位置する。炉跡2から南へ約9m、そして土坑1から東へ約9mを測る地点である。検出レベルは標高0.9m程度であり、<8層>に対応する。

平面形は、直径1.3～1.1mを測る不整形円形を呈する。底面は標高0.75mに位置し、直径0.9～0.85mの不整形円形を示す。深さは0.15mが残る。掘り方断面は皿状を呈する。また、本遺構下部には染み込み状の汚れが確認されているが、基盤層である<8層>の一部と判断した。

埋土は比較的明瞭に上・下層に分層される。1層は灰褐色系の砂質土で多量の炭粒を含む点が特徴である。炭



1. 灰褐色砂質土（炭多、焼土粒、Fe、Mn多）  
2. 暗黄灰色砂質土（白色砂多、Fe多）

番号	種類・器種	法長 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法施	粘土	色澤 内/外
		口径	底径	器高				
1	土鉢器・鉢	16.5	-	-	1/2	(口)縁ナデ(内)黒タタキ(外)ハケ、剥離	黒砂	赤紫/黄緑
2	土鉢器・葉	14.55	-	-	1/1	(口)7条の輻条成輪(内)黒タタキ・押圧(外)ハケ、煤	黒砂	暗紫/灰灰
3	土鉢器・碗状土器	-	2.2	-	1/3	押圧・ナデ(外)タタキ、煤、被熱変色	黒砂	淡黄緑

図22 土坑2・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

化物の集中は土坑内の3か所において顕著である(図22-トーン部)。1層の厚さは0.1m程度であり、こうした炭化物に加えて、焼土粒あるいは比較的多くの土器片も含まれる。2層は灰色系の砂質土で白色砂を多く含む層で、鉄分の沈着で黄色を強める。炭化物などの包含物は確認されない点で上層とは明瞭に異なる。基盤層である<8層>に類似しており、上層の影響を受けて汚れた基盤層の一部との評価も残る。

遺物は、13号ボリ袋1.3袋程度の量が出土した。全体的に細片～小片が多いが、1層中には、比較的残存率の高い土器片が含まれる。壺(図22-1)・吉備型甕(同-2)・鉢のほか製塩土器の脚部片(同-3)が炭集中部から出土した。いずれも古墳時代初期に属する。

本土坑は、炭を含む埋土の堆積状況や不整形の平面形あるいは埴群との位置関係などから、同道構群と関連を有す土坑の可能性も考えられる。廃棄時期は古墳時代初期に属する。

#### d. 溝

溝1(図10・23～26、図版8・9・29・35)

調査区の西半部(3区・4区)にあたるBR-BY62～64区において検出した。北東から南西方向に軸を振りながら調査区西端部をおおむね南北方向に走る。調査区南半部では、本溝の西半部は調査区外となる。検出レベルは、北側(3区)で標高0.75m、中央部で同0.85m、南側(4区)で同0.95mを測る。いずれも基盤層である<8層>に対応する。3区では、古代の建物関連遺構が本溝の東半部上部に重複する。また、本溝の中央部と南端部は、東西方向に走る中世溝群によって破壊される。

溝の幅は、全体が残存する北半部において約6mを確認した。溝の掘り込み斜面は、一部に強い角度も残るが、全体としては多少の起伏を有する程度の緩やかな状態で標高0.4～0.5mに至る。同面では2本の流路が検出された。溝中央部を走る流路1と同流路から分岐して西方向に向かう流路2とする。

流路1の検出レベルは標高0.5～0.6mである。幅は、流路2との交点付近から北側では1～0.8mに対して、同以南では1.5mへと広がる傾向が指摘される。底面レベルは標高0.1～0.5mの幅を有す。流路2以北(3区)では同0.1～0.25m、同以南(4区)では同0.4～0.5mを測り(同-a・b断面)、流路2付近から北に向けて底面レベルの低下が指摘される。特に、流路2への分岐点付近では同0.1～0.12mの低い数値を示す。溝の幅の変化を勘案すると、北に向けての水の流れと合わせて、流路2との合流による水量あるいは水流の強まりが想定される。底面レベルが高い南側(4区)では、本流路の掘り方が非常に緩やかなカーブを描きながら皿状底面を形成する点も、こうした機能面の理解と矛盾しない。

流路2は、BT64ポイント付近で流路1から枝分かれして西方向に向かう。検出レベルは標高0.5m前後であるが、調査区西壁では、上面レベルは標高約0.6mまで上昇する。溝の幅も、検出面では0.55mであるが、同断面では0.65mが復元される。底面レベルは調査区西端では標高0.25mであるが、東側の64ライン付近から流路1との結節部では同0.2mに下降する。同位置付近における流路1の底面が標高0.1～0.2mに位置することから、西から東、つまり流路2から同1に向けての流れが想定される。断面形態はU字形に近く、深さは流路検出面から約0.3mを残しており、流路1と比較すると溝としての機能的な形状が際立つ。

埋土について、まず流路1とその上部を埋める堆積層について確認すると、上層(図23-a・b断面1～3層)・中層(同-a断面4～6層・b断面4層)、そして流路1に対応する下層(同-a断面7～8層・b断面5～6層)に大別される。上層は全体的に砂質が強く、下部(同-a・b断面3層)は多量の鉄分の沈着によって黄橙色傾向を強める。一方、中・下層は灰色系の粘質土で下層に向けて暗色化を示す。流路1の最下層(8層)では白色砂を含んでおり、水の流れが予想される。また、流路2の埋土も灰色系の堆積土で白色砂を包含するなど、流路1の埋土と共通する(同-c断面)。

また、本溝の構築に関しては、流路2以外の形状が自然地形と類似することから、同地形の一部を加工しつつ、

調査の記録

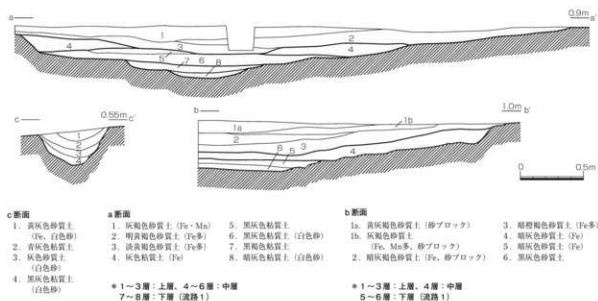


図23 溝1断面 (縮尺1/30)

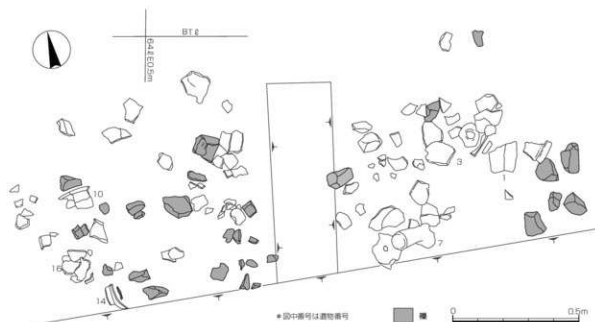
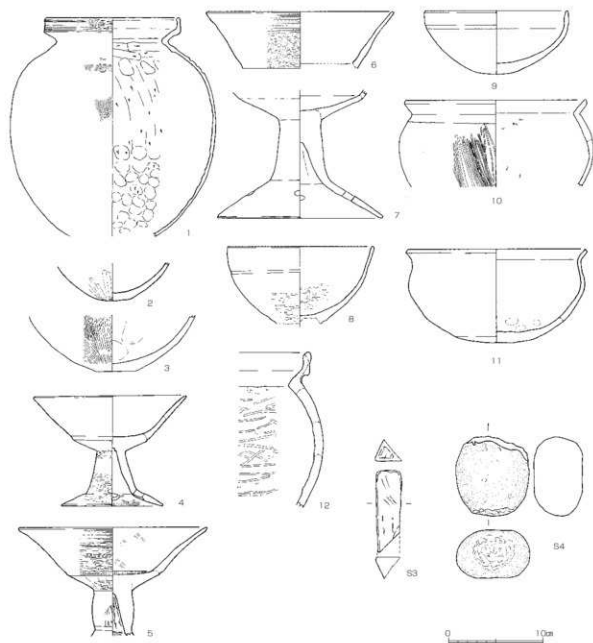


図24 溝1遺物出土状況 (縮尺1/15)

溝の機能を付加したものであったと考えたい。

遺物はコンテナ3箱分の量が出土した。その多くは、流路1と同2の結節点付近にあたるBT63・64区(3区)に集中して出土した(図24)。出土レベルは標高0.6~0.8mで、溝の上層に含まれており、本溝廃棄後の窪み部に一括廃棄されたと理解される。20点前後の角礫を伴い甕・壺・高杯・高杯・直口壺・ミニチュアの甕などの土器が分布する。特に残存率の高い器種の主体は高杯・鉢である。一方、流路部分では小・細片が数点確認されるのみで、ほとんど出土していない。弥生時代後期に属する土器片は極めて少量でいずれも小片であり、本溝の出土遺物の大半が古墳時代初期の時期に属する。その他に、直径10cm前後の叩き石・断面が三角形を呈し残存長8.7cmを測る砥



番号	種類・器種	法量 (cm)			台座部の 残存状況	形態・手法施	胎土	色澤 内・外
		口径	口径	器高				
1	土師器・甕	112	-	-	1/2	(口) 浅袋の櫛目状文(内) ケズリ後押圧(外) ハケ・刺突3筋	陶砂	角四石
2	土師器・甕	-	32	-	1/1	(内) ナズリ(外) ミガキ	陶砂	黄褐色
3	土師器・甕	-	38	-	1/1	(内) ケズリ後押圧(外) ハケ、(内) 漉羅敷、磨滅	陶砂	黄褐色・茶褐色
4	土師器・高杯	(16.1)	10.8	11.5	1/4	(脚部内) ハケ(外) ハケ後ミガキ、(杯内) 漉羅敷	陶砂	橙
5	土師器・高杯	19.8	-	-	1/4	(杯内) ハケ・ミガキ(杯外) ミガキ(脚柱外) ハケ痕、黒炭	陶砂	橙
6	土師器・高杯	19.8	-	-	1/3	(外) ミガキ(内) 磨滅、漉羅敷、黒炭	陶砂	暗黄褐色
7	土師器・高杯	-	17.2	-	1/4	(脚内) 絞り目、円孔、磨滅	陶砂	橙
8	土師器・高杯	15.3	-	-	2/3	ミガキ、全面磨滅、(外) 漉羅敷	陶砂	淡褐色
9	土師器・鉢	(15.0)	4.0	6.7	1/1	(口) 櫛目ナズリ(内) ミガキ、磨滅	陶砂	暗黄褐色
10	土師器・鉢	19.0	-	-	1/3	(内) ケズリ(外) 櫛目ナズリ・ミガキ、黒炭、磨滅	陶砂	橙・黄褐色
11	土師器・鉢	(19.6)	8.5	10.0	1/1	(内) 櫛目、全面磨滅、黒炭、黒炭	陶砂	橙
12	土師器・鉢	-	-	-	-	(内) 櫛目ナズリ後ミガキ(外) ハケ後ナズリ	陶砂	黒褐色・淡黄褐色
番号	種類	残存長: cm	残存幅: cm	厚: cm	重量: g	石材	特徴	
S3	灰石	8.7	2.8	2.1	63.1	ホルンファネルス、砂岩	3面使用、下端欠損	
S4	埴き石	8.4	7.8	3.1	479.0	花崗岩	上部欠損	

図25 溝1出土遺物1 (縮尺1/4)

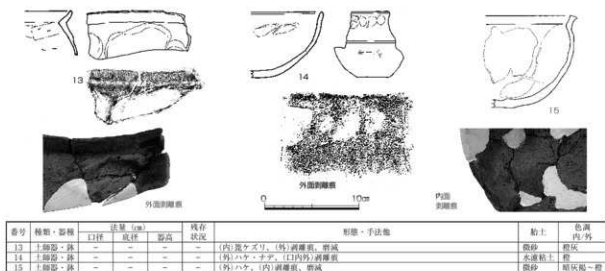


図26 溝1出土遺物2 (縮尺1/4)

石(図25-S3・4)が含まれる。

以上の点から、本遺構は古墳時代初頭に完全に埋没したと考えられる。

ここで、本溝出土遺物の特徴について触れておこう。比較的多くの出土土器において内外面に剥離面が確認される。その状態は、一部でうろこ状の剥離面を呈し、同剥片も確認される。その中には、焼成時破損品の可能性が指摘される土器片も数点含まれるが、剥離面の色調が土器の断面色調と明確に異なるとは言い難い状態などから確実性に乏しい点には注意が必要であり、積極的な評価には躊躇するところである。では、2次焼成に伴う剥離かという疑問も残る。例えば、2次焼成痕が器表面の変色などに明瞭に確認される鉢(図25-10)では剥離痕跡が確認されないのに対し、剥離痕跡が顕著な遺物には2次焼成痕は明確ではない。また、剥離痕跡を示すのは高杯と鉢に限定的である。現状では、これ以上の評価は困難であるため、ここでは、表面剥離が確認される土器の多い一群として報告するにとどめたい。

## 溝2 (図10・27、図版9)

調査区の南東部、BW61区に位置する。溝の方向は北西-南東を示しており、竪穴住居1の軸方向に近似する。検出面は標高約1~1.05mで<7層>に対応する。

長さ約3.5mが検出された。両端は緩やかに収束する。底面のレベルは同0.97mを測り、明瞭な高低差は確認できない。溝の深さは0.08m、幅は0.25~0.3mを測る。掘り方は小さな碗状を呈す。埋土は灰褐色の砂をベースに灰白色の砂が混ざる単一層であり、鉄分の沈着が顕著である。遺物は出土していない。

本溝の性格を考える上で、周辺遺構との位置関係を整理しておこう。北側には、炉跡1~3が5m前後の距離を保って形成されている。一方、南側には、溝3が約6mの間隔を有して走る。同溝と本溝の方向軸はほとんど平行しており、両溝間に広がる空間には加熱作業との関連性も考えられる土坑2が位置する。こうした遺構分布を積極的に評価すると、本溝は加熱作業空間を区切る溝の可能性も考えられるかもしれない。

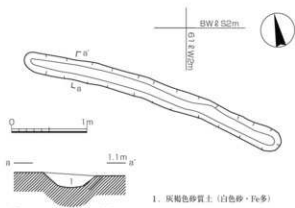


図27 溝2 (縮尺1/50・1/20)



所属時期は、検出面から古墳時代初頭と判断される。

### 溝3 (図28)

調査区東南部にあたるBX61～62区において検出された。南東端部は中世の溝8・9によって破壊される。北西端部は62ラインの西側で取東しており、調査区内に残る長さは約4mである。北西-南東方向を示しており、前述の溝2や堅穴住居1と軸を揃える。

検出レベルは標高1～1.05mで<7層>に対応する。

底面のレベルは西側で同0.92m、東側では同0.84m、深さはそれぞれ0.1mと0.2mであり、西側に向けて上昇して取東する。溝の幅は0.6mである。掘り方の形態は深い部分では椀状で、浅くなるに従って皿状へと変化する。

埋土は三分しているが、全体的に褐色系の砂質土という点で共通する。特徴となるのは、焼土と炭化物粒を多く含む点である。検出面においてもその分布は顕著であり、集中する部分も認められる。

本溝の性格については、前述した溝2と関連の深い溝と評価するならば、同溝と同様に、北側で操業された一連の加熱作業空間との関係が想定されるかもしれない。遺物は出土していないが、本遺構の所属時期は、検出面から古墳時代初頭と判断される。

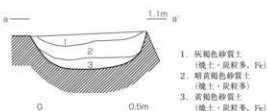


図28 溝3断面 (縮尺1/20)

1. 灰褐色砂質土  
(焼土・炭粒多, Fe)
2. 暗黄褐色砂質土  
(焼土・炭粒多)
3. 黄褐色砂質土  
(焼土・炭粒多, Fe)

## 第3節 古代の遺構・遺物

本時期に属する遺構は、調査区北西部(3区)で検出された建物状遺構と溝状遺構の2基があげられる(図29)。検出面はいずれも古墳時代初頭までに堆積した<7層>上面である。検出面と本遺構群の時期が対応しない背景には、中世以降に進められた土地改変の影響が考えられる。本遺構が位置する3区では<7層>上部に<5層>が堆積しており、本遺構の時期に対応する土層は、遅くとも<5層>形成に伴って消失したと判断される。また、それに伴って、比較的掘削深度の浅い遺構の大半が消失したことは十分に想定される。こうした状況の証左となるのが、<6層>以上の土層中や遺構内から出土する本時期の遺物である。その量は必ずしも際立つものではないが、その包含率や遺物の残存率は、他の調査地点に比べると高い傾向がみとれる。本時期の活動域が本地点およびその周辺を中心とした痕跡と理解される。

なお、両遺構は、その位置関係や出土遺物の一部が接合する状況进行评估すると、連続的で関連性が高い遺構として理解されよう。

### a. 建物状遺構

#### 建物状遺構1

(図29～33、表2・3、図版10・30)

3区で検出された。BR～BT62～63区である。前述した溝1の上部に重複する。また、

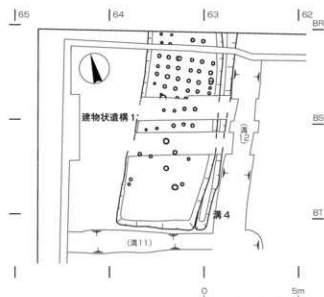


図29 古代遺構全体図 (縮尺1/200)

後述する中世溝11と同12が本遺構の東側と南側を区切る位置に形成されており(図29)、本遺構の配置が、後世の土地区画において何らかの影響を及ぼした可能性を予想させる。

本遺構の範囲には、近代の基礎工事などによって東西方向の溝状の破壊が数条にわたって走る。それ以外にも、前述したように、<5層>段階における土地改変による上部破壊の影響で、遺構の検出は、本来の掘削面からかなり下がった状態となった。そのため、検出レベルの値は標高0.85m前後が中心をなすが、同0.7mまで下降する部分もある。一方で、僅かではあるが、破壊の度合いが弱い場所では同1m程度に求められた。

本遺構は、窪地状の掘り込み部分とその底面に残る小規模なピット群によって構成される(図30)。窪地状の掘り込み面の平面形態は南北に長い長方形が予想されるが、本遺構の北端部が調査区北壁にのびているため、その規模や形態を確定することはできない。調査区内での規模は、南北10.3m・東西4~4.1mを測る。底面は比較的平坦で標高0.65m前後に位置するが、調査区北壁および東端部付近では同0.7~0.75mに数値が上昇し、東端部では同レベル付近から上面に立ち上がる(図31)。こうした状況を参考にすると、本遺構の北端ラインは、調査区北壁に比較的近い位置が予想される。また、残存状況が良好な断面観察を踏まえると、底面から上面への立ち上がり幅はおおむね0.3~0.5mが求められる。こうした諸特徴を考え合わせて、本遺構の北端部を調査区外に0.5m程度の位置に想定すると、南北10.8m程度の規模が予想されるが、その評価については保留しておきたい。掘り方は、全体的には皿状といえるだろう。深さは約0.2mを残す。そして、その底面に、本遺構の特徴をなす多数の柱穴が明瞭に検出された。

窪地に堆積した厚さ0.2m程度の埋土は、あざき色を帯びた灰色の粘質土あるいは砂質土をベースとし、上下2層に大別される(図31)。上層は下層に比べると鉄分の沈着が顕著で明るい色調を呈す。北端部のa断面では砂が多く含まれるほか上層では炭粒も認められる。ただし、全体的に包含物は少なく、比較的均質な堆積土と評価される。安定的に土砂が沈殿していくような環境が予想される。

窪地の底面で検出されたピットは54基を数える(表2)。本遺構が位置する3区において、これら以外にピットは検出されていないことから、その多くは本遺構との関連性を有するものと判断して分析を加えた。

ピットの直径は0.11~0.32m、底面レベルは標高0.52~0.74mの数値幅が確認されるが、その中で最も中心となる数値領域(以後、中心域とする)は、直径では0.1~0.21m、底面レベルでは標高0.6~0.67mである(図32)。同域に全体の約63%のピットが含まれる。残存する深さは0.01~0.17mの幅を有すが、0.1m以下が大半を占める。掘り方の形状は柱穴状のものも含まれるが輪状の場合も多い(図31-a断面)。埋土は灰色粘質土を中心とする。これらのピットについては、柱状の構造物の存在を想定するかどうか問題となるが、検出レベルの低さから本来の姿を復元することは困難であるため、ここではピットとして報告する。

本遺構内におけるピットの分布状況は一様ではない。本遺構の北半部では構造物の連結を予想させる集中的で規則的な配置が認められるのに対して、南半部は極めて分散的である。こうした配置上のまとまりをもとにピットをⅠ~Ⅷ群にまとめた(図30、表2)。北半に分布するのがⅠ~Ⅴ群(PⅠ~42)であり、それ以外の規則性が弱いピットをⅥ・Ⅶ群(P43~54)としよう。各群の詳細な特徴については後述するが、ここでは各群の配置からそれらの関連性を概観しておきたい。

Ⅰ~Ⅴ群は列状の並びとその集中度の高さが特徴である。その配置は、Ⅲ群と同群の一角に配されるⅣ群を中心に、北側にⅠ群とⅡ群が東西に、そして南側にⅤ群が位置する。これらの群を形成するピットの多くは、東西・南北の列上に一定の間隔を有して配されており、一連の構造物を構成した可能性が高いと評価される。ただし、各群間には、軸方向の違いやピットの規模あるいはピット数などの点で明らかな相違が認められる。それは、各群がそれぞれ異なる意味を有す状態と理解される。一方、南半のⅥ群はまとまりが把握しにくいピット群である。同群のピットは規模などの点で北半のピットと共通するが、分散・点在という配置面で全く異なる。Ⅵ群は、本遺構とは別の遺構の可能性を残すピット群である。ピットの規模・底面レベルなどの点で他との違いは明瞭であ

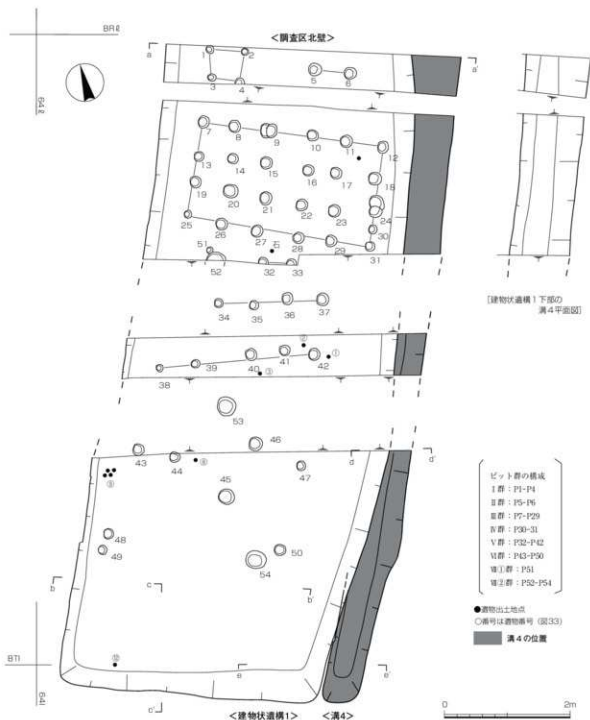


図30 建物状遺構1・溝4 (縮尺1/60)

り、特にⅦ②群（P52～54）の3基については、大形で深い点で際立つ領域を構成し（図32、表2）、各ビット間が2.5m間隔で列をなす配置から一連のビット列と判断される。

次に、各群の特徴について、その間隔など詳細を報告しよう（表3）。

【I群】 本遺構の北西隅においてP1～4の4基で構成される。それらの配置は、各ビット間の数値（0.45m・0.5m・0.55m）が示すように、ややひずんだ正方形を呈する。東西軸の方向はおおむねE20°Sの範囲内に収まる。ピ

調査の記録

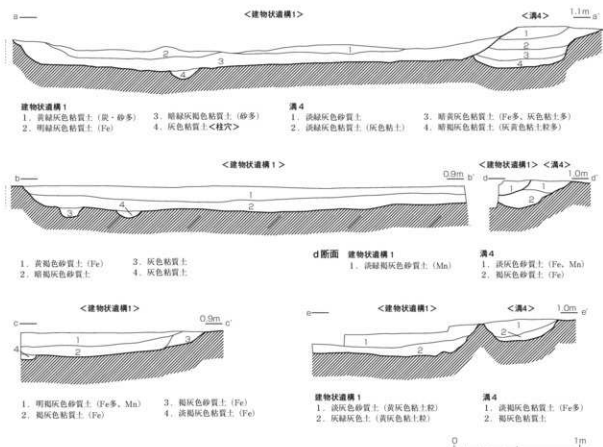


図31 建物状遺構 1・溝 4 断面 (縮尺1/30)

ットの直径と底面レベル値の分布は、標高0.65m前後・直径0.1~0.15mの範囲を示す。いずれも中心域に取まるが、その中でも底面レベルが高く直径が小さい範囲に集中する点で他とは区別される(図32、中心域枠の右下域)。

【Ⅱ群】 本遺構の北東隅において、P 5・6の2基で構成される。Ⅰ群の東に1.15m離れ、同群の南北中間ライン上に2基のピットが東西ラインを形成する。両ピットの間隔や軸方向(ピット間0.55m、軸方向E20°S)はⅠ群に共通する。ピットの規模・底面レベル(直径0.2m前後・標高約0.66m)は中心域に含まれるが、その分布域内では、最も底面レベルが高い位置にある(図32-□マーク)。Ⅰ群との共通性は高いが、構成ピット数や東西ラインの位置で違いをみせる。

【Ⅲ群・Ⅳ群】 本遺構の北半部に配されたP 7~31である。25カ所に27基が検出された。ピット数が最も多く、本遺構内で中心をなす群である。Ⅲ群(P 7~29)とⅣ群(P 30・31)は、前者の南東コーナー部を後者が構成する関係となっており、有機的関連性を有することは明瞭であるが、ピットの特徴の違いから別群として報告する。

両群におけるピットの並びは、東西方向に4列6カ所、南北方向に6列4カ所で構成される(図30)。その規模は、柱穴の中心距離で東西2.8~2.9m・南北1.5~1.6mの広がりを見せる。約45㎡の広さである。以下、東西方向の列を北から東西列1~4、南北方向の列を西から南北列1~6として説明する。

東西列の平行関係を確認してみよう。ここで注目されるのは東西列1と2、そして同列3と4の間隔がそれぞれ0.53~0.55mに集中する点である。同数値から逸脱するのは後者では1箇所(P 23とP 29間の0.5m)のみである。一方、東西列2と3では、同数値幅から逸脱するピットは3箇所(P 13と19、P 14と20、P 17と23)に増加し、数値幅は0.4~0.6mにと拡大する。ただし、こうした差は、全体的なピット列の並びを大きく乱すものではな

い。2条の列が対をなす状態にある点を指摘しておきたい。軸方向にも、その状態がみてとれる。前者(列1と2)はE20°Sであるのに対して、後者(列3と4)では、東半部の数値では一致するが、西半部ではE25°Sとなり異なる値を示す。つまり、軸を描える中で、一部にそのラインを乱すピットがある状態と言えそうである。それにあたるのが、P19・20・23である。

一方、南北列では、ピット間の数値は全体で0.46~0.68mの幅を有しており、東西列間と比較すると振れ幅が大きい。ただし、南北列間ごとの距離を確認すると0.04m~0.1mの振れ幅に収まっており、ほとんど平行関係の状態が保たれている。

Ⅲ群に含まれるピットの直径と底面レベルの分布については、前述したように、その多くが中心城を構成しているが、同域から逸脱するピットが確認される。それらは直径0.18~0.25mで、標高0.57~0.6mの一群(P24a・b、P23、P19)と標高0.52~0.53の一群(P15、P20、P26)である。ここに含まれるピットは、前述した列から逸脱傾向を示すピットに対応する場合が多い。P24・26にはライン上からのずれが確認される。こうしたピットについては改修に伴って差し替えられた可能性が考えられるかもしれない。

Ⅳ群のピット(P30・31)の特徴は、中心城とは明らかに異なる領域に分布する点である(図32)。特に際立つのは底面レベルの高さである。直径についても中心城に属するが小形の傾向が強い。こうしたピットの特徴に加え、その並びについても、東西列3と同4との中間にP30を据えており、Ⅲ群で構成される構造物の南東コーナーの構造が、他とは異なるものであったことがうかがわれる。

【V群】 Ⅲ・Ⅳ群の南側に検出されたP32~42の11基で構成される。ピットの直径と底面レベルの分布域(直径0.12~0.2m・標高0.6~0.66m)は中心城にすべて収まり、Ⅲ群の中心領域に重複する(図32)。

ピットの配置を東西方向の列3条のまとまりと理解し、北から東西列1~3とする。各列の長さは列1が0.45m、列2が1.65m、列3が2.45mを測る。それぞれの軸方向は、東西列1(P32・33)はE14°Sであるのに対して、同列2(P34~37)と同列3(P38~42)は、おおむねE10°Sの方向を呈しており、前者とは異なる値を示す。一方、同列2と3では、軸方向の一致とともに直線的なラインではない点も共通しており、Ⅲ群で指摘したように両者は2列が対をなす状態と理解することもできよう。Ⅲ群との関係では、軸方向で10°程度の違いを有す点、そしてピット配置や本数において明瞭な違いがある一方で、ピットの間隔は0.45mと0.55mを基準とする数値

表2 建物状遺構1内ピット一覧

群	番号	上面高 標高(m)	下面高 標高(m)	径(m)	直径(m)	番号	上面高 標高(m)	下面高 標高(m)	径(m)	直径(m)	
I群	1	-	0.64	-	0.13	27	0.68	0.62	0.06	0.19	
	2	0.70	0.65	0.05	0.11	28	0.66	0.63	0.03	0.18	
	3	-	0.66	-	0.13	29	0.65	0.62	0.03	0.18	
	4	-	0.65	-	0.15	30	0.73	0.74	0.02	0.15	
II群	5	0.71	0.66	0.05	0.20	31	0.74	0.73	0.01	0.15	
	6	0.75	0.67	0.08	0.19	32	0.69	0.63	0.06	0.16	
III群	7	0.67	0.61	0.06	0.19	33	0.70	0.66	0.04	0.16	
	8	0.68	0.65	0.03	0.19	34	0.63	0.60	0.03	0.14	
	9a	0.66	0.61	0.05	0.20	35	0.65	0.62	0.03	0.15	
	9b	0.66	0.62	0.05	0.21	36	0.64	0.61	0.03	0.19	
	10	0.68	0.62	0.07	0.19	V群	37	0.70	0.63	0.08	0.20
	11	0.73	0.64	0.10	0.20	38	0.65	0.62	0.03	0.12	
	12	0.75	0.67	0.09	0.17	39	0.66	0.64	0.02	0.14	
	13	0.65	0.62	0.03	0.15	40	0.67	0.66	0.02	0.19	
	14	0.66	0.62	0.05	0.17	41	0.68	0.64	0.04	0.17	
	15	0.67	0.52	0.16	0.19	42	0.69	0.63	0.06	0.19	
	16	0.68	0.65	0.04	0.18	43	0.63	0.56	0.07	0.18	
	17	0.67	0.62	0.05	0.19	44	0.62	0.54	0.09	0.17	
	18	0.75	0.65	0.10	0.21	45	0.62	0.60	0.02	0.25	
	19	0.66	0.58	0.08	0.19	46	0.66	0.61	0.06	0.22	
	20	0.67	0.52	0.15	0.23	47	0.67	0.65	0.03	0.15	
	21	0.67	0.61	0.06	0.20	48	0.64	0.54	0.10	0.16	
22	0.67	0.64	0.03	0.18	49	0.65	0.59	0.06	0.15		
23	0.66	0.58	0.08	0.20	50	0.66	0.61	0.06	0.18		
24a	0.75	0.60	0.15	0.25	51	0.71	0.67	0.03	0.11		
24b	0.75	0.59	0.17	0.20	52	0.69	0.52	0.17	0.30		
25	0.67	0.64	0.03	0.15	53	0.65	0.52	0.13	0.30		
26	0.68	0.53	0.15	0.19	54	0.63	0.55	0.09	0.30		

\*数値は平均値、-は記録なし

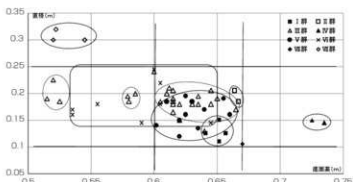


図32 建物状遺構1内ピットの直径と底面高分布

表3 I～V群のビット間距離と列方向

列	Ⅰ群 高さ1	ビット間 距離	Ⅱ群 高さ2	ビット間 距離	Ⅲ群 高さ3	ビット間 距離	Ⅳ群 高さ4	ビット間 距離	Ⅴ群 高さ5	ビット間 距離	Ⅵ群 高さ6	東西距離 m	主軸方向
Ⅰ群東西1	P1	0.53	P2										I群、II群 E37 S
		0.45											
Ⅰ群東西2	P7	0.45	P4										
		0.68											
Ⅱ群東西1	P7	0.5	P8	0.58	P9a	0.65	P10	0.53	P11	0.6	P12	P7-12 2.88	E37 S
		<1.08>											
Ⅱ群東西2	P13	0.54	P14	0.54	P15	0.68	P16	0.46	P17	0.62	P18	P13-18 2.84	
		<1.08>											
Ⅲ群東西3	P19	0.57	P20	0.58	P21	0.58	P22	0.5	P23	0.65	P24 b	P19-24 2.86	西平 E25 S 東平 E37 S
		<1.15>											
ビット間距離	0.55		0.55		0.54		0.53		0.5		0.57	P25-31 2.93	
Ⅳ群東西4	P25		1.15										
Ⅴ群東西1	(1.5)		(1.58)		(1.62)		(1.63)		(1.63)		(1.62)		
Ⅵ群東西2					0.52		0.45						
V群東西1			1.25		P32	0.45	P33		0.95			P32-33 0.45	E14 S
ビット間距離					0.7		0.55						
V群東西2			P34	0.35	P35	0.55	P36	0.58	P37			P34-37 1.65	E10 S
ビット間距離				0.55			1.1						
ビット間距離					0.8		0.8		0.85				
V群東西3	P38	0.55	P39	0.9	P40	0.55	P41	0.45	P42			P38-42 2.45	
ビット間距離		0.55		0.9			1						

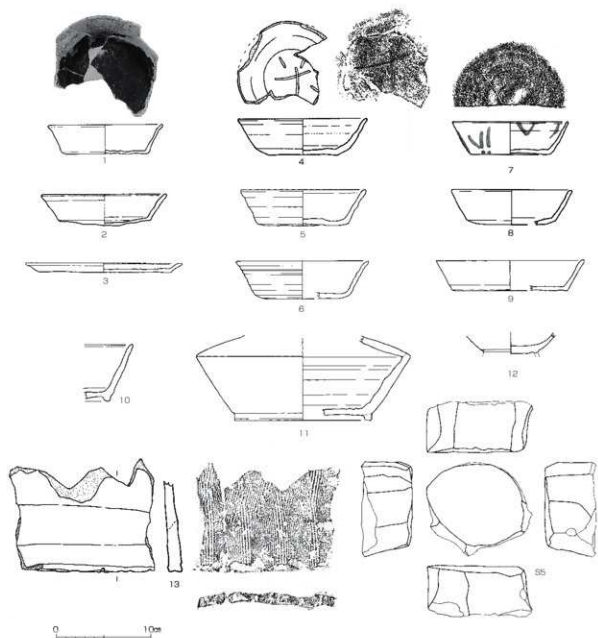
が並んでおり、I～Ⅲ群との共通した基準の存在が確認される。こうした状況からは、Ⅲ群などと強い関連性を有しながらも、異なる構造をもつ群との評価ができるのではなからうか。

【Ⅳ群】 本遺構の南半に分布するP43～50の8基が含まれる。その配置に規則性を見出すことは困難であり、I～V群とは明らかに異なる。ビットの規模と底面レベル（直径0.15～0.25m・標高0.54～0.65m）においても、そのほとんどが中心域外に分散した分布を示す（図32）。こうした状況は、本遺構の北半と南半で異なる目的が設定されていたことを予想させる。

【Ⅴ群】 Ⅲ群より南に位置するP51～54が含まれる。その特徴から本遺構とは別遺構の可能性が指摘される。ビットの直径・底面レベルの分布域は、すべて中心域外に求められる。P51は直径が小さく底面レベルは高い（直径10.5cm・標高0.67m）点で他と区別される（図32）。その位置はⅢ群とⅣ群間にありながら、いずれのビット列にも対応しない。一方、P52～54は深くて大形の柱穴という特徴（直径は0.3m以上・底面の標高0.52～0.55m）で他と明瞭に区別される。こうした数値の集中度は高く、3基をつなぐ軸ラインは北からN9°EとN1°Eを呈す。厳密には直線とはいえないが、その間隔は同2.35mと2.45mであり、いずれも近似した数値を保つことから、一連のビット列といえるのではなからうか。P52～54の特徴は、弥生時代などの一般的な柱穴に通じる。本遺構の下部に古墳時代前期以前の遺構が重複していることを考えると、同時期に属する可能性も十分に考えられるが、本遺構内に収まる点で検討の余地を残す。

【出土遺物（図33）】 出土遺物は、窪地底部付近と1層上面付近から出土した遺物を合わせるとコンテナ2箱の量となる。窪地において残存率が高い遺物は、V群の東西列3以南で出土する傾向が看取される。本遺構の西端付近に位置するP43とP48間では土師器杯などがまとまって出土したほか、P40・42・44付近でも遺物が確認されている（図30）。一方、ビット集中域の北半部ではP11付近以外に出土記録はない。

遺物の器種は土師器・須恵器の杯を中心に土師器皿・須恵器壺・緑釉陶器などで構成される。これらの中には、本遺構内出土の遺物に加えて、出土位置から本遺構との関連性が極めて高いと判断された遺物も含まれる（図33-1・4・6・9・10・13）。土師器では丹塗り土器の比率が高い。また、内面に漆膜が顕著に残存する杯を含む（同-1）。漆の付着状況などから漆を入れた容器であった可能性が指摘されている（本報告第5章3）。須恵器杯には宛記号のような線刻が確認される（同-4・7）。緑釉の碗（同-12）は比較的高いレベルで出土した。



番号	種類・器種	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法他	胎土	色調 内・外
		口径	底径	器高				
1	土師器・杯	11.9	9.4	3.1	1/5~1/3	(底内)押圧(底外)ケズリ後ナデ・板目直。 (内)漆付着。(内外)丹塗り	細砂	黄白~橙
2	土師器・杯	13.1	9.7	3.2	1/2	横ナデ(底内)押圧(底外)置ケズリ・押圧。(内外)丹塗り	細砂	黄白
3	土師器・皿	16.4	14.0	0.9	1/4	横ナデ(底内)ナデ・押圧(底外)置ケズリ後ナデ。(内外)丹塗り	細砂	明黄灰
4	灰忠器・杯	13.6	7.0	3.8	1/3	横ナデ(底内)置ケズリ後ナデ。(底内)「米」の線刷	細砂	灰
5	灰忠器・杯	12.7×13.2	9.6	3.8	1/1	横ナデ(底内)ナデ・押圧(底外)置ケズリ後ナデ・押圧。直後焼	細砂	灰白~黒灰
6	灰忠器・杯	14.0	10.0	4.0	1/4	横ナデ(底外)置ケズリ。(外)2条の沈線状ライン	細砂	茶灰~茶褐
7	灰忠器・杯	12.9	8.4	3.4	1/3~1/2	横ナデ(底外)置ケズリ後ナデ。灰層状茶色。(底内)龍記号「八」	細砂	明灰~灰
8	灰忠器・杯	(12.6)	9.4	3.7	1/4	横ナデ(底外)置ケズリ	細砂	灰白
9	灰忠器・杯	(15.4)	12.4	3.2	1/3	横ナデ(底内)ナデ	細砂	暗灰
10	灰忠器・杯	-	-	6.0	-	横ナデ。自然輪	細砂	暗灰~灰~緑
11	灰忠器・壺	-	7.2	-	1/4	横ナデ	細砂	暗灰~灰
12	緑釉陶器・碗	-	-	-	-	横ナデ。内外面施釉。高台内一部露胎	緑釉	灰緑緑
13	土師器・甕	-	-	-	-	底内。(内)ナデ・ケズリ直(外)粗いハケ	細砂	暗灰

図33 建物状遺構 1出土遺物および関連遺物 (縮尺1/4・1/8)

やや新しい時期の可能性もあるが、平面的には本遺構南西部の肩部付近に位置することから、ここで報告した。そのほかに、柱状部分に面取りがなされた円柱状石製品が認められる。(同-S5)。

出土遺物の時期から、本遺構は平安時代前期、9世紀頃に属すると考えられる。

本遺跡における本時期の活動域は第1～2次調査地点を中心に、その西側の第24次調査地点に広がり、井戸・掘立柱建物を軸とした遺構が展開している。本遺構はこうした既往調査では全く検出されていない。古代における本遺跡の集落構造を復元する上で注目される遺構である。

## b. 溝

### 溝4 (図30・31・34、図版10・30)

調査区北西部にあたる3区で検出された。BR・BS62区～BS・BT63区である。近代の建物基礎によって多くの部分が破壊されるほか、中世の溝1が東側に平行して走る。前述したように、建物状遺構1の東端ラインの下部に本溝の西端ラインが平行する点や両者の南端位置が一致するなど、両者間には高い関連性を指摘することができる。

検出レベルは、本溝の東端部で標高0.95～1mを測る。調査区北壁から南に長さ約10.5m付近で取束する。上面の幅は、南端部周辺では0.6m、北半部では1m程度が残存しており、1.2m程度に復元される。底面の幅も、前者では0.3m、後者では0.5m前後を測り、南端部に向けて狭まる。底面のレベルは北端で標高0.7m、南端付近では同0.79mを示しており、北に向けての傾斜が読み取れる。深さは約0.2～0.3mである。掘り方は椀状を呈する。埋土は、建物状遺構1との類似性が高く、あざき色を帯びた灰色系の粘質土を基調として灰色粘土粒が包含される。南半部では砂質を強め、褐色を帯びる傾向が指摘される。人為的な埋め土と理解される。

出土遺物は少なく、古代に属する遺物は5片程度である。丹塗り土師器のほか須恵器の平瓶と丹塗り高杯片が含まれる。

本遺構の時期は平安時代前期、9世紀頃と考えられる。

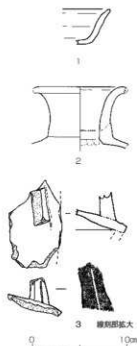


図34 溝4出土遺物 (縮尺1/4)

番号	種類・器種	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法	胎土	色調 内/外
		口径	底径	器高				
1	須恵器・杯	-	-	-	-	横ナデ(底外)ナデ	粗砂	灰白
2	須恵器・乱舞唐	(底)	-	-	-	横ナデ(無底)ナデ	粗砂	灰
3	須恵器・平瓶	-	-	-	-	把手部片、ナデ(外)ケズリ面、把手部裏面に縦波線1条	粗砂	灰

## 第4節 中世前半の遺構・遺物

本時期の遺構は、〈6層〉〈7層〉上面において検出された掘立柱建物2棟・井戸2基・土坑1基・溝13条・ピット56基である。ピット数の中には、前述したように本時期と判断した〈8層〉検出のピットも含む。掘立柱建物2棟は重複関係にある。これら遺構の所属時期は、中世前半の平安時代後葉～鎌倉時代を中心とするが、一部は室町時代初頭に及ぶ可能性を含む。12世紀～14世紀中頃に対応すると考えられる。

各遺構の検出面は〈7層〉と〈6層〉に分けられる。古段階にあたる前者は、東西方向の溝2条(重複する溝)のほか小規模な溝3条が含まれる。新段階にあたる後者では掘立柱建物・井戸・土坑・溝(区画溝)が屋敷地を形成しており、中世前半期の居住域としての継続が確認される。



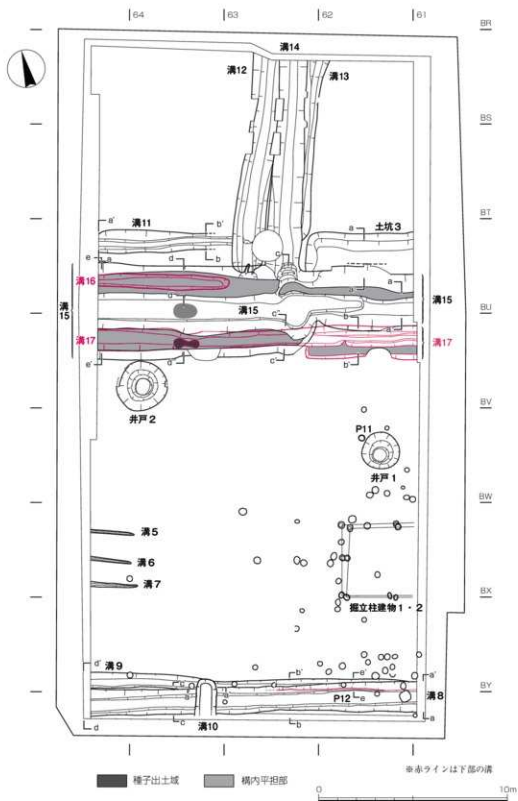


図35 中世前半遺構全体図 (縮尺1/200)

## a. 掘立柱建物とピット

本調査で検出された中世のピットは、建物構成ピットを除くと56基を数える。ほとんどは<6層><7層>上面の調査で検出された。2区に48基、4区に8基が分布しており、掘立柱建物2棟が位置する調査区南東部（2区）への集中が際立つ。その形状から柱穴と判断されるものが多い。同ピット群の中で、掘立柱建物2棟を構成するピットの配置は各柱穴位置において近接しており、その形状面での共通性も高い（表4）。両者の重複関係はP2とP7、そしてP3とP8において確認される。位置を踏襲して、同建物2から同建物1に建て替えられたと理解される。

## 掘立柱建物1（図35・36、表4～5、図版11）

BW61区に分布するP1～5で構成される。検出レベルは標高1.05～1.18mで<6層>に対応する。約3m北側に井戸1が、南側に約4m離れて溝8・9が、そして、北側に約9mの間隔で溝15・17が位置する（図35）。本建物は東西方向に長軸を有しており、その軸方向はE135°Sを示す。

柱穴の規模は、直径0.26～0.32m、底面の高さは標高0.76～0.87mで、深さは0.19～0.42mを示す（表4）。こうした数値幅の存在は、検出レベル差の影響によるものである。本建物の構造は、これらの柱穴配置から、P1～P3の列が建物西辺を、そして、それに直交するP3とP4の列とP1とP5の列がそれぞれ南辺と北辺を構成すると判断される。東辺の南北柱穴列は本調査区外の東側に想定されるが、それに対して本地点の東側に位置する第7次調査地点の成果のなかで、BW60区の西端付近に北から1.5m・2.2mの間隔で南北に並ぶ3基のピットが目とされる。ここでは便宜的に、北からS7-P①・同-P②・同-P③とする。北端と南端に位置するP①とP③の位置は、本建物の北辺と南辺ライン上にほとんど合致する。また、P①～③の軸方向は本建物のP1～3

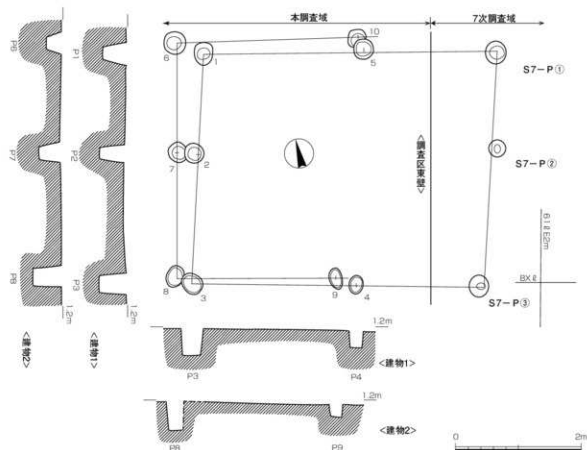


図36 掘立柱建物1・2（縮尺1/60）

の軸方向に近似することから、第7次調査地点のP①～③のラインが本建物の東辺を構成すると判断される。また、同調査地点では、同柱穴ライン以東において、南北方向に3基が並ぶ柱穴列が確認されていない点もその証左となろう。

以上の点から、本建物は東西4.6m、南北3.6mと3.7mの規模を有す2間×2間の掘立柱建物と理解される。各柱間の距離は、北辺と南辺では西側が2.5mと2.6m、東側が2.1mと2.0mを測る。西辺と東辺では北側が1.6mと1.5mで南側が2.0mと2.2mの数値が得られる(表5)。柱間間の数値にばらつきも指摘されるが、各辺で対応する数値は近似する。

遺物は、P1・2から小～細片が少量、P5からやや大形片が出土した。中世前半の吉備系土師器碗、土師器皿・鍋が含まれており、本遺構の時期を示す。

#### 掘立柱建物2 (図36、表4～5、図版11)

P6～10で構成される。前述の建物1との切りあい関係から、その前段階の建物と考えられる。検出レベルは標高1.13～1.18mで<6層>に対応する。本建物の軸方向はE125°Sである。

柱穴の規模は直径0.27～0.36m、底面の高さは標高0.73～0.93m、深さは0.2～0.45mを測る(表4)。P6～8の列が本建物の西辺を、それに直交するP8とP9およびP6とP10の列が、それぞれ南辺と北辺を構成する。東辺については、本建物の柱穴が建物1の柱穴と近接あるいは重複することから、同建物の東辺をなすS7～P①～③付近に想定される。しかし、周辺に同柱穴3基以外は確認されないうえ、これらの柱穴が、踏襲されて利用されたと考えたい。よって、本建物の規模は建物1とほぼ同規模と判断し、南北3.7m、東西4.7～4.8m程度の2間×2間と考えられる。柱間の距離は、北辺と南辺では西側が2.8mと2.55m、そして西辺では北側が1.7mで南側が2.0mを測る。前述の建物1よりは数値幅があるが、おおむね近似した数値を示す(表5)。

P6～8から中世前半の吉備系土師器碗、土師器皿・鍋の小～細片が少量出土した。本遺構の時期は同時期に属すると考えられる。

#### ピット (図35・37・38)

ピット群の分布状況の概要は前述したが、その中で、吉備系土師器碗が出土した2基をここにあげる。

P11はBV61区で検出した。検出レベルは標高約1.1mで<6層>上面に対応する。井戸1の北西部に位置し、直径は0.33m、底面レベルは標高0.79mを測る。ほとんど垂直に掘り込まれる。深さは0.32mが残る。埋土は上下に2分されるが、上層から吉備系土師器碗が伏せられた状態で出土した。

P12はBY61区で検出した。検出レベルは標高1.13mで<6層>に対応する。溝8上部に位置し、同溝埋没後の

表4 掘立柱建物構成柱穴一覧

遺構名	番号	直径 m	平均値	上面高 西	上面高 東	深さ	位置
建物1	1	0.28×0.36	0.32	1.17	0.80	0.37	北西隅
	2	0.31×0.30	0.31	1.15	0.76	0.39	西辺中間
	3	0.32×0.32	0.32	1.18	0.76	0.42	南西隅
	4	0.30×0.22	0.26	1.13	0.87	0.26	南辺中間
建物2	5	0.31×0.31	0.31	1.05	0.86	0.19	北辺中間
	6	0.34×0.35	0.35	1.18	0.93	0.25	北西隅
	7	0.29×0.32	0.31	1.15	0.83	0.32	西辺中間
	8	0.33×0.38	0.36	1.18	0.73	0.45	南西隅
	9	0.30×0.34	0.32	1.13	0.93	0.30	南辺中間
	10	-	-	-	-	-	北辺中間

表5 掘立柱建物規模と柱間距離一覧

	ライン位置	距離	柱穴番号	柱間距離 西	柱穴番号	柱間距離 東	柱穴番号
建物1	北辺東西ライン	4.6	1	2.5	3	2.1	S7-①
	南辺東西ライン	4.6	3	2.6	4	2.0	S7-③
	西辺南北ライン	3.6	1	1.6	2	2.0	3
	東辺南北ライン	3.7	S7-①	1.5	S7-③	2.2	S7-③
建物2	北辺東西ライン	4.7～4.8	6	2.8	10		
	南辺東西ライン		8	2.55	9		
	西辺南北ライン	3.7	6	1.7	7	2.0	8

S7-①～③: 豊田遺跡第7次調査のピット

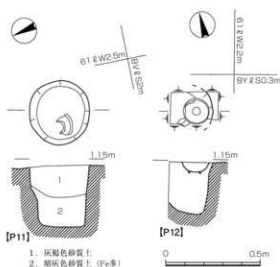
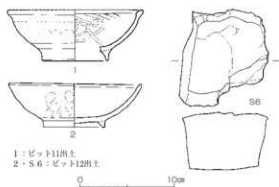


図37 ピット11・12 (縮尺1/20)

構築を示す。直径は0.23mを残し、底面レベルは標高約0.85mを測る。ほとんど垂直に掘り込まれる。深さは0.26mを残す。上面付近に、完形の吉備系土師器碗が正位置に、そして、下部には礎石と思われる角礫が出土した。

ピットの時期は、出土碗の特徴からP11は平安時代(12世紀中頃)、P12は鎌倉時代前半(13世紀初頭～前半)が考えられる。同時期幅は本ピット群の構築時期を示す。



1:ピット11出土  
2・S6:ピット12出土

番号	種類・器種	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形制・手法	胎土	色澤 内/外
		口径	底径	高さ				
1	土師器・碗	139	72	5.4	1.5~1.3	(内)ミヅキ(外)押正・ナデ	黒砂	黄赤白
2	土師器・碗	142	6.5×7	4.55	1/1	押正・ナデ, 垂後前, 垂	黒砂	灰白

番号	種類	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
36	礎石	9.5	9.0	6.0	820.6	流紋岩	全面的に焼熟

図38 ピット出土遺物 (縮尺1/4)

## b. 井戸

### 井戸1 (図35・39~41、図版12・13・30・36)

調査区中央東寄りにあたるBV61区に位置する。井戸2とは約10.5mの距離を有す。本井戸の北側には東西方向の溝17が約4mの間隔で、南側には掘立柱建物1・2が約3m離れて位置する (図35)。

検出面は標高1.1~1.15mで<7層>に対応する。しかし、周辺域では<6層>が<5層>に削平されていることから、本来は<6層>に対応する遺構と考えられる。平面形は円形を呈し、上面では直径約1.95m、底面では直径約0.7mを測る。底面は標高-1~-0.95mに位置し、深さは2.1~2.15mが残る。湧水砂層の上面は標高-0.6m付近にあり、同面からさらに0.35~0.4m掘りこまれた状態を呈する。掘り方断面形はY字形である。

埋土は9層に分層した。1・2層は際立つ包含物を含まない砂質土で、埋没後の流入土を含む層と理解される。3・4層は青灰色粘土と暗灰色あるいは黒灰色粘土が混在する粘質土あるいは粘土である。3層には完形土器が含まれる。5層は際立つ包含物を含まないシルト層、6層以下は粘土層である。6・7・9層から完形土器が出土した。また、6・7層は有機物を多く含む、多数の植物種子が検出された。特に多い種類はムラサキケマン・ヌカボタテであり、続いてザクロソウ・イヌビユ・オオバコ・カタバミなどがあげられる。その中にウリの種子が7点含まれる。こうした種子は、同層出土の吉備系土師器碗内の埋土からも検出された。7層上面には薄い木質の堆積が層状に確認される。9層は小礫が混入する点の特徴をなす。同層においても植物種子が出土した。特に多い種類はカタバミ・イヌタデであり、その他にザクロソウ・ノミノフスマなどを含む。また、ウリが4点確認された。上層と比較すると、その量や種類は少ない。種子の種類も異なる傾向が指摘されるが、いずれにおいてもウリの種子を含む点は注目される。(本報告第5章2)。

次に、完形土器などの残存度の高い遺物の出土状況を確認しよう (図39)。前述したように、それらは3層・6層・7層・9層から集中的に出土しており、埋め戻しにあたって意図的に置かれたと考えられる。底面を埋める9層上面付近で出土したのは吉備系土師器碗1点 (図40-2) である。井戸の中央部付近で、標高-0.86mの位置に横位の状態で出土した。7層では、同層下面にあたる標高-0.6m付近において同碗1点 (同-7) が井戸中央部に、そして、同層上面付近にあたる同-0.34m付近において同碗1点 (同-6) が傾斜あるいは横位の状態で出土した。その他に、碗7の上部では、東播系の須恵器甕の大形片 (同-14) が標高-0.45~0.4m付近にはほぼ水平に置かれた状態で確認された。遺物量が最も多いのは6層上面付近である。標高-0.2~-0.1m付近において、吉備系土師器碗5点と土師器皿1点のほか著状木製品を含む木製品片3点が出土した (図40-1・3・5・

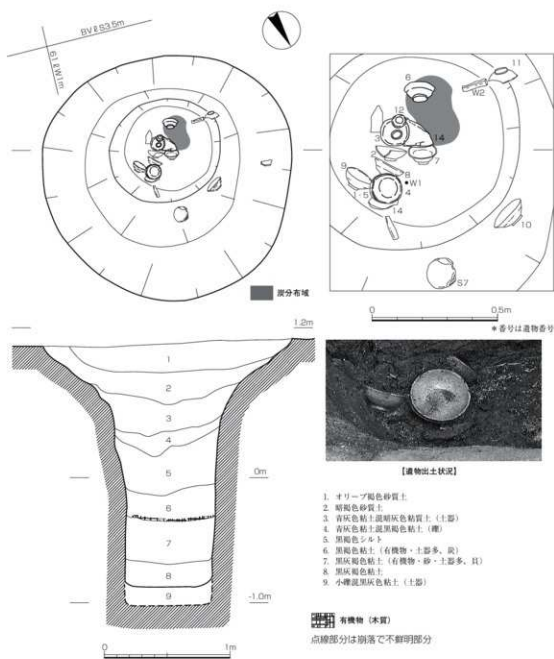
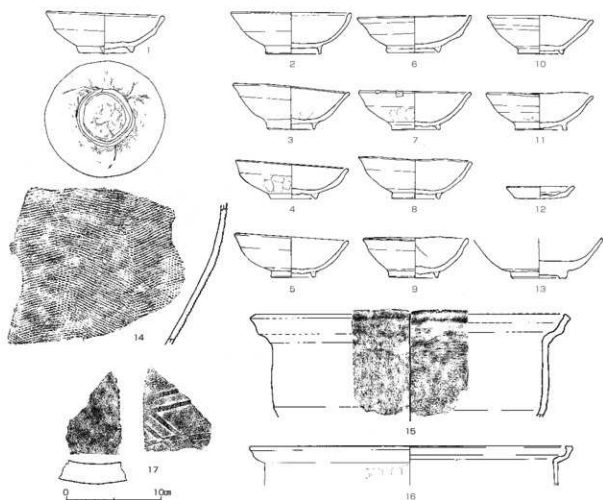


図39 井戸1・遺物出土状況 (縮尺1/30・1/15)

8・9・12、図41-W1～3)。その内の同輪2点(同-1・5)は、下から輪1・5の順番で正位置に重ねられ、その脇には同輪2点(同-8・9)が横位の状態で出土した(図39-遺物出土状況)。さらに、その南西側には同輪1点(同-3)が伏せられ、その上部には土師器皿1点(同-12)が正位置に置かれる。著状木製品(図41-W1)の出土位置は、正位置に重ねられた同輪2個体の西側に接する(図39-●の位置)。以上、9層～6層における遺物配置は、井戸の中心部に集中的であり、その結果、同層における平面的な遺物出土位置は重複することとなる。6層より上部では、被熱礫が出土した4層の堆積を経て、3層において同輪3点が出土した。標高約0.6mでは同輪1点(図40-4)が、井戸中央部に沈み込むように正位置の状態で検出された。同輪の下部には

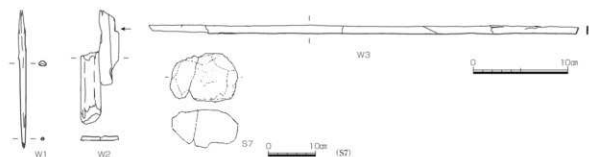
6層において重ねられた2個体の碗(同・4・5)が同様に正位置にあり、これら3個体の碗は平面的に完全に重複する。一方、その他の吉備系土師器碗2点(同・10・11)の出土位置はこれらとは異なる。井戸の周縁部において、標高0.7m付近で横位の状態で出土した。周辺には直径0.15m程度の被熱した円礫(図41-S7)を伴う。

出土遺物の量はコンテナ3箱分である。器種構成は、残存率が極めて高い吉備系土師器碗11点と土師器皿1点のほかに、土師器の鍋と甕、須恵器の甕と鉢と碗、瓦質鍋、瓦器碗、白磁碗、青磁碗と皿、瓦などがあげられる



番号	種類・器種	度量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法	胎土	色澤 内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	12.05	5.05	3.6~4.4	1/1	ナデ・(内内外)亀裂、重燒痕、(内外)植物痕	細砂	淡黄灰
2	土師器・碗	12.5	5.8	4.4	1/2~1/1	ナデ・押圧、重燒痕、内外面ターセル状の傷	細砂	黄灰~黄橙
3	土師器・碗	12.1	4.4×4.8	3.8~4.8	1/1	ナデ・押圧、重燒痕	細砂	淡黄~黄橙
4	土師器・碗	11.85	4.5×5.0	3.1~4.1	1/1	ナデ・押圧、重燒痕	細砂	黄白~黄
5	土師器・碗	11.8	4.4	3.8~4.8	1/1	ナデ・押圧、(内)植物痕	細砂	黄白
6	土師器・碗	11.7	5.0×5.3	3.9	1/1	ナデ・押圧、(内外)亀裂、重燒痕、(内)植物痕	細砂	淡黄橙~黄白
7	土師器・碗	11.65	5.1	4.05	1/1~1/2	ナデ・押圧、口縁補修痕、重燒痕、二次被熱	細砂	灰白~黄橙
8	土師器・碗	11.6	4.7×5.2	3.9~4.4	1/1	ナデ・押圧、重燒痕	細砂	淡黄橙/淡黄
9	土師器・碗	11.0×11.5	5.1	5.1	1/1	ナデ・押圧、重燒痕、正み大	細砂	淡黄
10	土師器・碗	10.9×11.3	4.6	3.1~4.0	1/1	ナデ・押圧、磨滅、正み大	細砂	灰白~淡橙
11	土師器・碗	11.1	5.35	3.6~4.0	3/4	ナデ・押圧、重燒痕、正み大	細砂	黄白
12	土師器・皿	7.0	5.6	1.3	1/1	ナデ(外底)鬼手弓後ナデ・板目痕、僅	細砂	淡黄灰
13	青磁・碗	-	5.6	-	1/3	(内外)植物、(器付と高台内)亀裂、磨出高台	細砂	暗赤灰、釉:淡緑灰
14	須恵器・甕	-	-	-	-	(内)ナデ(外)お伏のタテキ、重燒痕	細砂	灰~黄灰
15	瓦質・鍋	(228)	-	-	-	(口)瀬子ナデ(体西)ハケ(体外)押圧・縦ハケ	細砂	灰~暗灰
16	瓦質・鍋	(319)	-	-	-	瀬子ナデ(体外)押圧、僅	細砂	灰~暗灰
番号	種類・器種	残存長: cm	残存幅: cm	厚: cm	計測部の 残存状況	形態・手法	胎土	色澤: 内面/外面
17	須恵器・平瓦	9.0	7.1	2.1	-	(西面)布目痕(凸面)瓦て具痕	細砂	黄灰/灰

図40 井戸1出土遺物1 (縮尺1/4)



番号	器種名	残存長:cm	残存幅:cm	厚さ:cm	材質	木取目	特徴
W1	箸	144	0.8	0.5	ヒノキ	割材	上部側面割傷・欠損
W2	曲物底板	4.0	1.0	0.4	ヌナギ	板目	目取穴1か所、表面側面平滑、左右側縁欠損
W3	曲物側板	65.5	0.9	0.1	ヒノキ	板目	側縁割傷
番号	器種	残存長:cm	残存幅:cm	厚さ:cm	重量:g	石材	特徴
S7	鏝	10.3	1.39	8.0	1501.4	花崗岩	全面被蝕

図41 井戸1出土遺物2—木製品— (縮尺1/4・1/8)

(図40)。その他に、木製品と不明石製品1点を含む。木製品は、箸状木製品(図41-W1)・曲物の底板片(同-W2)・同側板片(同-W3)の3点があげられる。W3については、そのカーブからやや大形の形態も予想されるが、極めて薄い剥片状態であり、本来の形状を復元することは困難である。

以上に示した残存率の高い吉備系土師器・皿の出土状況や箸状木製品の存在、そしてウリを含む草本類の共存などは、祭祀的行為を復元する上で手掛かりとなる資料と言える。

本遺構の時期は、吉備系土師器の特徴に加えて青磁碗(図40-13)や瓦質鍋(同-15・16)の状態から、中世前半の中でも鎌倉時代の13世紀後半に求めたい。

#### 井戸2 (図35・42・43、図版14・31・36)

調査区中央部西側のBU63～64区に位置する。北側には東西方向の溝17が約0.2～0.3mの距離をもって近接する(図35)。下部には古墳時代初頭の溝1が走る。検出面は標高1.05～1.1mであり<6層>に対応する。

平面形は円形を呈する。規模は上面で2.7m×2.6m、底面で直径0.88mを測る。底面は標高-1.5mに位置し、深さは2.6mが残る。全体に大形で深い形状が特徴である。掘り方の断面形は上部が大きく開くY字形である。ただし、底面は湧水砂層を深く掘りぬいた影響で緩やかに窪む。また、標高-0.5m付近の壁面が外側に傾いた状態で看取される。使用時における水の影響を考慮すると、同レベル付近に水面レベルがあった可能性が高い。これについては、前述したように本地点での湧水レベルが標高-0.6m付近に求められる点と矛盾しない。

埋土は14層に分層した。ただし、10～13層については、調査時に断面中央部の大半が崩落したため、壁際に残った土層の観察から復元した。よって、標高0.5m以下については、堆積状況の概要程度の評価に留める。1～9層を上層、10～13層を下層、14層を最下層として、以下に報告する。

上層(1～9層)は砂あるいは粘土ブロックを比較的多く包含する土層群である。均質性に欠ける点で共通しており、埋め戻しの単位を示す一連の堆積と理解される。各層は色調や粘性の度合いで細分され、1層・2～5層・6～9層の3群に大別される。1層は流入土と考えられ、2層以下とは色調に違いを見せる。2・3層は鉄分の沈着の影響で黄色を強める。6層以下は全体的に粘性を強め、7層では炭・灰の存在が確認される。

下層(10～13層)は粘性が強く、暗～黒灰色を基調とする土層群である。粘土・砂のブロックを含まない点で上層とは異なる。11層・13a層・13b層では炭化物を、そして10層・12層下層・13a層・13b層では有機物を多く含む点の特徴をなす。有機物の分析から植物種子が抽出された。全ての層で共通して多い種類はカタバミ・サクロソウ・イヌビユである。その他に10層ではアカザ、12層ではサンカクイが加わる。また、ウリなどの栽培種は確認されない点で(本報告第5章2)、前述した井戸1と異なる。13a層では残存率の高い遺物が集中する。標高-0.95～-0.65m付近である。同層下面にあたる標高-0.95～-0.9mの位置に、内面を上に向けた備前焼の大甕

の大形片 (図43-7) が水平状態に、そしてその上面に完形の土師器皿 (同-1) が正位置で出土した。さらに、その上位には、同-0.65m付近に角礫2点 (同-S8・9) と棒状木製品 (同-W5) が確認され、それを覆うように有機物包含層である12層下半部が形成される。また、13b層を挟んで、標高-1.26m付近 (13c層) で曲

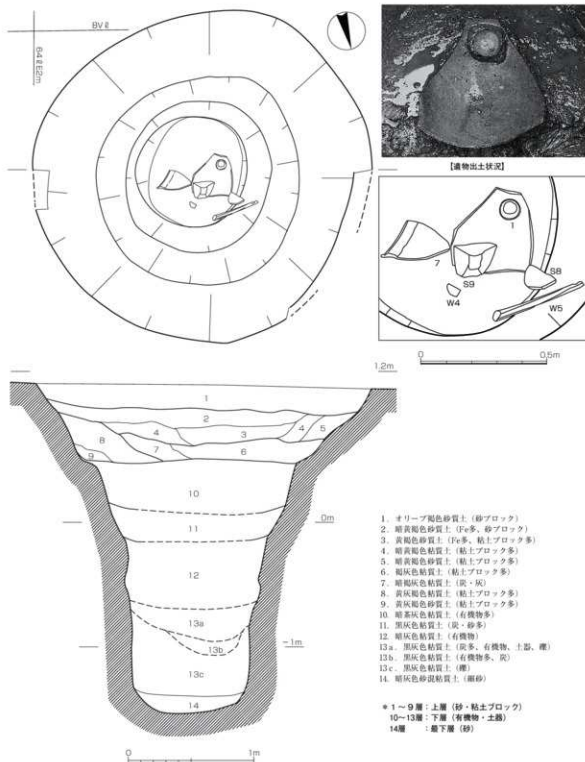
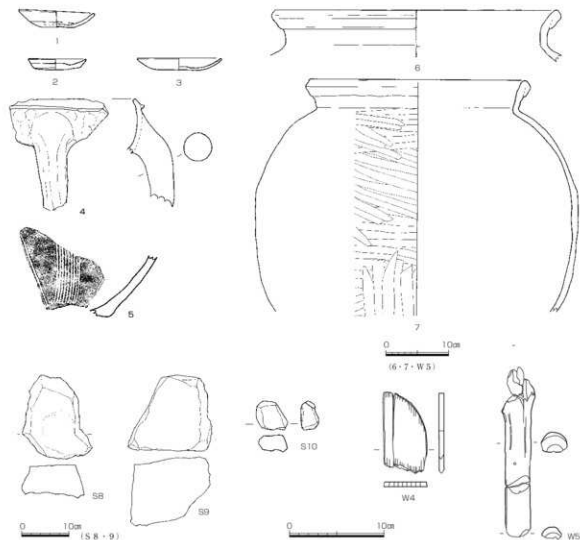


図42 井戸2・遺物出土状況 (縮尺1/30・1/15)



物片(同-W4)および角礫が出土した。以上の状況から、13c層~12層下半で、角礫と有機物が備前焼と土師器皿の配置を挟んで繰り返す重ねられる様子が復元される。井戸の廃棄に際して、遺物を伴う意図的な行為が行われたことは明らかであり、祭祀的性格が予想される。

最下層の14層では細砂の混入が顕著である点が、上層・下層と大きく異なる。同砂は湧水砂層由来の砂であることは明らかであり、使用段階に対応する層と判断される。同層でも種子が抽出された。カクバミ・ザクロンウ・



番号	種類・部材	度量 (cm)			前層部の 残存状況	形態・手法類			粘土	色調 内/外
		口径	径寸	高さ		形状	厚さ	特徴		
1	土師器・皿	80×7.6	3.3	1.5-1.9	1/1	縄ナデ(穴外)脚圧・黄褐色	木取り	表面	赤土	淡黄~淡緑
2	土師器・皿	6.2	5.0×3.5	1.15	1/2~1/1	縄ナデ(穴内)底平リ後ナデ・黄褐色	表面	天平欠損、器面に面取り加工	赤土	黄白~黄
3	土師器・皿	(90)	(5.2)	(1.3)	-	縄ナデ(穴内)ナデ・オサエ、(口)縄	表面	表面平坦、上下薄欠損	赤土	黄白~黄
4	瓦葺・脚付鉢	-	-	-	-	(口)縄ナデ(外)脚圧・ナデ・様、二次焼結	表面	表面平坦、上下薄欠損	赤土	黄白~黄
5	備前焼・すり鉢	-	-	-	-	縄ナデ、[口]底平	表面	表面平坦、上下薄欠損	赤土	黄白~黄
6	備前焼・大甕	45.2	-	-	1/4	縄ナデ、[口]底平	表面	表面平坦、上下薄欠損	赤土	黄白~黄
7	備前焼・大甕	(34.6)	-	-	-	縄ナデ(口)ナデ(外)底平リ・ナデ	表面	表面平坦、上下薄欠損	赤土	黄白~黄
番号	器種名	残存長: cm	残存幅: cm	厚さ: cm	材質	特徴	特 徴			
W1	産物・成板	8.6	4.5	0.5	スギ	板目	天平欠損、器面に面取り加工			
W3	素材	27.0	4.8	3.1	コナラ風タヌ平節	素材	表面平坦、上下薄欠損			
番号	種類	残存長: cm	残存幅: cm	厚: cm	重量: g	石材	特 徴			
S8	磨石	17.2	13.2	6.7	2526.7	表面滑	全面的に磨蝕、上面に僅、上下面平坦			
S9	磨石	16.1	17.1	13.2	5600.0	花崗岩・石英微石	花崗岩に石英微石が混入している。			
S10	磨	3.0	3.0	1.8	24.8	石英	石英微石からできている。			

図43 井戸2出土遺物 (縮尺1/4・1/6・1/8)

イヌビユが多い点で下層の有機物包含層と共通する。

出土遺物はコンテナ2箱分であるが、その内1箱は角礫が占める。比較的残存度が高い遺物は、前述した備前焼の大甕と土師器皿の完形品1点を含めた3個体(図43-1・2・7)である。その他に、須恵器甕や瓦質鍋(同-4)あるいは備前焼すり鉢(同-5)などを含むが、いずれも小片で出土量も限定的であることから、埋土に混入した遺物と理解される。本井戸で出土した被熱燻4点は、17cm程度の大きさの割燻である(図43-S8・9)。また、3×4cm程度の石英礫が1点出土しており(同-S10)、何らかの素材の可能性が考えられる。

本遺構の時期は、備前焼や土師器皿などの特徴から室町時代初め、14世紀中ごろと判断される。

### c. 土坑

#### 土坑3 (図35・44・45、図版16・31)

調査区北東部の1区で検出した。BT61区に位置する。溝15の北側に同溝と軸方向を描いて構築される。本遺構の南部分は溝15によって大きく切り込まれ消失しており、同溝上面北端ラインから約1.8mの幅を残すのみである。本遺構の西側では、溝15に接続する溝14と約0.3mの間隔を有す(図35)。また、東側は調査区外へと延びており、第7次調査地点で報告された土坑8(以下、7次土坑8と称す)につながる。

検出レベルは標高0.9m前後を測る。<7層>にあたるが、周辺遺構との関係や<6層>が削平されていることを考慮すると、本来は<6層>に対応すると判断される。上面の規模は、本調査域内では東西5.6m・南北2m前後が残存するが、東側の7次土坑8の数値を加えると東西7.5mの規模が求められる。残存部における上面ラインは直線的であり、平面形は隅丸方形と判断される。底面は標高0～0.08mに位置し、おおむね平坦面を形成する。立ち上がり斜面はおおむね直線的であり、全体的には逆台形の掘り方断面形を呈する(図45)。底面は東西が7次土坑8の数値を合わせると6.7m(本調査域は5m)を測る。

埋土は、上層(1～4層)と下層(5～8層)に大別される。上層は灰褐色系の砂質土で、全体に鉄分が沈着する。特に4層の下半では顕著であり、4b層として表記した。3層は褐色土をブロック状に多く含み、均質性を欠く点が特徴であるが、全体的には近似した堆積土群である。下層は灰色系の粘質土を基調とする。その中で6層のみは鉄分の沈着によって褐色を帯びる。5層と8層は青灰色粘質土として共通しており、標高0.4m以下は滞水状態にあったことが予想される。

出土遺物の量はコンテナ1箱分である。残存率が高い器種は吉備系土師器碗で占められ、そのほかには土師器

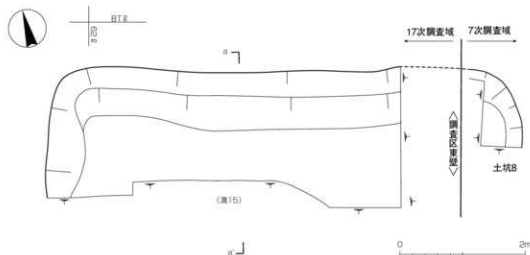
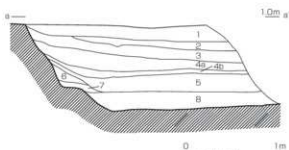


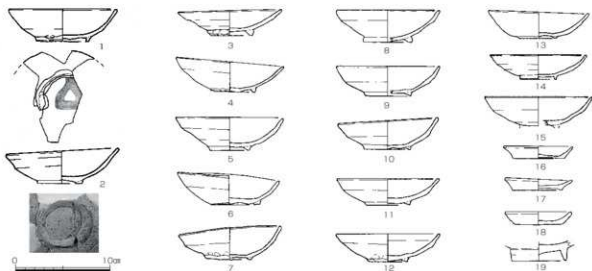
図44 土坑3 (縮尺1/60)

Ⅲ3点を含む(図45)。吉備系土師器椀1点(同-10)は8層上(標高約0.24m)で、また、同椀1点(同-9)は5層と4層の境付近で出土した。小片では、土師器鍋・甕あるいは白磁碗(同-19)、大振りで甕磨きが顕著な吉備系土師器椀・土師器舞台も確認されるが、混入遺物と判断される。吉備系土師器椀の特徴から、本遺構は13世紀末~14世紀初頭に一気に埋め戻された状態が想定される。

同時期は、本溝の南側を破壊する東西溝15の埋没時期に合致する。同溝については後述するが、埋没時期や底面レベルの近似性(同溝の北側平坦部レベルは標高0~0.1m)等から、一連の構造物の可能性も残るが、上面で切りあい関係が確認されたことから、別遺構として報告する。鹿田遺跡第7次調査でも、本土坑と共通性が高い土坑9が報告されている。ただし、埋没時期の同時性も含め、両遺構の機能面での検討が必要となろう。



- 1. 淡灰褐色粘質土 (Fe)
- 2. 暗灰褐色粘質土 (Fe)
- 3. 暗灰褐色粘質土 (Fe)
- 4a. 暗灰褐色粘質土 (Fe)
- 4b. 暗灰褐色粘質土 (Fe多)
- 5. 赤灰色粘質土
- 6. 暗灰褐色粘質土 (Fe多)
- 7. 暗青灰色粘質土 (砂多)
- 8. 赤灰色粘質土



番号	種類・器種	法量 (cm)			前溝部の残存状況	形態・手法施	胎土	色調 内外
		口径	底径	器高				
1	土師器・碗	11.2	5.6	3.4	1.5~1.4	ナデ、(口内)縁、(底外)磨き;ひか	磁砂	黄灰白・灰白
2	土師器・碗	11.7	4.5	3.7	1.4~1.1	ナデ、(高台)裏面が割れあり、磨減	磁砂	淡青灰・灰白
3	土師器・碗	11.8	4.2	2.6	1.4~1.1	ナデ(高台)押圧	磁砂	淡青灰
4	土師器・碗	11.3	4.7	2.7~3.7	1/1	ナデ、磨減	磁砂	淡青灰・黄灰
5	土師器・碗	11.2	4.3	3.5	1.2~1.1	ナデ	磁砂	淡青灰
6	土師器・碗	10.75	4.9	2.6~3.5	3/4~1/1	ナデ、磨み	磁砂	淡青灰
7	土師器・碗	10.8	4.7	2.5~3.6	1.2~1/1	ナデ・押圧、磨	磁砂	淡青灰
8	土師器・碗	10.7	5.0	3.4	1/4	ナデ、重焼痕	磁砂	淡青灰・黄灰
9	土師器・碗	10.7	4.7	3.1	1/2	ナデ・押圧	磁砂	淡青灰
10	土師器・碗	10.5	4.8	2.6~3.3	3/4~1/1	ナデ、重焼痕	磁砂	淡青灰
11	土師器・碗	10.5	4.8	2.8	1.5~1/1	ナデ	磁砂	淡青灰
12	土師器・碗	10.4	4.1	3.0	1.3~1/1	ナデ(底外)ナデ磨減目筋、(高台)押圧、重焼痕	磁砂	灰白
13	土師器・碗	10.3	4.0	2.6~3.0	1.2~1/1	ナデ、二次的焼熟	磁砂	淡青灰
14	土師器・碗 (10.0)	3.8	2.6	1/3	ナデ・押圧、重焼痕	磁砂	淡青灰~淡橙	
15	土師器・碗	11.2	-	1/3	ナデ・押圧	磁砂	淡橙白	
16	土師器・皿	7.4	5.4	1.3	1.2~3/5	横ナデ(底外)磨き;磨減回転左	磁砂	暗青灰・黄橙
17	土師器・皿	7.2	5.2	1.1	3/4~1/1	横ナデ(底外)磨き;磨減回転左	磁砂	淡青灰
18	土師器・皿	7.0	5.1×5.5	1.9	1.2~1/1	横ナデ(底外)磨き;磨減回転左	磁砂	淡青灰
19	白磁・碗	-	5.8	-	1/2	(内)施釉	精磁	灰白、釉:淡緑灰

図45 土坑3断面・出土遺物(縮尺1/40・1/4)

## d. 溝

## 溝5～7 (図35・46)

調査区南東の4区西端において検出された。BW64区である。各溝の特徴には強い共通性が認められることから、一連の機能を有する遺構であると判断し、3条を合わせて以下に報告する。

検出レベルは、いずれも標高1.03～1.07mで<7層>に対応する。ただし、調査区西壁断面の観察から、本来は同約1.1～1.15mであることが確認される。同壁から東に向けて長さ2.1～2.5mが残る。東端部は自然に取東する。溝の軸方向は、溝5がE16°S、溝6はE18°S、溝7はE14°Sを示す。いずれも鹿田溝内座標軸に近く、その誤差は2度前後で、ほとんど平行関係を保つと評価してもよいであろう。3条の溝の間隔は、溝の中軸線間で約1.4mを測る。いずれの溝も、底面のレベルは標高0.98～1mで、掘り方断面は碗状を呈する。上面の幅は、溝5・6が0.2m、溝7は0.35mを測る。深さは、溝5で0.08m、溝6と溝7では0.1mが残る。

埋土は、いずれも淡灰黄色砂質土の単一層である。鉄分の沈着が顕著であるため色調は黄色を帯びるが、本来は淡灰色を基調とする埋土と考えられる。溝6・7は灰白色の砂を多く含む点が特徴である。溝5では記録されていないが、砂質が強い点から同様の状態と理解してもよからう。遺物は出土していない。

これら3条の溝は等間隔で平行して走る点、あるいは各溝の形態が小規模な点を考慮すると、耕作にかかわる溝の可能性が高いと考えられるが、その分布域は極めて限定的である点で疑問を残す。

本溝群の所属時期は、遺物を共伴しないため確定できない。検出面の時期は古墳時代に遡り、同一面では同時期～平安時代後期の遺構が検出されている。本溝群は古墳時代の溝1の上部に形成されている点、あるいは古代(平安時代前期)の遺構・遺物は3区に集中しており遺構の特徴が全く異なる点から、それぞれに本溝群との直接的な関連性は低いと判断される。よって、本遺構の時期は、中世前半でも古い時期にあたる平安時代後期の中で考えておきたい。

## 溝8・9 (図35・47～49、図版17・18・32)

<7層>検出の溝である。両溝は、調査区南端のBX・BY60～64区において、重複して検出された。2区と4区の南端を東西方向に走り、両端部は調査区外へと伸びる。溝8が南側に、溝9が北側に位置するが、上部に形成された溝8が下部の溝9を大きく破壊しており、後者は多くの情報が消失している。溝の軸方向においても、前者では鹿田座標軸に近似するE12°Sが確認されるが、後者でその軸方向を確定できない。ただし、重複関係から両溝の方向はほとんど一致する可能性が考えられる。

平面的な検出レベルは、両溝とも標高1.1～1.15mであり、<7層>に対応する。ただし、調査区東壁(図47-a断面)では、溝8の埋土が標高約1.2mまで確認される。こうした数値幅の存在は、本遺構の上面が<4層>・<5層>の形成によって大きく削平を受けていることが影響したと理解される。よって、本来は標高1.2m付近まで上昇する可能性がある。

【規模】 溝8は調査区南壁脇に位置するため、調査区南側溝の掘削によって溝の南端部は破壊されている。また、調査区西端から東へ約4.2m付近までは、調査区南壁面内に溝の上部が入り込む。よって、平面的に溝の上面

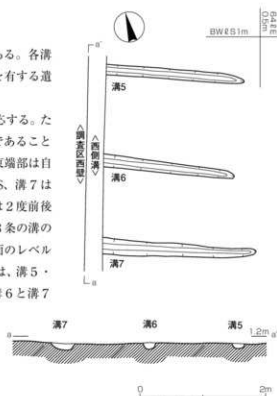


図46 溝5～7 (縮尺1/60)

規模を正確には確認できないが、断面観察から本来は1.65～1.7mが復元される。平面的には1.5～1.6mを検出した。底面のレベルは、東端部（図47-a断面）で標高0.41m、西端部（同-d断面）で同0.27mを測る。その間に位置するb・c断面では標高0.31mを示しており、東から西方向へと緩やかに下降する。深さは0.8mを残す。掘り方の形態は、b・c断面では底部が丸みをもつが、a・d断面を基準にするとおおむね逆台形と評価される。

一方、溝9の幅は、残存範囲が最も広い西端部で0.95mが確認される（図47-d断面）。底面レベルは、東側のe断面で標高0.75m、西端部のd断面で同0.65mを測る。溝8と同様に西方向に向けて下降する。深さは0.43～0.5mが残る。掘り方の断面形は底面に丸みがある点でボール形といえるが、上部が開く部分も確認されることから、ボール形～Y字形としておきたい。底面の丸みは水の流れを示すと理解される。

両溝の形態を比較すると、断面形態では共通性が認められるが、規模や底面レベルに違いが指摘される。つまり、機能面では継続性を保ちつつ、溝8形成段階に溝を拡張して深い溝への改修が進行したと考えられる。

【埋土】 溝8の埋土は上層と下層に大別される。上層にはa断面・c断面の1～6層、b断面1～5層、d断面1～3層が対応する（図47、一覧表）。a・b断面では、上層の下面ラインが下層の堆積層を切り込む状態を示

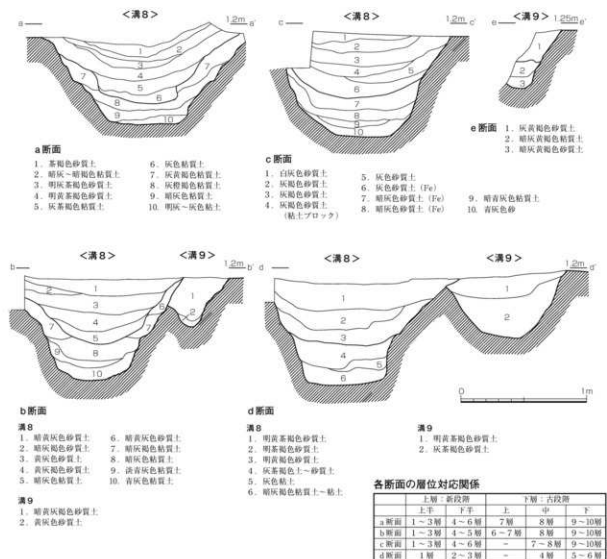


図47 溝8・9断面（縮尺1/30）

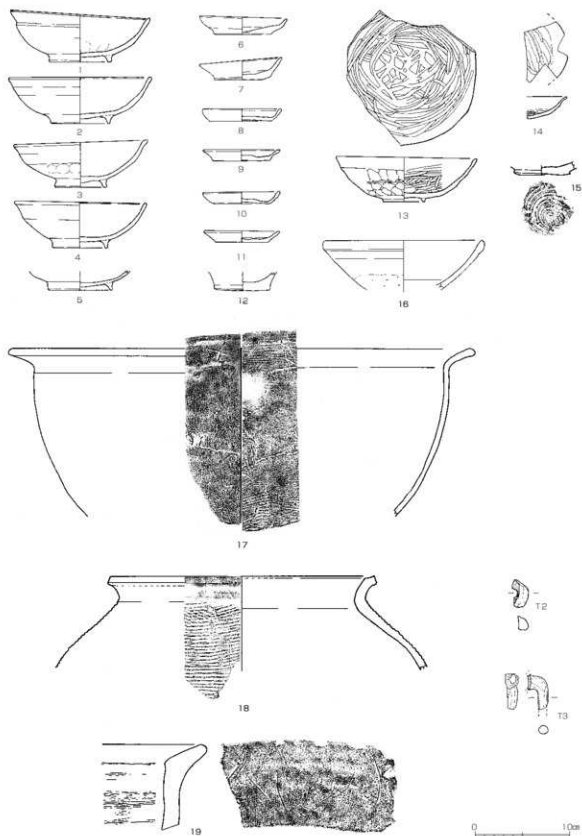
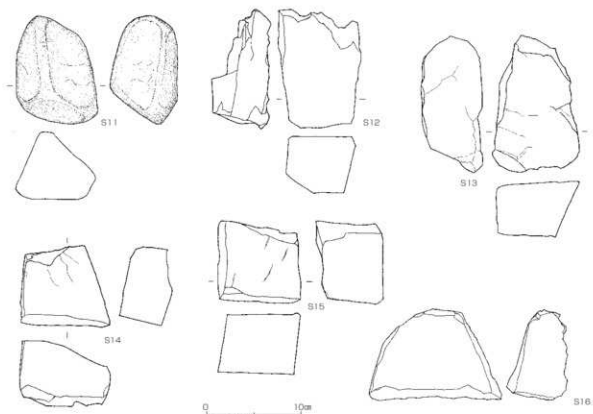


図48 清8出土遺物1 (縮尺1/4)



番号	種類・器種	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法類	胎土	色調 内外	
		口径	底径	器高					
1	土師器・甕	14.75	6.5	4.6-5.5	1/1	ナデ・押圧、僅	微砂	黄白	
2	土師器・甕	14.8	6.15	4.9	1/4-1/1	ナデ、重挽痕	微砂	灰白	
3	土師器・甕	11.3	5.5	4.9-5.0	1/2-1/1	ナデ	微砂	灰白	
4	土師器・甕	13.95	5.7	4.85	1/1	ナデ、重挽痕	微砂	淡橙灰	
5	土師器・甕	-	6.75	-	1/1	ナデ・押圧	微砂	淡橙白	
6	土師器・甕	9.2	6.1	1.7	1/1	横ナデ(底外)ナデ・押圧・板目直	微砂	淡橙灰	
7	土師器・甕	8.8	5.85	6.0	1/2-1/1	横ナデ(底外)ナデ・板目直、僅	微砂	淡橙灰	
8	土師器・甕	8.45	6.4	1.3	2/3-1/1	横ナデ(底外)寛ナリ、轆轤回転右	微砂	淡黄緑	
9	土師器・甕	8.2	6.0	1.2	1/2-1/1	横ナデ(底外)寛ナリ、轆轤回転右	微砂	灰白	
10	土師器・甕	8.1	6.4	1.25	3/6-1/1	横ナデ(底外)寛ナリ、轆轤回転右	微砂	淡橙緑	
11	土師器・甕	8.0	5.6	1.2	1/3-1/1	横ナデ(底外)寛ナリ・板目直、轆轤回転右	微砂	淡橙緑	
12	土師器・甕付	-	6.0	-	1/1	ナデ(底外)寛ナリ後ナデ	微砂	淡橙	
13	瓦器・甕	14.9	4.65	4.5	1/4-1/1	(内)ミゴキ妻(外)押圧・ミゴキ腹、和泉型	微砂	緑灰	
14	瓦器・甕	-	-	-	-	(内)ミゴキ(外)ナデ・押圧、和泉型	微砂	緑灰	
15	須恵器・甕	-	6.0	-	1/1	ナデ(底外)糸切り、轆轤回転左	微砂	灰白	
16	白磁・甕	17.0	-	-	1/4	ナデ、(内外)轆轤(内外)ナデ・重挽、円型文	微砂	灰白、輪：灰白	
17	土師器・甕	30.4	-	-	1/2	(内)横ナデ(外)腹ハケ・押圧・僅	微砂	緑黄	
18	須恵器・甕	-	-	-	-	(口)横ナデ(内)ナデ(外)タタキ、龜山焼	微砂	灰黄	
19	土師器・甕	-	-	-	-	(内)ハケ残(外)腹ハケ・僅、蟹口	微砂	緑黄	
番号	種類	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	重量・g	残存	形態・手法類	胎土	色調
T2	把手状土製品	2.9	1.3	1.4	6.0	-	ナデ、一部欠損	微砂	淡橙灰
T3	把手状土製品	3.8	2.2	1.0	6.3	-	ナデ	微砂	黄緑
番号	種類	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	重量・g	石材	特徴	特徴	
S11	礫	11.4	8.5	7.1	780.4	流紋岩	全面焼熟		
S12	礫	12.0	8.3	8.0	778.0	ホルンフェルス、砂岩	焼熟		
S13	卵石	11.7	8.3	6.1	1077.0	灰山岩	焼熟		
S14	礫	8.7	8.3	5.1	450.0	花崗岩	焼熟		
S15	礫	8.0	8.0	6.7	925.9	流紋岩	強い焼熟、僅		
S16	礫	8.6	13.5	5.6	908.9	石英斑岩	焼熟		

図49 溝8出土遺物2一喚一(縮尺1/4)

すことから、上層を新段階の溝、下層を古段階の溝として評価した。新段階溝の底面レベル(上層下面)は、断面観察から概ね同0.6m前後に求められたが、平面的には確認できていない。上層の埋土は、上半(a～c断面1～3層、d断面1層)と下半(同断面4～5・6層、同断面2～3層)にまとめたが、いずれも灰褐色系の砂質

土を主体としており、各層間に大きな差は認められない。ただし、土層下半は、灰色が強く粘性が高い層を含む点、そして底面付近に遺物が集中的に出土する点で、上半との違いをみせる。下層にあたる古段階層の埋土には、a・c断面は7層以下、b断面は6層以下、d断面は4層以下が対応する。埋土は粘性や暗色を強める傾向が指摘され、色調面から三層にまとめたが質的に大きな違いは認めない。その中で、最下層は灰色粘土～粘質土を呈する傾向が特徴をなす。

一方、溝9の埋土は全体に砂質が強く、比較的粘性の高い溝8とは異なる。1層は灰褐色系の砂質土、2層はやや暗い色調を呈する褐灰色～暗灰褐色の砂質土、3層は灰色を強めた砂質土である。

【遺物の出土状況とその構成】 溝8では、c断面あるいはe断面付近において、残存率の高い吉備系土師器碗が出土した。東側に位置するe断面付近では同輪2点(図48-1・4)が南から落ち込む状態を呈しており(図版17)、そのレベルは標高0.6m前後を測る。西側のc断面付近では、溝の中央部と南斜面において0.2～0.3mの隙を伴って同輪1点(同-2)と完形の皿1点(同-7)が出土した。出土レベルは標高0.6～0.75mを測る。いずれの位置も新段階の溝の底部付近にあたる。

出土遺物の量は、溝8ではコンテナ3箱分を数える。その内1箱は隙で占められる。遺物の構成は、残存率の高い吉備系土師器碗・土師器皿(図48-1～11)を中心に、瓦器碗・皿(同-13・14)、須恵器碗(同-15)、白磁碗(同-16)、土師器鍋・甕(同-17・19)、亀山焼(同-18)の破片を含む。その他には把手状製品の破片(同-T2・T3)があげられる。時期は異なるが平安時代前期の須恵器杯・蓋の破片も数点混在する。その他に、10数点の鏝が出土している。大半を占める割鏝は8～13cm程度の大きさに揃っており、その中には、柱穴の礎石の可能性を有するものほか、円鏝や板石状のものも確認される。石材は花崗岩・流紋岩など近辺の丘陵斜面から入手可能なものほか、石英斑岩・斑輝岩・安山岩など遠隔地から持ち込まれたものを含んでおり、その入手経緯については今後の課題となろう。一方、溝9に共存する遺物は、吉備系土師器碗の細片3片が確認されるのみである。

【所属時期】 出土遺物から、溝8の埋没時期は平安時代の終わりで12世紀後半の可能性が考えられる。溝9の時期については、出土遺物からは確定できないが、溝8との重複関係から同溝の前段階であることは明らかであり、両溝の連続的な使用が想定される。

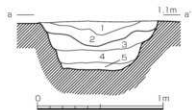
【周辺調査区との関連】 溝8は、本調査区の東側に接する第7次調査の溝6および西方に位置する第6次調査地点のSD10に対応する。両地点の溝をつなぎ合わせると、その長さは約60mを測り、鹿田座標のBYライン付近を東西方向に走ることとなる。この溝のラインは、鹿田キャンパスに広がる鹿田遺跡のほぼ中央部に当たっており、同時期の土地区画において重要なラインを形成した区画溝と評価される。

#### 溝10(図35・50・51、図版19・32)

調査区南端の4区で検出された。BX・BY63区に位置し、溝8の上部に構築される。軸方向はN12°Eを示す。

検出レベルは標高1.05m前後で<7層>に対応する。ただし、調査区南壁の観察から、上面レベルは標高1.25mに求められるため、本来は<6層>に対応すると考えられる。南壁から約1mの長さを検出した。溝の幅は1.1mを残すが、本来は少なくとも1.2m程度の規模が復元される。底面のレベルは標高0.68mで安定している。深さは0.37mを残すが、南壁では0.53mの深さが確認される。掘り方断面形は逆台形を呈し、底面の幅は約0.5～0.6mを測る。

埋土は、灰色あるいは灰褐色系の色調を呈しており、下半は鉄分の沈着で橙色を強める。全体的に、黄白色～黄灰色を呈する砂・砂質土や粘



1. 淡灰色砂質土 (黄白色砂ブロック)
2. 暗灰褐色砂質土 (黄灰色砂ブロック)
3. 灰褐色砂質土 (黄褐色砂質土ブロック)
4. 橙灰色粘質土 (黄灰色粘質土ブロック)
5. 明橙灰色粘質土 (黄褐色粘質土ブロック)

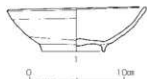
図50 溝10断面(縮尺1/30)



質土ブロックを多く含む点が特徴である。

出土遺物は吉備系土師器検1点があげられる。溝の北端部に位置するa断面付近で、東側から落ち込む状態で出土した(図版19)。そのレベルは標高0.85mで、本溝内の3層下面に対応する。

本溝の埋没時期は、溝8との重複関係や掘削面あるいは出土遺物の時期から鎌倉時代初頭、13世紀初頭～前葉の可能性が高い。



番号	種類・器種	質量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法	胎土	色調 内/外
		口徑	底徑	器高				
1	土師器・鍋	14.4	7.5	4.55	1/2-1/1	ナデ・押付	黄砂	黄白

図51 溝10出土遺物(縮尺1/4)

#### 溝11(図35・52、図版20)

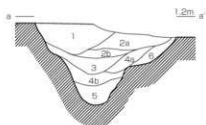
BT62～64区で検出された。調査区中央部を東西方向に走る。東西方向の溝群において最も北側に位置し、溝8とは溝の中心間で約24m、後述する溝15とは0.5～0.8mの間隔を有す(図35)。本溝の軸方向はE12°Sを示しており、鹿田地区の座標軸にはほぼ一致する。

検出レベルは標高1.05～1.15mで、<6層>に対応する。調査区西壁面際から東に向けて約7mを検出した。本溝の西端部については、平面的には調査区西壁に向けて伸びるにも関わらず、同壁面では本溝の断面を確認できない。よって、調査区西壁面際で収束したと判断される。一方、東端部については、調査区中央部を南北に走る溝12以東では検出されないため、同溝形成による消失あるいは同溝に接続する可能性が考えられる。

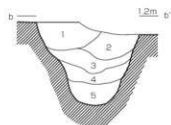
底面レベルは標高0.5～0.53mが中心をなす。明確な傾斜方向は確認できないが、東端部では同0.6mに上昇する。深さは0.65mを測る。溝の断面形は、底部に丸みを有するU字形を基調とするが(図52-b断面)、西半部では上部が大きく開く(同-a断面)。そのため、上面の幅は、東側部分では0.85mを測るが、西側では約1.1mまで広がる。底面の幅は0.2～0.25mである。

埋土は全体的に灰色を基調として砂質が強い傾向を示しており、粘質土となるのは最下層の5層のみである。また、砂などをブロック状に含み、均質性に欠ける特徴が指摘される。土層観察から、埋土は1・2層、3層、4・5層の3群に大別される。1・2層は比較的明るい色調で、最終的な流入土と理解される。3層以下は、やや暗くて褐色を帯びる傾向がある。特に4・5層は灰色粘質土あるいは粘土ブロックを多量に含んでおり、埋め戻しの状態を窺わせる。

出土遺物量はコンテナ2/3箱程度であり、中世前半の吉備系土師器検、土師器杯・皿・鍋、瓦器そして中世須恵器を中心とする。吉備系土師器検は大振りな高台が特徴であり、比較的古い時期を予想させる。古代以前の遺物や中世後半～近世の遺物も少量含むが、いずれも混入品と判断される。そのほかに焼土塊が出土しており炉壁片の可能性を残す。こうした遺物は、いずれも小～細片であるため詳細な時期は確定できないが、吉備系土師器の特徴や周辺遺構との関係などから、本時期の時期は鎌倉時代初頭、13世紀初頭前後の範囲で考えておきた



1. 淡灰色砂質土(砂ブロック多)
- 2a. 淡(灰)灰色砂質土
- 2b. 黄灰色砂質土(灰色砂ブロック少、Fe)
3. 暗黄灰色砂質土(灰色粘質土ブロック、Fe多)
- 4a. 淡褐色砂質土(灰色粘質土ブロック多、Mn)
- 4b. 暗灰色砂質土(灰色粘土ブロック多)
5. 暗褐色粘質土(灰色粘土ブロック多)
6. 黄灰色砂質土(Fe多)



1. 淡灰色砂質土(灰色砂ブロック多)
2. 灰色砂質土
3. 暗黄灰色砂質土(灰色砂ブロック)
4. 暗褐色砂質土(灰色粘質土ブロック多)
5. 暗褐色粘質土(灰色粘土ブロック)



図52 溝11断面(縮尺1/30)

い。

本溝の機能を考える上で問題となる東端部については、本来求められる位置に溝12が形成されている。本溝とは切りあい関係を示すが、直交する位置関係や、後述する溝12の所属時期などを勘案すると、両溝が結合していた時期を想定することも可能と考えられる。その状態を仮定するならば、本溝は、西端部は取東し、東端部は溝12とT字形に結合する区画溝との評価がなされる。また、U字形の断面形態や規模は、前述した溝8とは異なる特徴を示しており、機能あるいは管理上の違いがあるのかもしれない。

#### 溝12 (図35・53・54、図版20・21・32・35)

調査区北半部の中央部、1区と3区の境界にあたるBR~BT62区において検出された。概ね南北方向を示す溝で、軸方向はN21°Eを保つ。本溝の北半部は東側に位置する溝14によって肩部の一部が破壊される。南端部は溝15に切断され、その北壁面に本溝の断面が確認される。また、同溝以南に本溝の痕跡は残存しないことから、本溝の南端部が同溝の位置に取まることは明らかであろう。

本溝の検出レベルは標高1.05m前後であるが、調査区の北壁断面では同1.15mまで上昇する部分が確認される。同域では<5層>によって<6層>が削平されているため、平面的には<7層>での調査となったが、本来は<6層>に対応する遺構と判断される。

調査区北壁面から約12mの長さが検出された。その上面幅は1.6~1.7mを測る。底面の幅は0.4~0.6mであるが、底面のカーブが丸みを強める地点では0.3m前後に狭まる部分も確認される。掘り方の断面形は、標高0.8m付近から上部に向けて大きく開口し、同レベルから底面に向けては碗状をなす。底面レベルは標高0.25~0.54mの数値を示しており、約0.3mの高低差を有す。その数値は一律に推移するわけではない。BTラインの南約1mの地点には小さな段が形成されている(図53)。その比高差は約0.2mを測り、北側が一段下がる。同段以北における底面レベルの変化は、北端部(調査区北壁)から南1m付近までは標高0.37mであるが、同位置から同段に向けて同0.25m前後まで下降したのち、段部分で同0.34mに上昇する。深さは0.7~0.75mを測る。一方、同段以南における底面レベルは、標高0.45mに上昇したのち、本溝最南端(本溝と溝15との接点)に向けて標高0.54mへと緩やかに推移する。深さは0.5~0.58mを測る。こうした数値の変化は、段を境にして、北側の深い溝部分では南への傾斜を、そして一段高い南側の溝部分では、逆に北への傾斜を示す。つまり、段部分が最も低い位置を占める状態となる。

理土は上・下層に大別される(図53)。下層(a断面8層、b断面6・7層)は標高0.5m以下の堆積土である。全体に暗灰色系の粘土層で構成されており、一段下がった段内部を埋める。よって、堆積範囲は段以北に限定される。上層(同1~7層・同1~5層)は、下層上部および段以南も含めて溝全体を覆う。上層の下面は標高0.5m前後に位置しており、際立った傾斜は確認されない。堆積層は全体的に褐色系の色調を特徴とする。上半(両断面1~3層)は砂質が強く、下半(a断面4~7層・b断面4・5層)では粘性を強める。

さらに、本溝の南端部では、底面に小規模な流路と枕群が検出された(図53)。東西方向の溝15によって本溝が切断される手前部分である。流路は幅0.2~0.25mで、南に向けて僅かに傾斜しつつ幅を広げる。深さは約0.05mの小さな窪み状を呈する。枕の痕跡は直径5cm程度の円形として残存する。流路の北端部付近において、溝の東西両脇にそれぞれ3箇所確認された。こうした流路や枕の存在は、明らかに南側への水の流れを示すと同時に、その水流の調整がなされた可能性をうかがわせるものであり、本溝が、より深い東西方向の溝に接続していたことを示す傍証となろう。また、水流調整に関して、前述した底面のレベル変化が南端に向けて上昇する点、あるいはその手前の段によって、一段低い底面が溜まり状態を生み出している点に注目すると、こうした底面の上下動は、北からの水流を南側の溝へ落とし入れるための水利調整関連構造と評価できるのかもしれない。

残存率の高い遺物は、段の位置から北側に約4.5mの範囲に集中的に出土する(図53)。最北端に吉備系土師器轆が1点(図54-3)、そして約1.5m南に同轆1点と土師器鍋1点(同-5・22)、さらに約2m南~段の位置に

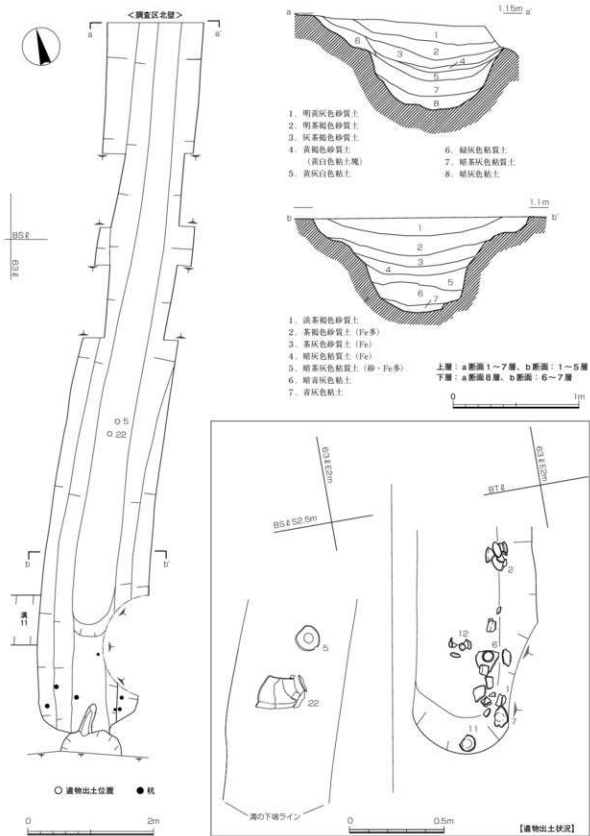
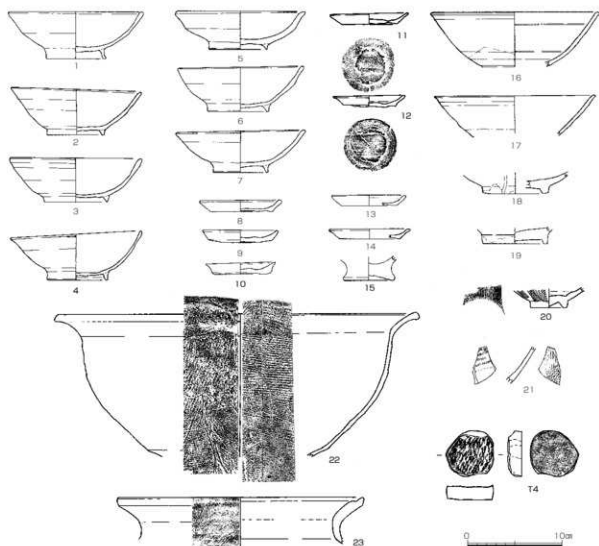


図53 溝12 (縮尺1/60・1/30・1/20)

調査の記録



番号	種類・器種	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法類	胎土	色調 内・外	
		口径	口径	器高					
1	土師器・甕	141	6.3×6.7	4.9	1/4~4/3	ナデ、系攪飯、磨減	陶砂	黄白	
2	土師器・甕	137.5	3.95	4.5~5.1	1/1	ナデ	陶砂	淡黄白	
3	土師器・甕	134.6	6.45	4.7	3/4~5/6	ナデ(流外)押圧・ナデ、磨減	陶砂	淡黄白	
4	土師器・甕	13.8	6.3	4.5~5.3	4/5	ナデ(流外)押圧・ナデ、磨減	陶砂	淡黄橙	
5	土師器・甕	13.6	6.15	5.05	1/1	ナデ、磨減、系攪飯、二次的焼熟	陶砂	黄白~淡黄白	
6	土師器・甕	13.3	6.4	4.7	2/3~1/1	ナデ、磨減	陶砂	淡黄白	
7	土師器・甕	13.3	5.9	4.35	1/2~1/1	ナデ(流外)押圧・ナデ、磨減	陶砂	淡黄橙	
8	土師器・甕	8.3	6.5	1.2	1/2~3/4	横ナデ(流外)流本可流ナデ、轆轤回転石	陶砂	淡黄橙	
9	土師器・甕	7.8	6.8	1.3	1/2	横ナデ(流外)流本可流ナデ	陶砂	淡黄橙	
10	土師器・甕	7.4	6.2	1.1	1/2	横ナデ(流外)流本可流ナデ、甕、轆轤回転石	陶砂	淡黄白	
11	土師器・甕	8.1	5.75	1.15	4/5~1/1	横ナデ(流外)流本可流ナデ、板目肌	陶砂	黄白	
12	土師器・甕	7.4	5.5	1.2	5/6~1/1	横ナデ(流外)流本可流ナデ、板目肌	陶砂	黄白	
13	土師器・甕	7.6	5.8	1.1	1/3	横ナデ(流外)流本可流ナデ、甕	陶砂	淡黄白/黄白	
14	土師器・甕	8.4	6.4	1.0	1/3	横ナデ(流外)流本可流ナデ	陶砂	淡黄橙	
15	土師器・甕内	-	(5.6)	-	-	ナデ	陶砂	淡黄橙	
16	白磁・甕	16.2	-	-	1/4	(内外)施軸(体外下子)高胎、(内)円筒文	堅致灰	灰白、釉:淡黄白	
17	白磁・甕	16.2	-	-	1/3	(内外)施軸(体外下子)高胎	堅致灰、釉:淡黄灰	灰、釉:淡黄灰	
18	青磁・甕	-	7.0	-	1/4	(内外)施軸(器付高台内)高胎、器出高台	堅致灰	灰白、釉:淡黄灰	
19	白磁・甕	-	6.8	-	1/3	(内外)施軸(高台内)高胎、足込みに砂目	堅致灰	灰白、釉:白	
20	青磁・甕	-	3.8	-	1/1	(内外)施軸(高台内)器付蓋胎、円筒文・櫛目文	精致灰	灰、釉:灰	
21	青磁・甕	-	-	-	-	(内外)施軸、(内外)櫛目文	精致灰	灰、釉:淡黄灰	
22	土師器・甕	38.6	-	-	1/4	(口)横ナデ(流外)ハテ(体外)ハテ・押圧、甕	陶砂	黄灰、磨減	
23	土師器・甕	-	35.8	-	-	ナデ(外)平打ナデ	陶砂	黄灰	
番号	種類	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残部	形態・手法類	胎土	色調
T4	瓦片:円筒	4.8	5.0	1.5	41.6	1/1	本目取・櫛目、円筒状に面取り	陶土	類灰・灰

図54 溝12出土遺物 (縮尺1/4)

同坑5点と土師器皿2点(同-1・2・4・6・7、11・12)が、溝の東半部～東斜面下端において検出された。北側では点在した状態を成すが、段内南端から北へ約1mの範囲には坑と皿が列状に並んで出土しており(図53、図版21)、同位置が遺物出土の中心域にあたる。これらの遺物の出土レベルは、そのほとんどが標高0.47～0.65mを示しており、上層の下面付近(図53-b断面5層～4層)に対応する。下層から出土した遺物は、溝のほぼ中央部において標高0.36m(同-b断面6層中)で出土した土師器皿1点(図54-12)のみである。こうした状況から、同坑・皿は、下層が堆積したのちに意識的に並べ置かれた可能性が高く、溝の廃棄に伴う行為の現れと理解しておきたい。さらに、その位置が段に近接する点も興味深い。

遺物はコンテナ2箱程度の量が出土した。前述したように、主体をなす器種は、残存率の高い個体を多く含む吉備系土師器碗と土師器皿である(図54-1～14)。その他に、残存率は下がるが、土師器鍋・器台(同-15・22)、須恵器壺(同-23)、白磁・青磁碗(同-16～21)、あるいは須恵質の瓦を加工した円盤状製品を含む(同-T4)。

以上の出土遺物から、本溝の埋没時期は鎌倉時代前半、13世紀前葉頃と考えられる。

**【本溝と溝11との関係】** 両溝が接続する可能性について前項で触れた。ここで改めて確認してみよう。

両溝の軸方向は、溝11がE12°S、本溝はN21°Eを呈することから、ほとんど直交したT字形の位置関係が見て取れる。また、接続場所については、本溝の南端から北に3m前後の位置に溝11の接続が予想されるが、同位置は本溝の段の窪み部には対応する(図53)。こうした位置関係は両溝の関連性を予想する根拠となるが、検出時に確認された両溝の切りあい関係も考えておく必要がある。同関係は、少なくとも本溝が廃棄される段階に溝11は既に埋没していたことを示すものであった。以上の状況を総合的に考えると、本溝は、古い段階に溝11と連結し、同時期に対応する埋土が本溝の下層であり、その後、溝11が廃棄されたのちの本溝に対応する埋土が上層で、南側の東西溝ととりつく状態へと改修された可能性が想定される。ただし、古い段階に、溝11と東西溝が併存し、本溝がそれぞれと連結した状態にあった可能性も残す。

#### 溝13(図35・55・56、図版22・33)

調査区北半の中央部にあたるBR61・62区、BS・BT62区において検出された。検出レベルは標高0.9～0.95mを測り、<7層>に対応する。ただし、本溝周辺では<5層>の形成によって<6層>が削平され消失している点、重複関係にある溝12・14の状態を考慮すると、本来は<6層>に対応する遺構であると判断される。南北方向に走る溝であり、軸方向はN15.5°Eを示す。溝の西半部は後述する溝14によって削平を受け、南端部は調査区北壁面から約10mの位置で収束する(図55)。

溝の幅は、溝14の破壊によって正確な数値を求めることは困難であるが、おおむね1～1.1mが残存する。ただし、調査区北壁の断面観察では、残存部だけでも2mに拡大する状態が看取された。こうした幅の急激な変化は、北壁の削平掘削の影響で平面的には確認できなかったが、直線的な溝の平面形が、調査区北壁付近で撥形に大きく開く形状へと変化する可能性が想定される。その背景を考えると、本調査区の北側に本溝が連結する東西方向の溝の存在も一つの解釈であるが、データに乏しいことから積極的評価は差し控えた。

底面のレベルは、北端部で標高0.3m、南側では同0.2mまで下降したのち、南端部では同0.25m前後の高さから上部に立ち上がり収束する。深さは0.6～0.7mを測る。底面の幅はおおむね0.4mである。掘り方の断面形態は、b断面で確認されるように、底面に丸みを有する碗状から上部に大きく開く形状が生たる形状と判断される。一方、北端部のa断面では、底面は比較的平坦で立ち上りの傾斜は極めて緩やかである。これは、同付近で撥形に広がる上面ラインの形態変化と関連した特徴と理解される。

埋土は、堆積状態から上層(図55-a断面1～5、b断面1～4層)と下層(同-a断面6～7層、b断面5～6層)に分けられるが、砂や粘質土ブロックの包含が認められる点で上下層は共通しており、両層の分離は必ずしも明瞭ではない。ただし、北側(a断面)と南側(b断面)では多少の違いが認められる。前者では、粘質

土と砂質土ブロックが混在する状態であるのに対して、後者では、特に、b断面の6層にあたる最下層で砂の割合が非常に高く、同断面5層と6層間には厚い鉄分層の沈着が際立つ。a断面の下層部(6・7層)が粘土で埋まるのとは対照的である。上層については、堆積状態は均質性を欠いた堆積が見て取れることから、溝廃棄段階の埋め戻し土と判断される。

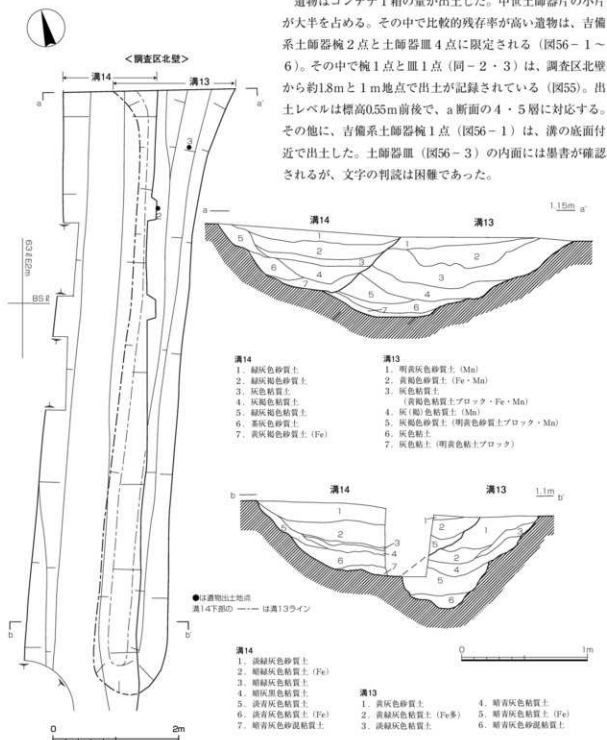


図55 溝13・14 (縮尺1/60・1/30)



図56 溝13出土遺物(縮尺1/4)

溝の埋没時期は、出土遺物の時期から鎌倉時代後半、13世紀末～14世紀初頭と判断される。

#### 溝14 (図35・55・57・58、図版22・33・35)

調査区北半の中央部にあたるBR～BT6区において検出された南北方向の溝である。軸方向はN14°Eを示す。溝12と溝13の間に位置し、両溝の一部に重複して構築される。これら3条の溝の軸方向はおおむね平行する範囲におさまる。南端部は、調査区中央部を東西方向に走る溝15に接続して同一溝を構成するが、説明の都合上、便宜的に別番号を付けて報告する。

検出レベルは標高0.95～1.05mであり、<5層>下面の<7層>に対応するが、本来は、周辺の溝と同様に、<5層>形成で消失した<6層>に対応すると判断される。溝の幅は、調査区北壁付近では1.45mを測るが、南端の溝15との接合部では1.85mまで広がる。底面の幅は北端部(a断面)で0.4m、南側(b断面)では0.55mである。同レベルは、前者の位置で標高0.5m、後者では同0.46mを測り、緩やかに南側つまり接続する東西溝15に向けて下降する。同溝との接続部では同0.4mまで底面は下降し、約0.25mの落差をもって東西溝15へ、段を形成しつつ落ち込む状態が観察される(図35・図58-c断面)。こうした接続状態については溝15の項で詳細を述べる。掘り方断面の形状は、逆台形あるいは底部が若干丸みを有する椀状と評価される。

埋土は、北側(a断面)では最上層を形成する砂質土層の下部に粘質土が堆積し、下半は砂質土となる。それに対して、南側(b断面)では、粘性を強める。ただし、最下層(b断面7層)では多くの砂が混入している。流水の影響を強く示すものかもしれない。

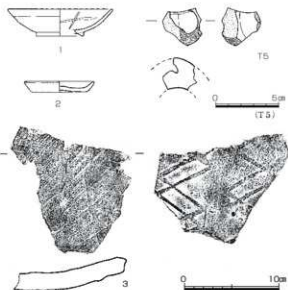


図57 溝14出土遺物(縮尺1/4・1/3)

番号	種類・部類	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法推	胎土	色調 内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・椀	(11)	20	28	1/3	ナデ、(内)工具痕、磨滅	磁砂	透灰/白
2	土師器・皿	7.8	6.1	1.1	3/4	磨ナデ(底外)・底ナリ	磁砂	白
番号	種類・部類	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)		形態・手法推	胎土	色調
3	軟質・平丸	12.0	9.5	1.8		(内面)布目痕(凸面)磨子目タタキ	磁砂	透灰/白
番号	種類	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	残存	胎土	色調(内/外)
T5	出口	30	3.1	2.3	157	ナデ、(外)底痕	磁砂	灰・粗灰/粉

遺物はコンテナ1箱程度の量が出土した。中世土器の小片が大半を占める。その他に、割縁2点を含むが、いずれも近辺の丘陵部で採取可能な石材である。遺物の器種構成は、吉備系土師器・土師器皿(図57-1・2)のほかに、土師器鍋・甕、中世須恵器・陶器、瓦質羽釜、青磁、そして瓦(同-3)などの破片が確認される。また、注目されるのは小形の焼土塊や羽口片(同-T5)の存在である。加熱作業を伴う手工業生産が予想される遺物である。

本溝の時期は、出土遺物の時期や溝の切りあい関係から、鎌倉時代後半、13世紀末葉～14世紀初頭に求められる。

#### 溝15(図35・58・59、図版22・23・33・35・36)

BT～BU60～64区で検出された。検出レベルは標高1.05～1m前後で、<6層>に対応する。溝14とは、62ラインの西1.5m付近でT字状に連結する。溝16・17の上部に形成されており、本溝の流路部分は両溝の間に位置する。また、本溝の上部は、<5層>に対応する溝19の構築によってその一部が破壊される(図58)。

溝上面の北端ラインは比較的直線的に走る。一方、南端ラインは、62ライン付近以西では、南側に約2mの幅で拡張された状態で検出された。その結果、溝の幅は、東半部では3.2～3.5mの値が復元されるが、溝の中央部～西半部では5.2～5.3mに拡大する(図35)。

本溝の掘り方断面は、基本的には段掘り状態を呈する。溝14以東では、溝脇の小さな段から流路が掘り込まれ、底面は丸みを有するが(図58-a断面)、同溝以西では、明瞭な平坦面が形成された段から流路部が掘り込まれ、その底面は平坦で逆台形の断面形を形成する(同-c～e断面)。同部分では、有段の逆台形の断面形態が明瞭に確認される。全体的な溝の深さは約1.2mを測る。

流路の中心はBUライン付近を走る。その底面レベルは、東端部では標高-0.05mを測るが(同-a断面)、東壁から約2.5m西側で0.1m前後の落差を形成して西側に落ち込む。そして、溝14との結合部付近(62ライン付近)では同-0.2mまで下降する(同-c断面)。溝14の南端レベルが標高0.4mであることから、本溝への落差は約0.6mとなる(同-c断面)。最も底面レベルが低い同地点における流路部の深さは約0.5mで、上面からは約1.2mを測る。同位置以西では、底面は同-0.1～-0.2mのレベルで推移しており(同-d・e断面)、やや不安定な状態を呈す。流路部の底面幅は、東側では0.7m前後(同-a断面)、そして西側では1～1.1m(同-c～e断面)に広がる。こうした流路の下端ラインは、溝14との結合部で南北に丸く挟れている。特に南側への影らみが大きく、その幅は最大約1.6mに拡大する(図35)。一方、北側の影らみ部は、上方に位置する溝14の底部に向けて階段状の立ち上がりを形成しつつ同溝と結合する(同-c断面：本溝北側斜面)。

流路脇に形成される平坦面は、溝14との結合部以西においては、同流路の南北両脇に形成される(図35-トーン部)。同面のレベルは標高0.45～0.5mを測るが(図58-c・d断面)、西端部付近では標高0.25mまで下降する(同-e断面)。その幅は北側では1m程度、南側では1～1.2mを測る。一方、溝14以東では、流路北脇に段を形成する幅0.3m前後の狭い面が確認されるが、面としてはやや不明瞭である。これら平坦面の下部には溝16と溝17が北側と南側にそれぞれ位置する。南側平坦面の東端位置は、前述した溝14結合部における底面の南側への影らみ部に一致する。その結果、同位置以西において南側への張り出しを有する溝形態が生み出される。また、平坦面には複数の礫が出土した。

埋土は、標高0.5m前後を境に上層と下層に大別される。この違いの背景には、同レベルにおける地下水位の影響による土質の変化も十分に予想されるが、ここでは調査時の知見を尊重して、以下に説明する。

上層(図58-c断面1～3層、d断面1～4層、e断面1～6層)は褐色あるいは灰色系の砂質土を中心とし、鉄分の沈着が際立つ。ただし、下層に接する層では粘性を強める傾向が確認される。下層(同-a断面1～4層、c断面4～9層、d断面5～9層、e断面7～9層)は粘質土～粘土を中心とするが、一部に砂の包含が特徴的な土層を挟む場合が認められる(同-a断面3層、c断面8層、d断面8～9層)。この砂の混入層に注目する



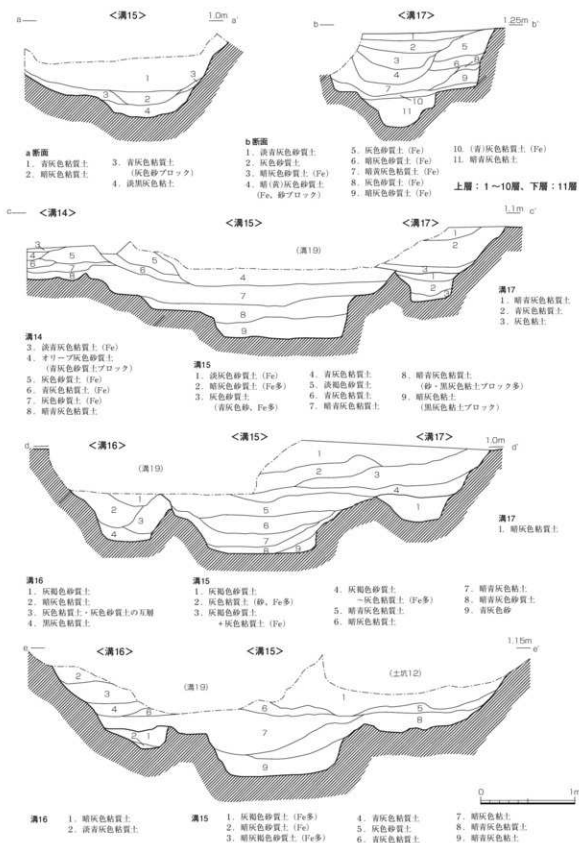
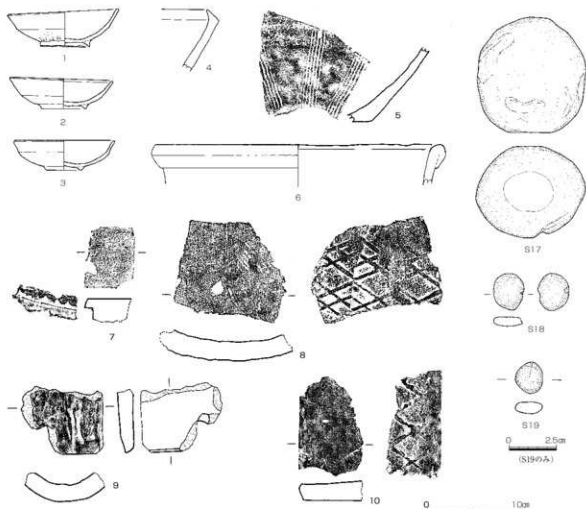


図58 溝15～17断面 (縮尺1/40)

と、溝中央部（同-c断面）で層厚は厚く、西に向けて薄くなり（同-d断面）、西端（同-e断面）では同層は確認されない。c断面付近は溝14との結合地点で、底面レベルが最も低く（標高-0.25m）、溝の上面ラインが大きく南側へ膨らむ場所である点に留意すると、こうした砂の包含状況は、溝14からの流水の影響を示すものと判断される。ただし、最下層では粘土堆積が認められる場合も多く、滯水状態も少なくなかったことがうかがわれる。

溝14との関係は、本溝のc断面7層が溝14の8層と一連の堆積を示しており（図58）、加えて溝14の1・2層が



番号	種類・部材	寸法 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法他	胎土	色調 内/外
		口径	底径	器底				
1	土師器・甕	11.8	8.5	3.0~4.0	1.5~1/1	ナデ、種子圧痕(内面1・外面2)	細砂	灰白
2	土師器・甕	10.9	4.8	2.9~3.3	1/2~1/1	ナデ・押圧	細砂	黄灰
3	土師器・甕	10.3	3.8	3.1	1/4	ナデ・押圧、二次的焼痕、磨滅	細砂	黄灰
4	金属塊・すり鉢	-	-	-	-	横ナデ、自然軸、直線痕	細砂	暗黒
5	金属塊・すり鉢	-	-	-	-	ナデ、1筋7本のスリ目、自然軸、使用痕	細砂	暗黒
6	金属塊・斧	30.1	-	-	4.9	横ナデ	細砂	明緑
番号	種類・部材	残存長: cm	残存幅: cm	厚: cm	重量: g	石材	特徴	
7	原土質・半瓦	7.2	8.5	2.5	1936	花崗岩	下部を平面に加工	
8	原土質・半瓦	10.6	14.0	2.3	38.0	安山岩	断面に1筋溝打ち大き	
9	焼瓦・丸瓦	7.0	8.4	1.8	-	-	-	
10	原土質・半瓦	11.8	6.7	2.2	-	-	-	
番号	種類	残存長: cm	残存幅: cm	厚: cm	重量: g	石材	特徴	
S17	加工磚	12.2	10.4	9.7	17936	花崗岩	断面に1筋溝打ち大き	
S18	石函	3.8	3.2	1.0	38.0	安山岩	断面に1筋溝打ち大き	
S19	蓋石	1.6	1.4	0.6	2.3	石英	円形、裏面は平面、白色	

図59 溝15出土遺物（縮尺1/4・1/2）

本溝1層に対応すると考えられる点からも、同時に機能し埋没した可能性は極めて高いと判断される。

遺物はコンテナ2箱分の量が出土したが、10数個の罐を含んでおり、土器類の量は同1箱弱である。いずれも小片で各種の土師器を含むが、残存率が比較的高い器種は吉備系土師器碗(図59-1~3)である。その他に、中世須恵器・備前焼・瓦・輸入陶磁器・近世陶磁器(同-5~10)を含むように、中世前半と中世後半~近世初頭の遺物が混在する。これは、調査当初、本溝と上部の溝19の分離が明確になされなかったためと判断される。溝19には中世前半の明確な遺物は含まれない。石器には石錘・碁石など(同-S17~19)があげられる。碁石は扁平な断面形を呈し、直径約1.5cmを測る。石材は石英質であり白色を呈する。第7次調査地点では黒色の同石器が出土している点も興味深い。

出土遺物の中で、中世後半~近世初頭の遺物を上部の溝19由来と考えると、本溝の埋没時期は、鎌倉時代後半、13世紀末~14世紀前葉の可能性が求められる。

#### 溝16(図35・58・60、図版22・23・33)

63ライン以西で、BT63~64区において検出された(図35赤線)。溝15の下部に位置するため、検出レベルは標高0.3~0.5mに求められる。溝の東端部は溝12の南端部に近接した位置であり、調査区西壁から東へ7.7mの地点で収束する。平面的には長さ約7mを調査した。

溝の上面幅は1.1m~0.7m、底面の幅は約0.4~0.2mを測り、西側に向けて狭まる。d断面では、底面のレベルは標高約0mを測り、深さは約0.5mを残す。流路部分は逆台形の断面形態を示すが、溝19によってほとんど削平された溝の上部は、同部分から上部へ大きく開くことが、北側斜面から予想される(図58-d断面)。この断面形態が、本来の溝形態に近いと判断される。調査区西壁際に位置するe断面では、底面レベルは標高0.08mを測るが、深さは約0.2mへと浅くなる。断面形も不整形な状態へと形を崩す(図58-e断面)。この変化の一因には、検出面のレベルが前者では標高0.5mに対して後者では同0.25mに下がっていることがあげられる。そのため溝の幅も、約1mから0.5mへと縮小する。

埋土の下層は灰色系の粘質土で構成される(同-d断面4層、e断面1・2層)。上層については、その多くを消失しているが、一部で砂質土と粘質土の互層堆積が確認される(同-d断面1~3層)。

出土遺物は13号ポリ袋1/3袋程度にとどまり、ほとんどが細片~小片である。中世前半期の吉備系土師器碗や土師器皿・銅・脚台付き皿、青磁碗などを含む(図60)。残存率が比較的高い土師器皿(同-2)のほか、脚台付き皿(同-4)などは鎌倉時代前半の年代観が得られるが、一方で、鎌倉時代後半(13世紀末~14世紀前葉)の時期が想定される遺物(同-1・3・5)も含む。

本溝の時期について、後者の遺物は溝15と同時期を示しており、両溝の強い関連性が予想される。その場合は、本溝は上部溝の平坦面に位置する点から、その下部構造的な性格も考える必要があるかもしれない。しかし、一方で、同時期の遺物は溝15に属するもので、前者の遺物が本溝の時期を示す可能性も排除できない。その場合は、時期が近い溝12との位置関係が改めて注目されることとなる。



番号	種類・器種	法量 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法	胎土	色調 内/外
		口径	底径	胎高				
1	土師器・碗	-	-	-	-	ナデ・押圧、二次的成形	磁砂	淡黄白
2	土師器・皿	7.7	5.9	1.2~1.6	1/1	横ナデ(底外)・横ナリ・板目削	磁砂	淡黄帯
3	土師器・皿	7.0	5.2	1.5	1/3	横ナデ(底外)・横ナリ・板目削(底)	磁砂	淡黄白
4	土師器・台付皿	9.2	6.0	4.5	1/3~1/5	横ナデ・底内3本の北端	磁砂	淡黄帯
5	青磁・碗	-	-	-	-	(内料)輪軸、(内3条の内周文)横目文	灰泥	灰・緑・緑灰

図60 溝16出土遺物(縮尺1/4)

## 溝17 (図35・58・61、図版22・23・33・35)

BU60～64区において検出された。BUラインの南約1.5m付近を東西方向に走る。本溝は、62ライン以東(以下、1区とする。)では溝15の南側に平行し、本溝の北側肩部を同溝が破壊する形で検出された。一方、62ライン以西(以下、3区とする。)では、溝15の上面の南ラインが南側に大きく拡大するため、本溝は同溝下部に取り込まれて上部を完全に消失する(図35・58)。その結果、平面的に溝15の南側平坦部の下部に重複することとなる。そのため、調査時に同溝との明瞭な分離が困難な状態も生じた。

検出レベルは、1区では標高1.2mで<6層>に対応するが、3区では溝15下面レベルの標高0.45～0.5mまで下がる。底面レベルは、前者では標高0.15mを測るが、後者では同0.25m前後となり、西に向けて上昇する。

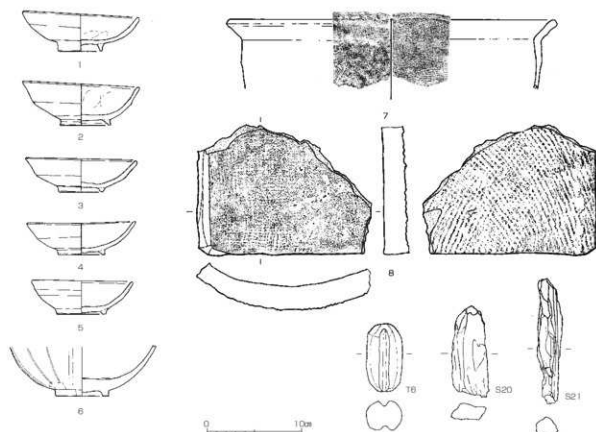
本溝の特徴について、残存状況の良い1区を中心に報告しよう(図58-b断面)。溝の幅は1.75mが残存するが、復元すると約2mの規模が求められる。底面のレベルは標高0.15mで、深さは1mを測る。溝の断面形は箱形～逆台形の二段掘りを呈する。底面は標高約0.5mの位置で幅1.5m程度の面を形成したのち、同面からさらに幅0.8m程度の流路が掘り込まれる。流路の深さは0.35～0.4mで、標高0.15m付近に位置する底面はやや丸みを有す。そのため、底面幅は明瞭とは言えないが、0.25m程度と理解される。標高約0.5m付近には、流路脇に、北側では幅0.2m、南側では幅0.4mの平坦面が形成される。前者については傾斜を有する部分も多いが、南側については明瞭な平坦面が東壁から約6mにわたって確認された。その西端部は、62ラインの西0.5m地点で方形に収束しており、北側の状況とは異なる形態を形成する。

埋土は灰色系の土層であるが、粘性の違いなどから標高約0.5m以上の上層(図58-b断面1～10層)と下層(同-b断面11層)とに大別される。上層は段掘り面以上を埋める土層群であり、堆積状況から、さらに1～4層と5～10層にまとめられる。前者は後者の堆積を切り込む状態で堆積する砂質土層の一群であり、各層の違いは色調の濃淡程度が高い類似性を示す。下半に向けては鉄分の沈着が進行し、同群の最下層にあたる4層では砂をブロック状に含むことから流水の可能性をうかがわせる。後者は全体に鉄分の沈着が顕著である。砂質土層群(5・6層、8・9層)と粘質土層群(7層、10層)が互層状の堆積をなす。一方、下層である11層は溝内の流路部を埋める堆積土であり、上層とは異なる暗青灰色粘土を呈す。

3区では溝15による破壊が標高0.45～0.5mにまで及ぶため、段掘り面以下の流路部が残存するのみで、掘り方の断面形態や平坦部の有無は確認できない。流路部の底面幅は、1区の0.2～0.3m(b断面)から、中央部で0.4m前後(c断面)、西半部で0.5～0.6m(d断面)、そして調査区西端付近では0.9m以上に広がる(e断面)。そのe断面付近では、溝15による本溝上部の破壊と底面レベルの上昇が影響して、本溝の形状は消失し、溝15の底部平坦面との区別が困難な状態が確認される(e断面8層)。埋土は1区における下層に対応する。

本溝の底面では、63ラインの西約2m付近(d断面位置)において、底面の東西1.3m・南北0.5mの範囲に瓢箪形のくぼみが検出された。その約0.05m程度の窪み内から種子が集中して出土した(図35-トーン部)。その中で際立つのがウリの存在である。その数は約500粒に上る。鹿田遺跡においても、ウリの出土例は井戸などで数多く認められており、何らかの祭祀的行為の痕跡の可能性も予想される点で注意しておきたい。その他にスベリヒユ・ザクソウ・ワチガイソウなどの雑草が検出された(第5章2)。

出土遺物はコンテナ2箱程度である。中世前半の吉備系土師器碗や土師器皿・鍋・甕、青磁碗、中世須恵器、瓦などのほか、土鍾や片岩素材の石製品片2点を含む(図61)。ほとんどが小片であるが、吉備系土師器碗では、比較的残存率が高い個体が数点出土しており(同-1～3)、他の器種との違いを示す。これらの出土位置は1区に集中しており、本溝の南側平坦部の西端付近や流路への落ち際付近である。前者の位置からは青磁碗や瓦(同-6・8)などが、そして、流路の落ち際ではb断面9層に対応する標高0.6～0.8mの位置から吉備系土師器碗が出土した。また、下層内からは吉備系土師器碗(同-2)が出土しており、本溝の時期は鎌倉時代、13世紀後葉頃と考えられる。溝15の前段階の時期に位置づけられる。



番号	種類・器種	質量 (cm)			計測面の 残存状況	形態・手法他	胎土	色調 内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・甌	12.1×12.6	4.7	3.5-4.2	3/4	ナデ、(高台内)種子压痕	陶砂	淡黄褐色/黄白
2	土師器・甌	11.95	5.4	3.8-4.7	7/8	ナデ・押圧、蒸焼痕	陶砂	黄白-淡黄褐色
3	土師器・甌	11.6	4.7	3.3-3.7	1/4-1/1	ナデ、蒸焼痕	陶砂	黄白
4	土師器・甌	11.9	4.75	3.35	3/5	ナデ・押圧、(底外)横目筋、蒸焼痕	陶砂	淡黄褐色/黄白
5	土師器・甌	10.6×11.0	5.35	3.5	3/4-1/1	ナデ(底外)横目筋・横目筋、横目筋、帯付部蒸焼、高台内斜目、連弁文・円周文	陶砂	淡黄褐色
6	青磁・甌	-	5.65	-	1/1	陶胎・帯付部蒸焼、高台内斜目、連弁文・円周文	窯灰	黄緑、靑・緑灰
7	土師器・甌	-	-	-	-	(体内)横目筋・横目筋・押圧、横目筋	陶砂	黄白/淡黄褐色

番号	種類・器種	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	形態・手法他	胎土	色調
8	須恵瓦・平瓦	13.5	18.1	2.5	(四角)布目織(凸面)格子目マタキ	陶砂	青灰

番号	種類	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	質量・g	残存	形態・手法他	胎土	色調
T6	土師	7.2	3.9	3.2	889	1/1	ナデ	陶砂	淡黄褐色

番号	種類	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	質量・g	石核	特徴
S20	板硝子or磁石	9.4	3.8	1.7	78.1	緑色片岩	厚縁部折損
S21	板硝子or磁石	13.8	3.5	2.6	82.0	点紋黒色片岩	厚縁部折損

図61 溝17出土遺物 (縮尺1/4)

【溝12・14と溝15～17の位置関係 (図35・58)】 溝15～17はBT～BU60～64区の範囲内で検出された。南北約5m幅内に収まり、重複関係を有して調査区中央部を東西に走る。いずれも平行関係を保つ。最上位に位置する溝15の下部に溝16・17が重複する。両溝の位置は、溝15内における流路部の南北両脇に形成された平坦部の下部に対応する (図35-トーン部)。その間隔は、両溝の中心距離で約3m、溝間の幅は2m程度である。溝16の時期は特定できないが、両溝の同時性を想定するならば、両溝の有機的な関係が考えられるかもしれない (図58-d断面)。また、南北方向の溝との関係では、溝15と溝14が連結するほか、溝15と溝12との関係についても、溝15の壁面に溝12の断面が明瞭に確認されることから、一段階古い時期に連結していた可能性を予想させる。このようにT字状につながる溝の状態は、溝12と溝16の端部の位置が接する点や出土遺物の时期的共通性から前述したように、両溝間においてもその可能性が指摘され、溝15形成以前から、そうした土地区画が存在したことも考えられる。

## 第5節 中世後半～近世・近代の遺構・遺物

ここでは、<5層>～<3層>で検出された遺構を取り上げる。時期は中世後半～近世・近代である。中世後半～近世初頭では井戸1基・溝2条、近世～近代では土坑16基・溝1条・畦畔と水口3箇所が含まれる。東西方向の溝2条（溝19・20）は、中世前半最終段階に埋没した溝15の位置が踏襲されており、中世後半以降、近代まで溝の機能が継続したことを示す。同溝は<5層>と<3層>で検出された。

本調査地点は、中世後半において屋敷地が耕作地へと変化する。こうした土地利用の変化に注目し、その中で遺構の性格や状態を勘案して、中世後半～近世初頭と近世～近代に分けて説明する。ただし、その境界は、遺構の詳細な時期を判別することができないため、必ずしも厳密なものではない。

### (1) 中世後半～近世初頭

中世前半における屋敷地の展開は本時期には姿を消し、全体的な遺構数は激減する。<5層>検出遺構の内、本時期に属する可能性が高いのは井戸1基と溝2条のみである。同層で検出した土坑4基については、いずれも<4層>で構成される近世～近代の畦畔下部に位置しており、同畦畔形成時期に上部が破壊された可能性を残す点や出土遺物から、近世に属すると判断した。

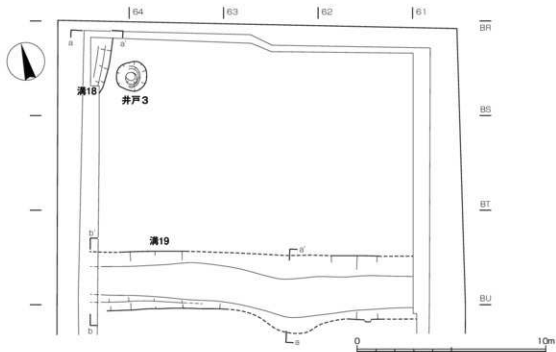


図62 中世後半～近世初頭の遺構全体図（縮尺1/200）

#### a. 井戸

##### 井戸3（図62・63、図版15）

調査区北西部の3区、BR63・64区に位置する。周辺の遺構としては、西側に溝18が約0.5mの間隔をもって検出されたのみである。検出レベルは標高約1.05mで<5層>に対応する。

平面形はおおむね円形を呈する。上面では直径1.55m、底面では直径0.4～0.5mの規模を有す。底面レベルは標

高-0.18mを測り、深さは1.25mを残す。掘り方の断面形は、下半部が壁面崩落によってオーバーハングした状態を呈するが、本来は逆台形に近い形状が復元される。

埋土は8層に分層したが、以下の3群に大別される。上層(1～4層)は砂質が強く、3層には複数の砂層を含む。下層(5～7層)は粘性を強め、最下層(8層)では粘土層となり、同層上面には有機物が薄く層をなす。上・下層の境にあたる4層には鉄分の沈着が顕著である。

前述した井戸1・2と比較すると、本井戸は底面レベルが高く、浅い形状である点で異なるが、壁面崩落の背景を考慮すると、水を溜める状態にある遺構であることは明らかであろう。ここでは、井戸1・2との違いを指摘しつつも、井戸としての機能を評価しておきたい。

遺物は、中世土器の細小片が数片出土したのみで時期は特定できないが、層的に、他の井戸より上位の<5層>に対応することから、中世後半～近世の遺構の可能性が求められる。

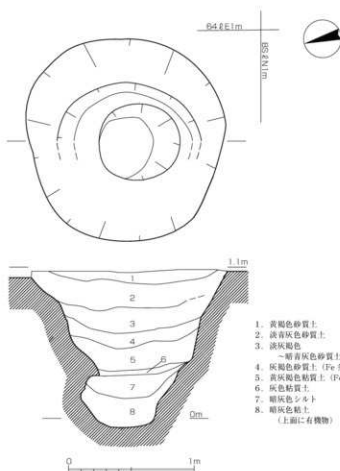


図63 井戸3 (縮尺1/30)

1. 黄褐色砂質土
2. 淡青灰色砂質土
3. 淡灰褐色  
～暗青灰色砂質土
4. 灰褐色砂質土 (Fe多)
5. 黄褐色粘質土 (Fe)
6. 灰色粘質土
7. 暗灰色シルト
8. 暗灰色粘土  
(上面に有機物)

## b. 溝

### 溝18 (図62・64、図版23)

BR64区において検出された。調査区3区の北西部コーナー部にあたる。平面的な検出が極めて限定的であったために方向軸は不明瞭であるが、鹿田座標軸よりも東に傾くことは確かであろう。検出レベルは標高0.92～1mまで下がり井戸3とはほぼ同一面となったが、調査区北壁の観察では標高約1～1.03mに求められる。<5層>に対応する。平面的に検出されたのは、南北に2.5m程度の東側部分のみであるが、調査区北壁と西壁において、その堆積が確認される。

本溝に関する情報が最も多く得られる調査区北壁で詳細を確認しよう。溝の幅は東西幅1.5mが残存しており、本来は同数値以上の規模が復元される。底面レベルは標高0.3mで深さは約0.7mを測る。掘り方の断面形態は、西側が調査区外に至るため確定はできないが、東側の立ち上がりラインから逆台形の形状が予想される。埋土は全体的に粘性が高く、1

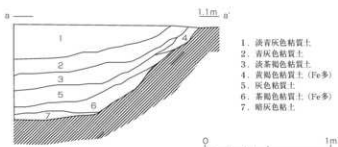


図64 溝18断面 (縮尺1/30)

1. 淡青灰色粘質土
2. 青灰色粘質土
3. 淡茶褐色粘質土
4. 黄褐色粘質土 (Fe多)
5. 灰色粘質土
6. 茶褐色粘質土 (Fe多)
7. 暗灰色粘土

～6層は粘質土で最下層の7層は粘土となる。全体的には灰色系の色調を呈すが、3・4層そして6層では鉄分の沈着から褐色系となる。全体に包含物は少ない。

調査区西壁では、1層の堆積は北壁から南へ15m前後まで確認されるが、3層については、北壁から南に約4.5m地点では立ち上がり、その堆積は取束する。つまり、両層の立ち上がり位置には約10m程度の差が生じている。ここでは、本溝の方向軸が西壁軸と斜めに交差する影響と考えたが、明確に判断するには情報に乏しく、別遺構の可能性も残る。平面形についても、溝として報告しているが大形の土坑の可能性も否定できない。

出土遺物量は13号ポリ袋に1/4程度で、吉備系土師器椀や皿を含む。同遺物の時期は鎌倉時代、13世紀以前のものであり中世後半に下る遺物は含まれないが、おおむね小片である点や掘削面が<5層>に対応する点から、中世後半～近世初頭の時期と判断される。

#### 溝19 (図62・65・66、図版34・35)

BT～BU60～64区で検出された。調査区の中央部を東西方向に走る。溝15の上部に重複し、その位置を踏襲する。本溝の中央部～北側部分は、後述する近代溝20や近・現代の工事による破壊が広範囲におよぶ。また、発掘調査にあたっては溝15との分離が不十分な部分も生じた。よって、ここでは断面観察をもとにして平面形態を復元し、その概要を報告する。

上面のレベルは、調査区西壁 (b断面) において標高1.2～1.25mを測り、<5層>上面に対応することが確認される。溝の幅は、平面調査では標高0.8～1mで2.1～2.7m程度を測るが、調査区西壁 (b断面) では標高1.2mで3.2m、中央部 (a断面) では同1m程度で幅3.4mの数値が求められる。よって、本来は幅3m前後の規模が復元され、中央部で南側に拡張して3.5mに至ると予想される。この拡張は溝15に通じる特徴である。底面レベルは、東側では標高0.6mを測るが、西側では同0.45～0.5mへと下降する。深さは0.65mを残す。底面の幅は1.5～1.8mであり、中央部では2mを測る。比較的幅広い平坦面を形成し、掘り方断面形は逆台形を形成する。

埋土は灰色系の色調を呈し、西方に向けて粘性を高める。特に際立つ土層の存在は確認できない。

出土遺物はコンテナ1/2箱程度の量が出土した。中世後半～近世の遺物が主体を成し、16世紀末頃の備前焼、17世紀代の肥前陶磁器を中心に瓦や土製品などを含む。13世紀末～14世紀前半を示す中世前半の土器片も確認されるが、いずれも少量で小～細片であり、遺構の重複関係などから混入遺物と判断される。

出土遺物の時期などから、本溝の時期は中世後半～近世初頭 (16世紀後半～17世紀) が想定される。

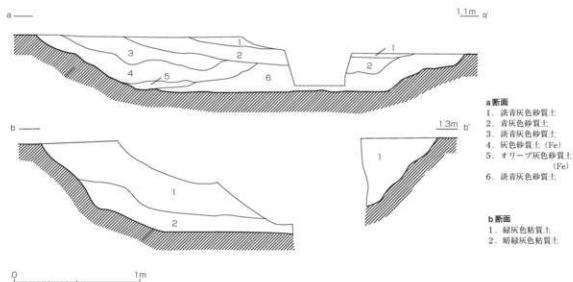
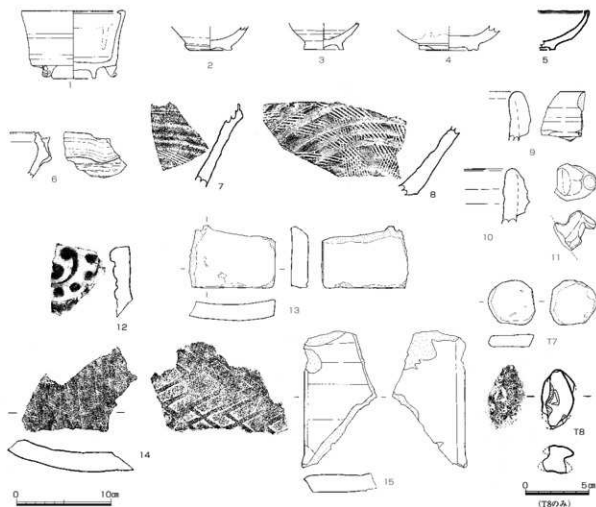


図65 溝19断面 (縮尺1/30)





番号	種類・器種	法量 (cm)			河原部の 残存状況	形態・手法施	胎土	色調 内・外	
		口径	底径	器高					
1	肥前青磁・香炉	(11.0)	4.6	2.2	3/4	ナデ。(外)施釉。器足の脚部3ヶ所	粘磁	淡青灰。釉：緑青	
2	肥前・碗	-	4.4	-	1/1	(外)ナデ・器ケズリ。(内)施釉。覆出し高台	粘磁	赤灰。釉：茶褐	
3	肥前陶器・碗	-	9.1	-	1/1	全輪・目入。骨付のみ施釉否。筋十日	粘磁	灰白。釉：灰青	
4	肥前陶器・皿	-	6.3	-	1/2	全輪灰・高台基部	付瓦	灰・施釉	
5	肥前・皿	-	-	-	-	茶灰釉・敷物。覆り出し高台。原田家系か	粘磁	灰緑。釉：白・黄	
6	肥前焼・すり鉢	-	-	-	-	横ナデ。(口)4本の深い割線。多燒痕	粘磁	灰・黄灰	
7	肥前焼・すり鉢	-	-	-	-	横ナデ。1筋6以上の跡めスリ目	粘磁	赤灰	
8	肥前焼・すり鉢	-	-	-	-	横ナデ。1筋7・8本スリ目	粘磁	茶灰	
9	肥前焼・茶	-	-	-	-	ナデ	粘磁	黒赤灰・滑灰	
10	肥前焼・茶	-	-	-	-	横ナデ。自然釉	粘磁	赤赤灰	
11	肥前焼・壺の耳	-	-	-	-	ナデ・脚付	粘磁	黒赤灰	
番号	種類・器種	残存長: cm	残存幅: cm	厚: cm		形態・手法施	胎土	色調	
12	瓦質・軒丸瓦	7.2	3.6	2.1		ナデ。連続凹文	粘磁	灰・黒灰	
13	瓦質・平瓦	6.5	9.1	2.3		ナデ	粘磁	灰	
14	瓦質・平瓦	9.4	10.5	2.0		(内面)布目痕(凸面)格子目タタキ	粘磁	灰・黒灰	
15	瓦質・平瓦	13.5	7.7	1.8		ナデ	粘磁	灰・黒灰	
番号	種類	残存長: cm	残存幅: cm	厚: cm	重量: g	残存	形態・手法施	胎土	色調
T7	備前焼・円盤	4.6	4.8	1.5	44.8	1/1	ナデ。裏面面取り	粘磁	黒赤灰
T8	土師	4.7	2.5	2.0	28.8	1/1	ナデ。片面に凸部位。縦。磨滅	粘磁	黒灰

図66 溝19出土遺物 (縮尺1/4・1/3)

本溝と溝15は、その位置や形態面で多くの共通点を有しており、連続的に利用されたことは明らかである。ただし、溝15では南北溝14とT字形の形状を有していたが、本溝では、南北溝との連結は引き継がれていない。本溝形成時に区画溝の再編があったと理解される。なお、溝14の位置には近代の南北畦が形成されており、土地区画の意識は継続していたことも予想される。

(2) 近世・近代

<3層>~<5層>で検出された遺構群である。各層で確認された合計16基の土坑ほか、<3層>では、溝1条・畦畔・水口が調査され、調査開始段階にあたる大正期の耕作地状況が復元された。

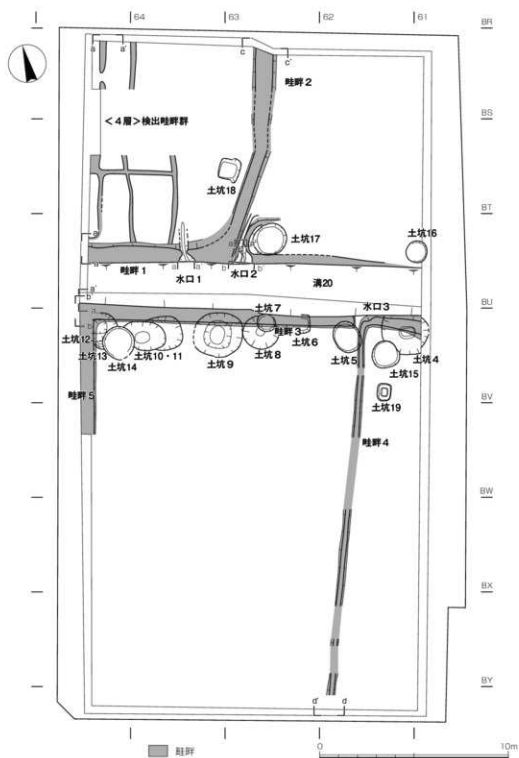


図67 近世・近代の遺構全体図 (縮尺1/200)

## a. 土坑

土坑は合計16基が調査された。検出面は、<5層>で8あるいは9基、<4層>で5あるいは6基、<3層>で2基である。土坑の配置は、調査区中央部を東西に走る溝20あるいは近代の畦畔脇に集中する(図67)。同溝の南脇を走る畦畔3の下部に並んで検出されたのは10基である(土坑4～13)。土坑間で重複する場合も認められ、数の多さからも集中度が高いことは明らかである。一方、畦畔と重複しない土坑は6基が確認される(土坑14～19)。溝の南側畦畔脇に3基、北側の畦畔脇に3基が、一定の距離を保って分散的に配され、土坑間に重複関係を持たない。また、円形の土坑14～17は東西・南北の畦畔が交差するコーナー部に位置する点で、他とは異なる配置を示す。

これら土坑を、形態の特徴で以下のように分類する。規模では、1m以上の規模を有するⅠ類(大形土坑)と1m以下のⅡ類(小形土坑)に、形態面では、平面形が円～楕円形で断面形がす鉢状～椀状を呈するa類、平面形が(長)方形で断面形が箱形～長台形を呈するb類、平面形が円形～短楕円形で断面形が箱形を呈するc類に大別する。さらに、a類では、平面形の長短によって円形に近いa①類と長楕円形をa②類に、b類では、底面の段の有無によって平坦な土坑をb①類、有段の土坑をb②類に、c類では、円形で底面が平坦なc①類と楕円形で底面が傾斜するc②類に、それぞれ細分した。各土坑の類型は、その位置や検出層とともに一覧表にまとめた(表6)。ただし、土坑13は残存部分が狭小で形状を確定できないため類型の設定を避けた。

各類型は、前述した土坑の配置とも強い関連性を示す。ここでは、複数の土坑を含むⅠa類とⅠc①類に注目してみよう。Ⅰa類(土坑4・8～12)の土坑は、その全てが東西溝の南脇畦畔の下部に位置しており、集中度の高い土坑群に含まれる。同類は、同畦畔下部の土坑群で類型化が可能な9基のうち6基を占め、その他の類型ではⅡ類が2基程度であることを考えると、同類が同位置の土坑群において主体的な群であると理解される。また、平面形が円形のⅠa①類(土坑4・8・9)は63ライン付近以東に、そして長楕円形の同②類(土坑10～12)は同以西にまとまりを示す。一方、畦畔脇に一定の間隔で配される土坑4基は全てⅠc①類(土坑14～17)である。以上のように、土坑形態とその配置には強い関連性が指摘される。

土坑の時期は、出土遺物から17～19世紀、そして検出面の時期などを考慮すると近世～近代(17～20世紀初頭)の時期幅が求められる。その中で、畦畔との位置関係や土坑間の重複関係あるいは検出層から、Ⅰa類が古く、Ⅰc類が後出すると理解される。畦畔との関連性の高さから、いずれも耕作に伴う遺構であることは明らかであり、その構造からⅠc類は野壺と評価されよう。Ⅰa類の機能を具体的に特定することは控えるが、前者から後者へと、ばらつきのある形態から定型化した形態へ、そして整然とした配置へと変化する点で、耕作に伴う土坑に形態面において何らかの両期が生じた可能性が考えられる。

Ⅱ類については、規模の点でⅠ類とは異なる機能が予想される。数も少なく齊一性に乏しい。

## 土坑4(図67～69、図版24・34、表6)

調査区東端部であるBU60・61区に位置する。検出レベルは標高1.28～1.32mで<4層>あるいは<5層>の可能性を残す。東西溝20の南側脇に残る近代の畦畔3の下部において検出された。その一部は調査区東端側に伸び

表6 近世・近代土坑の類型化一覧

規模	Ⅰ類: 1m以上(大形)			Ⅱ類: 1m以下(小形)			検出層	畦畔との重複関係	東西溝との位置関係
	形態	a類	b類	c類	a類	b①類			
平面形	円・楕円	方形	円・短楕円	円	方形・長方形				
断面形	すり鉢状 椀状	長方形	箱形	椀状	箱形	方形有段			
土坑4	1a①						(4or5層)	畦畔下	南脇
土坑5			1c②				(4層)	畦畔下	南脇
土坑6							(5層)	畦畔下	南脇
土坑7					Ⅱa		(5層)	畦畔下	南脇
土坑8	1a①						(5層)	畦畔下	南脇
土坑9	1a①						(5層)	畦畔下	南脇
土坑10	1a①						(5層)	畦畔下	南脇
土坑11	1a①						(5層)	畦畔下	南脇
土坑12	1a①						(5層)	畦畔下	南脇
土坑13			1c①				(4層)	無し	南脇
土坑14			1c①				(4層)	無し	南脇
土坑15			1c①				(3層)	無し	北脇
土坑16			1c①				(3層)	無し	北脇
土坑17			1c①				(3層)	無し	北脇
土坑18		1b①					(4層)	無し	南脇
土坑19						Ⅱb②	(4層)	無し	南脇
土坑13							(5層)	畦畔下	南脇

るほか、土坑15と溝20および近代の擾乱による破壊が全体に及ぶ。西側に並ぶ土坑5とは、上面で0.6～0.7mの間隔を保つ。

平面形は擾乱によって不明瞭であるが、円形に近い楕円形と判断される。長軸は東西方向を示す。上面規模は2.45m×2.15mが残存しており、2.6m×2.3m程度の大きさが復元される。底面は標高0.53mに位置し、0.7m×0.45mの楕円形を呈する。深さは0.78mを測る。掘り方断面はすり鉢状を呈し、底面に0.1m程度のくぼみが残る。以上の特徴からⅠa①類とした。

埋土を構成する各層は類似性が高い。上層（1・2層）と下層（3～5層）に大別すると、上層は黄灰褐色あるいはオリーブ灰色の色調を呈し、1層には灰色粘質土ブロックが含まれる。下層は青灰色の粘質土で、5層は暗色傾向を強める。4層は砂がブロック状に含む点で他と違いを見せる。

遺物は13号ポリ袋2/3袋程度が出土した。中世の土師器片のほかに、備前焼・瓦質土器・瓦、そして明の染付磁器などが含まれるが、備前焼以外は小～細片である。

本土坑の時期は、17世紀の遺物が含まれることから、同時期以降で、近世でもやや古い時期が予想される。

#### 土坑5（図67～69、図版24、表6）

BU61区に位置する。東西溝20の南側で畦畔3の下部に検出された。検出レベルは標高1.32～1.35mで<4層>に対応する。平面形は南北に軸を有す楕円形を呈し、1.68m×1.34mの規模を測る。底面は標高0.6～0.7mに位置しており、0.65～0.75mの深さが示すように傾斜面を形成する。そのため、掘り方断面は歪んだ箱形を示す。底面形は1.45m×1.2mの楕円形である。土層観察から、掘り方の南側に接して桶状の構造物の設置が予想される（図68-5・6層）。底板付近が水平でない点に疑問を残すが、桶を想定するならば、その規模は内径約1mが求められる。以上の特徴から、Ⅰc類の範疇に含めるが楕円形で底面が安定しない点などで、他の同類と区別してⅠc②類とした。

埋土は、以下の3群に大別される。1～4層が桶状構造物内の埋土に、5・6層は同個板痕跡に、そして7～9層は同構造物外の埋土に各々対応する。1～4層では鉄分の沈着による黄色化や褐色系の土をブロック状に含む点の特徴である。5・6層は個板痕跡として灰色の粘質土を呈すが、褐色系のブロック土を含むか否で分けられる。7～9層は灰色系の粘質土で、7層・9層には黄褐色土ブロックを含む。

遺物は13号ポリ袋1袋程度が出土したが、大半は小～細片である。中世土師器・須恵器片を含むが、備前焼のすり鉢などの近世陶器や染付碗のほか、瓦が10数点出土している。

本土坑の時期は、18世紀代の近世陶磁器を含むことから、同時期以降の近世の範疇でとらえておきたい。

#### 土坑6（図67・68、図版25、表6）

BU62区において、東西溝20の南側畦畔3の下部に位置する。調査時の側溝掘削で土坑の西半分を破壊される。検出レベルは標高1.23mで<5層>に対応する。西側の土坑8とは約1mの間隔を有す。

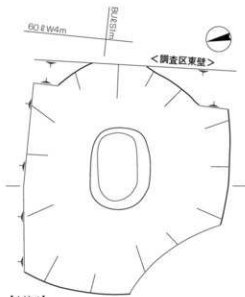
残存状況から、平面形は方形あるいは長方形が予想される。残存規模は、上面で1m×0.5m（残存値）、底面では0.65m×0.4m（残存値）を測る。底面は標高0.86mに位置し、深さは0.36mが残る。掘り方断面形は、底面が平坦な箱形を示す。以上の特徴から本土坑はⅡb①類と判断される。

埋土については詳細な情報に欠けるが、底面に薄く堆積する3層は砂を多く含む層であり、1・2層は不均質な埋土の可能性が考えられる。

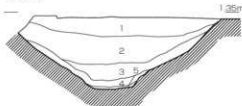
遺物は中世土師器の小～細片が20片程度出土したのみで、本土坑の時期を示すものは認められない。本土坑の時期は、周辺の状況から近世の範囲で捉えておきたい。

#### 土坑7（図67～69、図版25・35、表6）

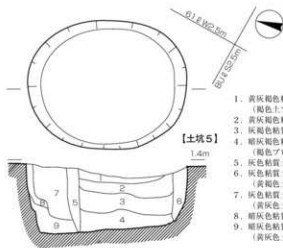
調査区中央部、BU62区に位置する。東西溝20の南側の畦畔3の下部で検出された。土坑8の上部に重複する。検出レベルは標高1.05～1.15mで<5層>に対応する。土坑6と同一面である。



【土坑4】

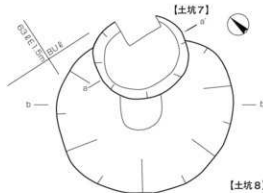


1. 黄灰色砂質土 (灰色粘質土ブロック)
2. オリーブ灰色粘質土
3. 青灰色粘質土
4. 青灰色粘質土 (青灰色砂ブロック; Fe)
5. 暗青灰色粘質土



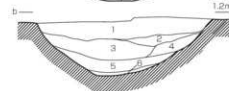
【土坑5】

1. 黄灰色粘質土 (褐色土ブロック多)
2. 黄灰色粘質土
3. 灰褐色粘質土 (褐色ブロック多)
4. 暗灰色粘質土 (褐色ブロック多)
5. 灰色粘質土
6. 灰色粘質土 (黄褐色土ブロック多)
7. 灰色粘質土 (黄褐色土ブロック多)
8. 暗灰色粘質土
9. 暗灰色粘質土 (黄褐色土ブロック)

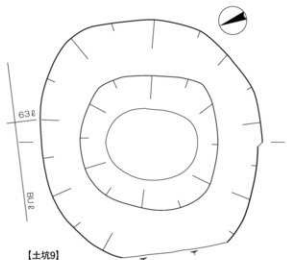


【土坑7】

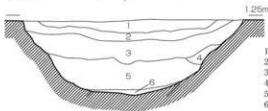
【土坑8】



1. 黄灰色砂質土 (砂ブロック多)
2. 暗黄灰色砂質土
3. 緑灰色粘質土
4. 青灰色粘質土 (粘土ブロック)
5. 暗青灰色粘質土
6. 粘土混暗青灰色粗砂



【土坑9】



【土坑7】

1. 暗青緑灰色砂質土 (Fe)
2. 灰色砂質土 (粗砂多)
3. 暗青灰色砂 (粗砂、小礫)
4. 暗青緑灰色粘質土 (砂ブロック多)
5. 青緑灰色粘質土
6. 暗青灰色粘質土 (Fe・砂ブロック多)
7. 砂混暗青灰色砂質土
8. 暗灰色粘土 (粗砂)
9. 暗青緑灰色粘質土 (粗砂、小礫)

【土坑6】

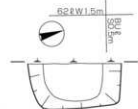


図68 土坑4～9 (縮尺1/40)

平面形は1m×0.92mを測る。厳密には楕円形であるが円形の範疇で理解することも可能であろう。底面は標高0.8mに位置し、深さは0.35mを測る。その規模は0.83m×0.66mである。掘り方断面形は、底面中央部が窪んでいる点を評価すると、不整形ではあるが碗状としておきたい。以上の特徴からⅡa類とした。

埋土は全体に青灰色系の色調を示すが、包含物や土質の状態から上層（1・2層）と下層である3層とに大別される。前者は微砂を多く含む砂質土であるのに対して、後者は粗砂や小礫を含む砂層を呈し、土坑中央の窪み部を中心に堆積する。上層を埋め戻し土、そして下層を使用時の堆積土と考えることができるかもしれない。

遺物は中世土師器などの小～細片が20片程度のほか、近世陶磁器片とつり鐘形風鈴の土製品（図69-T10）が出土した。本土坑の時期は近世の範疇で考えられる。

#### 土坑8（図67・68、図版24、表6）

調査区中央部、BU62区に位置する。東西溝20の南脇畔3の下部に並ぶ土坑群を構成する。本土坑の北半部には土坑7が重複して土坑上部を破壊している。検出レベルは標高1.1～1.15mで<5層>に対応する。

平面形は円形を呈し、上面は直径約1.85m、底面は直径約0.5mが求められる。標高0.52mに位置する底面までの深さは0.63mを測る。掘り方断面形はすり鉢状を呈する。

埋土は、全体的に均質性を欠く特徴を有し類似性が高いが、上層（1・2層）の砂質土から下層（3～5層）の粘土層へと粘性を強める。薄い堆積である最下層（6層）は粗砂層を呈し、他層と違いを見せる。

出土遺物は、13号ポリ袋1/9袋程度で、小～細片50片程度が含まれる。中世の土師器や須恵器片・瓦器片などのほかに近世陶磁器片が数点確認されることから、本土坑の時期は近世と判断される。

#### 土坑9（図67～69、図版24、表6）

BU62・63区に位置する。検出面は標高1.2mで<5層>に対応する。東西溝20の南脇畔3の下部に位置する土坑群を構成する。東側では土坑8と接し、西側では土坑11と0.5mに満たない間隔で近接する。西端部は側溝によって破壊される。

平面形は2.5m×2.35mを測る円形～短い楕円形を呈する。底面は標高0.55m付近で1m×0.75mの楕円形を示し、中央部は緩やかにくぼむ。最深部は標高0.4mで深さは0.8mを測る。掘り方断面形は碗状である。以上の点から本土坑はⅠa①類とした。

埋土では、全体に砂を含む特徴が指摘される。上層（1～4層）は青灰色を基調とし、各層は砂ブロックの包含量の差で分けられる。土坑放棄後の埋め土あるいは流入土の可能性が高い。下層（5～6層）は、上層から暗色化を強めると同時に粘性を強める。微砂を含むがブロック状ではなく非常に硬くしまった堆積土を呈する。暗灰色粘質土を示す6層は5層と類似するが礫の包含率が高く、炭化物を多く含む点に違いを認められる。使用段階の堆積層と理解される。

出土遺物は13号ポリ袋1/4袋弱の量が確認されるが、いずれも小～細片である。中世土師器・須恵器などのほかに、近世の備前焼の陶板（図69-T9）や染付碗（同-8・9）などが含まれる。18世紀代の遺物を含むことから、本土坑の時期は同時期以降の近世の範疇で考えておきたい。

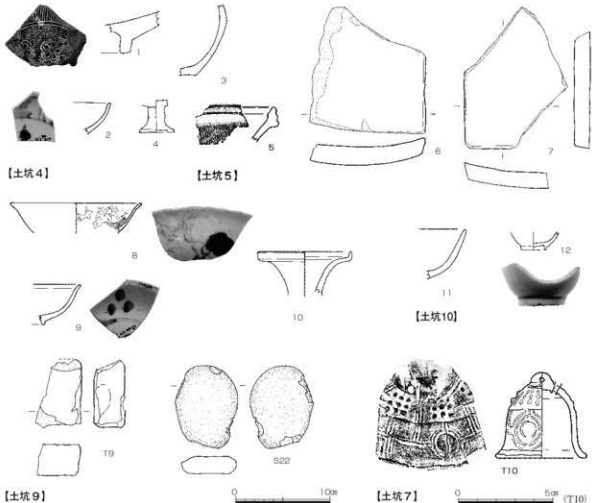
#### 土坑10（図67・69・70、図版25、表6）

調査区中央部西半にあたるBU63～64区に位置する。東西溝20の南側脇に沿って並ぶ近世土坑群を構成する。調査時には、後述する土坑11と同一の流入土で上面が覆われていたため、同土坑と分離されずに調査が進行したが、その後、本土坑が同土坑の上部に重複する状態を確認した。また、本土坑西端部は土坑14と重複しており、同土坑によって破壊される。検出面は標高1.2～1.3mで<5層>に対応する。

平面形は東西に軸をもつ楕円形を呈し、2.3m×1.5mの規模を有す。底面は標高0.55mに位置し、0.8m×0.6mの楕円形と理解される。深さは0.75mを測る。掘り方断面形は、底部中央部に窪みが認められ、全体的には緩やかな碗状と理解される。以上の特徴からⅠa②類に位置づけた。

埋土は、最上層（1層）、上層（2～3層）、下層（4～5層）に大別される。最上層の1層は土坑11の1層と分離が困難な状態にあることから、両土坑が廃棄された後の窪みに堆積した流入土と考えられる。上層は灰色系の色調を有する土層群で砂のブロックが混在する。一方、下層は、砂を多く含む炭化物も認められる4層と粗砂を含む砂層である5層が示すように、上層とはやや異なり、使用段階に堆積した可能性が考えられる。

遺物は13号ボリ袋1/4袋弱の量が出土した。中世土師器・瓦質土器・瓦・国産陶磁器片を含む。小～細片が



番号	遺構番号	種類・器種	度量 (cm)			計測面の 残存状況	形態・手法他	胎土		
			口径	口径	器高			内	外	
1	土坑4	肥前陶器・甕	-	-	-	-	(内)象嵌・鼠子、胎土目、顔色高台	陶砂	灰胎、釉・灰・乳白	
2	土坑4	磁器・碗	-	-	-	-	全輪	陶砂	灰、釉・灰青	
3	土坑4	瀬戸焼・飯椀	-	-	-	-	ナデ(内外)鼠子、(外)自然輪	陶砂	灰胎	
4	土坑4	白磁・仏指輪	-	3.8	-	1/2	全輪、器付のみ輪測定	陶砂	灰白、釉・透明	
5	土坑5	備前焼・下り鉢	-	-	-	-	横ナデ、スリ目1組	陶砂	灰胎	
8	土坑9	磁器・碗	(14.4)	-	-	-	染付・全輪、胎2匹の器付し模様	精磁	灰白、釉・透明	
9	土坑9	磁器・碗	-	-	-	-	染付・全輪、器付のみ輪測定	精磁	灰白、釉・青白	
10	土坑9	肥前青磁・甕	(9.8)	-	-	-	全輪	精磁	灰白、釉・緑灰	
11	土坑10	肥前陶器・碗	-	-	-	-	全輪、貫入、内野山系	陶砂	灰胎、釉・透明	
12	土坑10	肥前陶器・碗	-	2.6	-	1/2	染付・全輪、器付のみ輪測定	陶砂	灰白、釉・透明	
番号	遺構番号	種類・器種	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	重量・g	残存	形態・手法他	胎土	色調
6	土坑5	瓦質・平瓦	12.8	12.2	3.3	-	ナデ、面取り	陶砂	灰	
7	土坑5	瓦質・平瓦	14.9	11.0	1.8	-	ナデ、面取り	陶砂	灰	
番号	遺構番号	種類	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	重量・g	残存	形態・手法他	胎土	色調
T9	土坑9	瀬戸焼・陶板	6.9	4.8	3.3	123.5	-	ナデ	陶砂	陶
T10	土坑9	つり湯煎鉢跡	4.5	4.7	6.3	17.8	1/2	器付しによる成型・施文	陶砂	滑溜灰
番号	遺構番号	種類	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	重量・g	石目	石目	特徴	
S22	土坑9	石鏡	8.6	6.6	1.7	167	減成石	鏡面に2ヶ所の打ち欠き		

図9 土坑4～10出土遺物（縮尺1/4・1/2）

主体であり、本土坑の時期の詳細な時期は不明であるが、近世の範疇で捉えられよう。

#### 土坑11 (図67・70、図版25、表6)

調査区中央西寄りのBU63区に位置する。東西溝20の脇において畦畔3の下部に形成される土坑群の一つである。土坑10によって西半部が破壊される。土坑9とは東西に0.5mに満たない間隔で近接する。検出レベルは土坑10と同じく標高1.2~1.3mで<5層>に対応する。

平面形は、残存状況から東西に軸をもつ楕円形が想定される。短辺と理解される南北幅は1.8mを測る。一方、長辺が想定される東西幅は、西半部の破壊によって1.7mを残すのみであるが、掘り方ラインを復元すると推定規模は2.1~2.3mとなる。底面は標高0.48mに位置し、深さは0.8mを測る。その規模は0.63m×0.5mである。掘り方断面形は緩やかな椀状と理解される。以上の特徴は土坑10と類似しており、土坑としての親縁性をうかがわせる。以上の特徴から1a②類に位置づけた。

埋土の内、1層については前述したように土坑10と一連の流入土と判断した。2層以下は灰色系の色調を基調とする。上層を構成する3・4層には大ブロック状の砂が、下層の5層では砂のほかには有機物を含む。こうした埋土の特徴も土坑10と共通する。

遺物は13号袋り1/4袋程度の量が出土した。その大半が小~細片である。中世土師器のほかには瓦質土器や瓦、そして国産陶磁器片を含む。こうした状態は土坑10と同様であり、本土坑の時期は近世と考えられる。

#### 土坑12 (図67・70、図版25、表6)

調査区中央西端部のBU64区において、調査区内から調査区西壁にかけて検出された。東西溝20の南脇に沿って

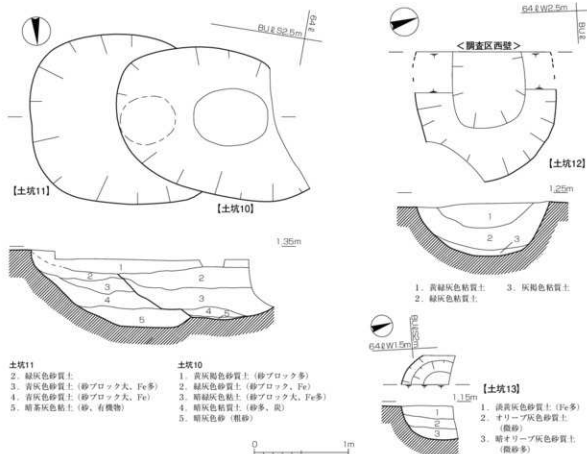


図70 土坑10~13 (縮尺1/40)



並び、畦畔3の下部に位置する土坑群を構成する。重複する土坑14によって南東部が破壊されるため、東側に位置する土坑10との関係を直接確認することはできないが、上面において接するあるいは一部重複するほど接近して形成されたことは十分に予想される。

検出レベルは標高1.15～1.2mで<5層>に対応する。平面形は残存状況から楕円形が想定される。上面規模は短辺で1.5mを測る。長辺が想定される東西方向は1.4mを残すが、本来は2mを超える規模が予想される。標高0.62mに位置する底面規模は短辺で0.7m、長辺の残存値は0.8mであり、楕円形の形態と判断される。深さは0.57mである。掘り方断面形は底面形状から碗状と理解される。以上の特徴からI a②類に位置づけた。

埋土の大半を占める1・2層は灰色系の粘質土で、いずれも均質性を欠く点の特徴である。一方、最下部に薄く堆積する3層は、褐色が強い色調で際立つ包含物は報告されていない。使用段階の堆積層の可能性が考えられる。

出土遺物は小～細片の中世土師器片が10片程度である。そのため、遺物から本土坑の時期を推し量ることはできないが、周辺遺構の位置関係や検出層位から、近世でも古い段階の時期が求められる。

#### 土坑13 (図67・70、表6)

BU64区に位置し、調査区中央西端部で東西溝20の南側に並ぶ土坑群を構成する。土坑12及び土坑14によって大半が破壊されており、残存部は南西部の一部に限定される。

検出レベルは標高1.1mで<5層>に対応する。確認された範囲は、上面で0.6m×0.3m、底面では標高0.75mの位置で0.37m×0.13mにとどまる。深さは0.35mが残るのみで、現状では掘り方断面形は碗状を呈する。こうした残存部の狭小さから規模の確定は困難であり、平面形についても、円・楕円形・隅丸方形のいずれかの可能性を考えるにとどまる。

埋土は灰色あるいはオリブ灰色を基調とする砂質土で構成される。1層は鉄分の沈着で黄色を帯びる。2・3層には微砂が多く含まれており、埋め戻し土と理解される。

遺物は中世土師器や備前焼の小～細片が約5片出土したのみである。備前焼の堯片には窯印が確認された。本土坑の時期は、土坑12との関係などから近世土坑の中でやや古い時期が考えられる。

#### 土坑14 (図67・71・73、図版26、表6)

BU63～64区に検出された。64ラインが本土坑の東端付近を走る。東西溝20の南脇に形成された畦畔3と南北方向の畦畔5が交わるコーナー部分に形成される。畦畔と重複しない点で、土坑4～13とは明瞭な違いをみせる。両畦畔との間隔は0.5～0.3mである。検出レベルは標高1.25mを測り<4層>に対応する。ただし、近代畦畔との位置関係などから、本来は<3層>の耕作に対応する土坑の可能性も考えられる。

平面形は円形を呈し、上面が直径1.67m、底面は1.35m×1.45mを測る。標高0.8mに位置する底面までの深さは0.5mで、掘り方は箱形の断面形を示す。また、ほぼ中央部に桶が設置されていることが、以下の土層観察あるいは構成材(籾)の残存から明らかとなった。以上の特徴からI c①類とした。

埋土は、桶内埋土(1～3層)、桶外埋土(5層)、そして桶痕跡土(4・6層)に大別される。桶内埋土の上層(1・2層)は灰褐色系の砂質土で、灰色あるいは褐色系の砂をブロック状に含み、均一性を欠く点の特徴である。廃棄後の埋土と理解される。下層にあたる3層は上層の色調が暗色化を強め、比較的均質な点で上層とは区別される。また、同層上面には白色砂が薄く堆積しており、上層形成直前つまり本土坑廃棄直前の状態を示す。よって、下層は使用時の堆積土の可能性が高い。4層と6層は暗灰色粘質土で締まりの弱い軟質土で、木質を含む点で共通する。こうした特徴や堆積状態は他層とは明らかに異なる。桶材痕跡あるいはそれを含む土層と評価され、6層が桶板痕跡で4層は底板痕跡に対応すると考えられる。5層は砂質が強く締まりのよい堆積をみせる。6層の周囲に堆積している点から、桶が土坑中央部に設置された際の裏込め土と理解される。

5・6層の状態から、桶の外径は底面1.1m・上端約1.15m、底板径は1m強、構成材の厚さは0.02m程度が復元される。また、籾材の一部が、標高0.95m付近で6層の外周部で確認された。幅3cm前後で竹材を編み込んだ

状態が復元され、調査時には2段の竈の存在が確認されている。

遺物は13号ポリ袋1袋程度の量が出土した。小～細片の中世土師器片のほかに、瓦や国産陶磁器を含む。平瓦12片のほか国産陶磁器片も多い点で前述した土坑4～13とは異なる。本土坑の時期は、近世後半～近代の時期が想定される。

#### 土坑15 (図67・71・73、図版26、表6)

調査区中央部東端部にあたるBU61区に位置する。東西溝20の南脇に形成された畦畔3と南北方向の畦畔4が交わるコーナー部分に形成される。土坑4の南東部に重複するが、畦畔とは東西・南北両畦畔と0.5～0.3mの間隔を保つ。こうした周辺遺構との位置関係は土坑14と共通する。同土坑との距離は中心間で約14mを測る。検出レベルは標高1.25mを測り<4層>に対応するが、近世土坑との重複や畦畔との位置関係などから、土坑14と同様に<3層>の耕作に対応する土坑と判断される。

平面形は円形である。その規模は上面において直径1.45m、底面では1.2m～1.25mを測る。底面は標高0.8mに位置し、深さは0.5mを測る。掘り方断面は箱形を呈す。また、ほぼ中央部に桶が設置されていたことが、以下の土層観察あるいは構成材の残存から想定される。以上の特徴は土坑14との共通性の高さを示しており、I c ①類とした。

埋土は、上層(1・2層)・桶内埋土(3・4層)・桶痕跡および桶外埋め土(5・6層)に大別される。上層は灰褐色系の砂質土で、1層には灰色砂質土がブロック状に含まれており、本土坑廃棄後の流入土と判断される。3・4層は暗灰色粘質土で共通するが、4層に向けて軟質な状態が強まる点で分層される。両層は、桶痕跡との関係が予想される5層と6層に囲まれた内側の堆積層を構成しており、本土坑の使用段階から埋没段階までの堆積層に対応すると理解される。5層は4層と同様の暗灰色粘質土であるが、土の締まり具合が強い点で違いを見せるほか、上面には桶の底板と考えられる板材が残存する(図71)。底板材の痕跡と理解されるが、5層の厚さが0.1mを測ることから、底板だけでなく底部堆積土を含むと考えられる。土坑の周縁に沿って立ちあがる6層と4層との境には木質が確認されており、桶の側板材痕跡と理解される。その厚さは東側で約0.08m、西側で0.18mを測る。本層についても、桶側板材痕跡と裏込め土を含む状態と判断される。特に西側に裏込め土部分が多いことから、その設置位置は土坑内で東側に偏っていた可能性が指摘される。

桶の規模は、外径で1m前後、底板径は0.93m程度が復元される。また、底板材上面が土坑底面から約0.1m上に位置することから、側板に挟まれた底板は土坑底面から数cm浮いた状態にあったと考えられる。

遺物は13号ポリ袋2/3袋の量が出土した。小～細片の中世土師器を含むが、瓦・国産陶磁器が主体をなし、備前焼も含まれる。土坑14と共通した様相を呈しており、本土坑の時期は近世後半～近代と考えられる。

#### 土坑16 (図67・71・73、図版26・27、表6)

調査区中央部東端部にあたるBT60区～61区に位置する。61ラインが本土坑のほぼ中央部を走る。東西溝20の北側脇に形成された畦畔1に近接するが重複関係は有さない。本土坑と同類型に含まれる土坑15および同17との位置関係は、前者とは南側の東西溝と畦畔を挟んで約5.5m、後者とは約7.5mの中心間距離を保ち、一定の間隔を有した分布を示す。ただし、同類型に属する3基の土坑が、全て畦畔のコーナー部に位置するのに対して、本土坑では対応すべき南北畦畔が確認できない。本来ならば本土坑の西側に小規模な畦畔の存在が予想されるが、同対象位置における擾乱などの破壊によって畦畔が消失した可能性が考えられる。

検出面は標高1.4～1.48mを測り<3層>に対応する。平面形は円形を呈し、上面で直径1.15mが確認される。底面では、調査時に下部遺構(土坑3)との重複が影響して底面西半分を掘りぬく状態となったため、東西幅の正確な数値は把握できないが、南北幅の数値から直径1m程度が復元される。標高0.81mに位置する底面までの深さは0.65mを測り、掘り方断面形は箱形を呈す。以上の特徴からI c ①類とした。

埋土は最上層(1層)、上層(2～4層)、下層(5層)、そして桶痕跡連土層(6・7層)に大別される。1層

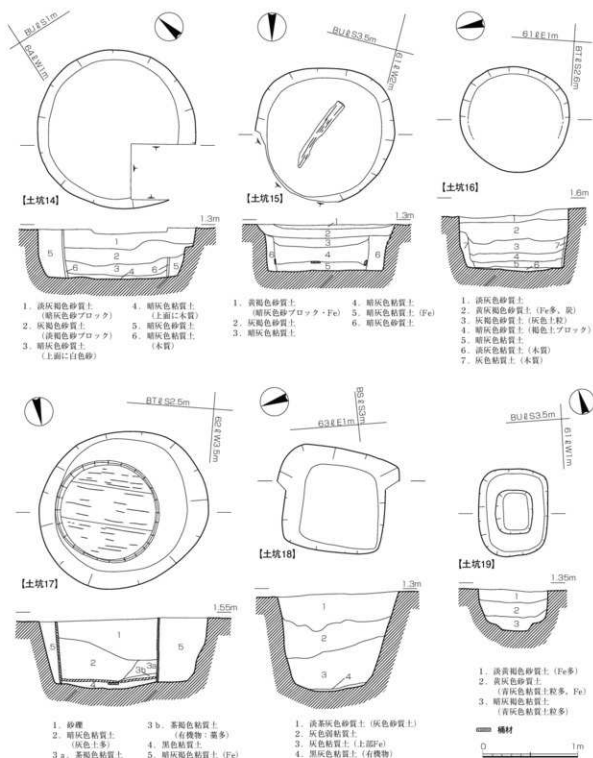


図71 土坑14～19 (縮尺1/40)

は<3層>由来の流入土である。上層は褐色～灰色の砂質土で均一性に欠ける土層群で、下方に向けて灰色を帯びて分層される。廃棄時の埋土と理解される。5～7層は灰色の粘質土である。5層は4層と類似するが均質面で違いを示す。廃棄前あるいは直後の堆積土であろう。6層と7層は土坑の側面と底面に薄く堆積する。両層と

もに、5層と4層との層界面に木質の残存が確認されることから、桶の底板あるいは側板の材に由来する層と判断される。その厚さは、0.02~0.03mあるいは0.08mを測り、桶の裏込め土を多少含む可能性を残すが、土坑15あるいは同16と比較しても裏込め範囲は極めて狭い。桶は土坑にほとんど接して置かれた状態といえよう。桶の大きさは直径1m程度、板材の厚さは0.02m程度が復元される。

遺物は13号ポリ袋1/2袋の量が出土した。備前焼・瓦・国産陶磁器を含む。18世紀後半~19世紀初頭の遺物が確認されるが、検出層位あるいは周辺遺構との関係から本土坑の時期は近代と判断される。

#### 土坑17 (図67・71~73、図版27・36、表6)

調査区中央部でBT62区に位置する。土坑内に桶が設置された状態で検出された。東西溝20の北側脇に形成される近代の畦畔1と同畦畔から北側へ向かう南北畦畔2のコーナー部に配置されている。両畦畔との距離は西側が約0.7m、南側が約0.3mを測る。近接する土坑は確認されない。東側に約7.5m離れて土坑16が、北西側に約4.5m離れて土坑18が位置するのみであり、一定の間隔で配置された土坑といえよう。西側に位置する畦畔2との間には、後述する水口2を伴う流路が確認される。

検出レベルは標高1.45~1.5mで、造成土除去後の<3層>上面で検出された。本土坑が形成される畦畔コーナー部には、畦畔1・2から連続的につながる方形の空間が標高1.4~1.5mの高まりとして確認される。<3層>が構成する田面との高低差は0.1~0.2mを測る。同空間の北端ラインは本土坑の北側0.5m付近に位置し、南北幅は2m、東西幅は推定2m+aの広がりを見せる。本土坑は、その空間の中心に設置されている。こうした状況から、本土坑と同空間は作業設備と作業空間の関係にあると考えられる。他の土坑についても、本来はこうした作業空間を有する可能性が想定される。

本土坑の平面形は、上面では1.8m×1.65mの楕円形、底面では直径1.4mの円形を呈する。底面は標高0.8mで平坦面を形成するが、桶の設置部分では底面がわずかに窪んでおり、そのレベルは同0.75mに下がる。そのため、深さは平面部で0.7m、窪み部で0.75mとなる。掘り方の断面形は多少の傾斜を有す箱形である。桶は掘り方内の東寄りに設置されている。以上の特徴からIc①類とした。

埋土は、土坑廃棄後に最終的に桶内を埋めた1層、桶内部の埋土である2~3層、桶外の埋土である4・5層に大別される。1層は砂礫層で、大正期の土地造成に伴う<1層>に対応する。よって、本土坑は本調査で最も新しい段階の遺構の一つであり、同一機能を有する土坑の最終形態といえる。桶内の2・3層には明らかな違いが指摘される。2層は暗灰色粘質土と<2層>由来の灰色粘質土が混在しており、使用最終段階における攪拌状態を予想させる。一方、茶褐色粘質土の3層は他層と明らかに異なり、桶底板上面では蕨状の有機物が厚く堆積して3層を形成する。土坑使用時の堆積物層の可能性が高い。桶外の埋土では、4層は黒色を、5層は暗灰褐色を呈しており、色調面での違いを示す。前者は桶下部の堆積土であり、同構造物の影響を強く受けて変色したものと考えられる。5層は桶設置に伴う裏込め土にあたる。

土坑内の桶は完全な状態で出土した。底板は直径1mの円形で、その縁に側板ととも25枚の側板がぐるりと配され、竹材を縄状に編み込んだ2段の簾によって固定される。外径は、下面で直径1.06m、上面では同1.1m、そして高さは約0.7mを測る。内側の深さは、中央部では桶底のたわみで0.65mとなるが、それ以外では0.62mを測る。底板は側板下面から0.04~0.05m上で上げ底を形成する。桶の容量は1.88m<sup>3</sup>を測る。これらの材の厚さは1.5~2cmである。底板は円形板が3分割されたものであり、それぞれ3箇所を木釘で接合している。さらに、底面裏面中央部には、底板の木目に直交する方向に幅11cmの板材が固定され、3枚の底板を繋ぎ留めた痕跡が小孔で残る。側板の幅は12~15cmで長さは約70cmを残す。数cmの幅に割いた竹材で編みこまれた簾は、桶の高さをほぼ均等に分割した位置に、20cm間隔で2段が配される。簾の幅は約5cmを測る。

遺物は13号ポリ袋1袋の量が出土した。小~細片の中世土器のほかに、瓦・国産陶磁器が含まれる。本土坑の廃棄時期は近代、大正10年頃である。

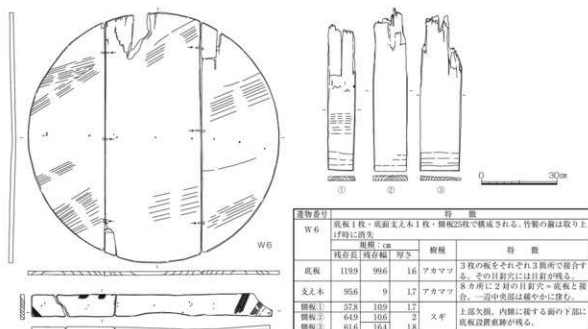


図72 土坑17出土遺物—木器— (縮尺1/15)

## 土坑18 (図67・71・73、図版27・34、表6)

調査区中央北よりのBS62区で検出された。その位置は東西溝20の北側で東西畦畔1と南北畦畔2のコーナー部から約3m北にあたる。畦畔2とは0.2～0.3mの間隔で、その西側に近接する。他の土坑とは離れた位置であり、最も近い土坑17とは畦畔2を挟んで南東へ4.5mの距離を有す。検出面は標高1.2～1.25mを測り<4層>に対応するが、畦畔2との位置関係などから、本来は<3層>に伴う可能性も考えられる。

平面形やその規模は、西半部の2/3程度が破壊を受けて不明な点を残すが、残存する東側上面で一辺1.25mが確認されること、そして底面は0.8×0.85mのほぼ正方形を呈することから、上面規模は1.25m程度の正方形の平面形が復元される。底面は標高0.2mに位置し、深さは1.05mを測る。上面からは急峻な角度で掘り込まれており、断面形は長方形を帯びた逆台形としておきたい。こうした形態は他の土坑では確認されていない。以上の特徴からI b①類とした。

埋土の主体を構成する1～3層は類似性が高い。全体的に均質性を欠き、下方に向けて粘性を高める。底面に堆積する4層は非常に薄い堆積層で、有機物を含む点で上部の堆積層とは異なる。使用段階の堆積の可能性が高い。それ以外は土坑廃棄後の埋め戻し土と理解される。

出土遺物には、完形の備前焼の灯明皿1点を含む。それ以外は8片の小～細片が出土したのみで国産陶磁器を含む。本土坑の時期は、近世末～近代と考えられる。

## 土坑19 (図67・71・73、図版27・34、表6)

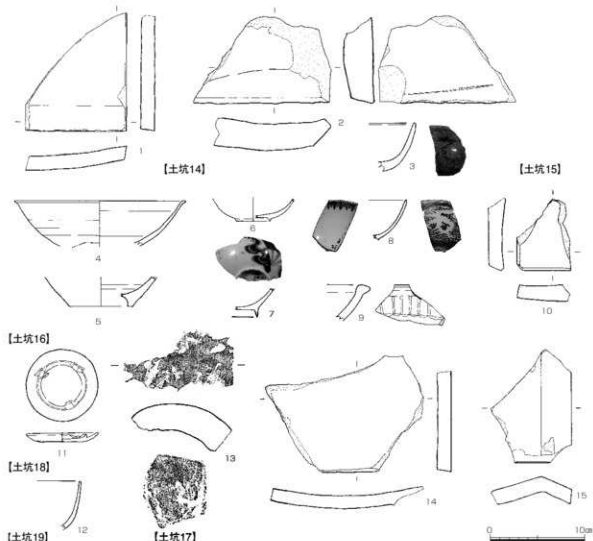
調査区中央部東側のBU61区に位置する。東西溝20の南脇を走る畦畔3から南へ約2.7m、そして同畦畔から南に延びる南北畦畔4から東へ約0.7mの間隔を有す。いずれの畦畔とも重複しない。北側に位置する土坑15とは約1mの間隔があり、溝20の南側土坑群の並びから南に離れて形成される。こうした畦畔や他の土坑との位置関係は、本土坑と同じく方形の土坑である土坑18と共通する。

検出レベルは標高約1.3mで<4層>に対応する。平面形は隅丸長方形を呈し、上面規模は0.92×0.75mを測る。掘り方の断面形は方形で2段掘り形態をなす。1段目の底面は標高約0.9mに位置し、深さは0.45mである。そして2段目の底面レベルは標高0.85mで、1段目から深さ約0.05mが掘り込まれ、全体の深さは0.5mとなる。最下

面は0.38m×0.27mの隅丸長方形を呈する。以上の特徴を踏まえてⅡb②類とした。

埋土は、全体に際立つ違いは認めがたい。1層は鉄分の沈着が特徴的である。2層と3層は均質性を欠く堆積土であり、青灰色の粘質土粒が多く含まれる点に共通性が認められる。埋め戻し土と理解される。

遺物は国産陶磁器の破の欠片が1点出土したのみである。本土坑の時期は、同遺物の時期や検出面から近世末～近代の範囲と考えられる。



番号	出土遺物	器種	法量 (cm)			片割部の 残存状況	形態・手法の特徴	胎土	色調
			口径	底径	器高				
3	土坑15	肥前陶器・碗	-	-	-	全輪、陶胎厚付、木原系	磁砂	灰白、輪：灰緑灰	
4	土坑16	吉野・碗	18.0	-	-	全輪、(内)は茶の沈着	陶質	灰白、輪：赤緑灰	
5	土坑16	吉野・碗	-	6.8	-	(内)ナデ、(外)厚輪、唇付輪漉ぎ	磁砂	灰白、輪：灰白	
6	土坑16	肥前陶器・碗	-	3.6	-	胎付、全輪、唇付輪漉ぎ	磁砂	白、輪：透明	
7	土坑16	肥前陶器・碗	-	-	-	胎付、全輪、唇付輪漉ぎ、高台付	磁砂	灰白、輪：淡青	
8	土坑16	吉野・碗	-	-	-	胎付、全輪、高代	磁砂	灰白、輪：透明	
9	土坑16	肥前陶器・浅子鉢	-	-	-	全輪、(内)厚輪唇漉ぎ	磁砂	胎土、輪：茶緑灰・乳白・黄	
11	土坑18	肥前焼・打明眼	7.6	5.1	1.0	(底外)赤キリ焼ケズリ、下眼、葉	磁砂	茶褐色	
12	土坑19	陶器・碗	-	-	-	(外)焼ケズリ、全輪、内野山流	磁砂	淡青調	
番号	出土遺物	種類・器種	残存長:cm	残存幅:cm	厚:cm	形態・手法特徴	胎土	色調	
1	土坑14	瓦・平瓦	12.5	11.0	1.5	ナデ	磁砂	灰白	
2	土坑14	瓦・平瓦	9.2	14.6	2.8	ナデ、前取り、沈積	磁砂	灰	
10	土坑16	瓦・平瓦	7.7	5.7	1.7	ナデ、前取り	磁砂	灰	
13	土坑17	明瓦・瓦瓦	6.0	10.5	2.8	(内面)ナデ(内面)布目肌	磁砂	胎灰	
14	土坑17	瓦・平瓦	12.3	16.7	1.5	ナデ、前取り	磁砂	灰白	
15	土坑17	瓦・平瓦	14.0	8.3	2.0	ナデ、前取り	磁砂	胎灰	

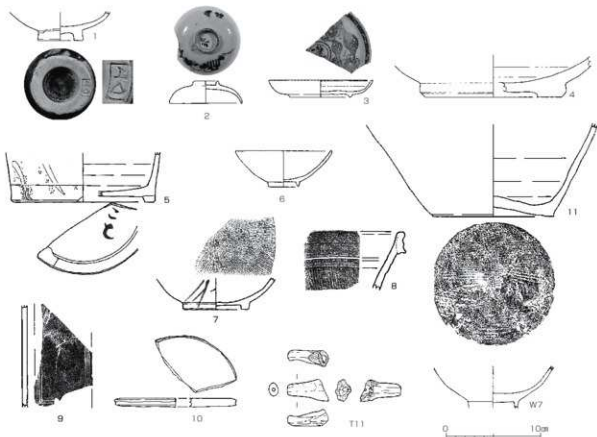
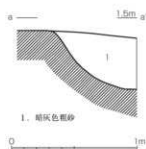
図73 土坑14～19出土遺物(縮尺1/4)

## b. 溝

## 溝20 (図67・73・74、図版34～36)

調査区中央部を東西方向に走る溝で、BT-BU60～62区・BT63～64区で検出された。溝19の上部に重複しており、同溝が本溝に連続的に踏襲された状態を示す。溝の北半は医科大学建設後の掘削で破壊されており、幅や軸方向など正確な情報は乏しい。

検出レベルは標高1.4～1.6mで<3層>に対応する。上面の幅は1m程度が残存するのみであるが、北側に残る東西畦畔1との位置関係から2m前後の規模が予想される。底面レベルは、調査区西壁付近で標高0.95mが確認される。深さは0.5



番号	種類・器種	法量 (cm)			遺構部の 残存状況	形態・手法類	胎土	色調・内/外	
		口径	底径	器高					
1	陶器・碗	-	4.7	-	1/1	〔高台〕内：鉄輪・管付蓋軸、管口「上凸」	陶磁	赤灰、輪：黒濁	
2	磁器・碗蓋	7.6	-	-	3/4	新地磁器製。全輪・管口のふち割き	陶磁	灰白、輪：透明	
3	磁器・皿	(11.0)	(7.3)	1.8	-	肥前磁器。銅胎銀染付。全輪・管付は軸通空	陶磁	灰白、輪：透明	
4	陶器・鉢	-	14.4	-	1/5	全輪、張り出し高台	陶磁	赤灰、輪：赤緑灰	
5	陶器・鉢	-	15.2	-	1/4	全輪・底部溝軸、高台表面滑「こと」	陶磁	灰赤胎、輪：緑灰	
6	備前焼・茶碗	10.1	3.2	3.8	3/4-1/1	重燒煎。高台内（備前陶）笠印	陶磁	赤胎	
7	備前焼・すり鉢	-	7.0	-	1/2	〔内〕すり目、火標、内外面化粧土	陶磁	胎灰茶	
8	備前系・すり鉢	-	-	-	-	糠ナゲ。〔内〕茶の茶編・1重10本のすり目	陶磁	赤	
9	備前焼・六角器鉢	-	-	-	-	〔外〕茶の茶編で区画。中央に植物文様	陶磁	赤	
10	備前焼・土や蓋	12.6	-	-	1/4	ナメ、自然輪	陶磁	赤胎	
11	丹波焼・壺	-	12.85	-	1/1	〔内〕鉄輪、〔底〕板目煎、砂目2ヶ所	陶磁	灰、胎：赤緑灰	
番号	種類	残存長：cm	残存幅：cm	厚：cm	重量：g	残存	形態・手法類	胎土	色調
T11	土塊・土片	1.7	4.3	1.4	9.6	1.2	ナメ・底の吹き口部。中央	陶磁	黄白
番号	器種名	残存長：cm	残存幅：cm	厚さ：cm	規格	本取り	特徴		
W7	土塊	-	-	-	ナメキ	芯持ち瓦本	〔内〕外：平置仕上げ・赤緑塗布。高台内のみ黒塗		

図74 溝20断面・出土遺物 (縮尺1/30・1/4)

m前後が残る。埋土は暗灰色粗砂で埋まるが近代のコンクリート片も含まれる。土坑17などと同じ最終段階の遺構に属する。

遺物はコンテナ2箱程度が出土した。備前焼・関西系のすり鉢、そして多くの国産陶磁器類・瓦等のほかに、木製の漆椀・鳥形土笛が含まれる。近世～近代の遺物である。本溝の廃棄時期は医科大学建設時期の大正10年頃である。

### c. 畦畔

近世層である<4層>と近代層である<3層>上面において、大小の畦畔および水口を検出した。

#### ①<4層>検出畦畔群 (図67・75)

調査区北西部のBR～BT63～64区において検出された。東西溝20の北側である。検出レベルは標高1.15～1.22mであり、<4層>に対応する。前述したように、同面では溝20の南側に数多くの近世土坑が形成されており、本遺構群との関連性が注目される。

本畦畔群は、BSライン付近を約3m幅で走る攪乱部によって南北に分断される。その北側では南北方向に2条、そして南側では南北方向に3条と東西方向に1条の畦畔がそれぞれ検出された。北側と南側の南北畦畔ラインは概ね一致する。畦畔の間隔は、南北畦畔では東から2m・1.5mを測る。一方、東西畦畔では、南側の畦畔1との位置関係から3.5m以上の間隔が予想されるが、攪乱などの分断で田面の規模を確定することはできない。南北に細長く区切られた耕作地には、顕著な凹凸が確認される。畑としての耕作空間を構成していた可能性が考えられる。

畦畔の上面レベルは概ね標高1.2m前後を測るが、北側では同1.15mまで下降する傾向が認められる。下面レベルは標高1.07～1.17mの幅があり、上面レベルと同様に北側がやや低い。畦畔高は0.1m前後が残る。上面の幅は0.3m程度で、下面幅は0.5m程度が予想される。

本畦畔は<4層>の高まりとして確認され、周囲は(緑)灰色粘質土で埋まる。時期は<4層>あるいは上部を覆う<3層>の時期から近世の畦畔と考えられる。

#### ②<3層>検出畦畔 (図67・76)

東西方向の2条の畦畔と南北方向の3条の畦畔が調査区全域で検出された。前者は、BUライン付近を東西に走る溝20の南北両脇に形成される。南側脇の畦畔3の残存状況は良好であるが、北側脇の畦畔1は、同溝北半部の破壊とともに一部を消失する。南北方向の畦畔は、溝20の北側畦畔1から北へ延びる畦畔2と同溝南側畦畔3から南へ延びる畦畔4・5である。畦畔1と2、同3と4のコーナー部には、円形土坑と水口が確認される。南北畦畔4と同5の間隔は約14.5mを測る。同畦畔2は両畦畔の中間位置に配されており、東西溝20を挟んで1/2の幅でずれた地割りの状態を示す。畦畔の規模は、東西畦畔1・3および南北畦畔2が大きく、南側の南北畦畔4・5は小規模という点で明確な違いが確認される。

畦畔は<4層>由来の堆積土によって構成され、<2層>が耕作土を構成する。放棄時期は大正期であるが、機能した時期は、少なくとも明治期までは遡ることが予想される。

#### 畦畔1・2 (図67・76、図版3)

両畦畔は東西溝20の北側で検出された。同溝北側脇を走る畦畔1はBT61～64区に位置する。後世の破壊の影響で、東側に向けて残存部が狭小となるために詳細な情報は限定的である。後述する水口1・2によって切断されるが、両水口間にあたる63ライン位置から北側へ延びる畦畔2と連結してT字形の区画を形成する。畦畔2はBR～BT62区・BT63区に位置する。両畦畔の接続部分は攪乱で詳細は不明であるが、畦畔1から2に向かう緩やかなカーブが一部で確認される。

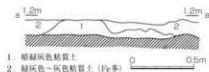


図75 <4層>検出畦畔断面 (縮尺1/30)



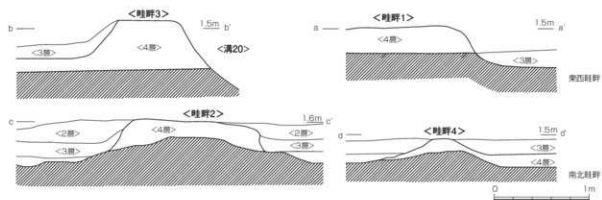


図76 哇畔1～4断面 (縮尺1/40)

両哇畔の上面レベルは標高約1.5～1.6m、下面は同1.2mを測り、約0.3mの高さが残る。両哇畔の交点部に形成された水口1と土坑17周辺には、前述したように両哇畔上面から連続的につながる作業空間が確認される。残存度の高い哇畔2で哇畔の形状を検討すると、上面幅は0.6～0.95m、下面幅は0.9～1.2mを測り、断面形は台形を呈する。哇畔1についても、最大の残存幅は上面で0.85m、下面で約1mであることから、哇畔2と同程度の形状が予想される。いずれも近世層である<4層>を加工して形成されている。

#### 哇畔3 (図67・76、図版3)

溝20の南側脇の東西哇畔で、BU60～64区に位置する。61ラインの西約2.5mと64ラインの西約2mの地点で、南北哇畔である哇畔4と同5に連結する。哇畔4とは直角に折れ曲がる状態でつながり、その脇に設置された水口3によって本哇畔は切断される。哇畔5とはT字形の接続をみせる。

上面レベルは標高約1.5～1.6mであるが、東端部では同1.4mまで下がる。下面レベルは標高1.3m前後で、高さは0.3m前後を測る。幅は、哇畔4との接合部で約0.5mに狭まるが、全体的には上面で0.7～0.8m、下面では0.9～1mを測る。断面形は台形を呈する。

#### 哇畔4 (図67・76、図版3)

調査区東端のBU～BY61区で検出された南北方向の哇畔である。水口3の位置から、哇畔3が直角に折れ曲がって本哇畔へと続く。後世の攪乱で数カ所が寸断されながら南壁に至る。

上面レベルは標高1.45～1.5m、下面は同1.35mで、高さは0.15～0.2mを測る。哇畔幅は、上面で0.18～0.23m、下面で0.4～0.5m、断面形は山形を呈する。哇畔1～3と比べると小規模で哇畔5との共通性が高い。

#### 哇畔5 (図67)

調査区西端にあたるBU～BV64区で検出された南北方向の哇畔である。64ラインから西に2mの位置で、東西哇畔3とT字形を形成して南側へ延びるが、調査区内に長さ約5mを残して西壁面に吸収される。上面レベルは標高1.45m、下面は同1.3mを測り、高さは0.15mを残す。哇畔の幅は、上面で0.25m、下面で0.4m、断面形は山形を呈する。哇畔4との類似性が高い。

### d. 水口

東西哇畔1・3において、3箇所の水口を検出した。水口1・2は哇畔1に、水口3は哇畔3にそれぞれ伴う。時期は、これらの哇畔および溝20の時期に一致する。

#### 水口1 (図67・77)

BT63区において哇畔1の上面で検出された。63ラインから西へ2mの位置で哇畔1を切断する水口部と田面に伸びる小規模な溝部で構成される。

水口部上面の検出レベルは標高1.45mである。同1.16mに位置する底面は、標高1.3mを測る水田面から約0.08m低い状態を呈し水口機能を明瞭に示す。上面幅は、畦畔1の北端位置で約0.2mを測るが、南側に向けて拡大し、東西溝2との接合部では0.9mに至る。一方、底面の幅は0.13m前後を保つ。深さは0.34mを測る。掘り方の断面形はすり鉢状を呈する。埋土の下半は砂質土で、上半は砂礫層で構成される。上層の埋土は溝20の埋土と共通しており、同時期に埋没したことを示す。

水口部から北側へ伸びる溝部は、水口南端部からは2mの長さで収束する。溝の幅は、水口部北端の0.2mの規模を踏襲しており、溝20と北側の田面を繋ぐ水路の機能が想定される。

出土遺物は数片で、いずれも古代～中世の小～細片であり、埋土中の混入遺物と判断される。

#### 水口2 (図67・77・78、図版28・34)

調査区中央部のBT62区に位置する。水口部分と溝部分で構成される。東西畦畔1を南北に切断しながら南北畦畔2の東端ラインに沿って走り、溝20北側の田面につながる形状で検出された。南端部は後世の擾乱で破壊されている。検出レベルは標高1.45～1.5mである。水口部では、本遺構の東側に約0.3mの間隔を有して土坑17が設置されている。同土坑周囲には、前述したように、水田面より一段高い作業空間が想定されるが、本遺構はその西端を切断する状態を呈する。

残存長は2.7mである。その内、北側約1.6mの部分が溝状を、そして南側約1.1mの部分が水口状を呈する。前者の溝部上面幅は0.3m、底面幅は0.25mでシャープな箱形の断面形を有する。底面は標高1.25m前後に位置しており、際立つ高低差は認めがたい。同面は、北端では水田面と一体化するため明瞭な深さを指摘できないが、南端部付近では、一段高い作業域脇にあたるために0.2mの深さが生じている。一方、後者は水口部を形成する。南側に位置する溝20に向けて、東側ラインは屈曲気味に東側に広がり、同溝につながる。上面幅は、溝部の幅である0.3mから0.45～0.55mに拡大し、さらに南端部では1.1mに至る。同南端部の底面レベルは標高0.95mで、深さは0.55mを残す。底面の数値は、溝部から約1mの間で0.3m程度下降したことを示す。掘り方の断面形はおおむねすり鉢状である。南端部ではその中央部に底面幅0.3m・深さ0.1m程度の窪み部を形成しており、流路としての機能を明確に示す。

埋土は、形態の違いにかかわらず灰褐色砂質土をベースとしており、全体的に類似性が高い。幅を広げる南端部では、3層付近で数個の角礫、1層中からは完形の青磁皿が出土した。出土遺物は少量で、青磁のほか備前焼・瓦質の瓦などが含む。青磁皿は中世に属するものであり、本遺構との関係は注意が必要であろう。時期は近代である。

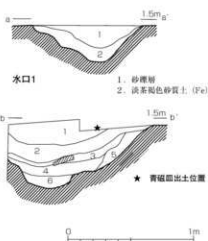


図77 水口1・2断面 (縮尺1/30)

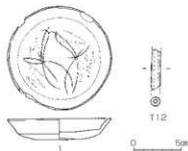


図78 水口2出土遺物 (縮尺1/4)

番号	種類・器種	法長 (cm)			計測部の 残存状況	形態・手法他	粘土	色調 内・外	
		口徑	底径	部高					
1	青磁・皿	11.0	4.7	2.3	1/1	(底)ケズリ、(内)施釉・底面露胎、同定数点1～3片類	微砂	灰緑、釉・明緑灰	
番号	種類	残存長: cm	残存幅: cm	厚: cm	重量: g	残存	形態・手法他	粘土	色調
T12	土塊	4.3	1.0	1.0	3.6	1/1	管状土塊、ナヤ、口徑0.3m	微砂	赤褐

## 水口3 (図67、図版28)

BT6I区で検出された。61ラインから西に約3mの地点で、畦畔3が畦畔4へ折れ曲がるコーナー部の西側に位置する。畦畔3を切断する状態で、溝20と南側に広がる水田面を繋ぐ。

上面レベルは標高1.4～1.45mである。底面レベルは、水田側に位置する南端部では標高1.27mであるが、北端部では同1.2mまで下降して東西溝20に至る。標高1.3m程度を示す水田面からは数cm低い状態を形成する。深さは約0.2m前後である。上面の幅は0.4m、下面幅は0.2mを測るが、溝20との接点では、下面幅は0.8mに拡大しており、南側の水田面と溝20間の水の流れを予想させる。水田面に伸びる流路は確認されていない。

## 第6節 包含層ほかの出土遺物

包含層あるいは個溝など、位置が特定できない遺物の中で注目される土器・土製品(図79)・石製品(図80)を報告する。弥生時代からの集落が終焉を迎える古墳時代初頭の土器(図79-1・2)は残存度が高く、遺構に伴う可能性も残る。古代以降の遺物については、本地点を特徴づける遺物と出土例が少ない遺物に注目した。古代の遺物は、本遺跡内において出土数が限定される中で、その数の多さが本地点の特徴であり、建物状遺構などに伴う可能性が高い。丹塗り土師器では面取り高杯の小片を含む。須恵器杯では内外面に「ヒダスキ」が確認されるほか、蓋・壺・壺などの器種も豊富である(同-3～8)。口縁に煤が付着する灯明皿(同-9)は中世後半以降、陶製のカマド(五徳状製品)やミニチュアの備前焼すり鉢(同-10・11)は近世の18世紀以降と考えられる。五徳状製品の胎土は雲母の包含が特徴的である。近代の遺物(同-12)は、「富山廣貫堂製、消化大仁ピストルどくけし」の記載が読み取れる薬瓶である。明治初期に営業を開始した企業である。図79-T13は、五輪塔の宝珠

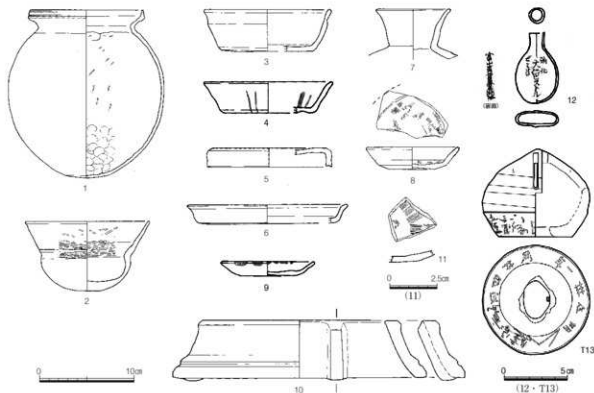
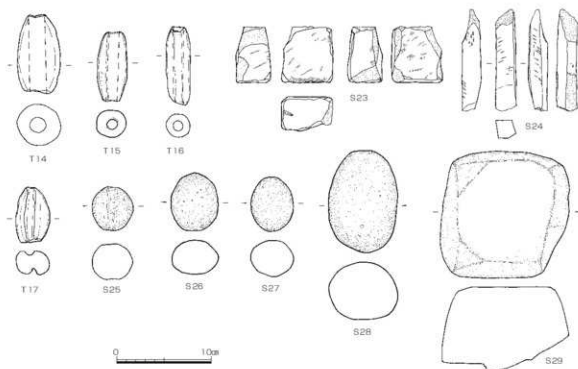


図79 包含層ほか出土遺物1 (縮尺1/4・1/3・1/2)



番号	出土位置	種類・器種	質量 (g)			残存状況	形態・手法集	粘土	色調 内・外
			口径	直径	高さ				
1	4区<7層>	土師器・葉	11.80	4.2	17.8	1/1	(口)横ナデ(内)匙ケズリ・押圧(外)磨減・燻	細砂	灰青/灰緑
2	4区<7層>	土師器・埴	1.50	2.3	7.4	1/1	ミガキ。磨減	細砂	赤褐色
3	層下	土師器・杯	11.3	9.6×10.5	4.4	1/4・1/1	横ナデ(内外)底ナリ蓋ナデ。(内外)丹塗り	細砂	黄白
4	4区<7層>上	砥石	13.51	10.2	3.3	-	横ナデ(内外)板目肌。(内外)次第状変色	細砂	灰
5	9区	須恵器・蓋	13.32	-	-	-	横ナデ	細砂	黒灰/灰
6	<7層>上	須恵器・皿	14.83	-	-	-	ナデ	細砂	黒灰/灰
7	北橋溝	須恵器・長皿蓋	7.7	-	-	-	横ナデ	細砂	黄灰/灰
8	3区横溝	青磁・蓋	9.6	4.6	2.3	1/2	(内外)黒釉(内)磨減。見込みに柳文。	粗砂	灰白・輪・淡緑灰
9	3区	土師器・打明器	9.7	5.9	1.5	1/2	横ナデ(内外)赤塗り肌。(口)基部に燻	細砂	黄白
10	3区横溝	陶器・蓋	27.0	20.8	16.1	-	ナデ。(内)燻。内面に突起部1箇所残存	細砂	淡黄褐色
11	<3~4層>	磨前焼・小鉢	-	-	-	-	ミニチュアのすり鉢	細砂	赤褐色
12	<3層>	ガラス製香瓶	1.2	-	5.5	1/1	消化 本にビストルどくけし(前)山崎宮交箱	-	-

番号	出土位置	種類	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	質量・g	残存	形態・手法集	粘土	色調
T13	1・3区<2層>	素焼 宝珠刺土製品	5.8	5.9	5.0	256	1/1	(外)ケズリ・ナデ。底部に4.3cm×0.4cmの透かし孔。残部:3.8cm×2.8cmの筒口孔。外周上部に頸口・重唇	細砂	黄褐色
T14	<6~7層>	土師	8.3	4.5	4.4	150.9	1/1	管状土師。ナデ。(口)径1.6cm×1.3cm	細砂	黄褐色
T15	3区<6層>以下	土師	7.3	3.1	2.8	69.1	1/1	管状土師。ナデ。(口)径1.2cm	細砂	黄褐色
T16	4区<6層>	土師	8.1	2.5	2.4	45.9	1/1	管状土師。ナデ。黒灰。口径1.0cm	細砂	明褐色
T17	土師	土師	5.8	3.5	2.5	46.8	1/1	右面土師。ナデ	細砂	黄褐色

番号	出土位置	種類	残存長・cm	残存幅・cm	厚・cm	質量・g	石目	特徴
S23	4区<4層>	砥石	5.9	3.4	3.6	180.2	ホルンフェルス。砂付	片面を砥面として有用
S24	<4層>横溝	砥石	11.7	2.1	2.0	65.2	板状	砥面として利用。上下両面
S25	2区横溝	石鉢	4.6	4.3	3.7	119.7	丸レイ石	内側中央に木の溝
S26	3区<8層>	円礫	6.1	4.9	3.6	154.7	板状石質礫灰行	明確な加工痕未確認
S27	4区<6層>	円礫	4.8	3.5	3.8	135.1	板状	明確な加工痕未確認
S28	4区<6層>	円礫	10.8	7.2	6.1	492.4	板状石質礫灰行	明確な加工痕未確認
S29	3区ビット	礎石	13.4	13.7	9.0	24205.0	板状	明確な加工痕未確認

図80 包含層ほか出土遺物2—土製品・石製品—(縮尺1/4)

に類似する形態を有し、線刻と墨書で文字が記されている。

その他の土製品では土鉢が出土しているが、出土層位からその多くは中世以前に属すると判断される(図80-T14~17)。石製品では、砥石(同-S23・24)・石鉢(同-S25)・円礫(同-S26~28)、そして礎石状礫(同-S29)を挙げた。砥石は<4層>からの出土であり、比較的新しい時期が予想される。2点の円礫は明確な加工痕は確認できないが、類似性が高い点や自然な状態では集落内に存在しないことが予想される点から、故意に持ち込まれた可能性が高い。出土層位から中世前半以前の遺物と判断される。礎石は2区の中世ビットから出土しており、中世前半に属する。

## 第4章 第17次調査地点における調査成果

本調査地点では、古墳時代初頭・古代・中世前半～中世後半、そして、近世～近代の遺構・遺物を検出した。その中で、東側に隣接する第7次調査地点の遺構群と連続的な構成を有する古墳時代初頭と中世前半の状況については、ここで両調査地点の成果を合わせて本調査地点付近の空間利用状況を提示し、調査成果のまとめとする。また、中世前半については、範囲を南北に拡大して既調査報告成果との関係にも触れておこう。

### (1) 古墳時代初頭における空間利用状況

#### a. 遺構配置の状況

第17次調査地点（以下、本調査地点とする。）では、調査区西端を南北に走る溝1の東側において、北側に住居域とその南に近接して形成された焼土集中域、そして住居域から離れて、南側にか跡群や粘土埋納土坑などが配される。こうした遺構は、本調査地点の東端に集中しており、東側の第7次調査地点に広がる様相を呈すことから、本調査地点と同調査地点の成果を総合して、本時期の遺構構成を改めて検討しよう。

第7次調査地点の主たる遺構配置は、北側に焼土集中を伴う複数の住居遺構（SH1・3・4）、その南に土器集中域（SX1）と不規則な小規模溝群（SD1～3・5）そして掘立柱建物群（SB1・2）と構状遺構（SF1）、その東側に井戸（SE1）、さらに調査区南端付近に粘土埋納土坑（SK3・4）という関係を示す（図81）。また、調査区中央部には、これらの遺構群の配置を縦断する形で、調査区を南北に区切る溝（SD4）が走る。遺構群の時期は、本調査地点の遺構群と同じ古墳時代初頭の枠におさまると同時に、遺構配置においても本調査地点との共通点が取られる。

まず、両調査地点を合わせた状態で遺構配置状況を概観すると、本調査地点溝1（以下、本調査地点を省略する。）に対してほぼ直交する方向で、BU63付近から南東に向けて便宜的に設定したAライン（同図）の北側と南側で、遺構の種類やその密度が異なることが読み取れる。同ライン以北では、竪穴住居群・掘立柱建物群・井戸といった集落を構成する主要な遺構群のほかに、焼土集中関連遺構・不規則な小規模な溝群・土器溜まりなどが形成され、高い遺構密度を呈している。こうした多岐にわたる遺構は東側に広がる第7次調査地点に分布する傾向が強い。また、同調査域では遺構間に重複関係も認められるなど、複数回にわたる利用段階が想定される。それに対して、同ライン以南の範囲は、西側の本調査地点を中心に、か跡群や粘土埋納土坑群などが分散的に分布するのみで遺構密度は低い。このように両域間の違いは明瞭である。

両域を縦断して南北を走るのが、西端部に位置する溝1と東よりに位置する第7次SD4である。溝1では、下層部に形成された流路の利用時期に対応する古段階と、同部分が埋没したのちに土器が廃棄される上層に対応する新段階との2時期の利用が確認される。

#### b. 各遺構の同時性

以上にあげた遺構群には、遺構の重複関係や溝1の利用状況から、少なくとも新・古の2段階の形成時期が想定される。各遺構の時間的な関係性を探ってみよう。

【北側空間の遺構（図81）】 主要な住居遺構は58～62ラインに分布し、Aラインに沿って東西方向に並び、西から、竪穴住居1（以下、住居1と略し、他も同様記す。住居2は同1に含めて扱う。）、第7次SH1とその一部を構成する住居3（以下、両報告を合わせて第7次SH1とする。）、第7次SH3・SH4である。これらの住居遺構の重複関係あるいは各遺構間の距離に注目して、各遺構の同時性の可能性を考えてみよう。

まず、重複関係を有するのは第7次SH1とSH3であり、後者が上位に位置する。また、住居間の距離は、住居1と第7次SH1との間隔が2m弱に対して、住居1と第7次SH3では約5mの間隔が保たれる。住居形態を復元

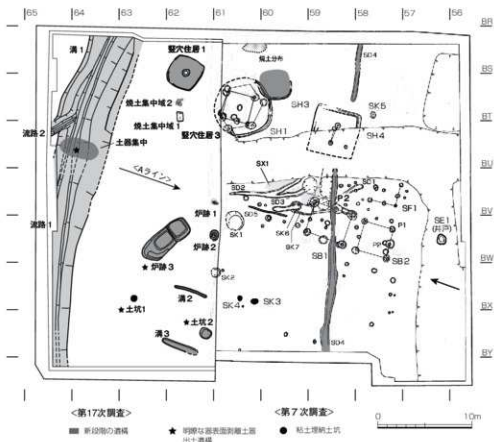


図81 第7次調査・第17次調査地点における古墳時代初頭の遺構配置 (縮尺1/400)

して各住居の同時性を勘案すると、前者の位置関係では困難であるが、後者では同時性の想定が可能であろう。こうした状況から、新・古の2段階を想定するならば、古段階に第7次SH1、新段階に住居1と第7次SH3との関係が指摘される。両段階の住居形態を比較すると、古段階の第7次SH1は直径6×6.4mの円～隅丸方形プランを呈し、直径0.7～0.8mの柱穴6本（下部には4本柱の段階を有す）を有するのに対して、新段階に位置づけられる2棟の住居は、一辺3.6m前後あるいは約3m前後の隅丸方形プランを呈しており、小形で柱穴を有さない非常に簡易な形態を示す点において、両者間の構造的な違いは明らかである。出土遺物についても、完形の管玉が出土した第7次SH1と叩き石が出土したSH3との違いに注意がおよぶ。こうした状況から、新・古の両段階において、住居遺構の機能差を想定することに大きな齟齬は生じないだろう。具体的には、新段階の住居は、通常の居住機能とは異なる場、例えば作業場的な建物の可能性が想起される。一方、こうした住居遺構群の東端に位置する第7次SH4は、第7次SH1とSH3のいずれとも3～4.5mの間隔を保つ。形態は、一辺約5mの方形住居で直径0.55m前後の柱穴2本を有している。こうした位置関係や形態から新・古段階の帰属を判断することは難しいが、注目されるのは、同住居と掘立柱建物群である第7次SB1・SB2、あるいは同SH1の4本柱の軸方向の共通性の高さであり、同SB1の西辺ラインはSH4の柱穴ラインにほとんど一致する点である。これらの軸方向は、住居1あるいは第7次SH3とは異なる。こうした遺構の位置関係から、第7次SH4は同掘立柱建物群や同SH1との共存関係を予想し、同建物群を含めて古段階に属すると判断することとなった。

住居遺構周辺に分布する焼土集中域1・2と第7次焼土分布域については、住居遺構との距離を検討すると、古段階の第7次SH1のみが3m程度の間隔を有す。それに対して新段階の住居との間隔は1～2mにとどまって

おり、焼成作業の安全性を勘案すると、その同時性は考えにくい。よって、これらの遺構は古段階の第7次SH1との同時性が想定される。また、第7次SH1の南側に位置する同SX1（土器溜まり）および同SD1～3・5の不規則な小規模溝群などの遺構については、個々の重複関係が不明瞭であり新段階の区分に対する判断は難しい。古段階に位置づけた第7次掘立柱建物SB1との上下関係も、明瞭な分離を示していないことから、これらの遺構群は掘立柱建物遺構とともに、古段階の時期幅の中で形成された遺構群と捉え、第7次SH1の継続時期内での関連性を考えたい。

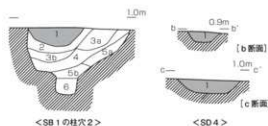


図82 第7次調査掘立柱建物1・溝4の断面(縮尺1/40)  
(山本編2007に加筆)

以上のように想定すると、古段階の遺構は、溝1の古段階を含めて、住居群（第7次SH1・SH4）とその周囲に形成される焼土集中域1・2、第7次調査の焼土分布・土器溜まり（第7次SX1）・小規模溝群・掘立柱建物等（第7次SB1・2、SF1）で構成されることとなる。東側の井戸も、その配置から本段階に含まれる可能性がある。一方、新段階では、住居1・第7次SH3のほか同SD4があげられる。同溝は同SB1が上部に重複する状態で報告されている。しかし、改めて断面図面を確認すると、SD4と重複するSB1の柱穴P2の1層（東西断面）の形状はSD4の断面とほとんど一致している（図82：トーン部分）。この点を再評価すると両遺構間の重複関係は逆転し、SD4は新段階の溝との評価となる。また、SD4と第7次SH4の位置関係において、住居形態を復元すると両者の同時性は考えにくいことから、同住居廃棄後に空間を区画する溝として、新段階に形成されたと考えられる。

**【南側空間の遺構（図81）】** Aライン以南の遺構群は、跡跡3基・土坑6基が挙げられる。北側の遺構分布とは異なり、重複関係を有する遺構はなく、一定の間隔が保たれて分散的な配置を呈す。跡跡1～3は東西約8mの空間に約3m間隔で配される。たわみ状の第7次SK1を除くと、周辺に他の主要な遺構は未確認であり、同域は加熱作業の場として、周囲からの空間的分離が意識されていた状況が予想される。その約5m南には、粘土を埋納した土坑（土坑1、第7次SK3・4）が東西に並ぶ。これらの遺構形成時期の同時性を示す積極的証拠は乏しいが、その配置は、一時期あるいはごく短期間の時期幅におさまる可能性を想起させる。

#### c. 本調査地点の空間利用状況

改めて、古段階と新段階の遺構をまとめて全体像を復元しよう（図81）。

**【古段階】** 本調査地点の西端部を南北方向の溝1が区切り、その東側に広がる空間は集落の一部として利用されている。同溝から約10m離れて形成された第7次SH1は、直径は約6～6.4mを測り、6本柱の構造で建て替えが確認されているように、本地点では中心的な住居に位置づけられる。管玉の存在も注目される。同住居周辺での焼成作業により焼土集中域1・2や第7次焼土分布が形成される。使用された多量の土器は住居の南側に廃棄された可能性が考えられる。同住居の東約4mには第7次SH4が軸を揃えて並ぶ。さらに同住居の南側には、やはり約4mの間隔で掘立柱建物である第7次SB1・2がほとんど平行して配される。SB2の東約4mに第7次井戸1（SE1）が位置しており、その配置から古段階に属する可能性が高いと考えられる。いずれも4m程度の間隔で配されている点には、空間利用に際しての計画性が予想される。形態的に異なる第7次SH1と同SH4との関係については、後者から出土した叩き石・被熱燻の存在も注目され、機能面での違いが予想される。

**【新段階】** 本調査地点の北端付近に、小形で簡易な構造の住居1と第7次SH3が5m強の間隔をもって住居域を形成する。古段階の第7次SH1周辺である。同域から南約10mの場所には、高温作業を示す跡跡1～3が構築されており、前述したように加熱作業域を形成する。さらに、その南側4～5m付近には粘土を埋納した土坑3

基（土坑1・第7次SK3・4）が東西方向に点々と並ぶ。第7次SH3では叩き石が出土しており、住居形態の特殊性も考慮すると、作業場としての機能が一つの可能性としてあげられる。以上の遺構配置やその内容から、本段階には、第17次調査地点を中心に高温の加熱作業の場が形成された状況が復元される。その作業空間の規模は、西側を古段階～新段階に存在する溝1が、そして東側を第7次SD4が区切ると想定すると、東西幅25m～30mの広がり求められる。

**【新段階の出土遺物】** 第17次調査地点において、遺構内あるいは遺構に関連した状態で土器が出土した主たる遺構は、弁跡3・焼土集中城1・土坑1・土坑2・溝1が挙げられる。特に、溝1からは、その上層部において一括性の高い状態で土器がまとまって検出された。これらの遺構の中で、焼土集中城1以外から、器表面に明瞭な剥離痕跡を有する土器片やその剥離片が出土しており、そのほとんどが高杯・鉢に限定的な状態が看取された。焼土集中城1周辺で出土した土器には剥離痕跡は確認されていないことから、同特徴を有する土器は新段階に属する遺構に対応しており、同時期に形成された状況を呈する。第7次調査地点にまで範囲を広げてみても、こうした剥離痕跡を明瞭に有する土器は、第7次SX1（土器溜まり）を含めて古段階の遺構から明確なものは報告されていない。

出土遺物量の多い溝1上層出土遺物群には、うろこ状に剥離した剥離面あるいは剥離片が含まれており、その中の数片あるいは土坑1の出土遺物には土器焼成時破損の可能性が残る。しかし、剥離痕跡のみの特徴では同破損品の認定には弱く、うろこ状剥離面の色調においても明瞭な痕跡とはいかない点から、全体的には焼成時破損土器との評価に至っていない。火災などの2次焼成の可能性も考えられるが、一方で、本文中で指摘したが、2次焼成による変色が明瞭な土器には剥離痕跡が確認されないのに対して、同変色がほとんど確認されない土器に剥離が顕著な点、あるいは器種の偏りについてもやや疑問が残る。いずれにしても、現状では新段階における土器には、そうした剥離痕跡が多い点を指摘し、その要因については今後の課題としておきたい。

なお、出土遺物に関しては、器表面剥離土器や土器焼成時破損品については、田崎博之氏・大久保徹也氏にご教示いただいた。

#### d. 集落内における手工業生産の場の形成

本調査地点は、鹿田遺跡内の西端部周辺に位置するが（図1・2）、さらに西側約10mにあたる第6次調査地点では、本時期の明確な遺構は極めて希薄であり（松本他編1997）、生活域外の状態を示す。両調査地点の位置関係を考えると、溝1が古墳時代集落の西端を区切るラインと考えてもよいであろう。本調査地点および第7次調査地点は、まさにその西端部に位置することとなる。そして、少なくとも新段階には、同域に溝1と第7次SD4によって区切られた手工業生産の場が、集落の周縁部に置かれた状況が復元される。さらに、本調査地点の北側約30mに位置する第24次調査地点では、本時期の遺構がほとんど検出されないなかで4基の土器棺が確認されており（南2018）、墓域としての利用が考えられる。本調査地点の状況は集落の西端付近の空間利用を考える上で参考になろう。

## (2) 中世前半における屋敷地区画

本調査地点で検出された溝は、東側に隣接する第7次調査地点に直接つながるほか、溝のライン上において、周辺の既調査地点の溝との対応関係を見出すことができる。対象となる調査地点は、第7次調査地点のほか、南側では23mの間隔を有する第26次調査地点、西側では10mの間隔を有する第6次調査地点、そして北側では30mの間隔を有する第24次調査地点があげられる。その範囲は南北約160m・東西約80mを測り、鹿田遺跡内において西端の中央部に位置する空間である（図1・2・83）。東西方向の溝が直接的に連続する本調査地点と第7次調査地点間の溝の対応関係は、本調査地点の溝15（以下、S17-溝15とする。他も同様）とS7-SD23、S17-溝17とS7-SD22、S17-溝8とS7-SD6に求められ、それぞれが同一溝を構成する。また、直接的に連続はしていないが、



S17-溝11はS7-溝19に対応する可能性も残る(図83)。

こうした溝のライン上でのつながりによって、構内座標BTライン(以下、構内座標は略す)以南には、溝によって四辺が区画された屋敷地を抽出することができる。同辺を構成する溝は、本調査地点・第7次調査地点・第26次調査地点として第6次調査地点に求められる(図83)。同屋敷地の区画について、12世紀後半と13世紀~14世紀前葉の二つの時期の状況を検討しよう。

#### a. 12世紀後半(図83: トーン部分)

BTライン以南に抽出される屋敷地の北辺ラインは、第7・17次調査地点の南端を東西に走るS17-溝8とS7-SD6、そしてライン上でつながるS6-SD10で構成される。その長さは58mを測る。両端は丸く収束しており、屋敷地コーナー部は開放状態を呈する。その他に、同屋敷地の区画との関連性が想定される溝は、西辺ラインでは南北方向を示すS6-SD17、東辺ラインではS7-SD8・9と南北方向において同一ラインを構成するS26-溝18が挙げられる。南辺については、東西方向のS26-溝17と同一溝19が候補となるが、両溝の埋没時期に差は報告されておらず(山口2019)、同時併存となると、区画溝としては内側の溝であるS26-溝17が対応すると判断される。ところで、同溝を含む第26次調査地点のS26-溝17-19の時期は、いずれも13世紀前葉として報告されており(山口2019)、本段階の溝群の時期と時間的齟齬が指摘される。ただし、同時期差は溝の埋没時期の時間差であることを考慮すると、必ずしも機能時期が異なるとは言えない。これらの溝の中でS26-溝18は、S7-SD8・9と北ラインが一致するほか、次段階の溝との重複関係においても本段階の溝群との共通性が確認される。よって、機能した時期は本段階に遡ると判断した。

以上の溝のラインを参考にして、屋敷地の区画ラインを構内座標に置き換えると、北辺はBYライン、東辺は57ライン、西辺は71ラインの西0.5mの南北軸、そして、南辺はCEライン付近に対応する。その結果、S17-溝8が位置するBYラインを北辺として南側に区画された屋敷地の大きさは、溝の中心間で東西幅70m・南北幅約30m、溝の外縁端部では東西幅72m・南北幅32mを測る。ここで得られた数値は、東西2/3町(約72m)・南北1/3町(約36m)の数値よりはやや短い傾向が読み取れるが、計測上の誤差も勘案すると、おおむね近い数値と評価される。つまり、1/3町の2区画を東西に合わせた状態とも捉えられる。

#### b. 13世紀~14世紀前葉(図83)

**【BTライン以南の状況】** 本時期の屋敷地は前段階から北側への拡大が認められる。北辺を構成する溝は、本調査地点と第7次調査地点で一連の溝となるS17-溝15とS7-SD23であり、BUラインを東西に走る。同一SD23は、56ライン付近で南に向けて直角に曲がり、南北方向のS7-SD24につながる。ただし、BUライン上の溝は56ライン以東にも延びている。北辺の溝から南に向かうS7-SD24は、南側の第26次調査地点のS26-溝22aにライン上でつながり、本屋敷地の東辺を構成する。両溝は形態的にも類似性が高く一連の同一溝と理解される。同溝に直交して西方に伸びる東西溝がS26-溝22bであり、屋敷地の南辺を区画する溝と考えられる。西辺を構成する溝は、北辺および南辺の溝と直接に連結してはいないが、その配置から第6次調査地点のSD13-16に求められる。その中で、S7-SD24と同時期を示すのがS6-SD14である。

以上の溝の配置から想定される屋敷地の区画ラインを構内座標に置き換えると、北辺がBUライン、東辺が56ラインから57ラインへ向かう南北軸、南辺がCEラインの南3mのライン、西辺が70ラインにそれぞれ対応する。その規模は、溝の中心間で東西幅約68m・南北幅54mを測り、溝の外縁幅では東西幅73m・南北幅56mとなる。東辺・西辺・南辺の位置は前段階の位置がほとんど踏襲されるのに対して、北辺は北側へ約20m移動している。その結果、屋敷地の東西幅は前段階と同様に2/3町(約72m)が維持されるが、南北幅は1/2町(約54m)が意識された状態へと変化しており、敷地の南北幅が拡大する。屋敷地を区画する溝は結合してコーナー部を形成する状態が東辺で明瞭に確認されており、閉鎖的な屋敷地空間の創出が予想される。前段階の途切れた溝の状態とは異なる。

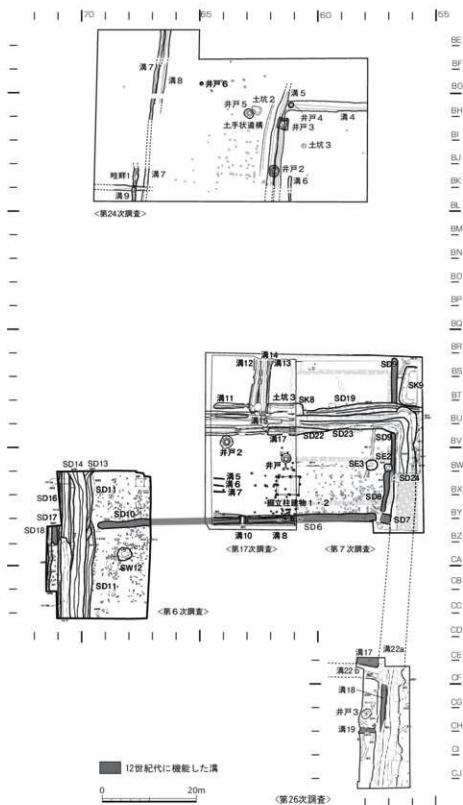


図83 鹿田遺跡西端付近における中世前半の遺構配置 (縮尺1/800) (各報告書の図に加筆)

こうした屋敷地内には、前段階に1/3町区画の二つのまとまりを想定したが、本段階においても同様の状況が復元される。柱穴・井戸などの遺構分布は、62ライン～65ライン付近（第17次調査地点）で極めて希薄あるいは空白となっており、その東・西側（第7次調査地点側と第6次調査地点側）にその集中域が広がる。また、第17次調査地点の南端部で検出された南北溝S17-溝10が位置する63ラインは、屋敷地内の敷地を、東西幅約34mに二分する位置に合致する。こうした状況は、屋敷地内に東西二組の利用空間の存在を示唆するものであろう。また、屋敷地の東辺を構成するS26-溝22 aは、南辺にあたるCEライン付近以南へと延びており、同溝群にはS26-井戸3も確認されることから、本屋敷地の南側に別の屋敷地の配置を窺わせる。

**【BTライン以北の状況】** BTライン以北では、本屋敷地北辺の中央部付近から北に延びるS17-溝12-14の存在が注目される。北辺を形成するS17-溝15と連結する同-溝14の南北ライン上には、北側に位置する第24次調査地点のS24-溝5が確認される。両溝で構成される南北ラインは本屋敷地の東辺ラインの軸方向とはほぼ平行する。また、S24-溝5には、BGラインの南3.5m付近で東西に走るS24-溝4が直交してとりつく。同溝からは新しい瓦も出土しているが、機能した時期が本時期までさかのぼる可能性が考えられることから（南2018）、S17-溝15（BUライン）の北側に区画が想定される敷地の北辺を区切る溝と理解される。本屋敷地の北辺からの南北幅は、溝の中心間で67m、溝の外縁幅で70mを測り、同敷地の南側に接する本屋敷地の東西幅の値に一致する。こうした数値の共通性は統一された区画基準の存在を示唆する。また、北側に想定される敷地区画の西辺にあたるS17-溝14は本屋敷地の東西幅の中で、東側に30m、西側に38mの間隔を有す位置で連結しており、BUラインを挟んで、北側と南側に配される屋敷地区画の配置が、敷地幅の約1/2を東にずらした状態にあったことが確認される。

その他に、第24次調査で報告された南北溝7・8については、第6次調査の西端部を南北に走る溝群S6-SD13～16の方向に延びるが、その軸方向はやや異なっており、直接につながるかどうかは今後の検討が必要である。ただし、その方向は現在の鹿田地区の敷地ラインに近いことから、集落の西端を区切る溝となる可能性が指摘される。

以上のように、本調査地点の成果によって、鹿田遺跡西端周辺での既往調査成果を結合することができた。今後、こうした成果を含めて鹿田遺跡全体の土地区画の復元については、機会を改めて再考したい。

## 引用・参考文献

- 松本武彦・山本世祝編 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊 岡山大学理蔵文化財調査研究センター  
 南健太郎編 2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊 岡山大学理蔵文化財調査研究センター  
 山口雄治編 2019『鹿田遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第35冊 岡山大学理蔵文化財調査研究センター  
 山本世祝編 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊 岡山大学理蔵文化財調査研究センター

表7 遺構一覽

\* ( ): 残存額 ( ): 復元値 を示す。

遺構名	位置	横出高: 標高m		深さ: m	平面形 (復元形)	規模: m		断面形	時期	
		上面	底面			上面	下面			
		聖武住居1	BR・BS61			0.75~0.82	0.7~0.75			0.05~0.07
聖武住居2	BS61	0.83~0.85	0.75	0.1	(隅丸方形)	(約3)	-	-		
聖武住居3 (柱穴)	BS・BT60	0.71~0.76	0.52	0.19~0.24	楕円形 (住居は隅丸方形)	0.6×(0.5)	0.15	-	二段	
観立柱 建物1	BW60・61	1.05~1.18	0.76~0.87	0.19~0.42	長方形	3.6・3.7×4.6	-	-	中世前半	
観立柱 建物2	BW60・61	1.13~1.18	0.73~0.93	0.2~0.45	長方形	3.7×(4.7~4.8)	-	-	-	
建物状 遺構1	BR・BT 62・63	0.7~1	0.65~0.75	約0.2	(長方形)	4~4.1 ×(3.0,3.5)	(3.25~3.25) ×(9.5)(10.2)	階段	古代	
井戸1	BV61	1.1~1.15	-1~-0.95	2.1~2.15	円形	1.97×1.95	0.7×0.68	U字形	中世前半	
井戸2	BV63・64	1.05~1.1	-1.5	2.6	円形	2.7×2.6	0.88×0.88	U字形	中世後半	
井戸3	BR63・64	1.05	-0.18	1.25	円形	1.35×1.55	0.42×(0.5)	逆台形	中世後半 ~近世	
中継1	BV60・61	0.88~0.9	-	-	円~楕円	横分直1.6×1.3 横土0.75×0.4 横敷土0.25×0.3	-	-	古墳初期	
中継2	BV60・61	(0.78~0.83) (0.9)	0.13	0.78	円	1.05×(0.9)(1)	直径約0.4, 下部は U字形約0.3	U字形		
中継3	BV61・62	0.8~0.95	深さ1: 0.62~0.65 深さ2: 0.75	約0.2~0.25	隅丸長方形	5.8×2.2	5.45×1.55	-		
境上 集小域1	BS・BT61	0.85	0.8	0.05	隅丸長方形	1.1×0.65	-	階段		
境上 集小域2	BS61	0.83	0.8	0.02~0.03	不整形	0.8~0.7	-	-		
土坑1	BW62	1.1~1.07	0.9	0.2	円形	0.64×0.65	0.45×0.45	逆台形		
土坑2	BX61	0.9	0.75	0.15	不整形	1.3×1.1	0.9×0.85	階段		
土坑3	BT61	0.9	0~0.08	0.9	隅丸長方形	東西(5.6)(7.5) 南北(2)	東西(5)(6.5) 南北(1.7~2.2)	逆台形		中世前半
土坑4	BV60・61	1.28~1.32	0.53	0.78	円~楕円形	(2.45×2.15) (2.6×2.3)	0.7×0.45	十字鉢状		
土坑5	BV61	1.32~1.35	0.6~0.7	0.65~0.75	楕円形	1.68×1.34	1.45×1.2	平凸箱形		
土坑6	BV62	1.23	0.86	0.36	方形or長方形	1×(0.5)	0.65×(0.4)	箱形	近世	
土坑7	BV62	1.05~1.13	0.8	0.35	(楕) 円形	1×0.92	0.83×0.66	箱状		
土坑8	BV62	1.1~1.15	0.52	0.63	円形	1.85	0.5	十字鉢状		
土坑9	BV62・63	1.2	0.4~0.35	0.8	円~楕円形	2.5×2.35	1×0.75	箱状		
土坑10	BV63・64	1.2~1.3	0.55	0.75	楕円形	2.3×1.5	0.8×0.6	箱状		
土坑11	BV63	1.2~1.3	0.48	0.8	楕円形	(1.7)(2.1~2.3) ×1.8	0.63×0.5	箱状		
土坑12	BV64	1.15~1.2	0.62	0.57	楕円形	1.5×(1.4)(2.3以上)	0.7×(0.8)	箱状		
土坑13	BV64	1.1	0.75	0.35	?	7 7.6×0.3	(0.37×0.13)	箱状		
土坑14	BV63・64	1.25	0.8	0.5	円形	直径1.67	1.35×1.45	箱形		
土坑15	BV61	1.25	0.8	0.5	円形	直径1.45	1.2~1.25	箱形		
土坑16	BT60・61	1.4~1.48	0.81	0.65	円形	直径1.15	直径1	箱形	近世末 ~近代	
土坑17	BT62	1.45~1.5	0.75~0.8	0.7~0.75	楕円形	1.8×1.65	1.4×1.4	箱形		
土坑18	BS62	1.2~1.25	0.2	1.05	方形	1.25×(1.1)(1.25)	0.8×0.85	逆台形		
土坑19	BV61	1.3	0.85	0.5	隅丸長方形	0.92×0.75	0.38×0.27	方形2段		

遺構名	位置	横出高: 標高m		深さ: m	規模: m		断面形	時期
		上面	底面		上面	下面		
		溝1	BR・BY 62~64		北0.75~南0.95 流路1: 0.5~0.6 流路2: 0.42~0.5 (0.6)	北0.1, 南0.5 西0.25, 東0.2		
溝2	BW61	1~1.05	0.97	0.08	0.25~0.3	-	階段	古代
溝3	BX61・62	1~1.05	西0.92, 東0.84	西0.1~東0.2	0.6	-	階段~階段	
溝4	BR・BS62 BS・BT63	0.95~1	北0.7, 南0.79	0.17~0.3	南0.6 北(1)(1.2)	南0.3 北0.55	階段	中世前半
溝5	BW64	1.02~1.07 調査区西側L1	0.98~1	0.04~0.06 (0.08)	0.16~0.17 (0.2)	0.07	階段	
溝6	BW64	1.03~1.04 調査区西側L1	0.97~0.99	0.07(0.1)	0.15~0.2 (0.2)	0.07	階段	
溝7	BW64	1.03~1.06 調査区西側L1	0.98~0.99	0.06~0.07 (溝底0.1)	0.15~0.25(0.35)	0.05~0.1	階段	
溝8	BX・BY 60~64	1.1~1.15(1.2)	東0.41, 西0.27	0.8	(1.5~1.6) (1.65~1.7)	0.58~0.6 0.42	逆台形	中世後半 ~近世
溝9	BX・BY 60~64	1.1~1.15	西0.65, 東0.75	0.43~0.5	西0.95 東(0.5)	西0.3 東0.2	階段 ~Y字	

遺構名	位置	検出高：標高m		深さ：m	規模：m		断面形	時期	
		上面	底面		上面	下面			
溝10	RX・BY63	1.1m前後 (1.25m前後)		0.68	(0.37) (0.53)	(1.1) (1.2)	0.5-0.6	逆台形	中世前半
溝11	BT62-64	1.05-1.15		0.5-0.53, 東端0.6	0.65	東0.85 西1.1	0.2-0.25	上部が闊くU字形	
溝12	BR-BT62	1.05-1.15		北0.37, 中央0.25- 0.45, 南0.54	北0.7-0.75 南0.5-0.58	1.6-1.7	0.4-0.6	Y字・U状	
溝13	BR61・62 IS-IT62	0.9-0.95		北0.3, 南0.2	0.6-0.7	(1-1.1) (北端2)	0.4-0.45	Y字・U状	
溝14	BR-IT62	0.95-1.05		北0.5, 南0.46	0.5-0.6	北1.45 南1.85	北0.4 南0.55	逆台形or階段	
溝15	BT-IR/ 60-64	1-1.05		東-0.05 西-0.2	(1.2)	(5.1) (西32-53, 東32-35)	東0.7 西1-1.1	有段逆台形	
溝16	BT63-64	0.5-0.3		東0, 西0.08	東0.5, 西0.25	1.1-0.7	0.4-0.2	逆台形	
溝17	BU60-64	1.2 溝15下：0.45-0.5		東0.15, 西0.25	1	(0.7-1.75) (約2)	0.25	階型～有段逆台形	
溝18	BR64	1-1.03		0.31	0.7-0.72	(1.5)	(0.65)	逆台形か?	
溝19	BT-IR/ 60-64	1.2-1.25		東0.6 西0.45-0.5	0.65	中央3.5 西3.2	1.5-2	逆台形	
溝20	BT-IR/ 60-62, BT63 ～64	1.4-1.6		(0.85)・(0.95)	(0.5)	(1) (2)	-	-	近世 ～近代
(4層) 小堀野群	BR-IT 63-64	1.15-1.22		1.07-1.17	北0.1	6.5, 3.5, 0.3	(0.5)	台形	近世
畦畔1	BT61-64	1.5-1.53		1.2 1.5：作業域	0.3 0.03：作業域	西半 (0.85)	西半 (1)	台形	近代
畦畔2	BR-IT 62・63	北半1.25-1.6 南半1.4-1.5		1.2-1.25	0.25-0.3	0.6-0.95	0.9-1.2	台形	
畦畔3	BU60-64	西半1.6 東半1.4-1.5		1.3	0.3	0.45-0.8	0.9-1	台形	
畦畔4	BU-IT61	1.45-1.5		1.35	0.15-0.2	0.18-0.23	0.4-0.5	山形	
畦畔5	BU・IT64	1.45		1.3	0.15	0.25	0.4	山形	
水口1	IT63	1.45		1.16	0.34	0.2-0.9	0.13	すり鉢状	
水口2	BT62	1.45-1.5		溝状部1.25 南端部0.95	0.2 0.55	0.2 0.45-1.1	0.25 0.3	箱形	
水口3	BT61	1.4-1.45		南1.27, 北1.2	0.2-0.25	0.4-0.8	0.2	-	

表8 出土木製品と自然木の樹種一覧

本文中掲載番号	器種名	遺構名	樹種	SR	木取り	時期	OKUP番号
1641	W1 箸	舟#1	ヒノキ	S	割材	中世前半	1918
	W2 曲物底板		スギ	S	板目		1919
	W3 曲物側板		ヒノキ	S	板目		1920
1643	W4 曲物底板	舟#2	スギ	S	板目	中世前半	1916
	W5 割材		コナラ・楓・タヌキ節	S	割材		1917
1672	WG 支え木	土坑19	アカマツ	S	板目	近世末～近代	1928
			アカマツ	S	板目		1929
			アカマツ	S	板目		1930
			アカマツ	S	板目		1931
			スギ	S	板目		1932
			スギ	S	板目		1933
			スギ	S	板目		1934
未掲載	曲物側板	溝15	スギ	S	板目	中世前半	1924
			竹	-	-		1925
	円盤	土坑4	アスナロ	S	板目	近世	1915
		土坑15	アカマツ	S	割材		近世末～近代
	杭	溝20	タリ	S	割材	近世～近代	1921
			タリ	S	割材		1922
	杭	溝20	タリ	S	割材	近代	1923
			タリ	S	割材		1926
	杭	畦畔1	タリ	S	割材	近代	1927
			スギ	S	板目		1935

## 参考文献

能城修一「鹿田遺跡第17・26次調査出土木製品と自然木の樹種同定」『鹿田遺跡13』2019 岡山大学理蔵文化財調査研究センター

## 第5章 自然科学的分析

### 1. 鹿田遺跡出土管玉の原石、遺物成分群同定

薬科 哲男 (遺物材料研究所)

#### a. はじめに

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多く、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。よって石器の原産地分析で成功している<sup>1)</sup>、非破壊で分析を行う蛍光X線分析法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。蛍光X線分析のみで鉱物名を求めることは出来ない。本報告書で使用する鉱物名は考古学で使用する通称名で薄片作成など岩石学的方法により証明されたものでない。遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この遺物成分の元素比の値と同じ成分を持つ遺物を各遺跡から探し、同じ石材を使用しているとして、その使用圏を石材採取遺跡も含めて求める。同じ成分の遺物は同じ石材を使用しているとする根拠は、石製品の製作行為の石材分割、成形過程の石材面の元素成分を接合していくことで石製品作りに関連づけられ、考古学の研究となり、石製品作りのために古代人が最初に原石を手にした玉材産地の地質学的産地から考古学的証拠を確認してから決定する。考古学的証拠が発見されなければ、玉材産地と決定できない。この時は、周辺遺跡で同じ元素成分の石材が多用されている場合玉材産地に近い関係にあると推測する。石製品の石材産地が不明のときは、同じ石材を使用した遺跡として、同じ石製品を作る遺跡から供給された消費遺跡と考えられる。遺物成分群の作成理由は、蛇紋岩、滑石、緑泥片石岩の露頭の各原石が均一か？否か？不明で、成分組成のパラッキの大きいもので原石群を作ると、原産地間（原石採取地点間）の区別ができない状態になり、産地同定結果を誤判定する可能性が非常に高くなり信頼性のない結果になる。この誤判定を避けるために、玉類の成分組成で遺物群を作り、露頭の各原石1個、1個と遺物群と比較し一致するか同定して地質学的産地を求めて、この地質学的産地が古代人が最初に原石を採取した地点か否か、考古学者による加工品の散布など証拠を求めて、考古学的産地を同定し、産地分析は終了する。地質学的産地が不明でも特定の地域で同じ成分の遺物が多数出土する地域が考古学的産地に近いとする考えは、様式学の同形遺物形式が多数見られる地域が様式の発生地とした考察に匹敵すると考えられる。また、1cmΦの分析管の中に入る玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、玉に含有されている常磁性種を分析し、蛍光X線分析で求めた結果をさらに詳細に石材、遺物成分群を区別するために産地分析に利用する<sup>2)</sup>。今回分析した管玉は、鹿田遺跡第7次調査の壑穴住居1出土の古墳時代初期の1点（図12-S1、23頁掲載）の同定結果である。

#### b. 碧玉原石の蛍光X線分析

図1に韓国の浦項碧玉、浦項緑色凝灰岩、花山碧玉の蛍光X線スペクトルの例を示した。碧玉の蛍光X線分析で求めた含有元素の中で、石材、遺物成分群の産地同定に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Sb、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原産地を判定する指標として用いる。

#### c. 碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図2に示す。佐渡猿八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良いものは

光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所も見られる。今回分析した原石は猿八の各地点、小倉川河床から表採したもの、および地元で提供された原石などであり、また提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、それはグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重は、2.6~2.1の間で大半は2.6~2.48で、この中には、茶色系碧玉も含まれ、原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶色系と緑色系の縞があるなど、多少色の違いがあっても分析した元素組成上には大きな差はみられなかった。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は②島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。横屋堀地区から産出する原石は、濃緑色から緑色の緻密で剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、他に硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のものは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域のものが分析されているのがわかる。これら花仙山周辺の面白谷、瑪瑠公園、くらさき地区などから原石を採取し元素組成の似た原石で、くらさき群、面白谷瑪瑠群、花仙山凝灰岩群などを作った。玉谷原産地は、③兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で産出す

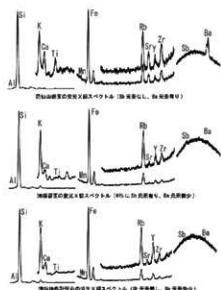


図1 浦項碧玉、浦項緑色凝灰岩、花仙山碧玉の蛍光X線スペクトル

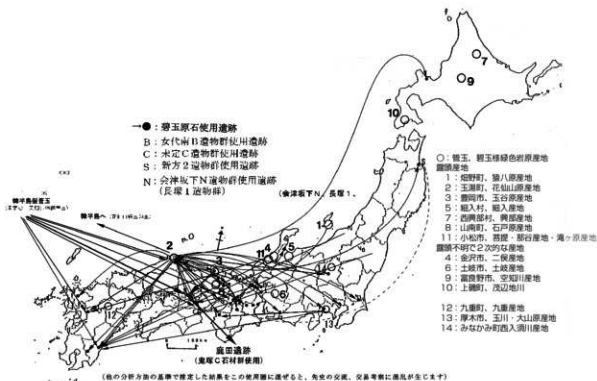


図2 古墳(統続文)時代の碧玉製管玉の原材料使用分布図および碧玉・碧玉棒岩の原産地





る碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑色系に茶色系が混じるものもみられ、これは佐渡狼八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡狼八産原石より緻密で優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した玉谷産原石は、比重が2.644~2.600が多く、2.599~2.589の碧玉も少数採取できた。玉谷産原石は色の違いによる元素組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する元素組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、④石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから露頭は医王山に存在する可能性がある。ここの河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。また元素組成は他の産地のもとは異っており区別できる。しかし、この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか検証するために、さらに分析個数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区にあり、そのグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。それは肉眼では他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重を分析した8個は2.25~2.12と非常に軽く、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域であり、そこでは赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出している。このうち緻密な光沢のよい濃緑色で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。奥部産地は、⑦北海道紋別郡西奥部村にあり、その碧玉は鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は、⑧兵庫県水上郡山南町地区にあり、その安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少なく淡い緑色で、比重も2.6以上で一部の碧玉の組成は玉谷産碧玉に似る。また大部分の原石は元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.6~2.5が5個、2.5~2.4が5個である。その碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質のもの碧玉を多数収集することは困難である。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町茂辺地川の川原で採取される碧玉は不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。⑪石川県小松市菩提、那谷、滝ヶ原に緑色凝灰岩の露頭があり、その中に緻密な碧玉が包含されている。また、産出量は少ないが良質の碧玉が菩提川、宇田川から採取される。この地域から採取された碧玉の中に、女代南B遺物群に一致する元素組成の碧玉が含まれる。⑫大分県九重町・九重町歴史民族資料館付近から緻密で比重が2.1~2.2の淡緑色~緑色系、茶褐色系などの凝灰岩が採取され、玉材の可能性も推測される。最近、韓国、浦項地域から良質の碧玉及び緑色凝灰岩が見つかり、浦項碧玉A群、浦項碧玉B群及び浦項緑色凝灰岩A群を作った。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめ

表2 鹿田遺跡出土管玉の非破壊分析による化学組成濃度

分析番号	非破壊分析による化学組成濃度 (wt.%)										重量	BF	比重
	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	FeO					
12901	2.2	0.5	10.0	80.1	1.6	3.1	0.3	1.9			0.699		2.203
	SrO	BaO	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	Rb <sub>2</sub> O	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>	Nb <sub>2</sub> O <sub>5</sub>					
	0.1	0.1	0.0037	0.0684	0.001	0.004	0.0097	0					

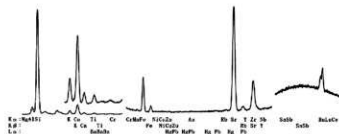


図3 鹿田遺跡出土緑色凝灰岩製管玉 (129901) の蛍光X線スペクトル

表3 鹿田遺跡出土管玉の元素比分析結果

分析番号	元素比														重量 (g)	比重
	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	Ba/Zr		
I29001	0.032	0.774	3.063	0.751	0.056	0.032	2.193	0.095	7.975	0.198	0.047	0.035	0	3.924	0.6987	2.303
JG-1*	0.081	3.205	0.736	0.198	0.111	0.277	3.479	0.956	1.261	0.187	0.017	0.020	0.086	1.567		

a) : 標準試料, Ando, A., Kurawawa, J., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974) 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192.

て母集団を作り合計62個を表1に示す。各母集団に原産地名を付けてその産地の原石群として、例えば原産

地名が花仙山の場合、花仙山群と呼ぶことにする。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても元素組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、例えば、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製玉類の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索すると言う目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B(女代B)群であるが、同質の材料で作られた可能性のある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。宇木汲田遺跡で採取された産地不明の管玉の中で相互に似た元素組成のものを集めて未定C(未定C)群を作った。また、岐阜県可児市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚(1)、(2)遺物群、多摩ニュータウン遺跡、梅田古墳群、上ノ段遺跡、梅田東古墳群、新方遺跡、青谷A、B遺物群その他の遺跡などから出土した玉類および玉材剥片でそれぞれ遺物群を作り他の遺跡、墳墓から出土する玉類に組成が一致するか定量的に判定できるようにし、現在原石・遺物群は合計499個になった。この他、鳥取県鳥取市福部町多岐ヶ池、鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。兵庫県香住町の海岸から採取された親指大1個の碧玉様の玉材は、貝殻状剥離がみられる緻密な石質で少し青っぽい緑の石材で玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光X線分析の結果では、興部産碧玉に似ているが、ESR信号および比重(2.35)が異なっているため、興部産碧玉と区別ができる。

#### d. 蛍光X線分析法および電子スピン共鳴法による碧玉原料との比較

遺跡から出土した玉類の汚染の少ない部分を探して完全な非破壊分析を行っている。遺物の原産地の同定をするために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2)また、10mm以下の遺物については、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれと比較して、似た信号の原石の産地の原料であると推測する。

#### e. 蛍光X線法による産地分析

これら産地同定結果は蛍光X線分析装置はセイコのSEA100L型を使用し、管玉の蛍光X線分析のスペクトルを図3に示し、化合物元素濃度および分析した玉の比重をアルキメデス法で測定し表2に示した。計算された濃度は破壊して行う厳密な定量分析値ではなく、半定量分析で、得られた濃度には誤差が相当含まれる可能性がある。

表4 鹿田遺跡出土管玉の石材産地同定

分析番号	ホテリソングのT検定(確率)	ESR信号形	比重	総合判定
I29001	鬼塚C石材群(71%)、鹿田管玉群(確)(60%)	Feのみ	2.303	鬼塚C石材群

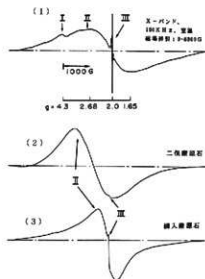


図4 碧玉原石のESRスペクトル(花仙山、玉谷、猿八、土岐)

同定のために元素成分比を求めて結果を表3に示す。分析した管玉の表面は緻密で、一見碧玉様であるが、比重が約2.2程度であり通称、緑色凝灰岩製管玉に分類した。原材産地同定および遺物成分群同定をするために管玉のAl/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrを用いて原石・遺物群（表1）の結果と数理統計のマハラノビスの距離から8元素比として行う近似式を用いてホテリングT<sup>2</sup>乗検定<sup>2)</sup>により計算した同定結果を表4に示した。管玉は分析場所を変えて、合計49回分析した結果で最も同定確率が高く同定されたのは東大阪市の鬼塚遺跡出土の鬼塚C石材群で信頼限界の5%を大きく超えて同定され、管玉の石材が鬼塚C石材群と同じ石材でないと言えない。より産地を正確に特定するために、蛍光X線分析法で同定された遺物の結果が

ESR分析の結果と一致するかESR分析を行った。

#### f. ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンなど、碧玉が自然界からの放射線を受けてきた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は完全な非破壊分析であり、直径が1mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大のものでも分析ができる場合がある。図4-(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号面(III)で構成されている。図4-(1)では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、図4-(2)、-(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。各原産地の原石の信号面(III)の形は産地ごとに違いがあり産地分析の指標となる。図5-(1)には花仙山、猿八、玉谷、土岐を示し、図5-(2)には興部、石戸、八代谷-4、女代B遺物群、八代谷を示し、そして図5-(3)には富良野市空知川の空知A、(B)、北海道今町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号面(III)のスペクトルを示した。また、図5-(4)には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形、菜畑形、紫金山形を示した。ESR分析では碧玉のESR信号の形が、あらかじめESR分析している原石、および産地不明遺物群のESR信号形と一致した場合、その産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した鹿田遺跡の管

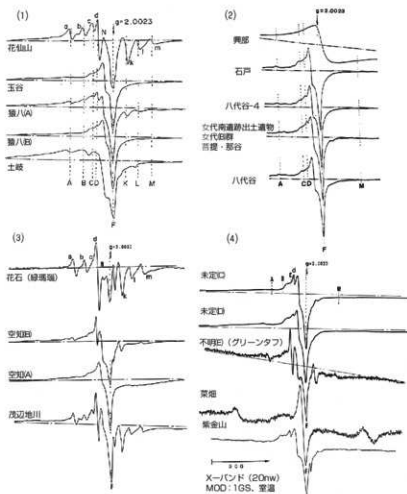


図5 碧玉原石の信号(III)のESRスペクトル

玉のESR信号を図6に示す。ESR信号ⅢのDFKの位置に非常に小さな信号とノコギリ刃状信号が鉄イオンと推測するFe信号に重なる信号形で、表4のESR信号形の欄にFeのみと記載した。鹿田遺跡の管玉のESR信号は、鬼塚C石材群の分析番号124746、124752、124753、124770番で124770番は他と異なるよう見えるが、信号の拡大率が大きいため、ESR信号のバラツキの中に入り、ESR信号からも鬼塚C石材群と同定できる。より正確な原産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法ともに同じ原産地に特定された場合は、蛍光X線の元素分析のみで判定した原石・遺物群産地よりも正確に、その原石・遺物群と同じものが使用されているとして総合判定原産地の欄に結果を記した(表4)。

### g. 結論

今回分析を行った鹿田遺跡出土管玉の石材比重は2.203で便宜的に決めた基準に従えば碧玉の2.6~2.4の範囲より小さく、緑色凝灰岩と思われる。蛍光X線分析で分析場所を変えて、合計49回分析した結果の中で信頼限界の5%を超える定量的に同定された回数は22回で、定性的に同定する5%以下~0.1%以上が12回で、どこの遺物群(地質学的産地群も含めて)にも同定できなかった回数は14回であった。この中で最も確率が高く同定されたのは東大阪市の鬼塚遺跡出土の鬼塚C石材群で71%の確率で信頼限界の5%を大きく超えて同定され、管玉の石材が鬼塚C石材群と同じ石材でないとは言えないと推測した。またESR信号からも鬼塚C石材群と同定できて、蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法ともに同じ石材産地に特定された可能性を示す信頼度の高い結果が得られた。本研究は出土した管玉と同じ元素成分の遺物の分布範囲を求めることが主たる目的であることから、鬼塚C石材群に一致しなかった分析部分を含めて、将来、鹿田遺跡出土管玉と同じ元素成分の遺物が使用されているときに同定できるように新たに鹿田管玉群を作り表1の遺物群、原石群の表に登録した。参考資料として、日本の古代の玉材の移動、分布範囲が広域におよんでいる例を図2に示した。

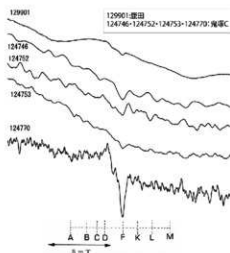


図6 鹿田遺跡出土管玉および鬼塚C石材群のESR信号(Ⅲ)のスペクトル

### 注

- 1) 藤科哲男・東村武信 1983「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学16』pp.59-89
- 2) Tetsuo Warasina 1992「Allocation of Jasper Archaeological Implements By Means of ESR and XRF」*Journal of Archaeological Science* 19 pp.357-373
- 3) 東村武信 1976「産地同定における統計的手法」『考古学と自然科学9』pp.77-90

### 引用・参考文献

- 茅原一也 1964「長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)」『長者が原 新潟県糸魚川市教育委員会』
- 藤科哲男・東村武信 1987「ヒスイの産地分析」『富山市考古資料館紀要6』
- 藤科哲男・東村武信 1990「奈良県内遺跡出土のヒスイ類玉の産地分析」『橿原考古学研究所紀要 考古学論叢14』
- 李弘鐘・朴淳發・朴天秀・朴弁圭・李在煥・金大煥・藤科哲男・中村大介 2008「韓半島における玉類の理化学的分析と流通」『第17回関西考古学会学術大会発表要旨』
- 藤科哲男 2010「佐渡玉作遺跡出土石製玉類の石材産地同定分析」『今なぜ佐渡の玉作か—雁島「佐渡」の玉作文化を探る—』(2010年日本玉文化研究会佐渡大会要旨)

## 2. 鹿田遺跡第17次調査出土種子と土器圧痕の種子同定

岩崎志保（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）

沖 陽子（岡山大学特命教授）

### a. 遺構出土種子の同定

#### (1) 分析資料と方法

古墳時代初頭の竈跡2・焼土集中域2、中世前半の井戸1・2、溝15・17、近代の土坑17について土壌を持ち帰り、フローテーション法（0.5mmメッシュ）により種子の検出を行った。種子の抽出・洗浄後に選別を行い、実体顕微鏡撮影と種の同定作業を実施した。

#### (2) 同定結果

種が同定できたものは46科105種である（表1、写真1・2）。古墳時代初頭の遺構（竈跡2、焼土集中域2）からそれぞれ1科1種ずつ、中世前半の遺構（井戸1・2、溝15・17）から46科105種、近代の遺構（土坑17）からは5科9種の種子を確認した。

このうち中世前半の井戸1・2・溝17では特に多くの種子を確認した。井戸1では、6・7層の間に有機物層が認められ、種子の多くは同層から出土する。井戸2では下層（10・12・13層）と最下層（14層）から多くの種子を検出した。こうした種子が多く認められた層からは完形に近い土器の出土があり（図39、掲載51頁）、祭祀行為が指摘されているところだが、これらの植物種子もそれに伴って利用された可能性が考えられよう。一方溝17では底面のくほみ内から多くの種子が出土している。

出土種子の内容は、井戸1では34科60種を確認し、粒数では、カタバミ（72）、ムラサキケマン（154）、イヌタデ（56）、ツルソバ（749）、ザクロソウ（76）、ノミノフスマ（107）、イヌビユ（56）が目立つ。井戸2では26科53種を確認し、シロザ（アカザ）（64）、カタバミ（69）、ザクロソウ（205）、イヌビユ（65）が目立つ。溝17では27科47種を確認し、シロザ（アカザ）（106）、雑草メロン（115）、スズメウリ（388）、オオバコ（74）、タガラシ（52）、スベリヒユ（95）、イヌタデ（79）、ザクロソウ（138）、ホオズキ（133）、ワチガイソウ（314）が目立つ。これら井戸1・2と溝17とで共通して存在する植物はシロザ（アカザ）、カタバミ、ムラサキケマン、イヌタデ、ザクロソウ、エノキグサ、ノミノフスマ、ミドリハコベ、イヌビユ等であり、現代でも畑地雑草として知られている。本調査地点の周辺環境を示していると考えられる。そのほか井戸1では、ツルソバ・ムラサキケマンが多く、食用や毒草として知られる。溝17で粒数が多い植物には、シロザ（アカザ）、雑草メロン、スズメウリ、オオバコ、スベリヒユ、ホオズキのように、食用・薬用とされるものを含んでいる。

### b. 土器圧痕の種子同定

#### (1) 分析資料と方法

本分析では鹿田遺跡第17次調査において出土した土器を実見し、何らかの圧痕のある資料7点を対象としてレプリカ法（辻野・田川1991）を用いて14点の圧痕レプリカを採取した。その特徴を表2に掲載している。圧痕土器7点は、古墳時代初頭の竈跡3から出土した鉢2点と土坑1出土の鉢1点、中世前半の溝8・15・17で出土した土器器軸各1点と溝17で出土した杯1点である。

圧痕レプリカの作成と同定作業は以下の①～⑨の工程で実施した。

①圧痕土器の選定、②圧痕部の洗浄、③土器の全体写真撮影・実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真撮影、④離型剤（パラロイドB72 5%アセトン溶液）を圧痕部とその周辺に塗布、⑤シリコーン・ゴム（モメンティブ・シリコーンTSE350）を圧着部に充填、⑥乾燥後、シリコーン・ゴムを土器から離脱、⑦圧痕レプリカをオスミウムによって蒸着後、走査型電子顕微鏡（日立S-4800）を用いて表面観察・撮影し、⑧圧痕レプリカの法量を計

## 測、⑨種子の同定

## (2) 同定結果

種の同定ができた圧痕は6点であり、いずれもイネ科の植物種子である。属名まで判明したものは、メヒシバ属・イネ属・エノコログサ属であり、さらに種まで同定できたものは中世前半の溝15出土土器圧痕のアワと同時期の溝17出土土器圧痕のイネであった。アワの圧痕土器は13世紀末～14世紀初頭の土師器椀、イネの圧痕土器は13世紀末頃の土師器椀である。アワ・イネとも栽培植物であることが注目される。この時期にアワの存在が確認されたのは鹿田遺跡では初めてである。

本分析における種子・種子圧痕の同定は沖がおこない、それに基づいて岩崎が資料をまとめた。文章は両者協議のうえ岩崎が執筆し、全体を両者で調整したものである

註 1) 機器の使用にあたっては、岡山大学医学部共同実験室の協力を得た。

表1 遺構出土種子一覧

種子番号	同定結果		出土遺構							
			古墳初期		中世前半		近代 土城17			
			中塚2	塚上集土城2	井戸1	井戸2		溝15	溝17	
1	アカザ	アカザ(シロザ)			13					
2	アカザ	カワラアカザ			12					
3	アカザ	コアカザ					1			
4	アカザ	シロザ(アカザ)			37		64		106	
5	アカネ	ヘクソクズラ			4		1		1	
6	アカネ	ヤエムグラ	1		1		2		2	
7	アカハタ	ヒメアザミ			1					
8	アカヒ	アザミ								1
9	アブラナ	タネツケバナ			6					
10	イネイ	イネ			2					
11	イヌザンショウ	カラスザンショウ			1		1			
12	イネ	アキノエノコログサ					2			
13	イネ	エノコログサ			2		1			
14	イネ	キンエノコロ			12					14
15	イネ	コツツギキシノエノコロ			3					
16	イネ	コフクサ					1			
17	イネ	スズメノヒエ			11					
18	イネ	ムツオシダ			1		1			1
19	イネ	メヒシバ					13			3
20	ウコギ	チランキ			3				5	
21	ウリ	カラスウリ							44	
22	ウリ	キカラスウリ							1	
23	ウリ	藤原メロン			1				115	
24	ウリ	スズメウリ					2		388	
25	ウリ	ヒヨウタン							1	
26	エゴノキ	エゴノキ							1	
27	オオバコ	オオバコ			24				74	
28	オトギリソウ	ミズオトギリ			1					
29	オミナエシ	オミナエシ			1					
30	カタバミ	カタバミ			72		69		12	
31	カヤツリダマ	イヌホトケ					1		21	
32	カヤツリダマ	オニセキ							1	
33	カヤツリダマ	カヤツリダマ					9			
34	カヤツリダマ	ゴウソウ					45			
35	カヤツリダマ	ホタルイ			8		5		3	
36	キク	オナモミ					1			
37	キク	ゴボウ			1				1	
38	キク	チヂミ			10		1		2	
39	キク	ヒメアザミ			7		5		22	
40	キク	ヤブキ			3				4	
41	キク	ユウゴギク					3			
42	キョウチクトウ	オウゴン					2			
43	キンボウゲ	ウマノアシタタ					1			
44	キンボウゲ	チヂミ								52
45	タマフツ	ヤブムササキ			2					
46	ケシ	ケシ					2		3	2
47	ケシ	ムタギキ			134		36		3	
48	ケシ	ヤブキ			1					
49	シソ	イブキ			1					
50	シソ	シロコウ						1		
51	シソ	シロネ					1			

鹿田遺跡第17次調査出土種子と土器圧痕の種子同定

種子番号	同定結果		古墳初期					出土遺構			近代 土坑17
	種	種	年号2	磯上墓中城2	中世前半			遺17			
					年号1	年号2	遺15				
32	シソ	ヒメジソ				4			13		
33	シソ	ミゾコウジュ							1		
54	シソ	ヤマジソ			1	45					
35	スイカズラ	ニワトコ				2					
36	スベリヒユ	スベリヒユ							95		
37	スミレ	スミレ			1	2					
38	セリ	ウマノミツバト							1		
39	セリ	セリ			1	1					
40	セリ	ミツバト							1		
41	セリ	ヤブシラミ			3						
62	センダン	センダン							3		
63	タデ	イシミカワ			5						
64	タデ	イスタデ			56	3			79		
65	タデ	オオイスタデ			3	42				4	
66	タデ	サダタケ							6		
67	タデ	ササユタデ					1				
68	タデ	ツルソバ			749					2	
69	タデ	ヌカサダ			11						
70	タデ	ホソバノウナギツカミ			2	3					
71	タデ	ホシダタデ			2				2		
72	タデ	ミチヤナギ							16		
73	タデ	ヤナギタデ							7		
74	ツマヅ	ヤマツツジ			4						
75	ツエナギ	ツエナギ			1						
76	ツバキ	ササソコク			75	205			128		
77	トウダイゴサ	エノキダサ			20	41			10	1	
78	ナス	イヌホオズキ			1						
79	ナス	セシナリホオズキ			2						
80	ナス	ホオズキ			4				128		
81	ナゲシコ	コハコベ			32	1					
82	ナゲシコ	ツメタケ			2						
83	ナゲシコ	ノミノツリ				4					
84	ナゲシコ	ノミノフタ			107	26			1	2	
85	ナゲシコ	ハコベ			5						
86	ナゲシコ	ミドリハコベ			15	7			32	1	
87	ナゲシコ	ミニナガサ				8					
88	ナゲシコ	ミヤマハコベ			3						
89	ナゲシコ	ワチガイソウ			2				214		
90	ハラ	タケイナゴ			1	6					
91	ハラ	ナカキクド				18					
92	ハラ	ヤナギタケ								1	
93	ヒノキ	ヒノキ				2			3		
94	ヒユ	アオヒユ				10			18		
95	ヒユ	イヌヒユ		3	56	65			18		
96	ブドウ	エビヅル			1				1		
97	ブドウ	ツタ				1					
98	ブドウ	ノブドウ							2		
99	ボラソ	ヤマシヤクキタ			2	1					
100	マタタビ	マタタビ									
101	マメ	ミヤコダサ			1						
102	ミカン	キハダ			5	1					
103	ミソハギ	ミソハギ				1					
104	ヤマゴボウ	ヤマゴボウ							1		
105	ヤマモモ	ヤマモモ							3		

\*表中の数字は粒数を示す。数は1/2個体以上残るものを数えた。

表2 土器圧痕の種子同定結果一覧

土器 圧痕 NO.	同定結果		圧痕土器関連情報							
	種	長さ (mm)	幅 (mm)	報告番号	器種	圧痕付着部	時期	出土遺構	遺構時期	
1	-	8.6	6	図17-6	土師器鉢	-	底部土中	弥生後期-古墳初期	9号坑	古墳初期
2	(種子カマ)	9.8	5.6	図17-7	土師器鉢	外面	底部外面			
3	-	7.5	4			内面				
4	イネ科メヒシハ属	7	3	図21-2	土師器鉢	内面		土坑1	古墳初期	
5	-	3.37	3.16			内面	外部内面			
6	-	2.79	2.36	未掲載	土師器碗	内面	高台内	中世前半	遺8	中世前半
7	イネ科	8.2	4			内面				
8	-	6.9	3.6	図30-1	土師器碗	外面	高台内	13世紀末-14世紀初	遺15	中世後半
9	イネ科エノコログサ属アワ	6.8	3.7			外面	高台内			
10	イネ科メヒシハ属	5.38	2.02			内面	底部内面	12-13世紀	遺17	中世前半
11	イネ科エノコログサ属	6.3	3.32	未掲載	土師器鉢	外面	底部外面			
12	-	2.94	1.12			外面	底部外面			
13	-	2.79	0.93			外面	底部外面			
14	イネ科イネ属イネ	9	4	未掲載	土師器碗	外面	高台内	13世紀末頃		

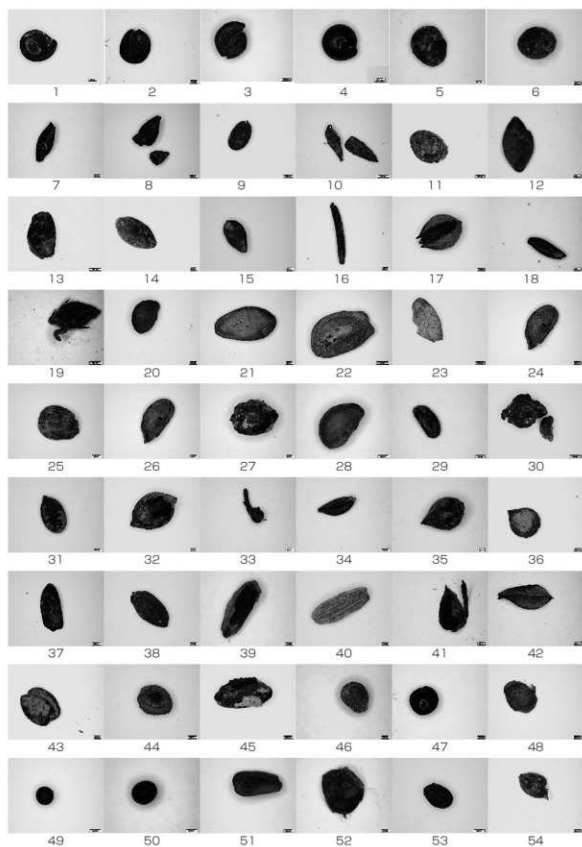


写真1 遺構出土種子1~54



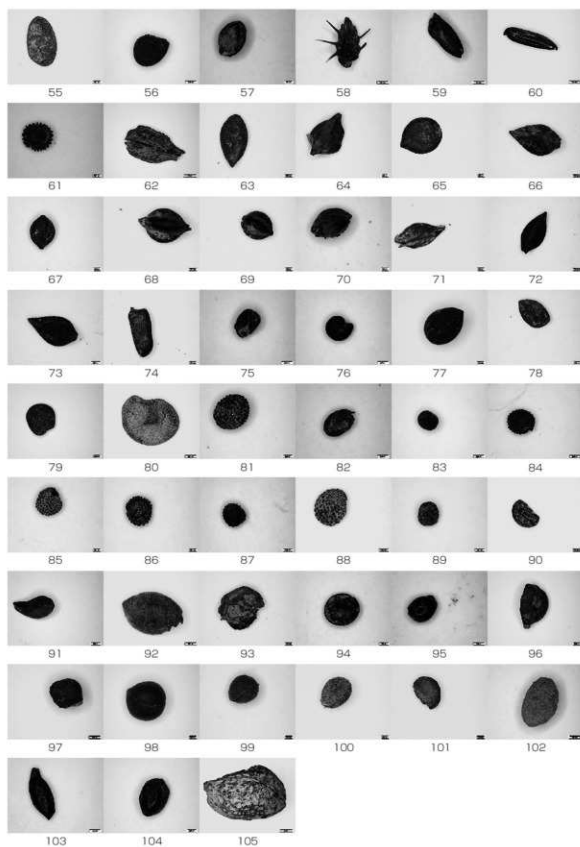


写真2 遺構出土種子55~105

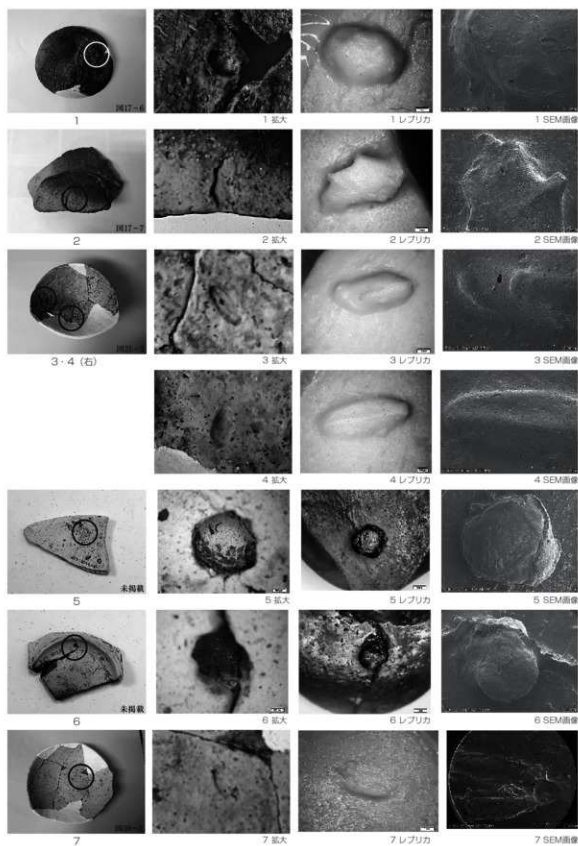


写真3 土器圧痕1～7

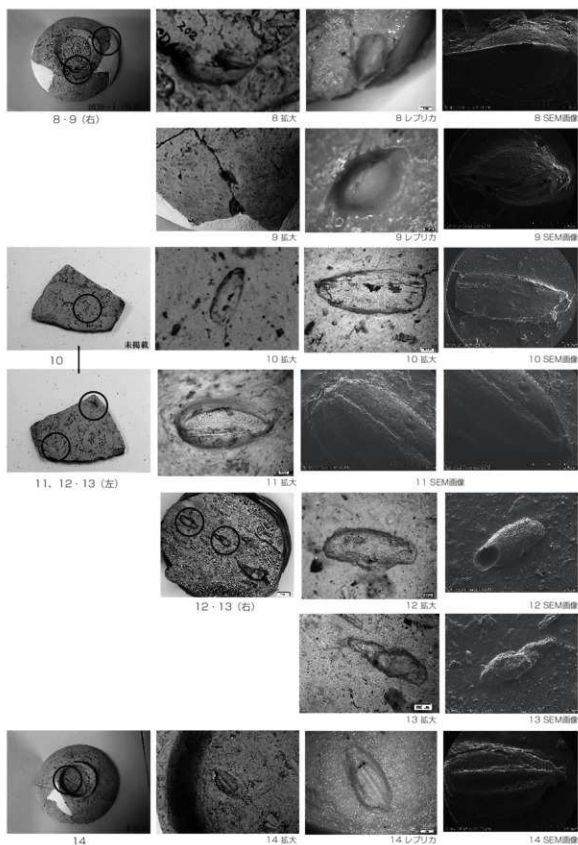


写真4 土器片痕8~14

## 3. 鹿田遺跡第17次調査出土土師器杯内の塗膜構造調査

徳吉田生物研究所

## a. はじめに

岡山市に所在する、岡山大学構内の鹿田遺跡から出土した土師器付着の漆について、用途等を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

## b. 調査資料

資料は建物関連遺構 1 から出土した、表 1 に示す漆付着の土師器 1 点 (図 33-1、掲載 45 頁) である。

## c. 調査方法

表 1 の資料本体の塗膜付着部分から数 mm 四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

## d. 断面観察

塗膜断面の観察結果を、表 2 と以下の文章に示す。

塗膜構造：下層から、漆層が観察された。

漆 層：土師器内面に付着していた塗膜は、顔料を含まない、漆であった。色調は通常の透明漆よりも濃い、褐色を呈していた。

## e. 摘要

岡山大学構内の鹿田遺跡から出土した、中世の漆製品の塗膜断面を調査した。

土師器の内面に見られた塗料は、通常の透明漆よりもやや濃い褐色を呈していた。塗装断面の所々に白く抜けたような部分が観察された。これらは劣化した部分である。この塗膜は土師器内面に塗布されたものではなく、漆工具として使用された土師器の内面に残った漆と判断される。

表 1 調査資料

器種名	概要
土師器杯	内面のみに濃褐色を呈する塗膜が付着している土師器杯

表 2 塗膜構造表

器種名	部位	写真番号	塗膜構造 (下層から)			
			下地		漆層構造	顔料
			膠着材	混和材		
土師器杯	内面	2	-	-	漆 1 層	-

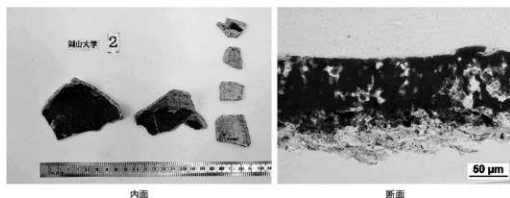


図 1 塗膜断面写真

## 4. 鹿田遺跡第17次調査出土漆椀の分析

(株)吉田生物研究所

### a. 樹種同定

#### (1) 試料

試料は岡山県鹿田遺跡第17次調査溝20から出土した容器1点(図74-W7、掲載93頁)である。

#### (2) 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柀目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した(図1)。

#### (3) 結果

樹種の顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

##### ① ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管(～270 $\mu$ m)が1列で孔圍部を形成している。孔圍外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圍部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔細胞)。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柀目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものど大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

### ◆参考文献◆

- 高地 謙・伊東隆夫 1988「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版  
 高地 謙・伊東隆夫 1982「図説木材組織」地球社  
 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載I～V」京都大学木質科学研究所  
 北村四郎・村田 潤 1979「原色日本植物図鑑木本編I・II」保育社  
 深澤和三 1997「樹体の解剖」海青社  
 奈良国立文化財研究所 1985「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」  
 奈良国立文化財研究所 1993「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」

### ◆使用顕微鏡◆Nikon DS-F11

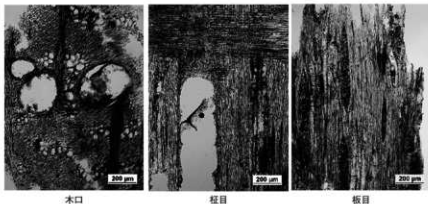


図1 断面写真

## b. 塗膜構造調査

## (1) はじめに

岡山大学構内に所在する鹿田遺跡第17次調査溝20から出土した漆器について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

## (2) 調査資料

調査した資料は、表1に示す近世の漆器1点(図74-W7、掲載93頁)である。

## (3) 調査方法

表1の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。また、蒔絵が施された資料については、プレパラート上で日本電子製EPMA (JXA-8200) を使用して元素分析を行った。

## (4) 調査結果

塗膜断面の観察結果を表2に示す。

**塗膜構造**：木胎の上に、下層から下地、漆層と重なる様子が観察された。

**下地**：黄褐色を呈する漆に地の粉を混和した地の粉漆下地がみられた。

**漆層**：下地の上に1層のみ漆層が施されたものと、2層の漆層が重なっているものとがみられた。1層のみの漆層は、高台内である。高台内の透明漆層の上層部は褐色を呈しているが、これらは本来黄褐色を呈する透明漆層が劣化により変色したものである。

また内外面には2層の漆層が認められた。これらは全て、黄褐色を呈する透明漆層の上に赤色漆層が重ねられていた。このことから、内外両面の体部は、一見した資料の色は赤色であるが、実際には透明漆を塗布した後には赤色漆を塗布している、とわかる。

**顔料**：赤色漆の中に、明瞭な粒子形状が判別される透明度の高い朱を混和したもの(内外面)が認められた。

## (5) 摘要

岡山大学構内に所在する鹿田遺跡から出土した、漆器碗について塗膜構造調査を行った。

漆下地が施されたものには、複数層の漆層の塗り重ねが認められ、赤色漆層に混和された顔料は朱であった。

また、塗膜分析結果と木胎の樹種とをあわせてみると、漆下地の1点の木胎はケヤキであった。一般的に下地に漆が使用される時にはケヤキの木胎が使用される場合が多い。今回調査した資料も同様であった。

表1 調査資料

器種名	樹種	概要
漆塗り碗	ケヤキ	内外両面とも赤色で、高台内のみ黒色の無文の碗

表2 塗膜構造表

器種	部位	写真番号	塗膜構造(下層から)			
			下地		漆層構造	顔料
			膠着剤	混和材		
碗	内面	図2-2	漆	地の粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
	外面	図2-5・6	漆	地の粉	透明漆1層/赤色漆1層	朱
	高台内	図2-4	漆	地の粉	透明漆1層	-

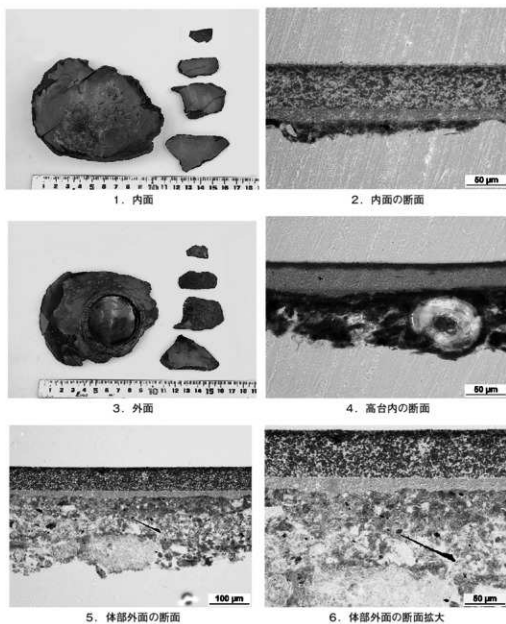


図2 塗膜断面写真





## 報告書抄録

ふりがな	しかたいせき							
書名	鹿田遺跡14-第17次調査-							
副書名	岡山大学総合研究棟（医学系）新営に伴う発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第36冊							
編著者名	山本悦世（編著）・岩崎志保・沖陽子・薬科哲男							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津島中三丁目1番1号							
発行年月日	2020（令和2）年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	世界測地系	世界測地系	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
鹿田遺跡第17次調査地点	岡山県岡山市北区鹿田町二丁目5番1号	33201	県2208	34°39'02"	133°55'07"	20060710～20061116	642	総合研究棟新営
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
鹿田遺跡第17次調査地点	集落	古墳時代		堅穴住居・竈跡・土坑・溝		土器・種子圧痕土器・石錘・叩き石・砥石		
	集落	古代		建物状遺構・溝		丹塗り土師器・漆附着土師器杯・須恵器・線刻須恵器杯		
	集落	中世		掘立柱建物・井戸・溝		中世土師器・須恵器・瓦器・備前焼・青磁・瓦・種子圧痕土器・墨書土器・碁石・羽口		溝で区画された屋敷地を検出
	田畑	近世～近代		土坑・溝・畦畔		陶磁器・備前焼・漆桶		

2020年3月25日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第36冊

## 鹿田遺跡14

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター  
岡山市北区津島中三丁目1番1号  
(086) 251-7290印刷 西尾総合印刷株式会社  
岡山市北区津島651  
(086) 254-1111代